秋田城跡

平成四年度秋田城跡調査概報

秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

平成四年度秋田城跡調査概報訂正表

ページ	行	誤	正
凡例	下から１行目	１／３である	１／４である
14	上から４行目	ＳＤ1142	ＳＡ1142
32	下から８行目	第36図	第37図
32	下から４行目	ＳＡ1180	ＳＡ1179
34	上から１行目	第38図	第39図
41	下から３行目	須恵器（５～９）	須恵器（５～８）
45	下から７行目	赤褐色土器（６）	赤褐色土器（７）
49	下から13行目	東西1.2m×0.9m	東西1.2m×南北0.9m
51	下から８・９行目	ＳＤ1142	ＳＡ1142
59	上から７行目	12～15は。	13～15は

平成四年度秋田城跡調査概報

秋　田　城　跡

秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

序　　文

本年度は秋田市教育委員会が秋田城跡の発掘調査を開始して、20周年という記念すべき年に当たります。

平成４年度の発掘調査は、昨年度に引続き鵜ノ木地区南東部および焼山地区水道局資材センター北側の２箇所を対象に実施しました。

発掘調査と並行して平成元年度から実施しております環境整備事業は本年度環境復原の一環として古代木の実園の造成を行っております。

秋田城跡発掘調査事業も20周年を迎えましたが、この間、秋田城の中心であります政庁跡や外郭の築地塀、漆紙文書、木簡など考古学、古代史研究の通説をくつがえすような学術的価値のきわめて高い遺構、遺物の発見等めざましい成果を上げることができました。

このような成果をあげることができましたのも文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生のご指導、ご協力の賜物と衷心より深く感謝申し上げます。

平成５年３月

秋田市教育委員会
教育長　長　門　伸　一

目　　次

Ⅰ　調査の計画…… 1

Ⅱ　第58次発掘調査

1）調査経過…… 2

2）検出遺構と出土遺物…… 9

3）その他の出土遺物…… 61

Ⅲ　第59次発掘調査

1）調査経過…… 63

2）検出遺構と出土遺物…… 69

3）その他の出土遺物…… 72

Ⅳ　まとめ

1）第58次発掘調査…… 73

2）第59次発掘調査…… 76

Ⅴ　第39次発掘調査出土木製遺物…… 80

Ⅵ　第54次発掘調査出土木製遺物…… 88

Ⅶ　秋田城跡第58次発掘調査で出土した動物遺体…… 115

Ⅷ　秋田城跡環境整備事業…… 117

例　言

1．本報告書の執筆、編集は、小松正夫、日野久、松下秀博、伊藤武士があたった。

2．遺物の実測、トーレスは、小松、日野、松下、伊藤の他、補助員の鈴木朝子、桑原愛子、土田ミエ、富樫キヨ子があたった。

3．遺構写真は日野、伊藤、遺物写真は日野があたった。

4．井戸出土の動物遺体の鑑定及び執筆は、国立歴史民俗博物館助教授西本豊弘氏にお願いした。

5．出土鉄製品の錆取りについては、東北歴史資料館の協力を得た。

6．発掘調査では上記の他に、以下の方々、及び関係機関からの指導、助言を得た。記して感謝したい。

新野直吉、岡田茂弘、渡辺定夫、進藤秋輝、細見啓三、牛川喜幸、今泉隆雄、林謙作、熊田亮介、大川清、村田晃一、佐藤敏幸、田中哲雄、西田健彦、文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、宮城県教育委員会、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、（敬称略・順不同）

凡　例

遺物

1．土器断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器、中世陶器である。

2．土器の性格の相違は、下記のスクリーントーンで表現した。

黒色処理

漆容器

転用硯

3．調整技術、切り離し等の表記は下記の如くである。

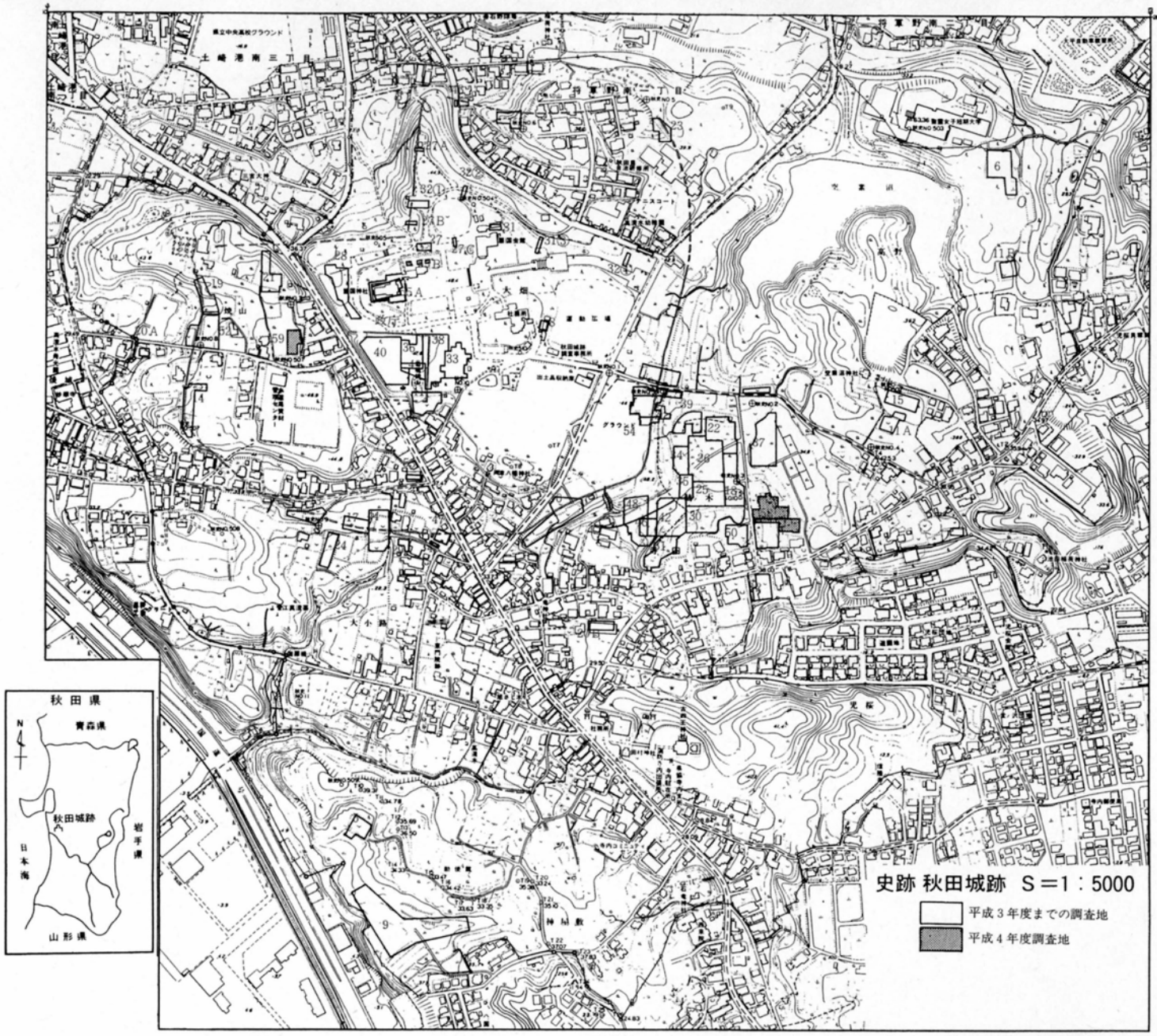
○回転ケズリは、ケズリ調整と記載。回転以外の調整はその都度別記。

○ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、回転利用のカキ目調整と記載。

○切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、「軽い」調整と記載。

○実測図、写真図版の縮尺は、特記のあるもの以外はすべて１／３である。

○第39次・第54次出土木製品の実測図、写真図版の縮尺については、特記のあるもの以外はすべて１／３である。



第1図　秋田城跡発掘調査位置図

秋田市教育委員会

Ⅰ　調査の計画

平成４年度の秋田城跡発掘調査は、第58次、第59次調査を実施した。

発掘調査事業費は総事業費(本体額)1,500万円のうち、国庫補助額750万円(50%)、県費補助額375万円(25%)、市費負担額375万円(25%)となっている。

調査計画は下記の表１のように立案した。

表１　発掘調査計画

調査次数	調　査　地　区	発掘面積㎡(坪)	調査予定期間
第　58　次	鵜ノ木地区南東部	1,000㎡(303)	４月10日～７月31日
第　59　次	焼山地区中央部	1,000㎡(303)	８月１日～10月31日
計		2,000㎡(606)	

平成４年度は秋田城跡第五次５ケ年計画の初年度にあたり、前年次の後を受け、引き続き鵜ノ木地区建物群の性格と変遷を明らかにすること、新たに焼山地区へ調査を転開していくことに重点を置いた調査年次となっている。

各次数の調査目的と成果の概要は以下のようになる。

第58次調査は、昭和48年以降継続して調査を実施している鵜ノ木地区東南部、前年度第57次調査地の北側、東側の隣接地を対象とした。この地区では多数の掘立柱建物跡群を検出しており、前年度に続きその東側への遺構の広がりを追求することと、同地区の遺構群の性格・変遷を究明することを目的に実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡７棟、竪穴住居跡13軒、井戸跡13基の他、柱列、溝跡、土壙等古代及び中世の多数の遺構を検出し、同地区東側における遺構の範囲を確認するとともに遺構群の時期的変遷を把握するうえで重要な資料を得た。また、東側調査区で古代から中世にかけての沼地跡と整地跡を検出した他、西側調査区では鵜ノ木地区南部の一画を区画する区画施設を確認するなど従来にない新たな成果も得た。

第59次調査は政庁跡から西門に至る区域である焼山地区中央部を対象とした。この地区では北側の第21次調査で掘立柱建物跡や、竪穴住居跡を検出しており、その南側、中央部における遺構の広がりを究明することを目的に実施した。

調査の結果、重複する掘立柱建物跡３棟、竪穴住居跡１軒、焼土遺構１基を検出し、中央部の遺構の存在を確認しその利用状況を知ることができた。

平成４年度の発掘調査実施状況は下記表２のようになっている。

表２　発掘調査実施状況

調査次数	調　査　地　区	発掘面積m²(坪)	調査実施期間
第　58　次	鵜ノ木地区南東部	1,340m²(406)	４月10日～10月８日
第　59　次	焼山地区中央部	462m²(140)	９月18日～11月17日
計		1,802m²(546)	

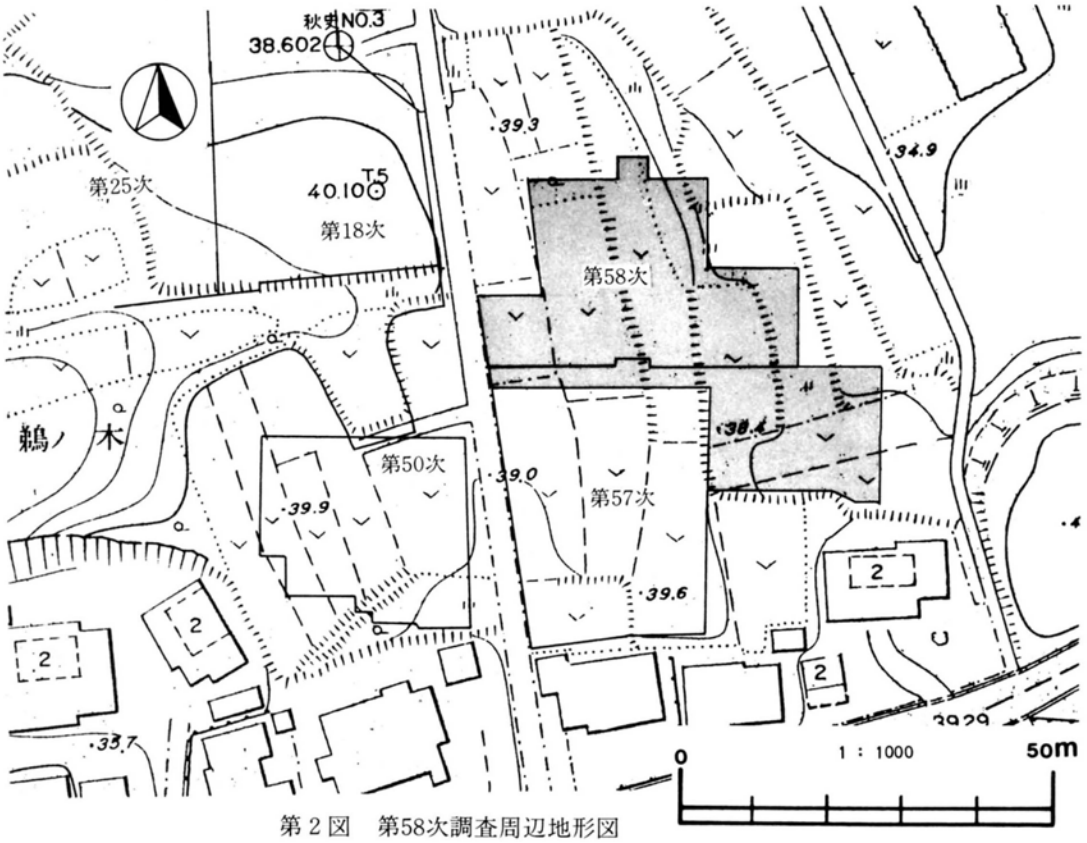
８月１日に第58次調査の現地説明会を開催し、120名の参加者を得た。

II　第 58 次 発 掘 調 査

1）　調査経過

第58次は鵜ノ木地区南東部を対象に、平成４年４月10日から10月８日まで実施した。発掘調査面積は1340m²(406坪)である。

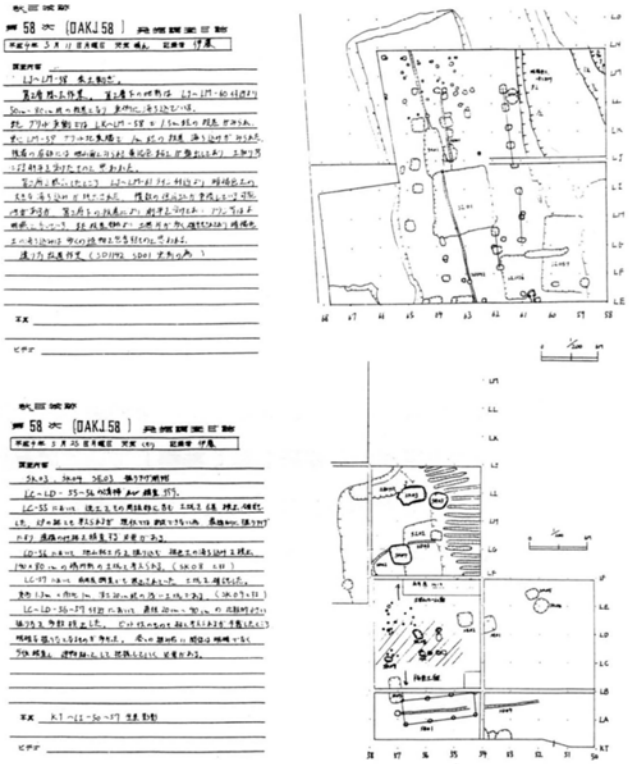
調査地の位置する鵜ノ木地区は、昭和48年以降継続して調査を実施している区域であり、周辺からは規則的配置に基づく掘立柱建物跡群、「天平六年月」や「(天平)勝宝五年」の紀年銘のある木



第２図　第58次調査周辺地形図

簡を出土した井戸跡等、多数の遺構が検出されている。

調査区は前年度調査地(第57次調査)の北側及び東側の隣接地である。旧畑地で西側と東側に大別され、西側が高く東側が一段下がり、湿地(通称雨池)へ傾斜していく地形となっている。前年度第57次調査では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が検出され、中世の遺構の存在も指摘されている。第58次調査は前年度に引き続き、この地域おける遺構の広がりを追求し、同地区の遺構群の性格、変遷等を究明することを目的として実施した。



西側より表土除去作業を開始した。表土は浅く、西側の一段低位の部分では土取りにより包含層さらにローム面も削平されていた(4月14日～16日)。

調査区西側から表土及び第2層褐色土を除去しながらローム面で遺構を検出していった。ローム面では、ＳＢ1146、1147、ＳＫ1189、ＳＩ1153、ＳＡ1179・1180、ＳＩ1136・1137(第57次で一部検出)を検出した。また重複関係でＳＫ1189、ＳＩ1153より新しく調査区を南北に走るＳＤ1142を検出し、その精査実測を行った。溝は埋土の状況から立体的区画施設の布掘り溝と考えられたが、明確な柱痕跡等は認められなかった(4月17日～5月13日)。

一段低く、湿地へ続く東側調査地の表土を除去しながらローム面で遺構を検出した。その区域でＳＫ1191、1192、ＳＥ1168、住居跡状落ち込み等を検出した(5月15日～20日)。

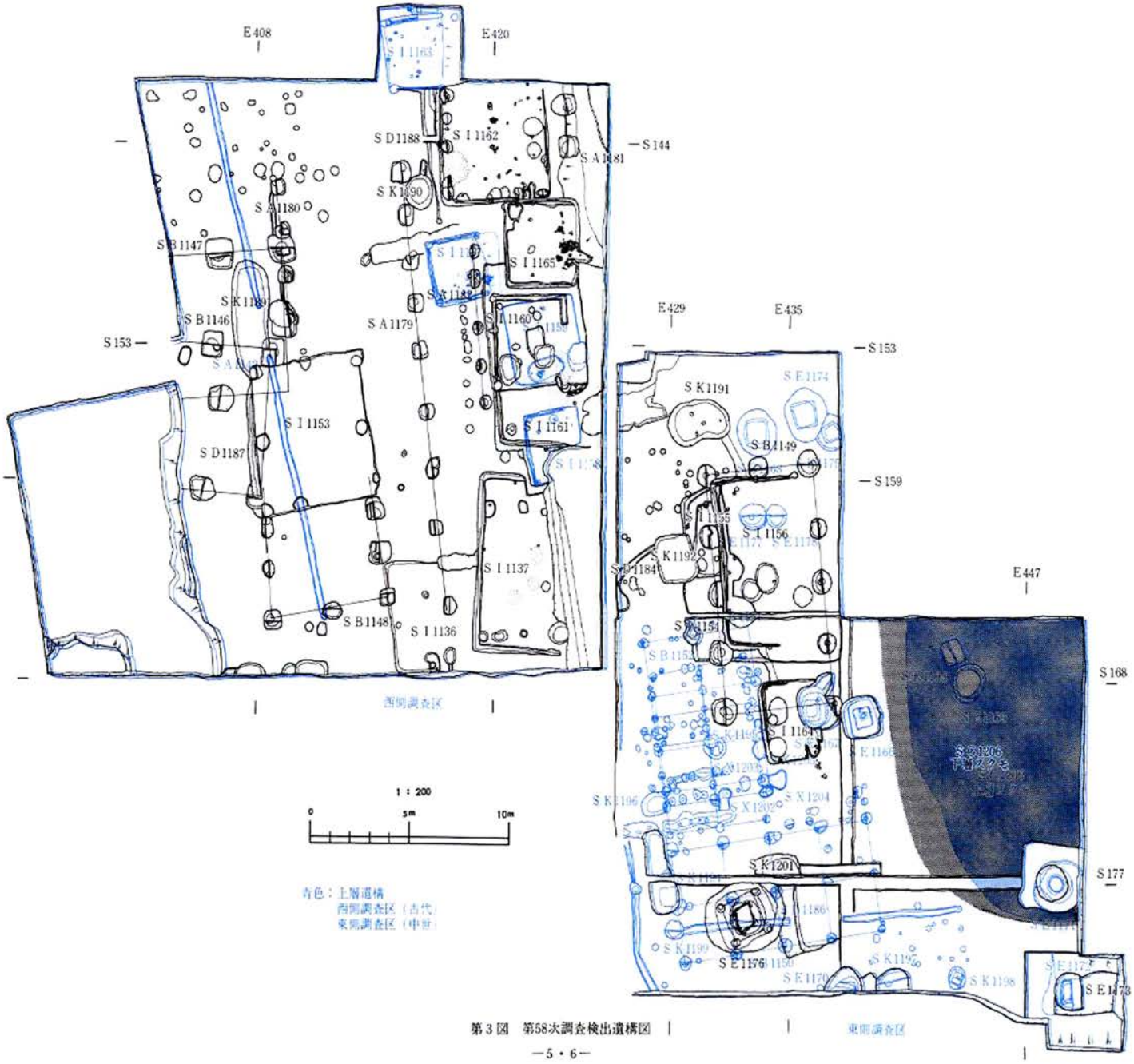
東側調査区南半は、前年度の未調査地区であり、表土はほぼ除去されていた。この区域は表土下がローム面ではなく、暗褐色土の遺構面を精査していった。ＳＥ1166、1167、1169、ＳＤ1186、ＳＢ1150、ＳＸ1202～1205焼土遺構、ＳＫ1194～1196等を検出した他、中央西寄りで多数の小ピット状の掘り方群を検出した。井戸跡群を掘り下げ精査したところ、ＳＥ1166は木組の井戸枠を持つ井戸跡と判明した(5月21日～6月3日)。検討の結果、東側調査区南半の暗褐色土層は、中世の遺物包含層であり、遺構群は中世のものと判断された。また更に下層に遺物包含層が存在することが判明した。東側調査区上層遺構の写真撮影及び遣り方を設置しての平面実測を実施した。またそれと並行して、西側調査区では住居跡群の掘り下げと精査を行った(6月4日～15日)。

西側調査区では、ＳＩ1137の北側から調査区北辺にかけて、褐色土の落ち込みが連続しており、

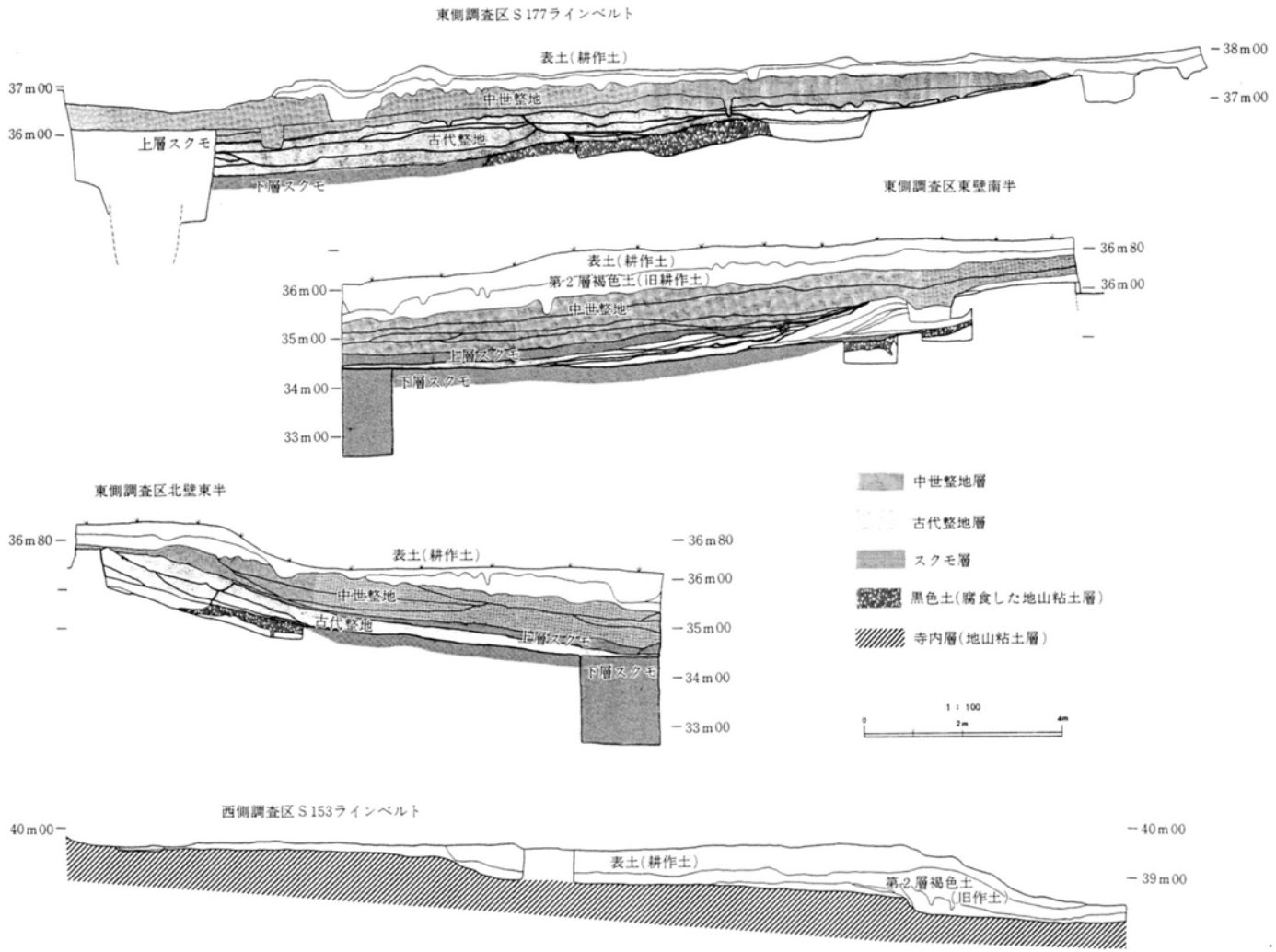
重点的に精査を行っていった。その結果、ＳＩ1157、1158、1162の住居跡を検出し、掘り下げて精査した。一方、ＬＩ～ＬＫ－58～59のグリッドにそれらと重複し、更に下層となり古いと考えられる落ち込みが検出された。また北辺付近でＳＩ1163の一部を検出したため、調査区を拡張して全容を把握し精査した。東側調査区では、焼土遺構群と土壙の掘り下げ、ＳＢ1150の掘り方断ち割りを行った。焼土遺構群の炭化物内より砂鉄が採集されたが、鉄滓、フイゴ等は出土せず遺構の性格付けはできなかった。

西側調査区では、ＳＡ1179、ＳＢ1146、1147の掘り方断ち割りを行った他、ＳＩ1153南側に検出された掘り方を精査し、ＳＢ1148とした。東側調査区では、ＬＢ～ＬＥ－50～53のグリッドにおいて、西側の中世遺構面から連続し厚く堆積していく暗褐色土の整地層を除去し、下層の包含層を追求していくこととした(6月26日～7月1日)。暗褐色土とその直下の黒色土層を除去したところ、層内より珠洲系中世陶器、青磁碗等が出土し、中世の整地層であることが確認された。整地層下より沼地跡と考えられるスクモ層を検出した。スクモ層を除去していったところ、スクモ層内より回転糸切り無調整の赤褐色土器坏が出土し、古代以降の堆積層であることが確認された。調査区東辺において、中世整地土より掘り込まれるＳＥ1171、1172を検出し、掘り下げを開始した(7月2日～13日)。東側調査区北部で住居跡状落ち込みを精査し、ＳＩ1154～1156の３軒の重複する住居跡を検出した他、重複する井戸跡ＳＥ1174、1175を検出し掘り下げた。南東部ではＳＥ1172のプラン検出のための調査区を拡張した他、ＳＥ1171埋土より牛骨が出土したため、バインダーで固定し取り上げた。南西部では中世整地層を除去し、古代整地層上の遺構を精査し、ＳＥ1176を検出した。西側調査区では全景写真撮影を行った(7月14日～29日)。東側調査区では、ＬＢ～ＬＥ－50～53グリッドで上層スクモ層下の灰黄褐色土層の除去を開始し、層内出土遺物より古代整地層であることを確認した。その整地層下より下層スクモ層の広がりを検出した。また、掘り下げていたＳＥ1176底部より井戸枠と方形曲物の井筒が出土した。西側調査区では、遺構全体の平面実測を行った(7月30日～8月11日)。この間８月１日に現地説明会を開催し、120名の参加者を得た。

東側調査区中央部から北部にかけて古代整地層上の堆積土除去作業を行い、ＳＩ1164、ＳＢ1149を検出した。また、周辺の小ピット群の精査検討を行い、ＳＢ1151、1152を検出した。西側調査区では、ＬＩ～ＬＫ－58～59グリッドの住居跡状落ち込みを精査し、新しいものからＳＩ1159、1160、1161、1165と複雑に重複する住居跡を検出した他、ＳＩ1162東側に柱列ＳＡ1181の一部を検出した(8月12日～9月3日)。東側調査区では下層遺構全体の平面実測を行った。西側調査区では、北東部の住居跡群の掘り下げ後の床面精査や実測、写真撮影を行った(9月3日～11日)。全域の調査にめどがついたため、調査区全体の航空写真撮影を行い(9月16日)、全景写真撮影とグリッドごとに調査区の東西南北の壁の実測、写真撮影も行った(9月16日～24日)。作業の主体を第59次調査に移した後、補足調査を行った。下層スクモ層の堆積状況把握のためのトレンチを３ケ所に設定し、掘り下げた。また、ＳＩ1156床面の土壙状落ち込みの精査を行い、ＳＥ1177、1178を検出した。その際Ｓ



第３図　第58次調査検出遺構図



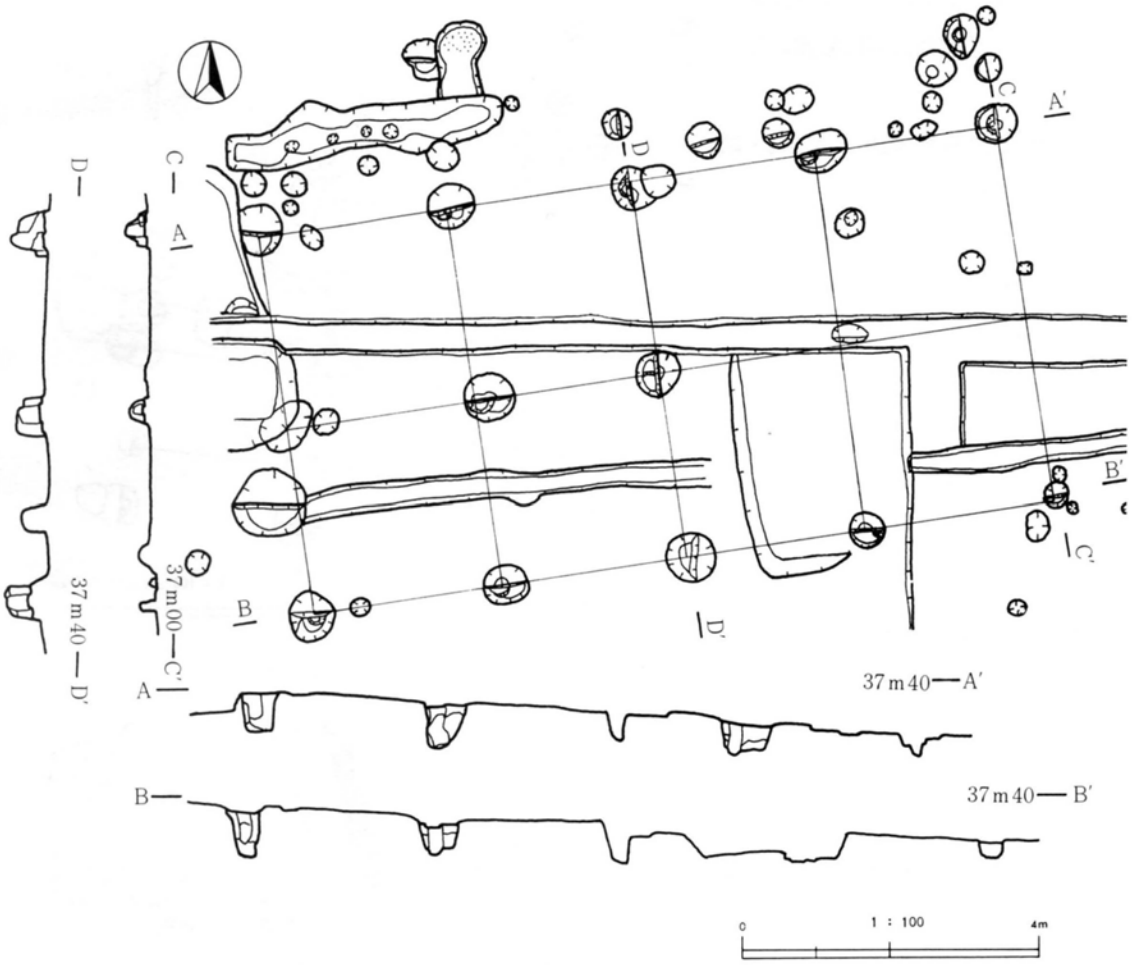
第４図　第58次調査土層断面図

E1176東側に土壙の存在を確認し、ＳＫ1201とした。補足調査分の実測、写真撮影を行い、10月８日に調査を終了した。

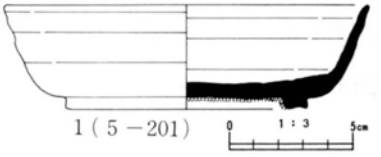
２）　検出遺構と出土遺物

ＳＢ1150掘立柱建物跡　（第5図・図版3）

調査区東側中世整地層上で検出した梁間２間(2.4ｍ＋2.4ｍ)、桁行４間(2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ)の総柱東西棟の掘立柱建物跡である。建物方位は、梁間が北で約９度西に振れる方向となる。



第５図　ＳＢ1150掘立柱建物跡



第６図　ＳＢ1150掘立柱建物跡出土遺物

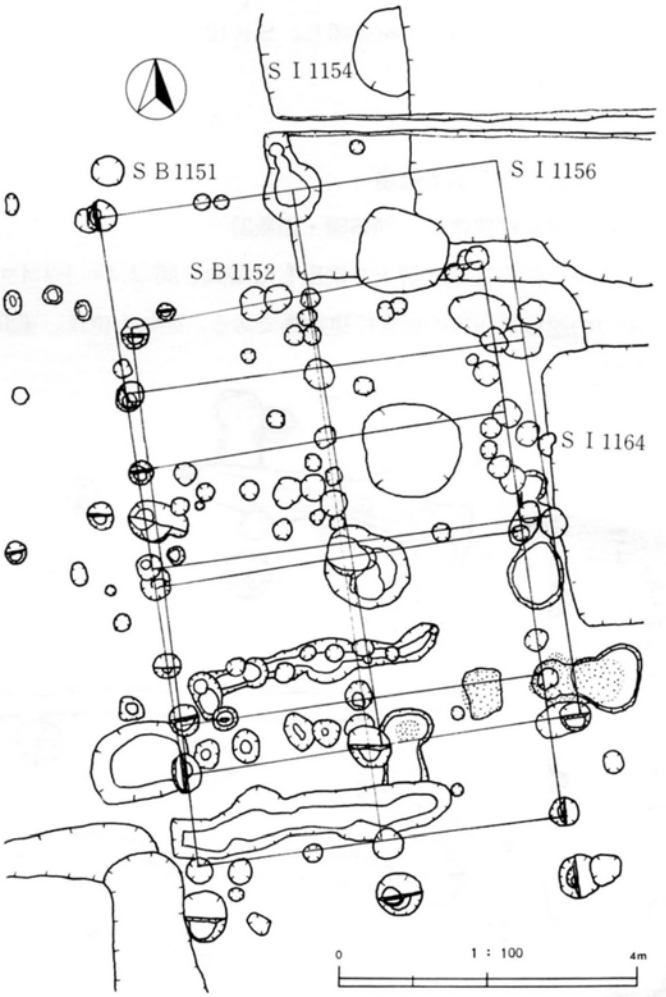
柱掘り方は、直径50cmの円形で深さ10～30cm、直径約20cmの柱痕跡が認められる。東側の掘り方は削平により浅くなっている。埋土は褐色土が主体をなす。

ＳＢ1150出土遺物　(第6図・図版30)

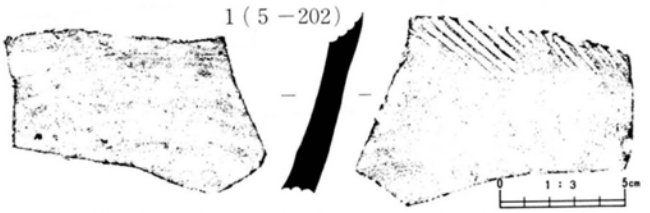
須恵器：掘り方埋土から出土の須恵器台付坏である。ヘラ切り後撫で調整を施す。底部は硯に転用。

ＳＢ1151掘立柱建物跡　(第7図・図版2)

調査区東側中世整地層上で検出した梁間２間(2.4ｍ＋2.4ｍ)、桁行４間(2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.7ｍ)の南北棟、総柱の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約９度西に振れる方向となる。柱掘り方は直径約40cmの円形である。ＳＢ1152と重複し、これより新しい。ＳＢ1152に対し、ほぼ同規模で位置と方位をずらし、建て替えが行われている。ＳＸ1202、1205と重複し、これらの焼土遺構より古い。



第７図　ＳＢ1151・ＳＢ1152掘立柱建物跡



第８図　ＳＢ1152掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ1152掘立柱建物跡　(第7図・図版2)

ＳＢ1151と重複し、これより古い。梁間２間(2.4ｍ＋2.4ｍ)、桁行４間（1.8ｍ＋1.6ｍ＋1.8ｍ＋1.8ｍ）の南北棟、総柱の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約７度西に振れる方向となる。柱掘り方は直径約40cmの円形である。ＳＸ1204、1205と重複し、これらより古い。

ＳＢ1152出土遺物　(第8図・図版30)

中世陶器：本建物西桁に隣接する小掘り方から出土した中世陶器甕の体部下端である。桁、梁柱筋としての組み合わせが不可能な多数の小掘り方が検出されているが、その一つから出土したもの

で、ＳＢ1152建物跡が同位置での建て替えと考えれば最も建物の時期に近い遺物と言える。

ＳＢ1146掘立柱建物跡　（第9図・図版4）

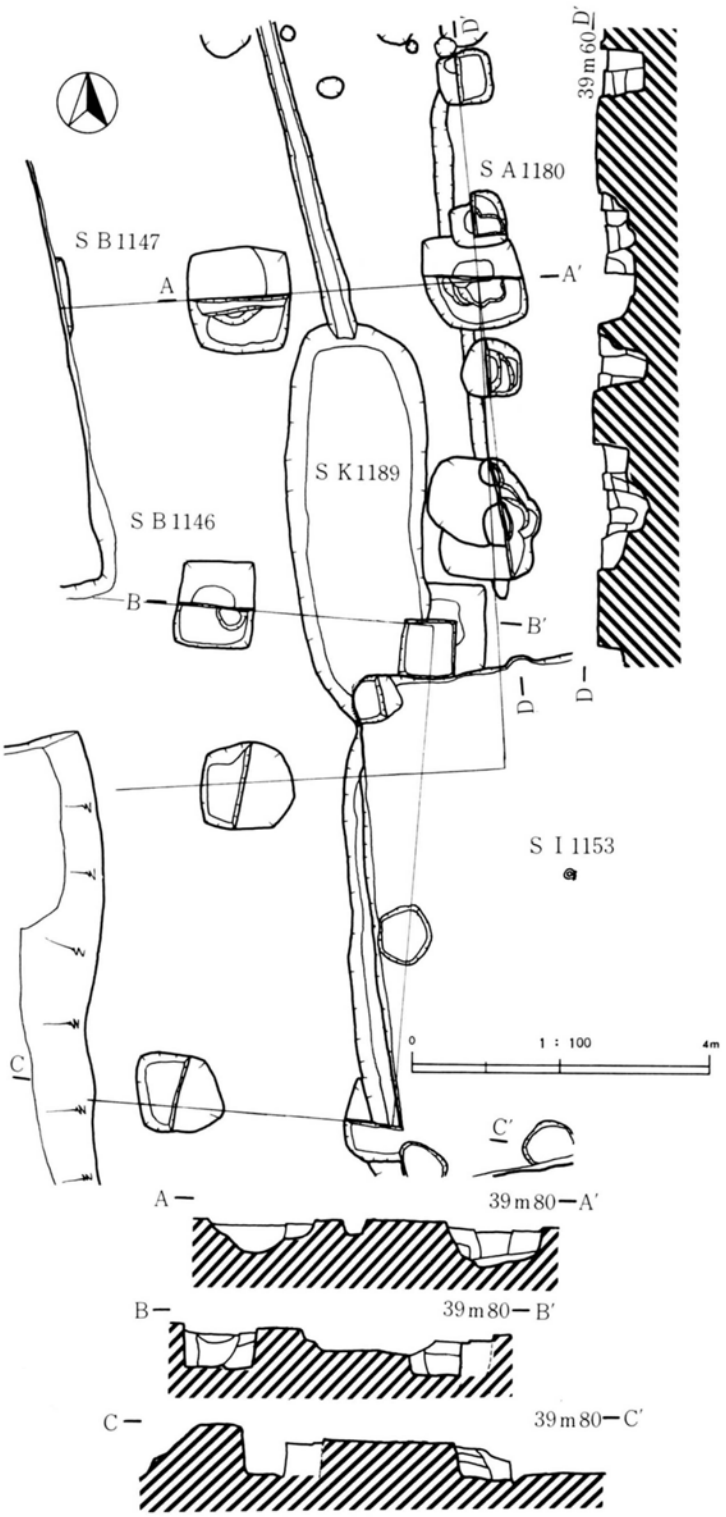
調査区西側で検出した梁間２間(3.3ｍ＋3.3ｍ)、桁行２間以上(3.0ｍ＋…)の東西棟の掘立柱建物跡である。東西桁行は削平により確認されない。梁間中央の柱の掘り方は、ＳＩ1153に削平され不明である。建物方位は梁間が北で約４度東へ振れる方向となる。柱掘り方は1.1ｍ×1.0～1.2ｍの方形で深さ40cm、直径約50cmの柱痕跡が認められる。埋土は褐色土が主体をなす。ＳＢ1147と重複し、これと同規模の建物であり、建て替えが行われたと考えられるが、新旧関係は不明である。ＳＩ1153、ＳＫ1189とも重複し、それらよりも古い。

ＳＢ1146出土遺物　（第10図・図版30）

須恵器：掘り方埋土から出土した須恵器長頸壺底部である。

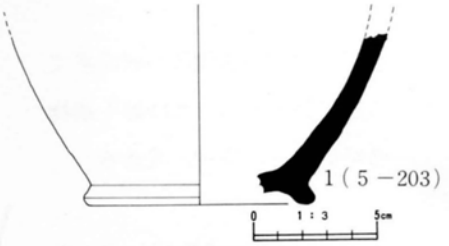
ＳＢ1147掘立柱建物跡　（第9図・図版4）

ＳＢ1146と重複し、位置的には北寄りに建てられているが、



第９図　ＳＢ1146・ＳＢ1147掘立柱建物跡・ＳＡ1180柱列跡

新旧関係は不明である。梁間２間(3.3ｍ＋3.3ｍ)、桁行２間以上(3.3ｍ＋…)の東西棟の掘立柱建物跡である。東西桁行は削平により確認されない。東梁の南東隅柱は、ＳＩ1153に削平され不明である。建物方位は梁間が北で約３度西へ振れる方向となる。柱掘り方は1.2～1.4ｍ×1.2～1.4ｍの方形で、深さ40～50cm、直径約50cmの柱痕跡が認められる。埋土は褐色土が主体をなす。ＳＩ1153、ＳＡ1180と重複しそれらより古い。



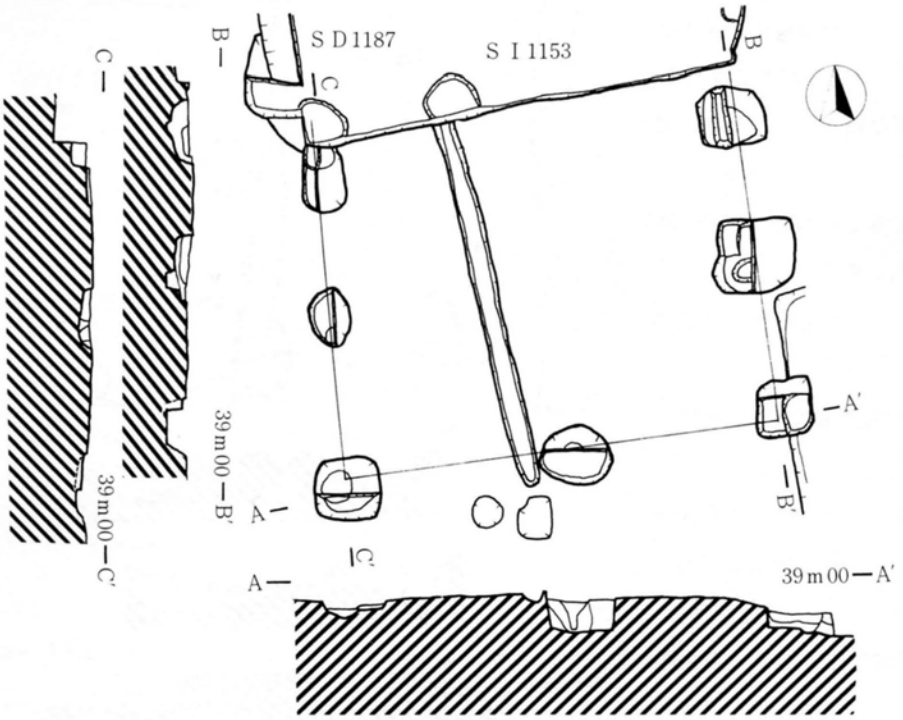
第10図　ＳＢ1146掘立柱建物出土遺物

ＳＢ1148掘立柱建物跡　（第11図・図版1）

調査区西側で検出した梁間２間(3.0ｍ＋3.0ｍ)、桁行２間以上(2.1ｍ＋2.1ｍ＋…)の南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約６度西へ振れる方向となる。柱掘り方は0.6～1.0ｍ×0.8ｍの方形で深さ20～80cm、削平によりかなり浅いものが多く、柱痕跡は明確でない。埋土は褐色土が主体をなす。ＳＩ1153と重複しこれより古い。

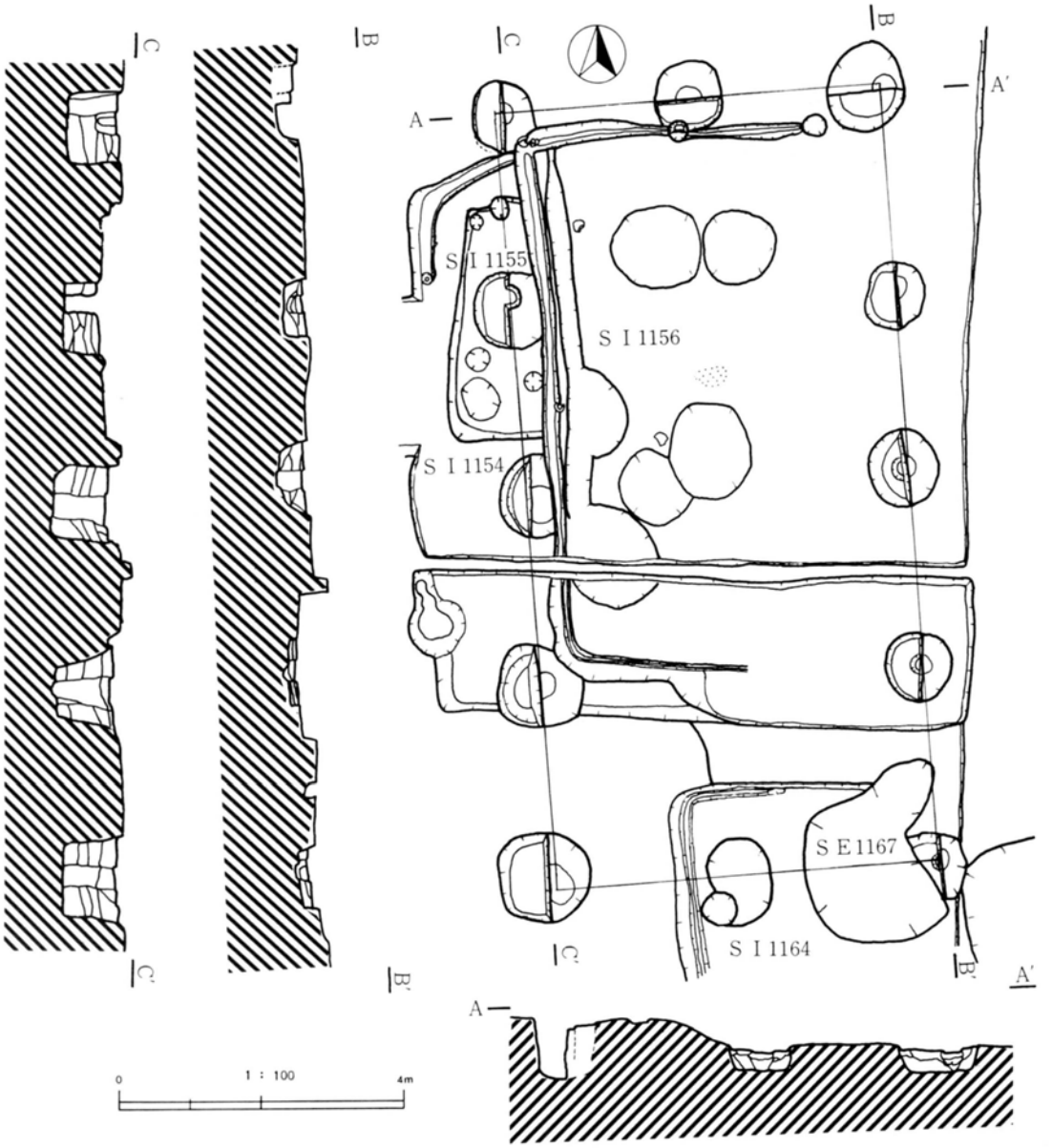
ＳＢ1149掘立柱建物跡　（第12図・図版6）

調査区東側で検出した梁間２間(2.7ｍ＋2.7ｍ)、桁行４間(2.7ｍ＋2.7ｍ＋2.7ｍ＋2.7ｍ)の南北



第11図　ＳＢ1148掘立柱建物跡

棟の掘立柱建物跡である。建物方位は、桁行が北で約５度西へ振れる方向となる。柱掘り方は直径



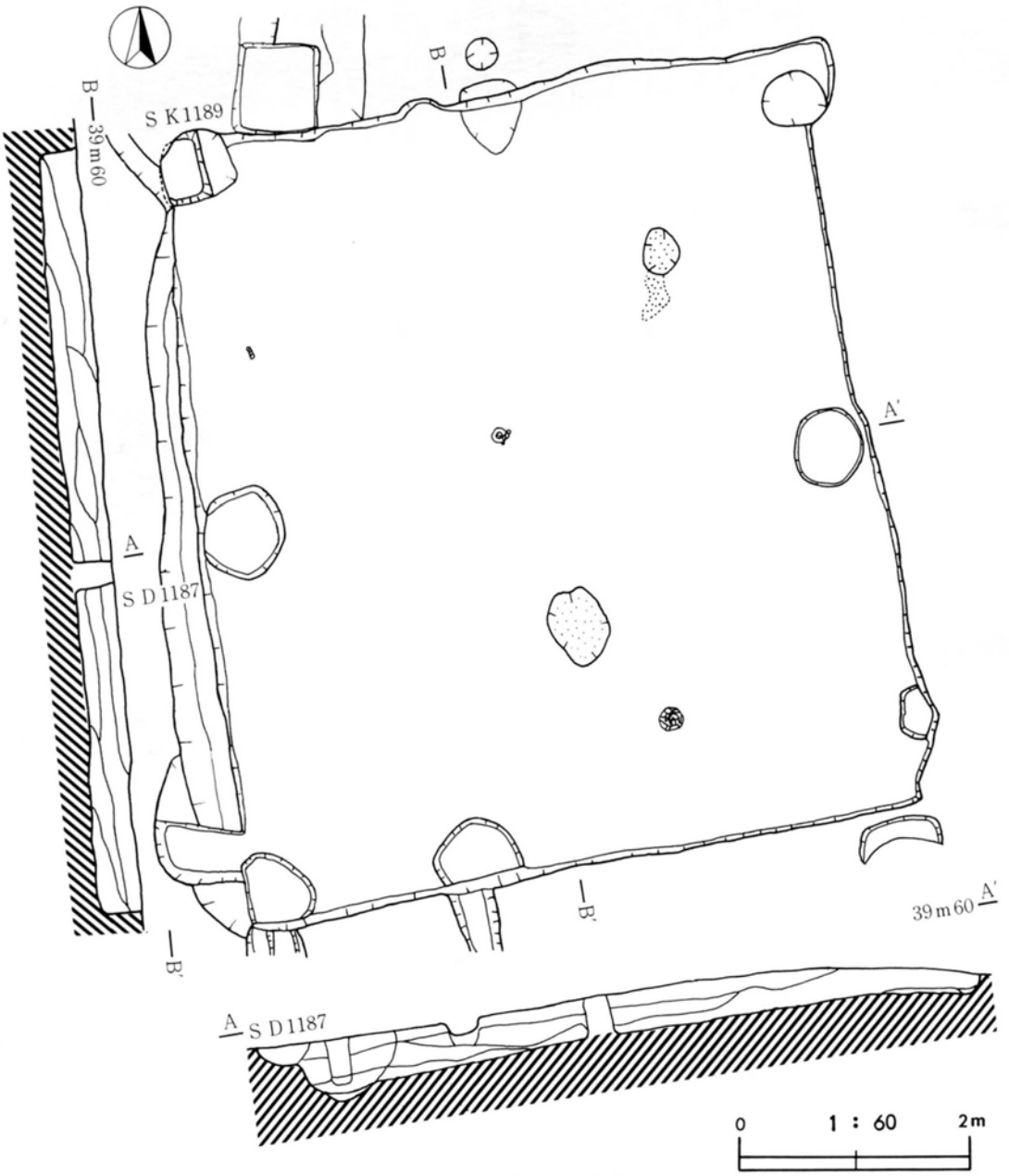
第12図　ＳＢ1149掘立柱建物跡

0.8～1.2ｍの円形で、深さ20～90cm、直径30cmの柱痕跡が認められる。東桁の柱掘り方は削平により浅くなっている。埋土は明黄褐色粘土と浅黄色粘土、褐色土が主体となり、版築が明確である。ＳＩ1154、1155、1156と重複し、ＳＩ1154より新しく、ＳＩ1155、1156よりも古い。また、ＳＩ1164と重複しこれよりも古い。

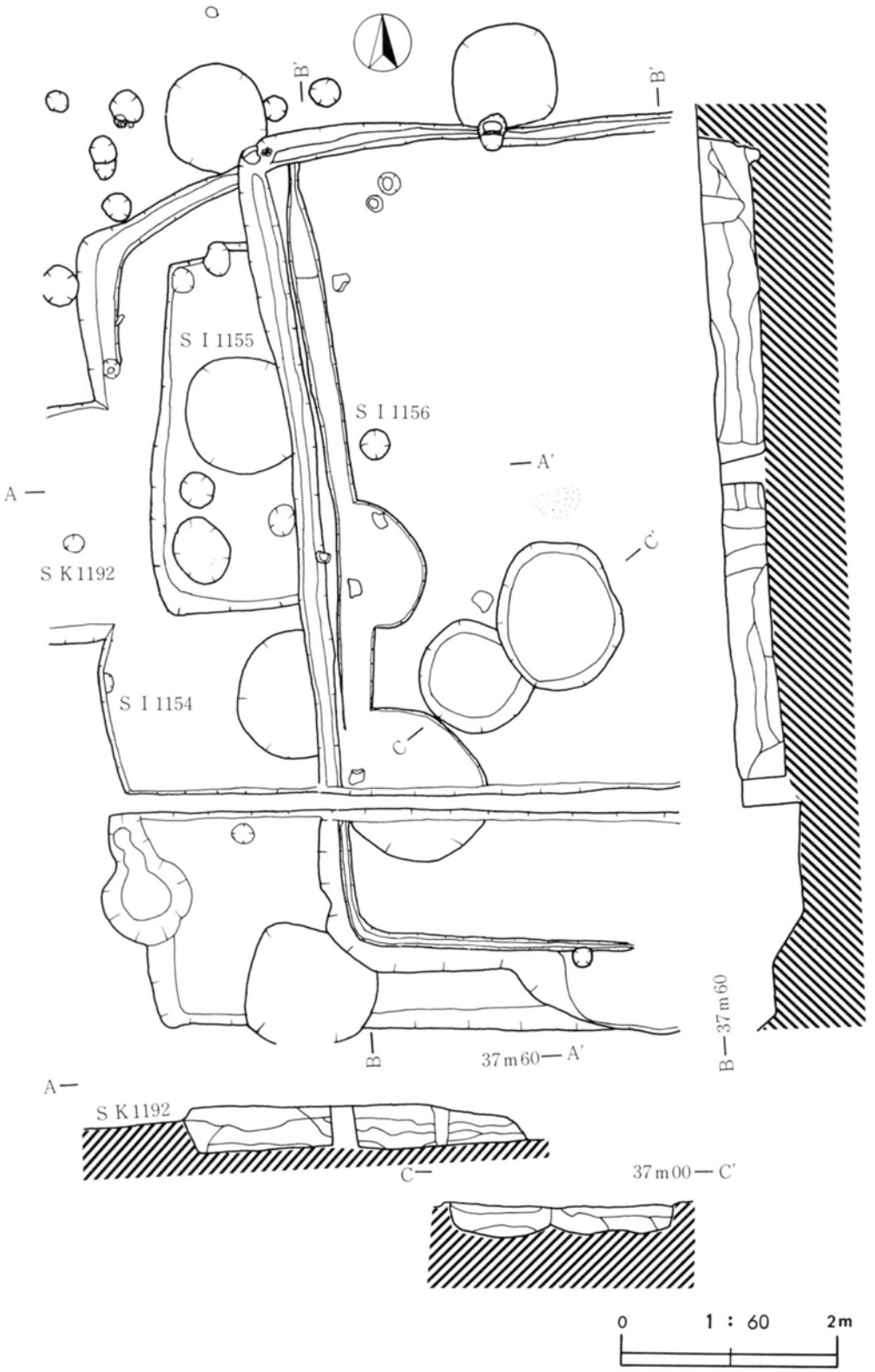
ＳＩ1153竪穴住居跡　（第13図・図版7）

調査区西側で検出された。平面形は東西5.8ｍ×南北6.5ｍの南北に長い長方形で、長軸方向は北

で約６度西に偏している。各辺に３本の直径50～80cmの円形もしくは楕円形の掘り方が伴うが、西辺を除き必ずしも規則的な配置ではない。カマドは存在せず、他の住居跡とは性格を異にする遺構と考えられる。住居壁は高い部分で40cmを計る。ＳＢ1146、ＳＢ1147、ＳＫ1189、ＳＤ1187、ＳＤＳＤ1142と重複し、ＳＢ1146、ＳＢ1147、ＳＫ1189より新しく、ＳＤ1187、ＳＤ1142より古い。



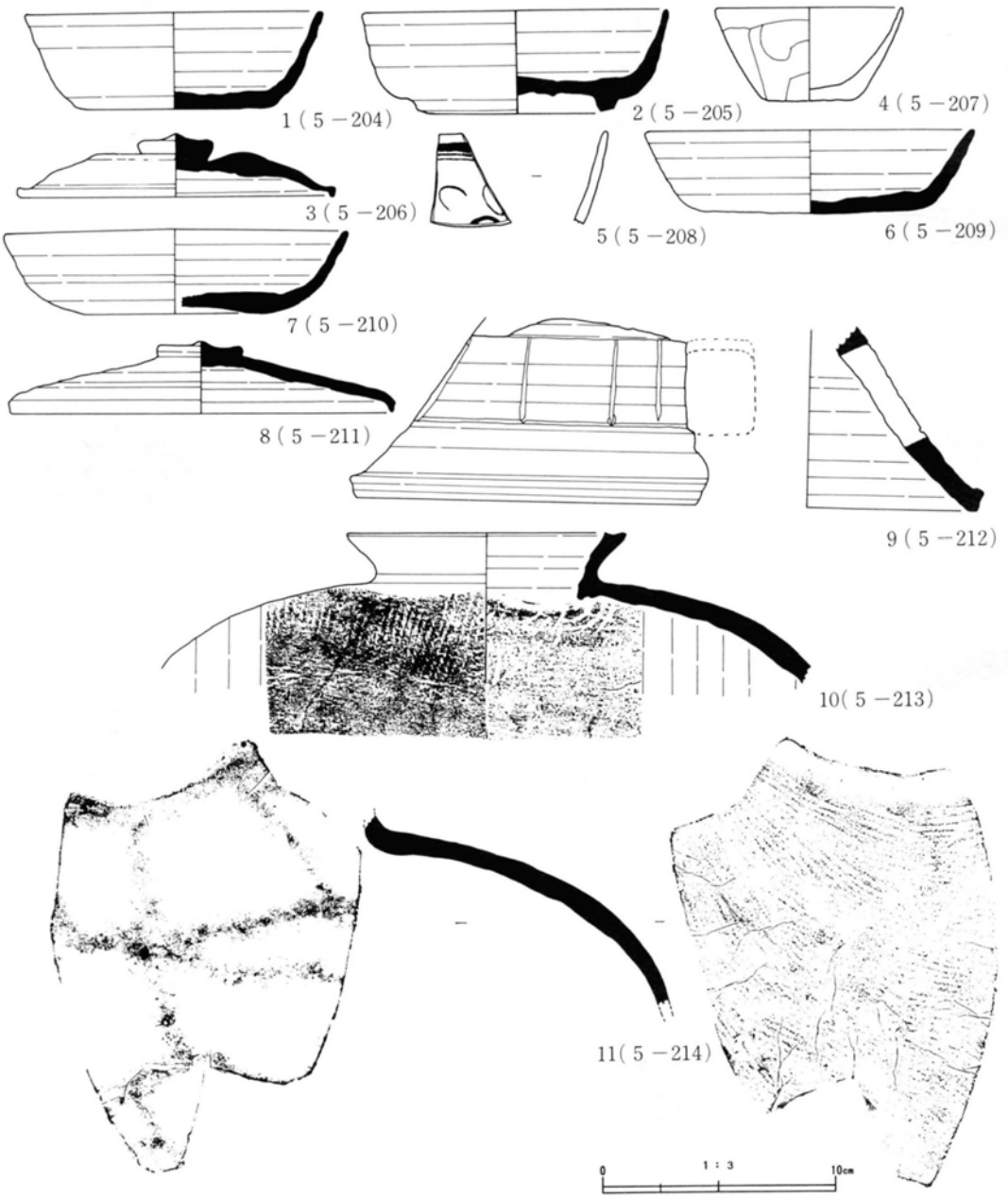
第13図　ＳＩ1153竪穴住居跡



第14図　S I 1154・S I 1155・S I 1156竪穴住居跡

ＳＩ1154竪穴住居跡　（第14図・図版7）

調査区東側で３軒住居跡が重複して検出された中で、最も古い。平面形は、東壁が削平されており不明であるが、東西2.0ｍ以上×南北7.8ｍの南北に長い長方形である。西壁は北で約６度西に偏している。カマドは認められない。削平により住居壁は15cmと浅い。ＳＢ1149、ＳＩ1155、ＳＩ1156、ＳＫ1192と重複し、それらより古い。



第15図　ＳＩ1154・ＳＩ1155・ＳＩ1156竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ1155竪穴住居跡　（第14図・図版7）

平面形は東壁が削平されており不明であるが、東西2.7ｍ以上×南北3.4ｍの南北に長い長方形である。西壁はほぼ真北を向く。カマドは認められない。住居壁は30cmを計る。ＳＢ1149、ＳＩ1154ＳＩ1156と重複し、ＳＢ1149、ＳＩ1154より新しく、ＳＩ1156より古い。

ＳＩ1156竪穴住居跡　（第14図・図版7）

平面形は、東壁が削平されており不明であるが、東西3.5ｍ以上×南北7.5ｍの南北に長い長方形である。西壁は北で約６度西に偏している。壁直下に10～30cmの周溝が巡る。床面南半分に焼土壙３基を伴う。カマドは認められない。住居壁は高い部分で40cmを計る。ＳＢ1149、ＳＩ1154、ＳＩ1155、と重複し、それらより新しい。

ＳＩ1154～1156出土遺物　（第15図・図版30）

１～５は重複が不明な段階で取り上げており、一部新しいピット等の遺物が混入していると考えられる。。６～11はＳＩ1156と確認してからの遺物で、７、９、11は床面である。

須恵器（１～３・６～８・10・11）：１、６、７はヘラ切り撫で調整の坏、２は台付坏である。３、８は蓋、10は横瓶、11は甕である。

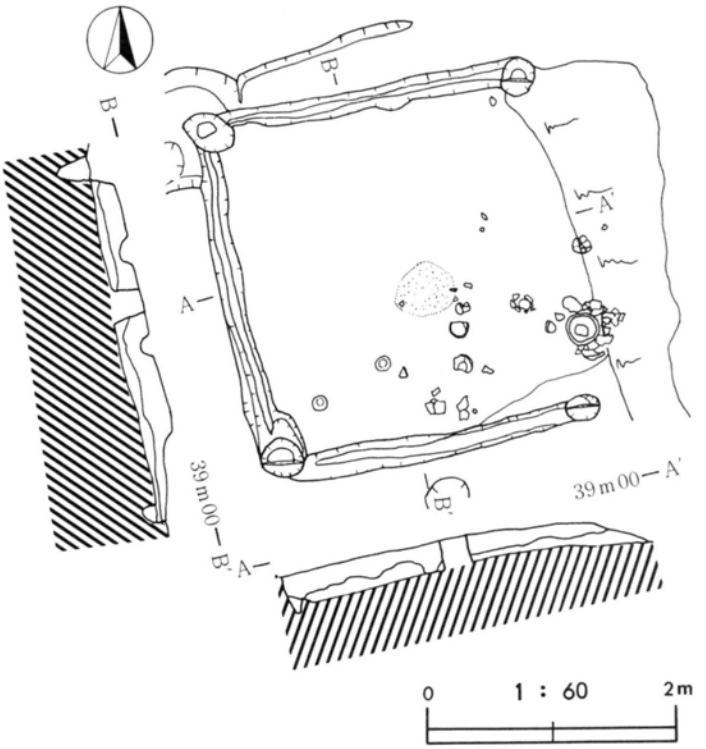
縄文土器（４）：胎土に砂粒を多量に混入した土器である。

青磁（５）：色調が黄褐色の劃花文碗である。

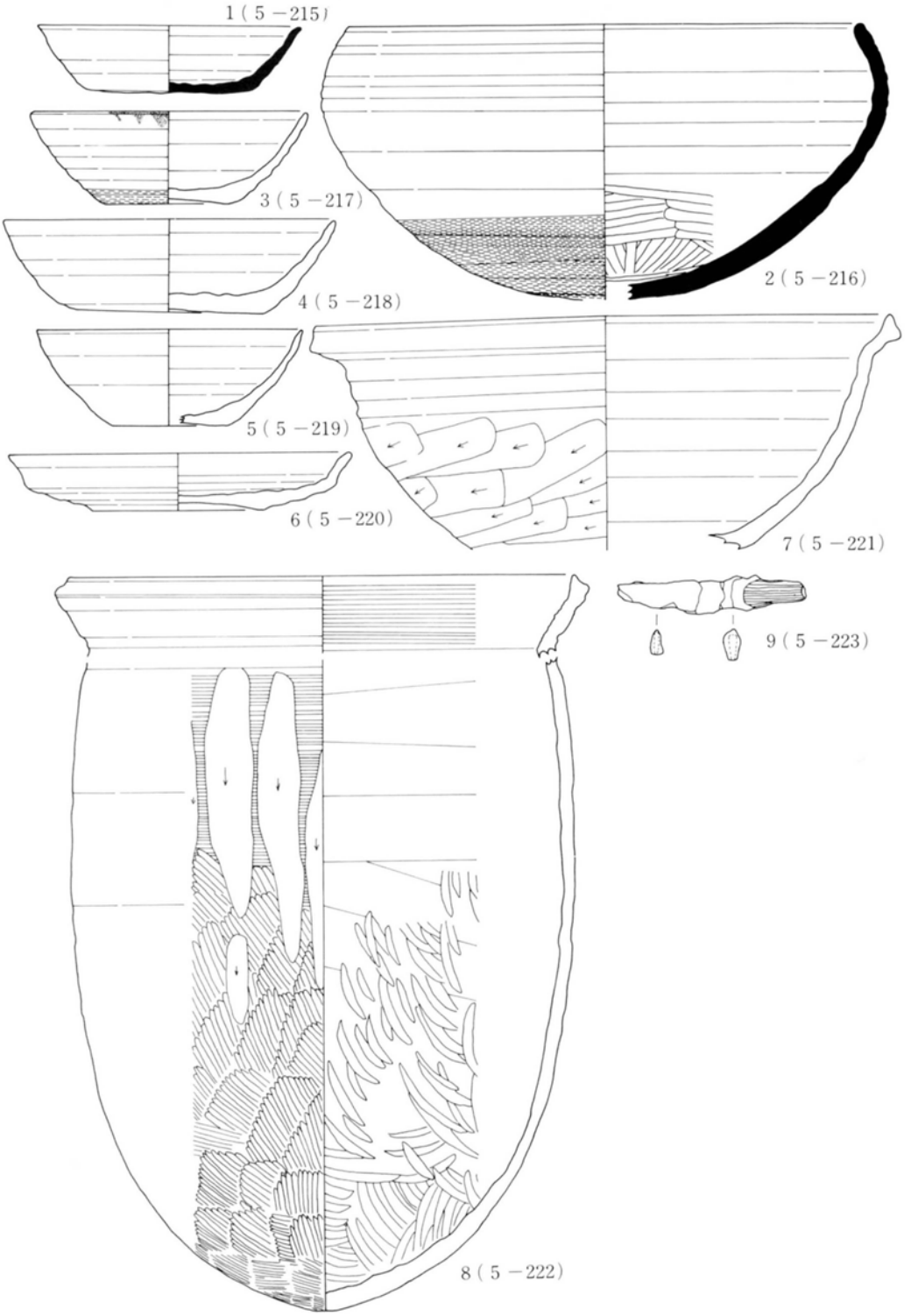
硯（９）：脚部に縦方向の沈線と透しのある円面硯である。

ＳＩ1157竪穴住居跡　（第16図・図版8・11）

調査区西側で検出された。平面形は、東壁が削平されて不明であるが、隅柱の位置からは、東西2.8ｍ×南北3.0ｍのほぼ方形である。西壁は北で約12度西に偏している。壁直下に幅18～22cmの周溝が巡る。四隅には柱掘り方を伴う。カマドの袖、煙道部は認められないが、削平された東壁南寄りに赤褐色土器鉢、



第16図　ＳＩ1157竪穴住居跡



第17図　ＳＩ1157竪穴住居跡出土遺物

甕を倒立して支脚としており、カマド跡と考えられる。住居壁は高いところで20cmを計る。ＳＡ1182と重複しこれより新しい。

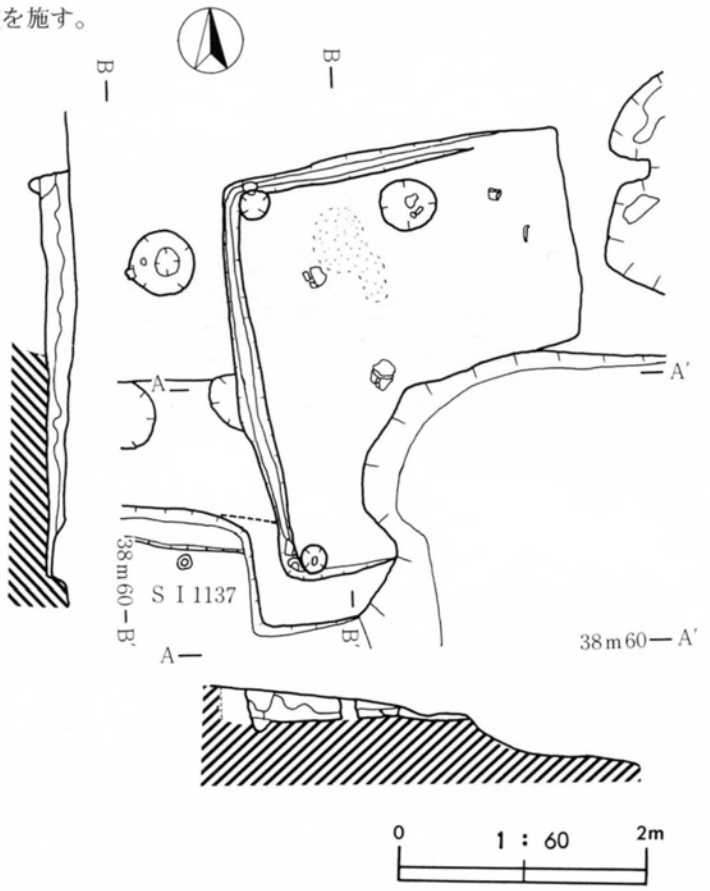
ＳＩ1157出土遺物　（第17図・図版31）

１、３、５、６、９は床面、２、４、７、８はカマド出土である。

須恵器（１・２）：１はヘラ切り無調整の坏である。２は鉄鉢を模した鉢で、外面下半を底部までケズリ調整、内面はヘラ撫で調整を施す。

赤褐色土器（３～８）：３、４、６は糸切り、３は体部下端にケズリ調整を施す。５は切り離し不明である。７は、カマド支脚に使用された鉢である。外面下半部に横位の手持ちケズリ調整を施す。８は、７同様カマド支脚に使用された丸底長胴甕である。外面は上半部横位のカキ目、下半部は平行タタキし、その後に縦位の手持ちケズリ調整を部分的に施す。内面口縁部は横位のカキ目、上半部は回転利用の撫で調整を施し、下半部には扇状のアテ具痕跡が認められる。

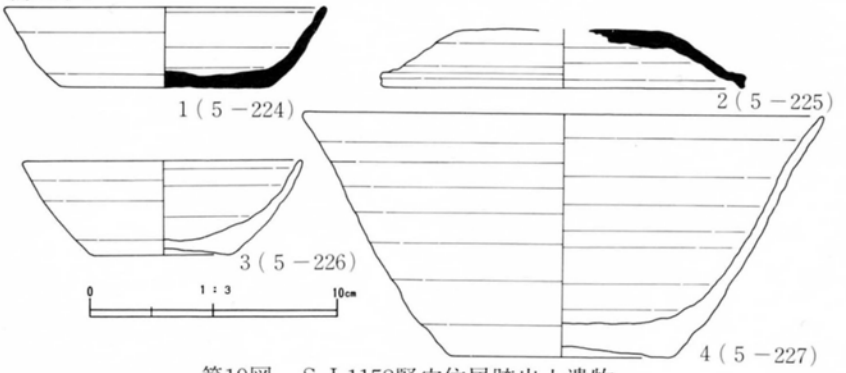
鉄製品（９）：刀子で茎部には木質部が残る。



第18図　ＳＩ1158竪穴住居跡

ＳＩ1158竪穴住居跡　（第18図・図版8）

調査区西側で検出された。平面形は、東壁が削平されており不明であるが、東西2.8ｍ以上×南北3.2ｍのほぼ方形である。西壁は北で約

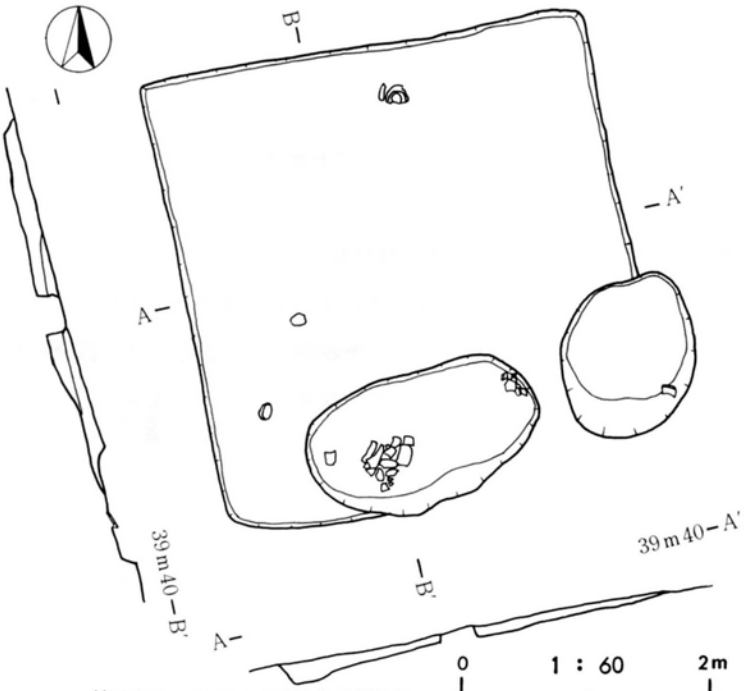


第19図　ＳＩ1158竪穴住居跡出土遺物

11度西に偏している。壁直下に幅15～20cmの周溝が巡る。北西、南西隅に柱掘り方を伴う。カマドは認められない。住居壁は高い部分で25cmを計る。ＳＩ1137、ＳＩ1161と重複し、それらより新しい。

ＳＩ1158出土遺物　（第19図・図版31）

１、２、４は床面、３は埋土出土である。



第20図　ＳＩ1159竪穴住居跡

須恵器（１・２）：１はヘラ切り撫で調整を施した坏である。２は蓋である。

赤褐色土器（３・８）：３は糸切り、器面が荒れ、調整の有無は不明。４は糸切り無調整の椀である。

ＳＩ1159竪穴住居跡　（第20図・図版9）

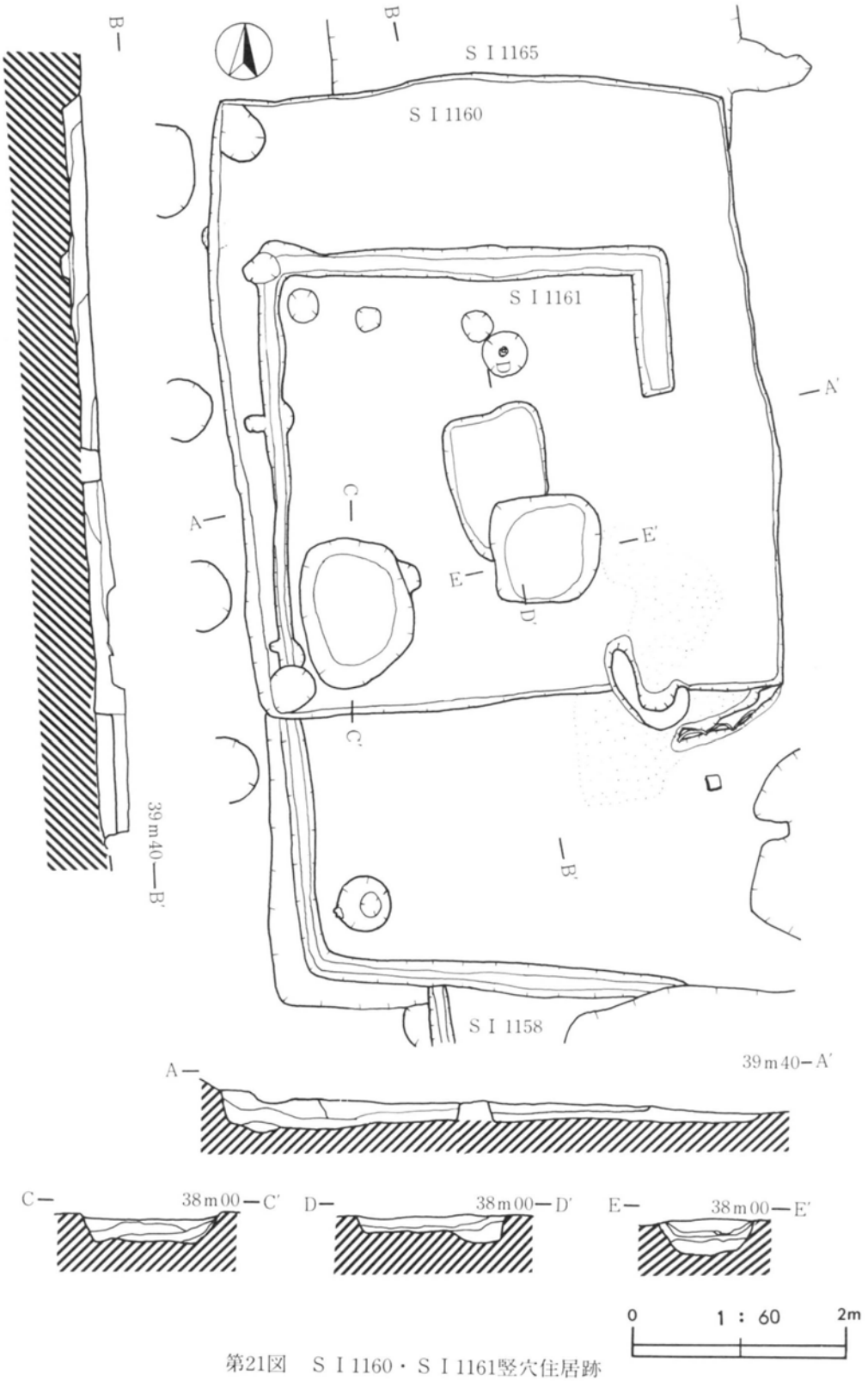
調査区西側で３軒住居跡が重複して検出された中で最も新しい。平面形は、東西3.5ｍ×南北3.5ｍの方形である。西壁は北で約11度西に偏している。南壁と南東隅部に土壙が重複し、住居壁が不明確となっている。カマドは不明である。全体に削平されており、住居壁は高い部分でも18cmと浅い。ＳＩ1160、ＳＩ1161と重複し、それらより新しい。

ＳＩ1160竪穴住居跡　（第21・22図・図版9・11）

平面形は、東西5.0ｍ×南北5.8ｍの南北に長い長方形である。長軸方向は北で約６度西に偏している。北西、南西隅に柱掘り方を伴うが、東側は未検出である。カマドは南壁東寄りに粘土で構築されている。住居壁は高い部分で30cmを計る。ＳＩ1159、ＳＩ1161、ＳＩ1165と重複し、ＳＩ1161、ＳＩ1165より新しく、ＳＩ1159より古い。ＳＩ1161との重複部分に焼土壙を３基検出したが、どちらに伴うものかは不明である。

ＳＩ1161竪穴住居跡　（第21・22図・図版9・11）

ＳＩ1158、ＳＩ1160に削平され、北半分は周溝のみ遺存し、東壁及び東側周溝も失われている。平面形は東西3.8ｍ×南北6.8ｍの南北に長い長方形である。長軸方向は北で約５度西に偏する。壁直下に幅12～30cmの周溝が巡る。カマドは東壁中央に粘土と平瓦を補強材として使用し構築されて



第21図　S I 1160・S I 1161竪穴住居跡

いるが、北側半分はＳＩ1160により破壊されている。住居壁は高い部分で30cmを計る。ＳＩ1158、ＳＩ1159、ＳＩ1160と重復しそれらより古い。

ＳＩ1159～1161出土遺物　（第24図・図版32）

１～５はＳＩ1159、６・７はＳＩ1160、８はＳＩ1161のそれぞれ埋土から出土、９は住居跡か否か確定できない。

須恵器（１・２・６・７）：１、６、７はヘラ切り後軽い撫で調整を施す。１は底部に「橘」と考えられる墨書がある。６は底部をややていねいな撫で調整の後に幅３mm程の太さのヘラ記号を底部の幅いっぱいに一直線に施している。１、２は燈明皿と考えられる。

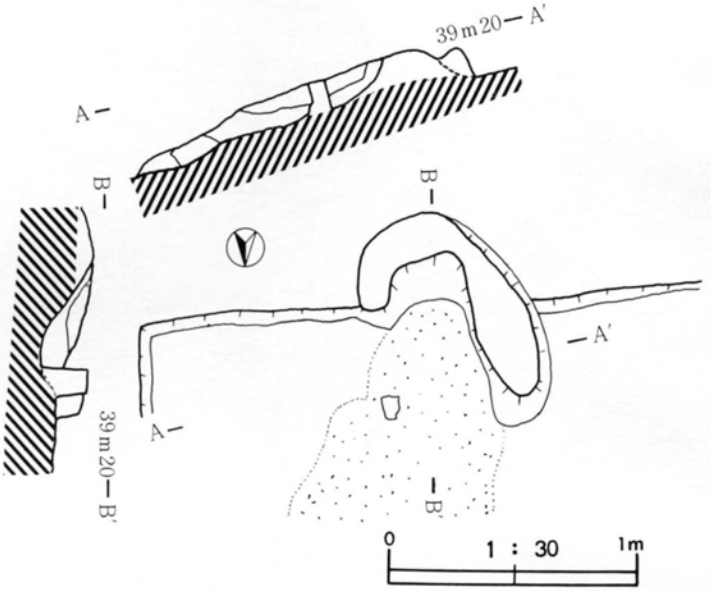
土師器（３）：手捏ねのミニュチュア土器で、スス状炭化物が内外面に付着していることから燈明皿と考えられる。

赤褐色土器（４・５・８）：４は鉄鉢を模したと思われる鉢、５は体部下半に斜め方向の手持ちケズリ調整を施した鉢である。８は糸切りで器面が荒れているため調整の有無は不明である。燈明皿に使用したと思われる。

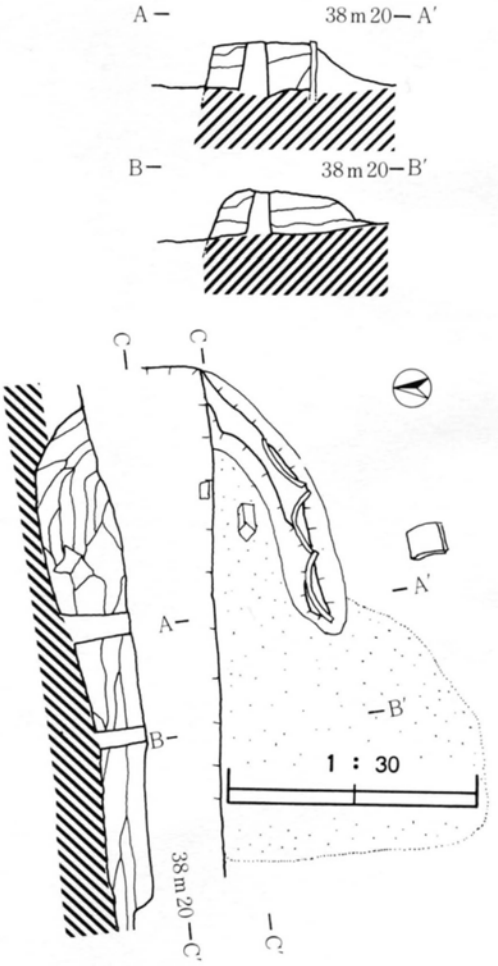
砥石（９）：緑色凝灰岩製の砥石である。

ＳＩ1162竪穴住居跡　（第25・26図・図版10・11）

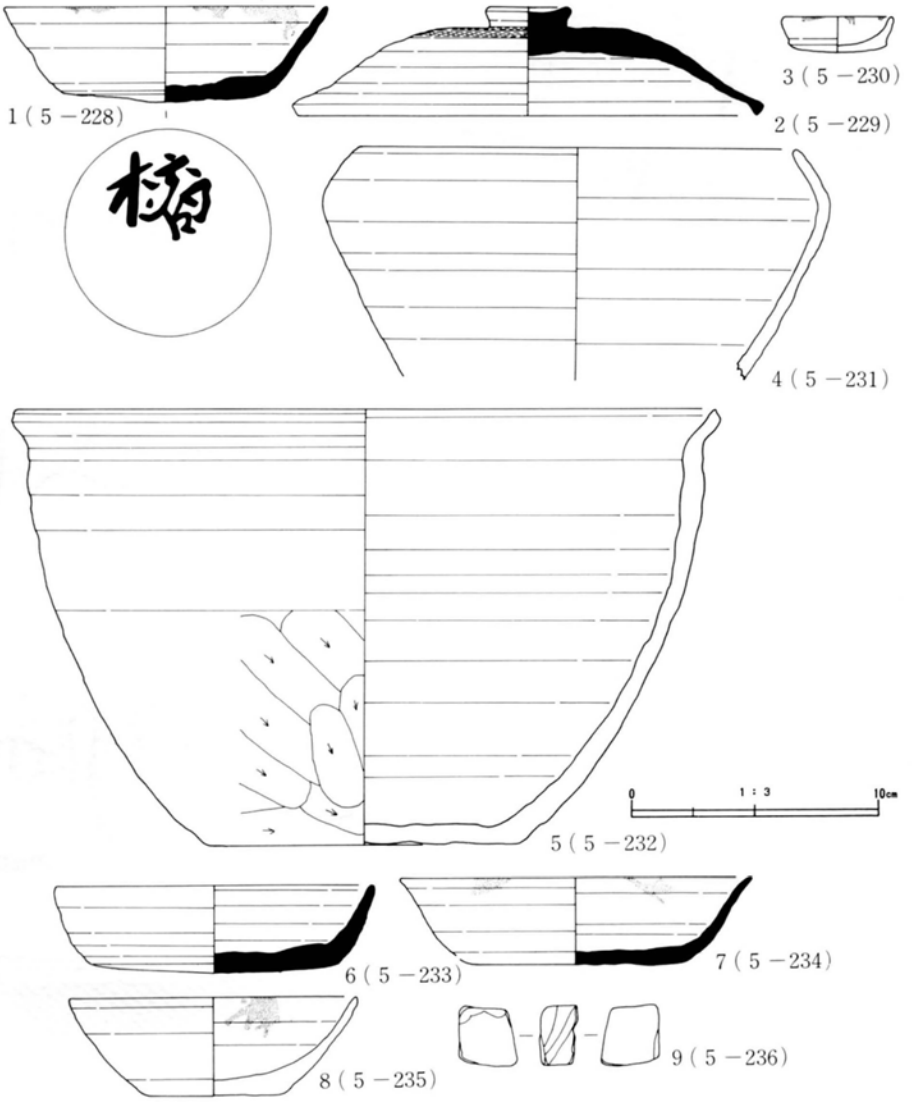
調査区西側北辺部で検出され、北壁の一部は未検出である。東西5.5ｍ×南北5.4ｍのほぼ方形である。西壁は北で約５度西へ偏する。西壁、南壁の直下に柱掘り方と幅10～20cmの周溝を伴う。西壁南寄りに炭化物・炭化木材が集中して埋土を覆っている部分が検出された。カマドは南壁東寄りに褐色土混じり



第22図　ＳＩ1160カマド跡



第23図　ＳＩ1161カマド跡



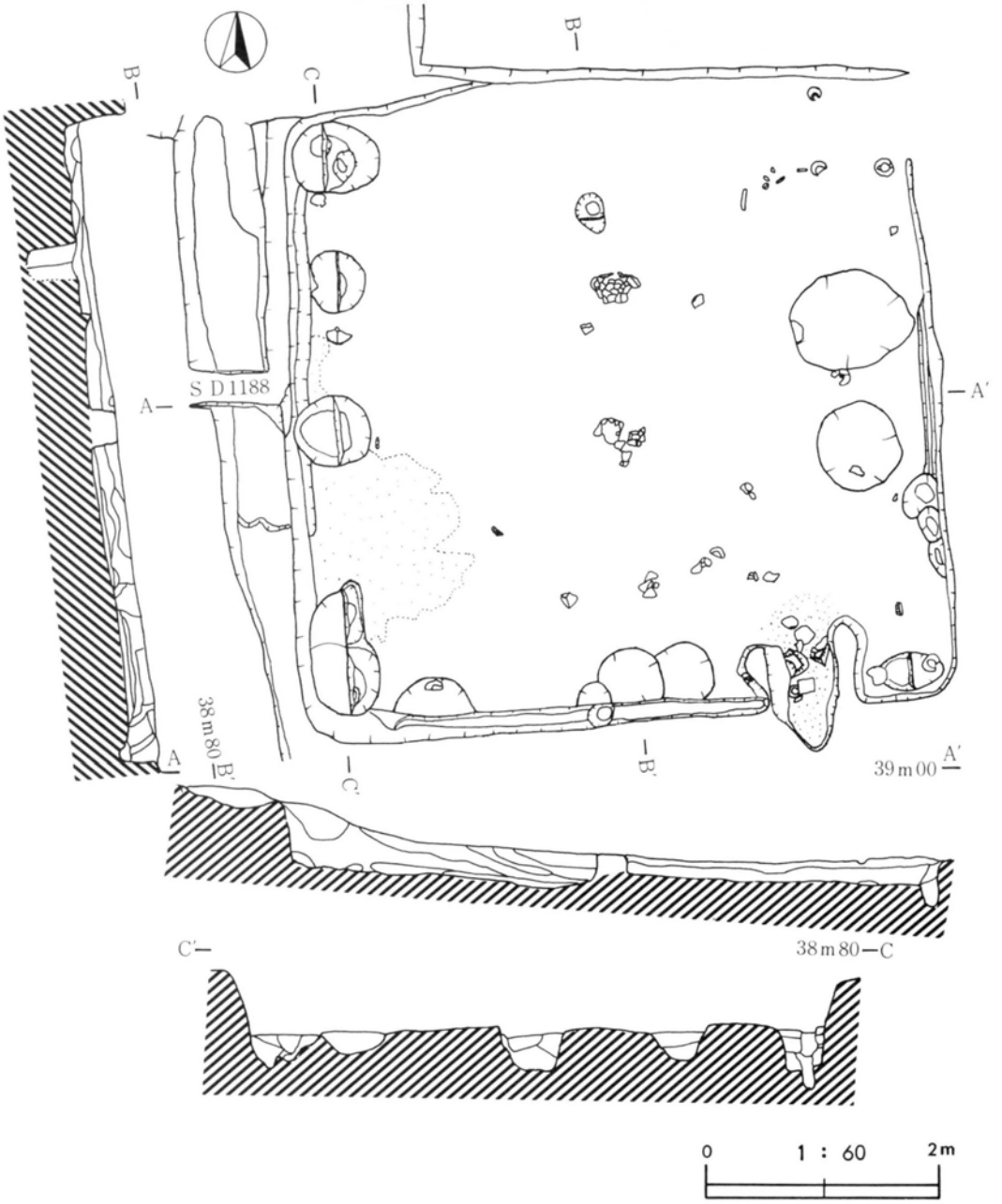
第24図　ＳＩ1159・ＳＩ1160・ＳＩ1161竪穴住居跡出土遺物

の粘土により構築されていたと考えられるが、削平により、袖部、煙道部とも遺存状況が悪い。住居壁は高い部分で50cmを計る。ＳＩ1165、ＳＤ1188と重複し、ＳＩ1165より新しく、ＳＤ1188より古い。

ＳＩ1162出土遺物　（第27図・図版33）

1、3～5、15、22、23は床面、2、18はカマド、6、20は床面上の掘り方、その他は埋土の出土である。

須恵器（1～18）：1～12はすべてヘラ切り後に撫で調整が施されている。3は判読不能、5は体部に「三」、底部に「仁」、7、8、10は底部にそれぞれ「岳」、「寺」、「寺」の墨書がある。また、4、9、11、12は内外に付着する炭化物から燈明皿と考えられる。13は糸切り無調整の坏である。14は擬宝珠状のツマミ、15～17は扁平なツマミである。



第25図　ＳＩ1162竪穴住居跡・ＳＤ1188溝跡

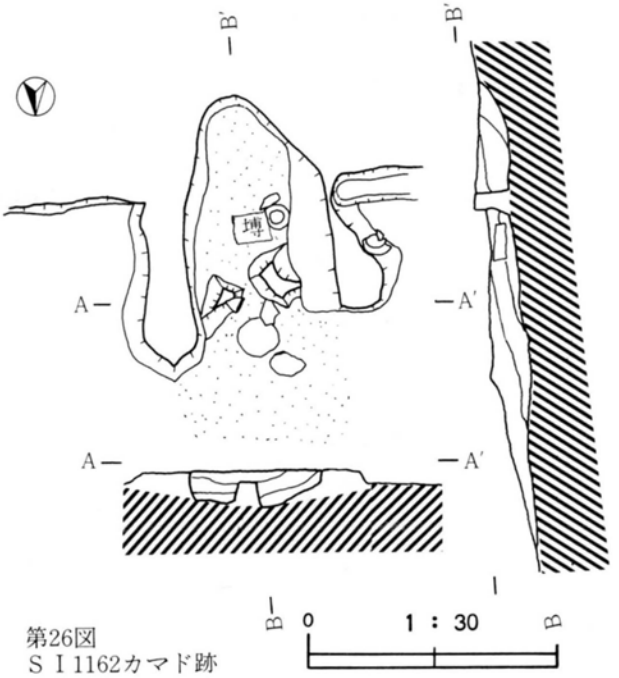
土師器(18)：内外面黒色処理を施したロクロ使用の蓋である。

赤褐色土器(19～22)：19は体部下端をケズリ調整、底部に手持ちケズリ調整を施す。20は器面が荒れているため調整は不明である。21はヘラ切りの小型坏で、内外面に多量に炭化物が付着していることから燈明皿と考えられる。

鉄製品(23～25)：23は少し薄いが、鉄挺と考えられる。24、25は鉄鏃である。

ＳＩ1163竪穴住居跡　（第28図・図版10）

調査区西側北辺部で検出された。平面形は東壁が削平され不明であるが、東西3.1ｍ以上×南北3.3ｍの方形である。西壁は北で約11度西に偏している。北西、南西隅に柱掘り方、北壁、南壁直下に幅12～18cmの周溝が巡る。カマドは認められないが住居東側に焼土、炭化物が堆積している。住居壁は高い部分で40cmを計る。東側の削平によりＳＩ1162との直接の切り合い関係は不明であるが、層位的にこれより新しいと考えられる。



第26図
ＳＩ1162カマド跡

ＳＩ1163出土遺物　（第29図・図版34）

７、８は床面、その他は埋土出土である。

須恵器（１～６）：１～３はヘラ切り撫で調整の坏である。４は糸切り無調整の坏で底部に「寺」の墨書がある。１を除きすべて赤褐色を呈する生焼け状態である。５、６はヘラ切り後肩部にケズリ調整を施す。両者とも墨の付着はないが内面を硯に転用。

赤褐色土器（７～10）：すべて糸切りの坏で、７、８は体部下端にケズリ調整を施す。７～９は炭化物の付着から燈明皿と考えられる。

石匙（11）：縦型の石匙である。

ＳＩ1164竪穴住居跡　（第30・31図・図版12）

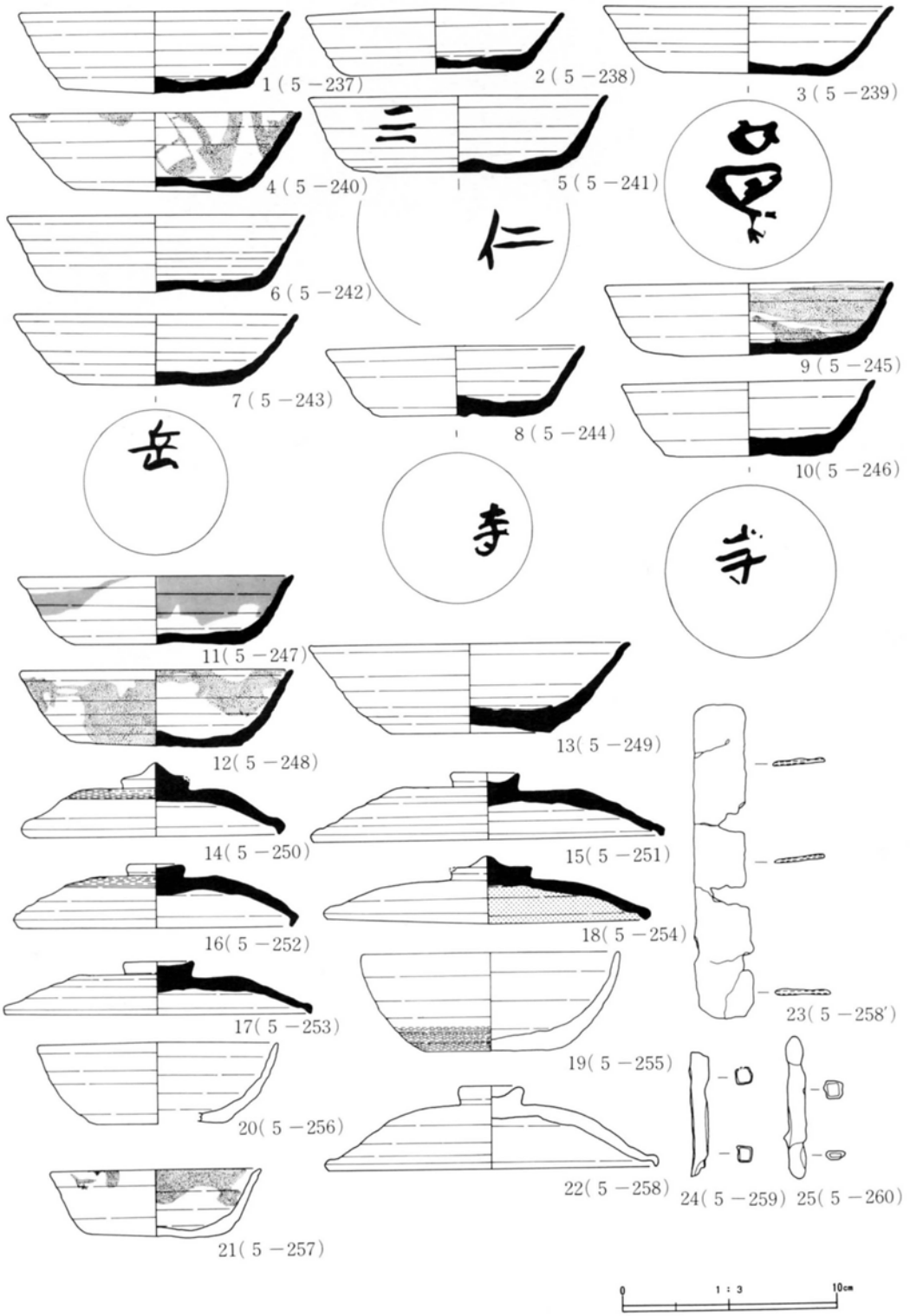
調査区東側で検出された。東壁の北半分はＳＥ1167により壊されている。平面形は、東西3.0ｍ×南北3.6ｍの南北に長い長方形である。西壁は北で約９度西に偏している。北壁、西壁直下に幅20cmの周溝が巡る。床面南西隅部に直径90cmの土壙を伴う。カマドは南壁東寄りに粘土により構築されているが、削平により遺存状況が悪く煙道部は失われている。住居壁は高い部分で14cmと浅い。ＳＢ1149、ＳＥ1167と重複し、ＳＢ1149より新しく、ＳＥ1167より古い。

ＳＩ1164出土遺物　（第32図・図版35）

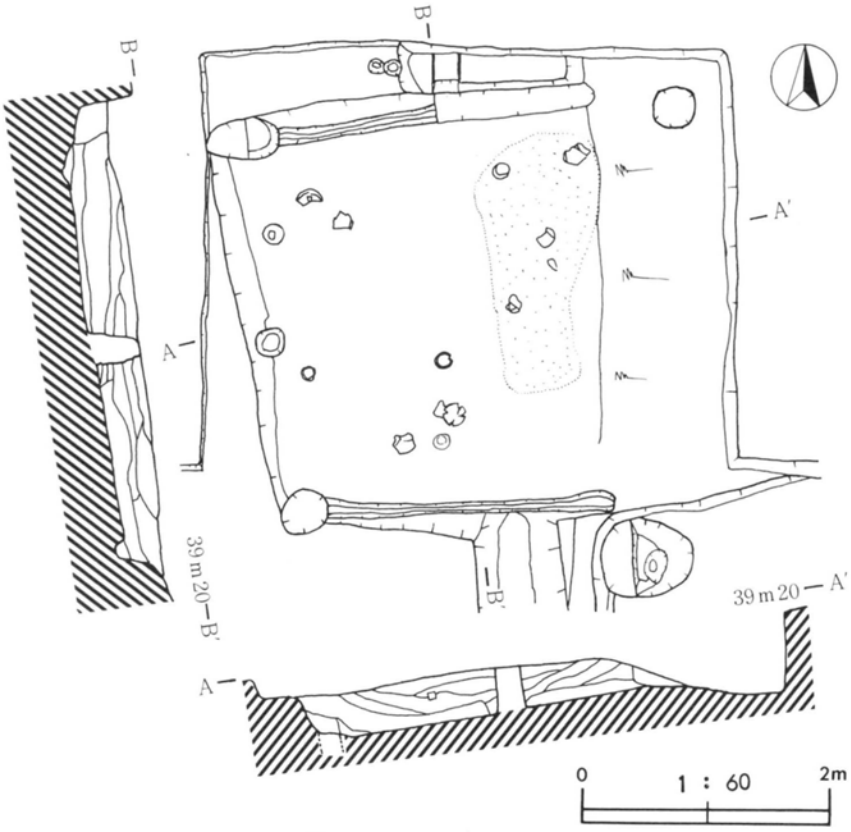
１は床面、他は埋土出土である。

須恵器（１・２）：１はヘラ切り後軽い撫で調整を施す。体部外面は工具による回転利用の撫でである。２はヘラ切りの台坏付である。１、２とも内面に漆の付着が認められる。

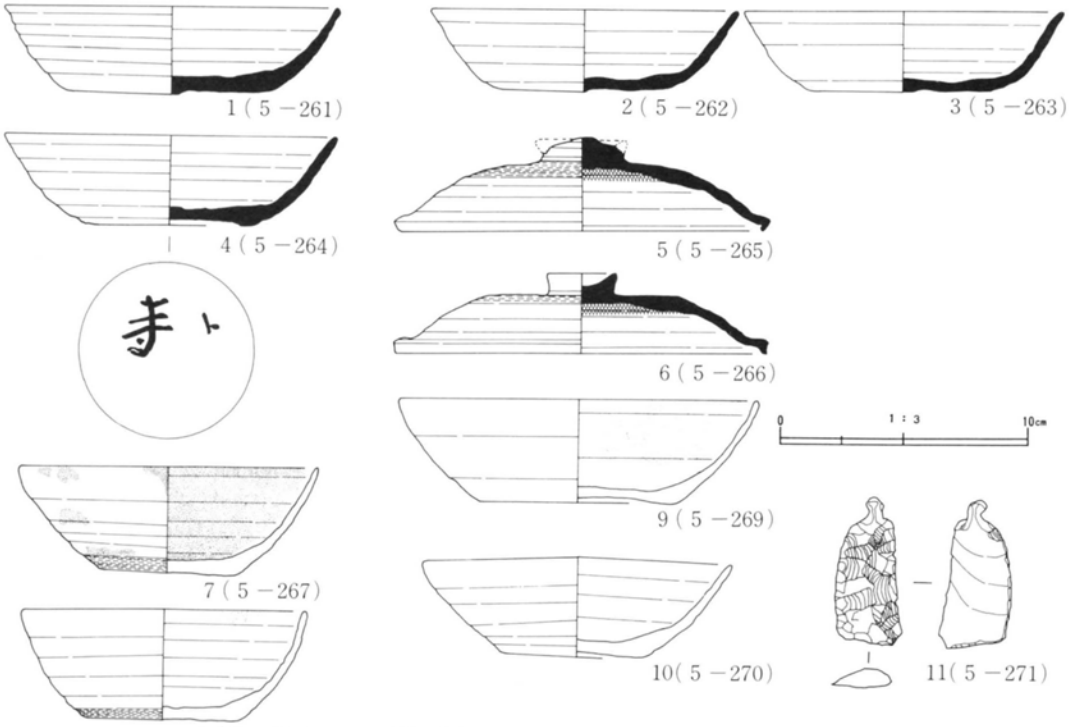
石匙（３）：横型の石匙である。



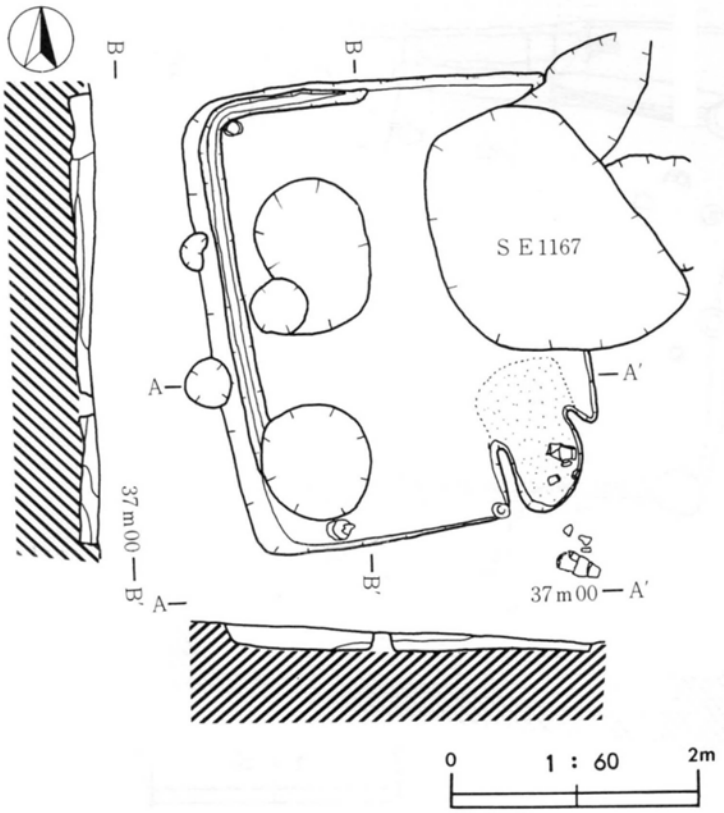
第27図　ＳＩ1162竪穴住居跡出土遺物



第28図　ＳＩ1163竪穴住居跡



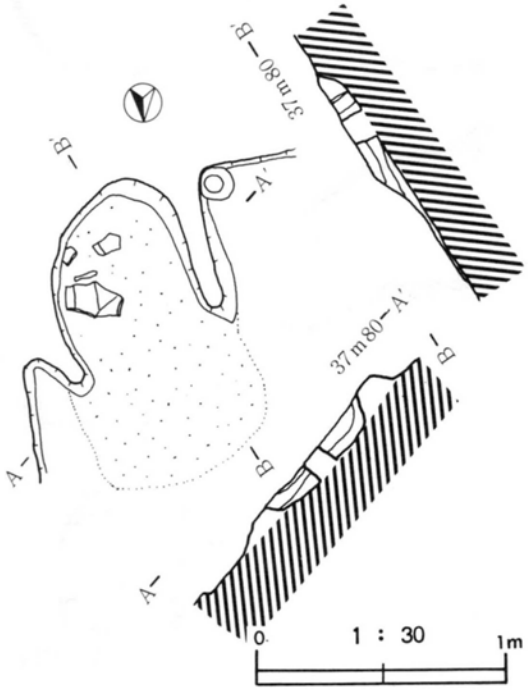
第29図　ＳＩ1163竪穴住居跡出土遺物



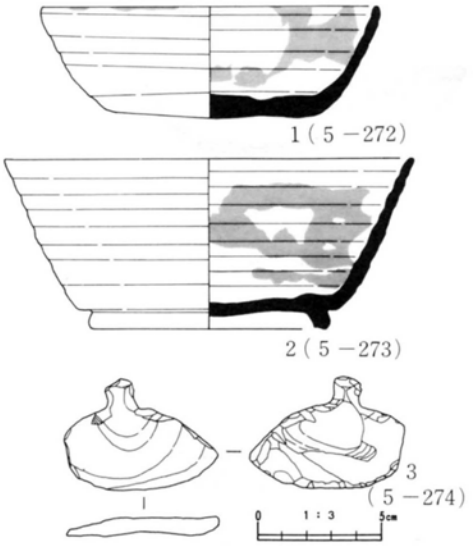
第30図　ＳＩ1164竪穴住居跡

ＳＩ1165竪穴住居跡　（第33・34図・図版12・13）

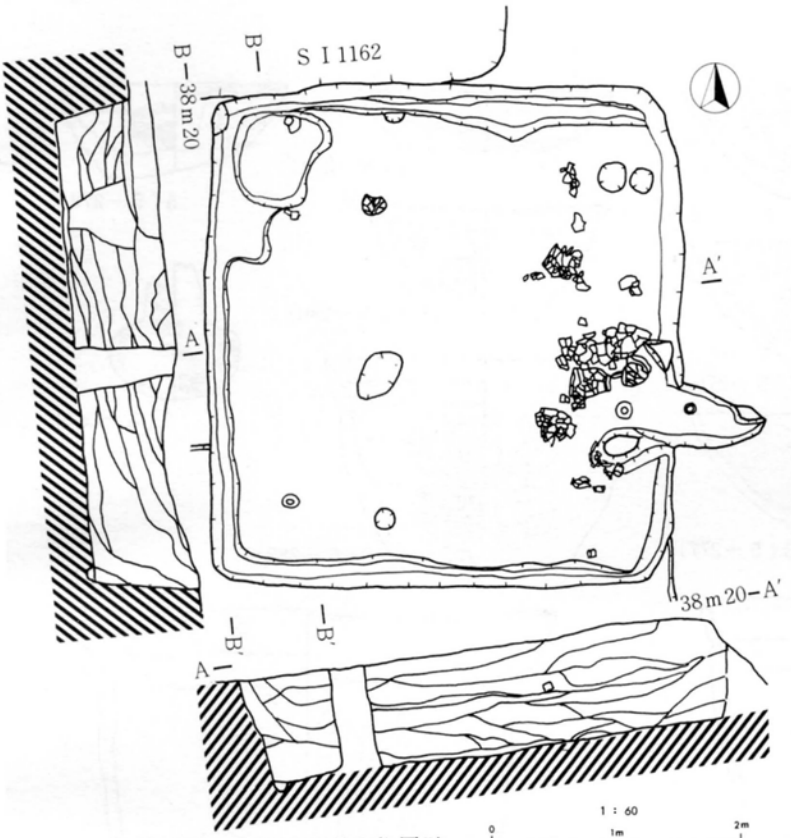
調査区西側で検出され、遺構の重複関係からもっとも古い住居跡である。。平面形は、東西3.8ｍ×南北4.0ｍのほぼ方形である。長軸方向は北で約１度西に偏している。壁直下に幅16～26cmの周溝が巡る。床面北西隅部に60cm×75cmのゆがんだ楕円形の焼土壙を伴う。カマドは東壁南寄りに粘土により構築されている。煙道部は燃焼部より急に立ち上がり、外部に60cm延びている。燃焼部には土師器甕を倒立して支脚として使用している。袖部にも土師器を倒立させて使用しており、周辺からは、甕類が集中して出土している。住



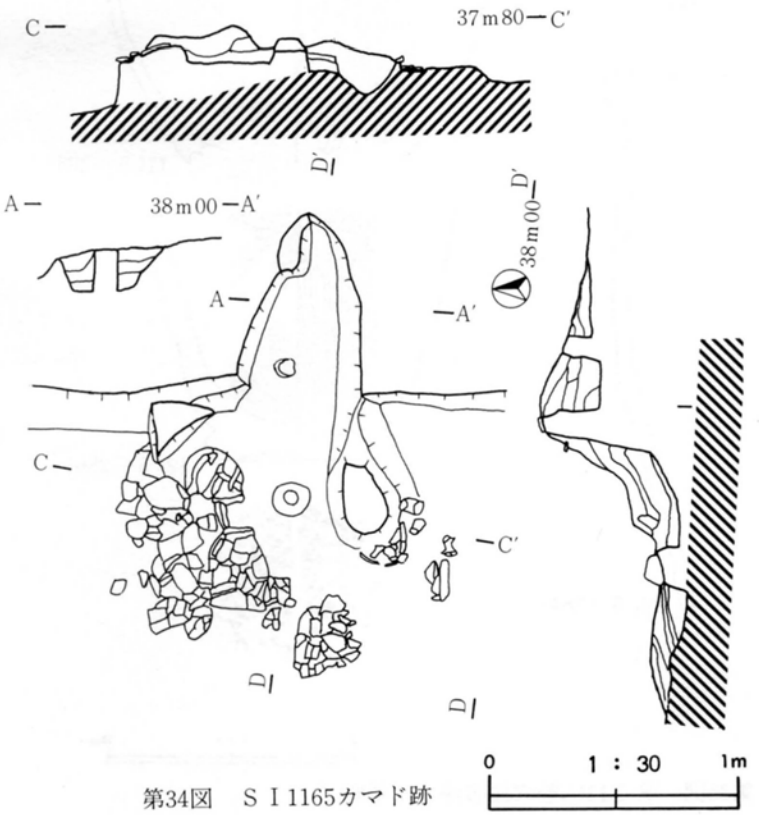
第31図　ＳＩ1164カマド跡



第32図　ＳＩ1164竪穴住居跡出土遺物



第33図　S I 1165竪穴住居跡



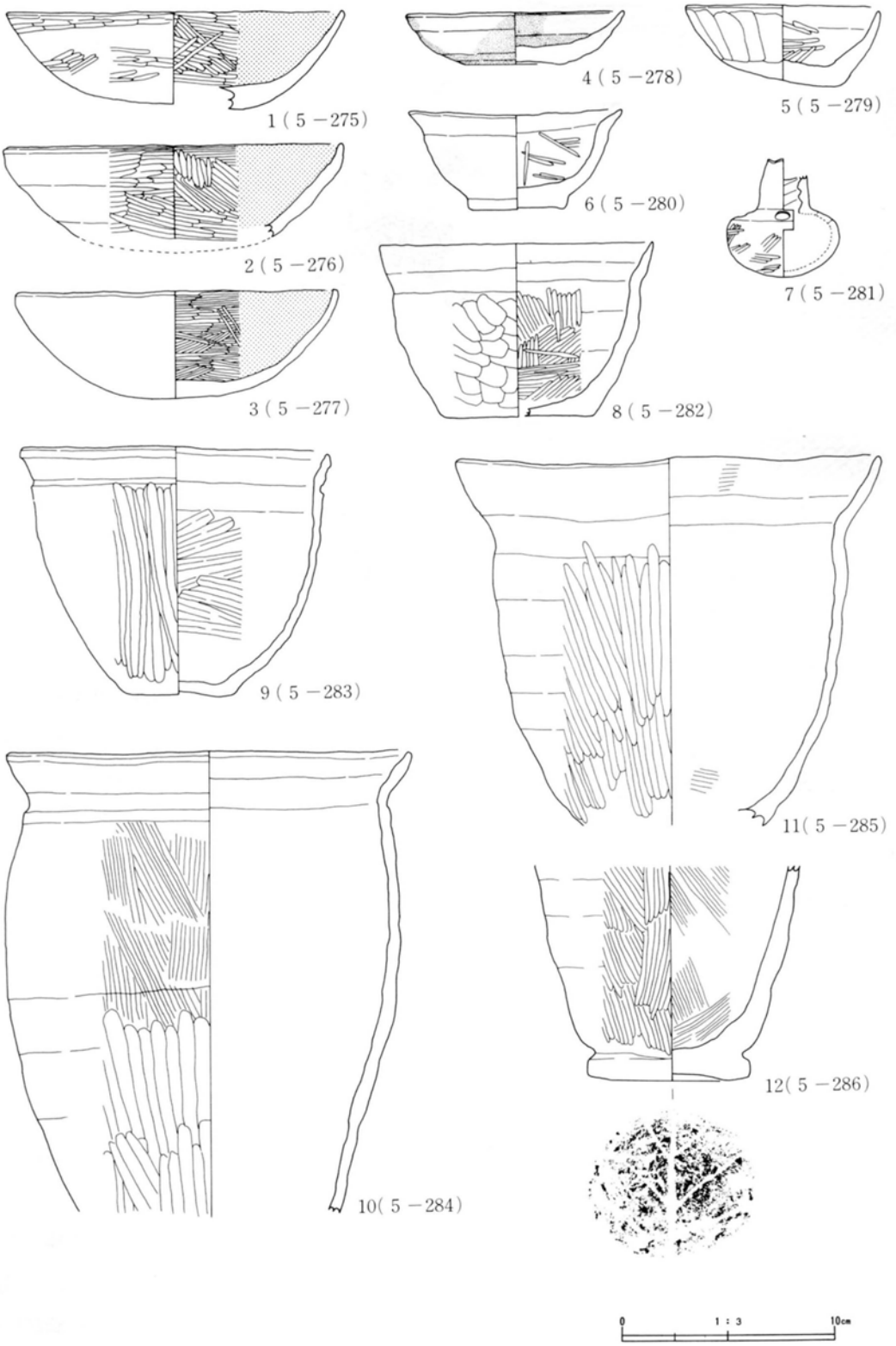
第34図　S I 1165カマド跡

居壁の遺存度は良好で80cmを計る。

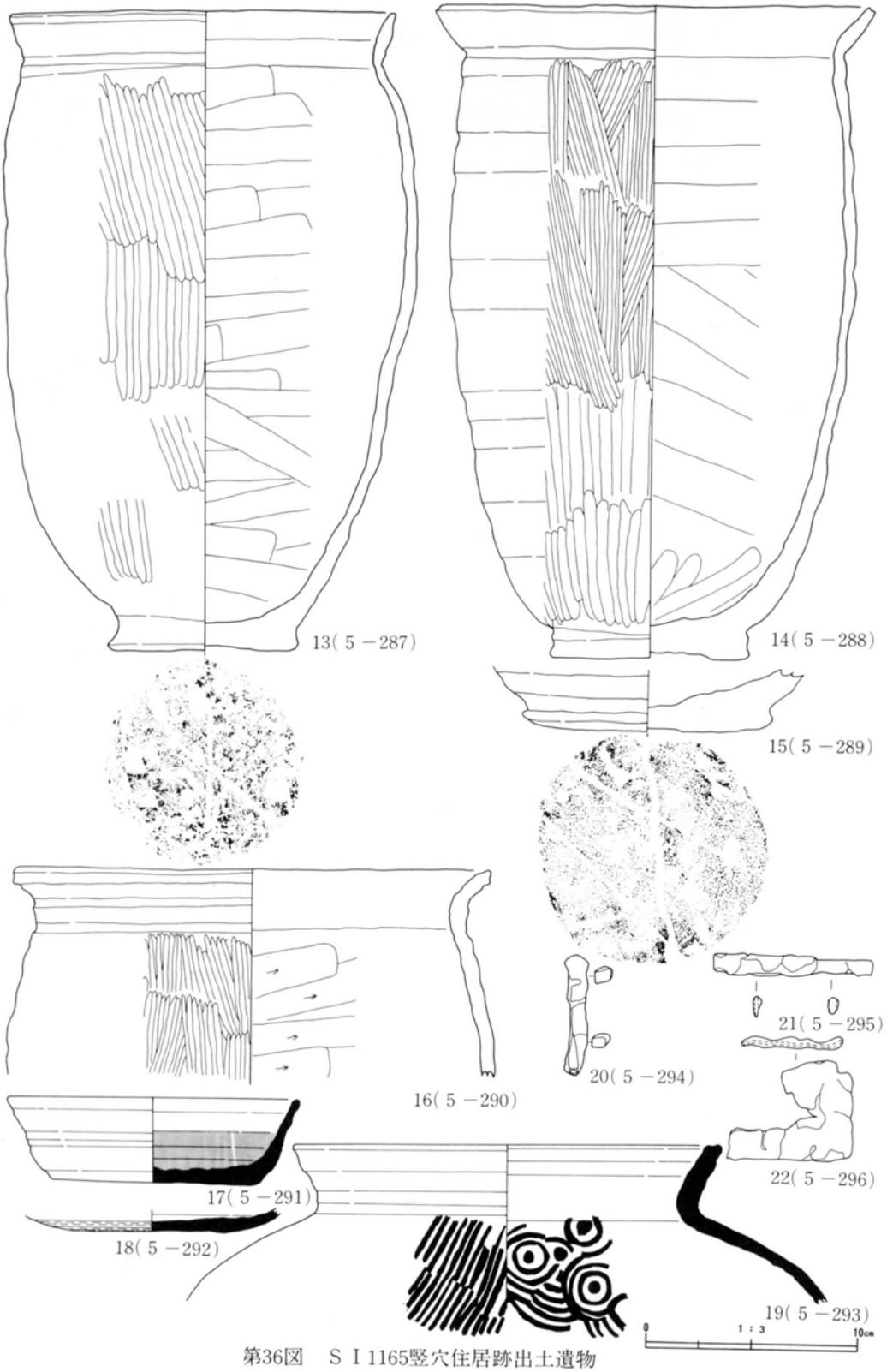
S I 1165出土遺物　（第35・36図・図版35・36・37）

1～3、6～8、11、15、16、18、19、22は床面、9はカマド支脚、10、14はカマド袖、13、21はカマド前床面、20は床面上土壙、他は埋土からの出土である。

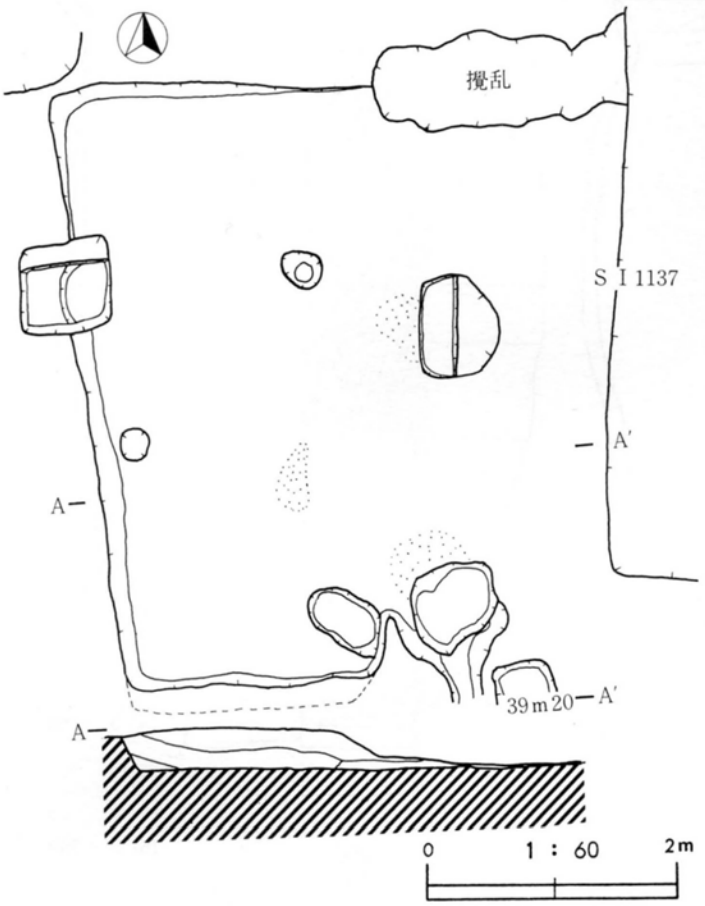
土師器（1～16）：1～3は内外面ともミガキ調整を施し、内面黒色処理の丸底坏である。4は平底非黒色の平底坏である。内外面をヘラ状工具で撫で調整を施す。内外面とも炭化物が付着することから燈明皿と考えられる。5、6は手捏ね非黒色の坏と小型台付椀である。5は外面を手持ちケズリ調整、内面はミガキ、削り調整を施す。6の内面はミガキ調整を施す。7はミニュチュアの小型椀形土器である。8、9は小型鉢である。外面は棒状あるいは幅広の工具によるミガキ調整、内面は、8はミガキ調整、9は工具による撫で調整、頸部に棒状工具による一本の沈線を施す。10、16は甕である。10は頸部に明瞭な段を有し、口唇部は平坦



第35図　ＳＩ1165竪穴住居跡出土遺物



第36図　ＳＩ1165竪穴住居跡出土遺物

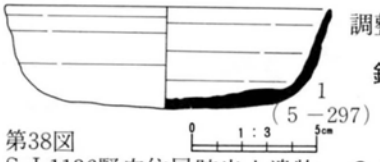


第37図　S I 1136竪穴住居跡

面を作りだしている。外面は、上半はカキ目調整、下半はミガキ調整、内面はていねいな撫で調整である。11は口縁部が大きく外反する。外面はミガキ調整、内面はていねいな撫で調整である。12は底部に木葉痕跡が見られる。外面はミガキ調整、内面はヘラ撫で調整である。13、14は頚部に工具による沈線が一条巡る。外面はミガキ調整、内面はヘラ撫で調整、14は底面が指撫で調整である。14は口唇部を平坦に作りだし沈線を施す。15の底部は木葉痕跡。16は頚部に工具による２条の太い沈線が巡る。口唇部のつまみだしの作りは須恵器を模している。外面はミガキ調整、内面はヘラ撫で調整である。

須恵器(17～19)：17はヘラ切り後ていねいな撫で調整を施す。内面に漆付着。18は底部全面ケズリ調整を施す。19は甕である。

鉄製品(20～22)：20は鉄鏃、21は刀子、22は不明鉄製品である。



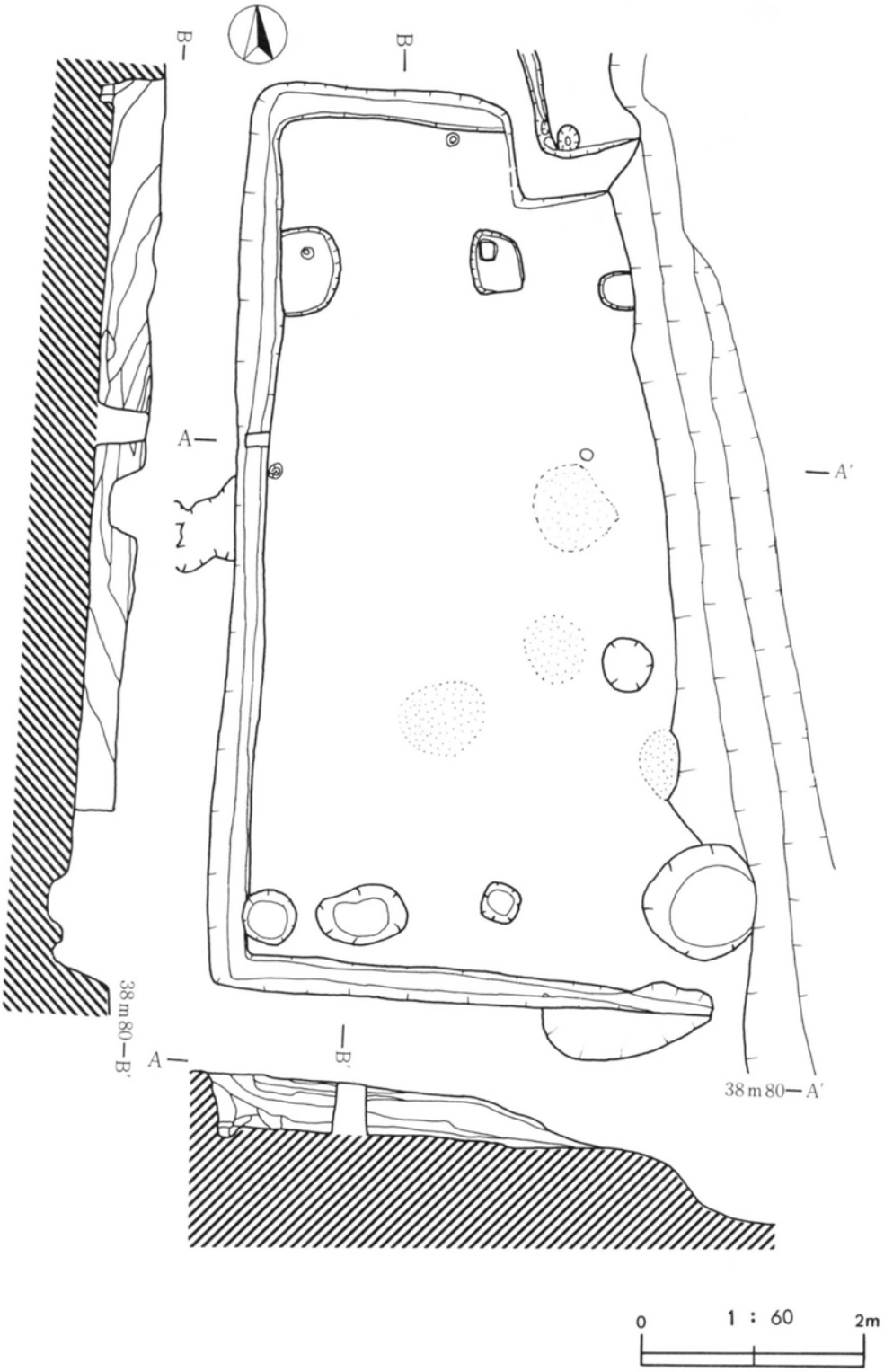
第38図
S I 1136竪穴住居跡出土遺物

S I 1136竪穴住居跡　(第36図・図版13)

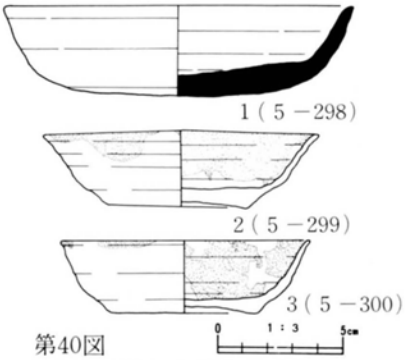
調査区東側南辺で検出した。前年度(第57次調査)で全体の2/3以上を検出し、北壁は未検出であった住居跡である。平面形は北壁検出により南北が判明したが、東西は東壁が削平されて不明である。東西3.6ｍ以上×南北4.8～5.0ｍの方形となっている。カマドは南壁に粘土で構築されている。西壁は北で約６度西に偏している。住居壁は高い部分で30cmを計る。S A1180、S B1148と重複し、それらより新しい。

S I 1136出土遺物　(第38図・図版38)

須恵器(１)：ヘラ切り後ていねいな撫で調整を施した、床面出土の坏である。



第39図　ＳＩ1137竪穴住居跡



第40図
ＳＩ1137竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ1137竪穴住居跡　（第38図・図版14）

調査部西側南辺で前年度(57次調査)に南壁付近のみ検出した住居跡である。平面形は東壁が削平されて不明であるが、東西4.3ｍ以上×南北8.0ｍの南北に長い長方形である。西壁は北で約3度東に偏している。壁直下に幅20～40cmの周溝が巡る。床面に地床炉状の焼土面が3ケ所あるが、カマドは認められない。住居壁は高い部分で45cmを計る。

ＳＩ1137出土遺物　（第40図・図版38）

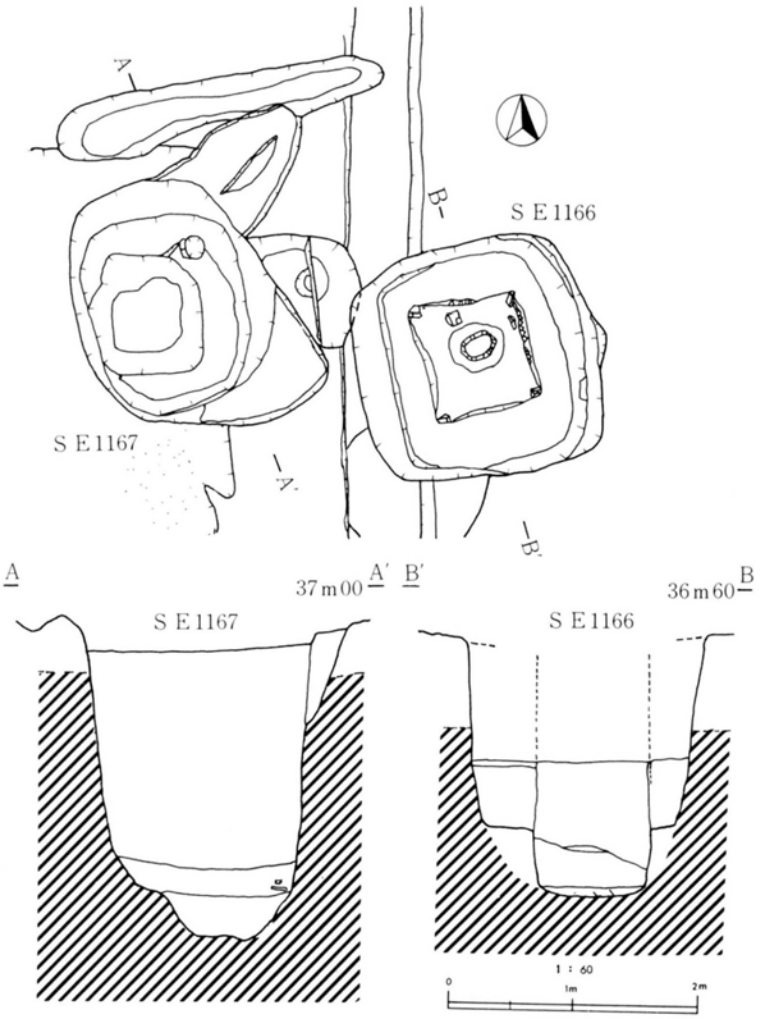
すべて床面出土である。

須恵器（1）：ヘラ切り後撫で調整を施す。

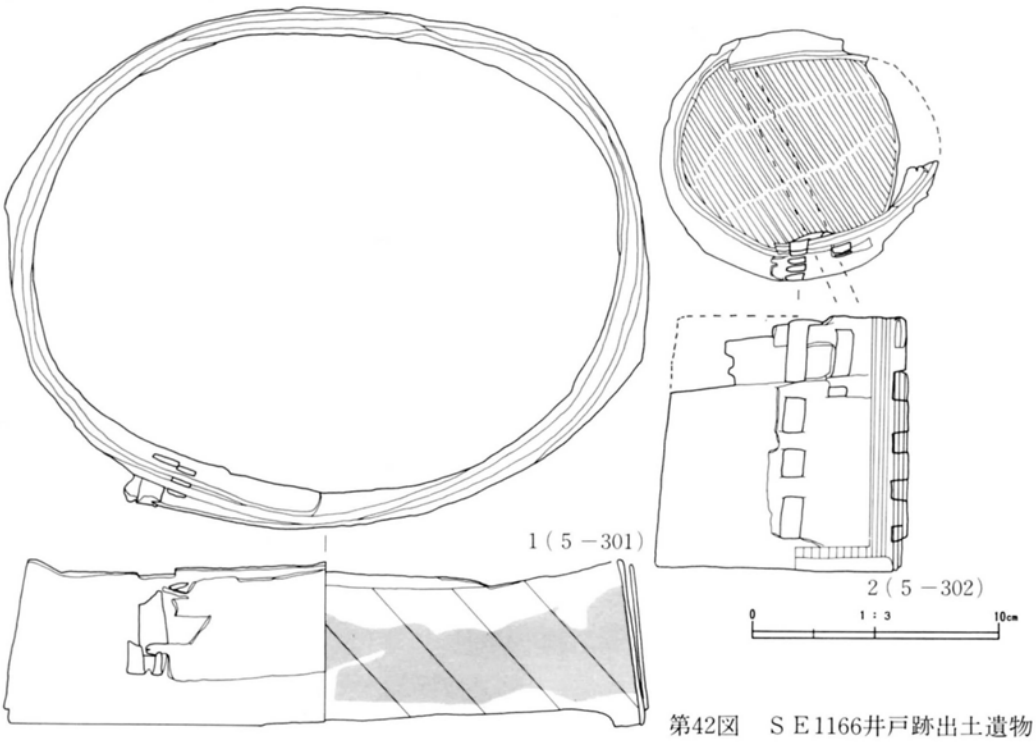
赤褐色土器（2・3）：2・3は糸切り無調整で、内外面に炭化物が付着することから燈明皿と考えられる。

ＳＥ1166井戸跡　（第41図・図版14）

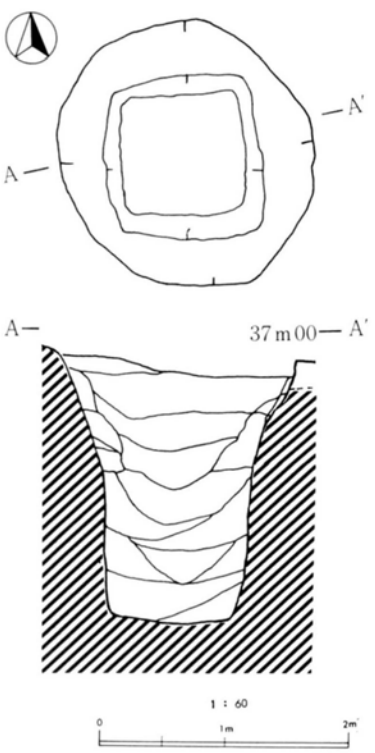
調査区東側中央で検出された。中世整地層から掘り込まれる井側を有する井戸跡で、ＳＥ1167東側に隣接する。掘り方の平面形は東西1.9ｍ×南北1.9ｍの方形である。確認面からほぼ垂直に2.0ｍ掘り下げられる。掘り方内側に1辺75cm四方の隅柱横桟式の井側を有するが、板材の遺存が悪く底部より高さ40cmのみ確認された。井戸底部より直径30cmの底板のな



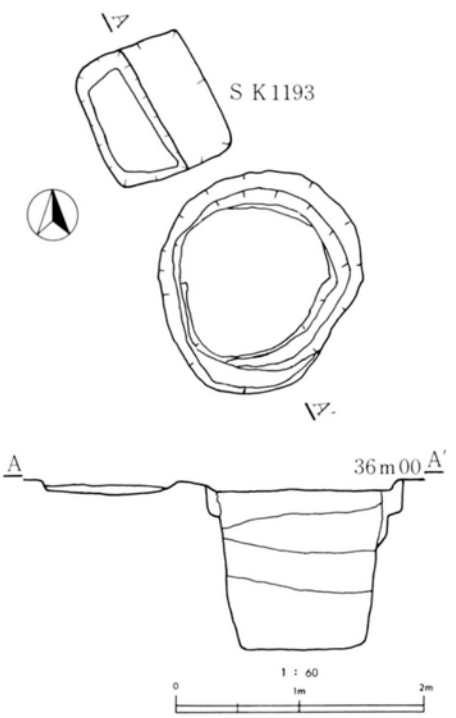
第41図　ＳＥ1166・ＳＥ1167井戸跡



第42図　ＳＥ1166井戸跡出土遺物



第43図　ＳＥ1168井戸跡



第44図　ＳＥ1169井戸跡

い曲物と、柄杓が出土した。

ＳＥ1166出土遺物

（第42図・図版38）

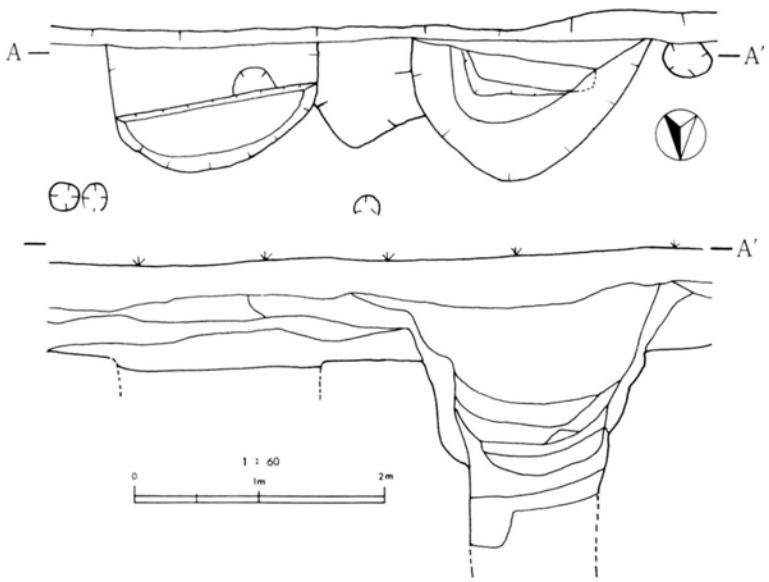
１、２は井戸底から出土した。

木製品（１・２）：１は曲物である。側板の内面は斜め方向のケビキが入る。内面漆塗りである。２は曲物の柄杓である。柄は欠損している。

ＳＥ1167井戸跡

（第41図・図版14）

調査区東側中央で



第45図　ＳＥ1170井戸跡

検出された中世整地層から掘り込まれる井戸跡で、ＳＥ1166の西側に隣接する。掘り方の平面形は東西1.5ｍ×南北1.8ｍの楕円形であり、北東と南東にせり出す形の浅い段状の落ち込みが伴う。確認面より1.9ｍまでは垂直に掘り下げられ、底部付近で一辺90cmの方形にすぼまっている。確認面より底面までの深さが2.4ｍである。ＳＢ1149、ＳＩ1164と重複し、それらより新しい。

ＳＥ1168井戸跡　（第43図・図版15）

調査区東側北部で検出された井戸跡である。掘り方の平面形は直径2.0ｍの円形である。確認面より90cmまではやや傾斜を付けて掘り下げられ、そこで１辺1.1ｍ四方の方形にすぼまり、そのまま底部まで垂直に掘り下げられる。確認面より底面までの深さは2.1ｍである。井側は認められないが、掘り方の形態と埋土の状況より、材の抜き取りを受けた可能性が考えられる。

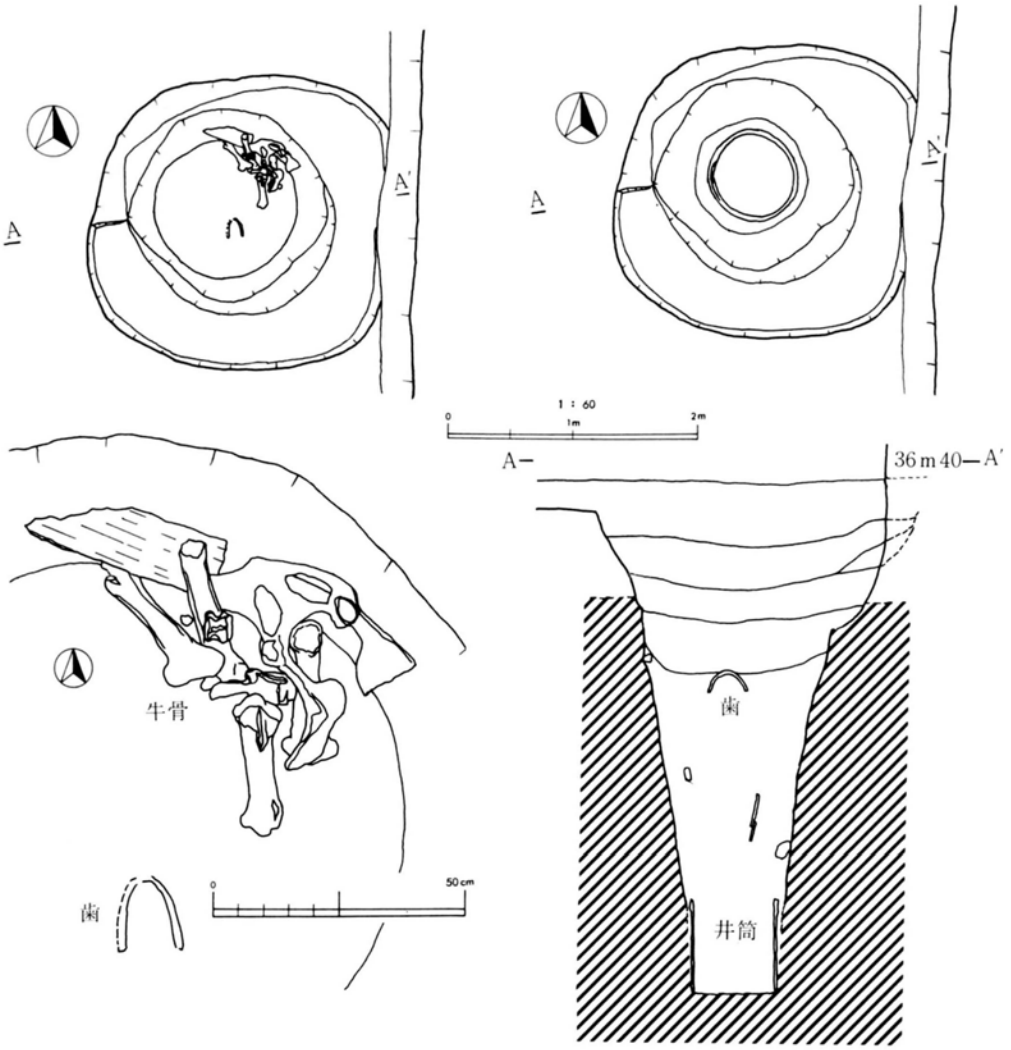
ＳＥ1169井戸跡　（第44図・図版15）

調査区東側で検出された中世整地層と上層スクモ層を掘り込む素掘りの井戸跡である。北西にＳＫ1193が隣接する。掘り方の平面形は東西1.6ｍ×南北1.7ｍのややゆがんだ楕円形である。確認面より約30cmのところに段を持ち、そこから底部までほぼ垂直に掘り下げられる。確認面より底面までの深さは1.3ｍである。

ＳＥ1170井戸跡　（第45図）

調査区東側南辺で検出された表土下の第２層から掘り込まれる井戸跡である。平面形は調査区南辺にかかるため明確でないが、直径２ｍの円形になると考えられる。掘り込み面より60cmで方形にすぼまっている。深さは掘り込み面より２ｍまで確認した。層位的に他の井戸跡より一時期新しい遺構と考えられる。

ＳＥ1171井戸跡　（第46図・図版15・16）



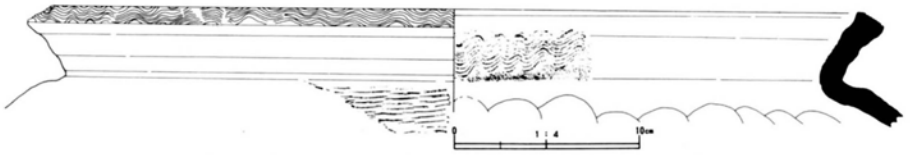
第46図　ＳＥ1171井戸跡

調査区東側東辺で検出された上層スクモ層に連続する面から掘り込まれる井戸跡である。底部に大型の曲物の井筒を有する。掘り方は、直径2.3ｍの円形である。確認面から1.0ｍまではやや傾斜を付けて掘り下げられ、そこで、直径1.6ｍの円形にすぼまり、そこから底部まで急な傾斜で掘り下げられる。確認面より底部までの深さは4.0ｍである。底部では、直径72cm×高さ60cmの円形の曲物が井筒として使用されている。井側痕跡は明確に検出されていないが、埋土より板材が出土しており井側を有した可能性がある。埋土中程より牛骨が一括で出土した。直接の重複関係はないが、ＳＥ1173の廃土(灰黄色砂及び白色粘土)を掘り込んでおり、これより新しい。

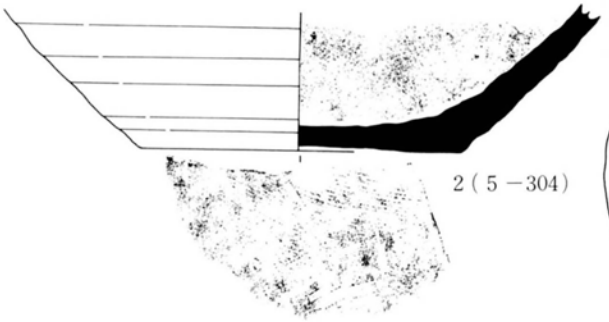
ＳＥ1171出土遺物　(第47～49図・図版38・39・40)

１、４、７は井筒内、３、５、８は埋土、２は覆土の出土である、９は井筒に使用した大型曲物である。

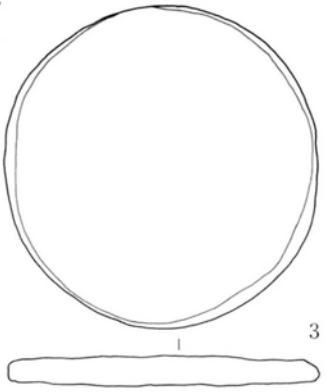
中世陶器(１・２)：１は口唇部と口縁部内面に波状文、体部外面は平行タタキ、内面は無文の円



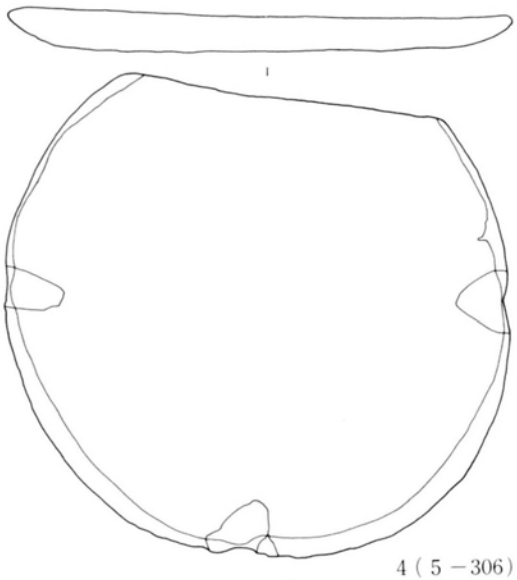
第47図　ＳＥ1171井戸跡出土遺物　1（５－303）



2（５－304）

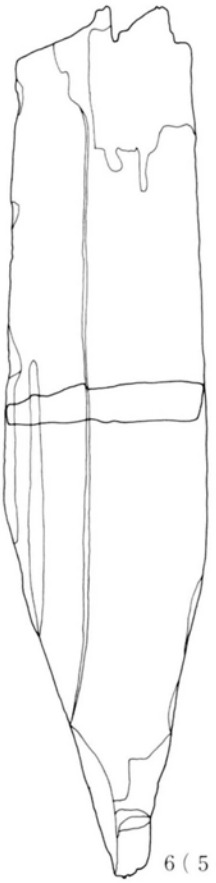


3（５－305）



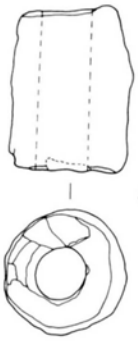
4（５－306）

5（５－307）

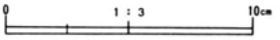


6（５－308）

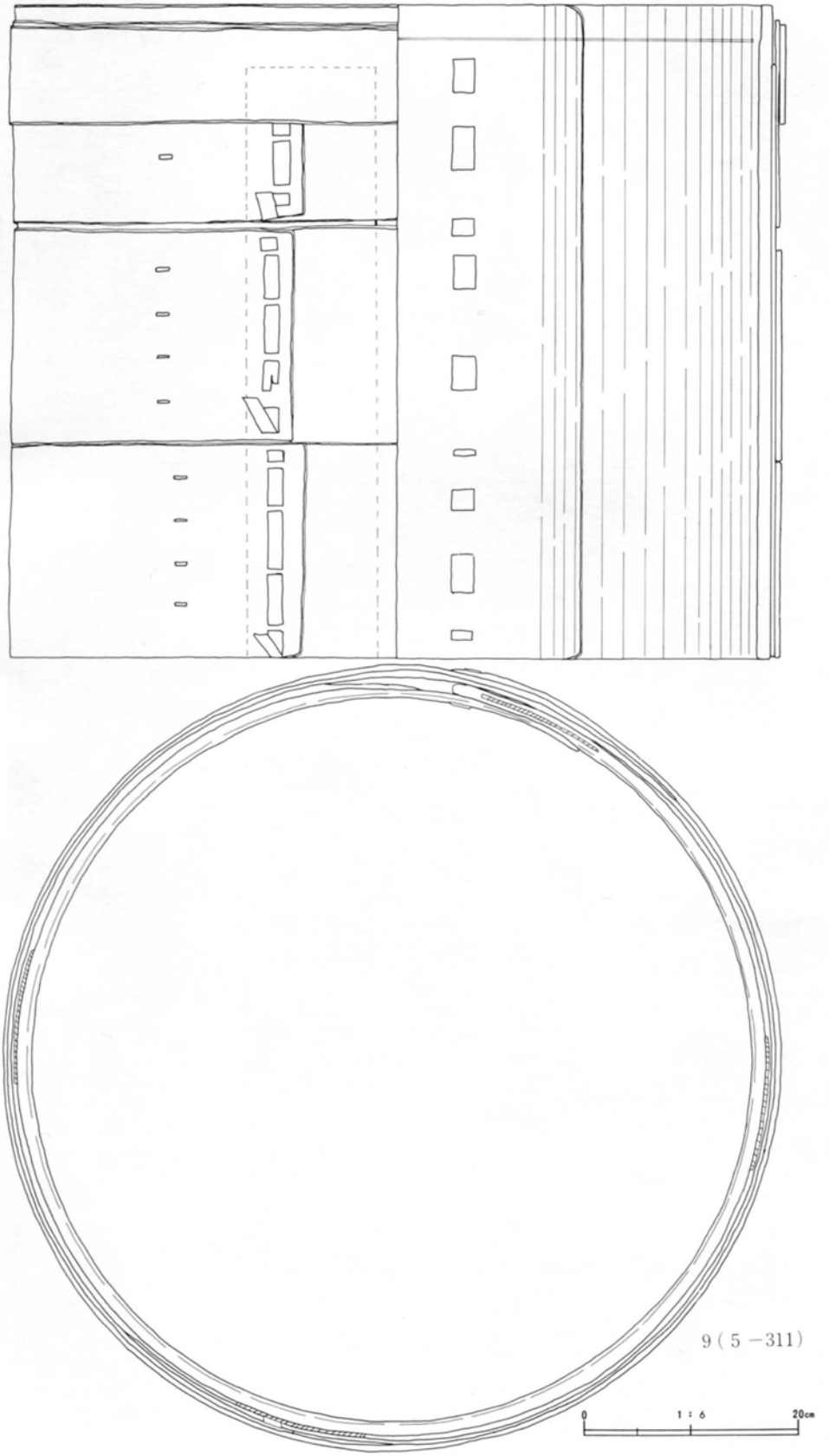
7（５－309）



8（５－310）



第48図　ＳＥ1171井戸跡出土遺物

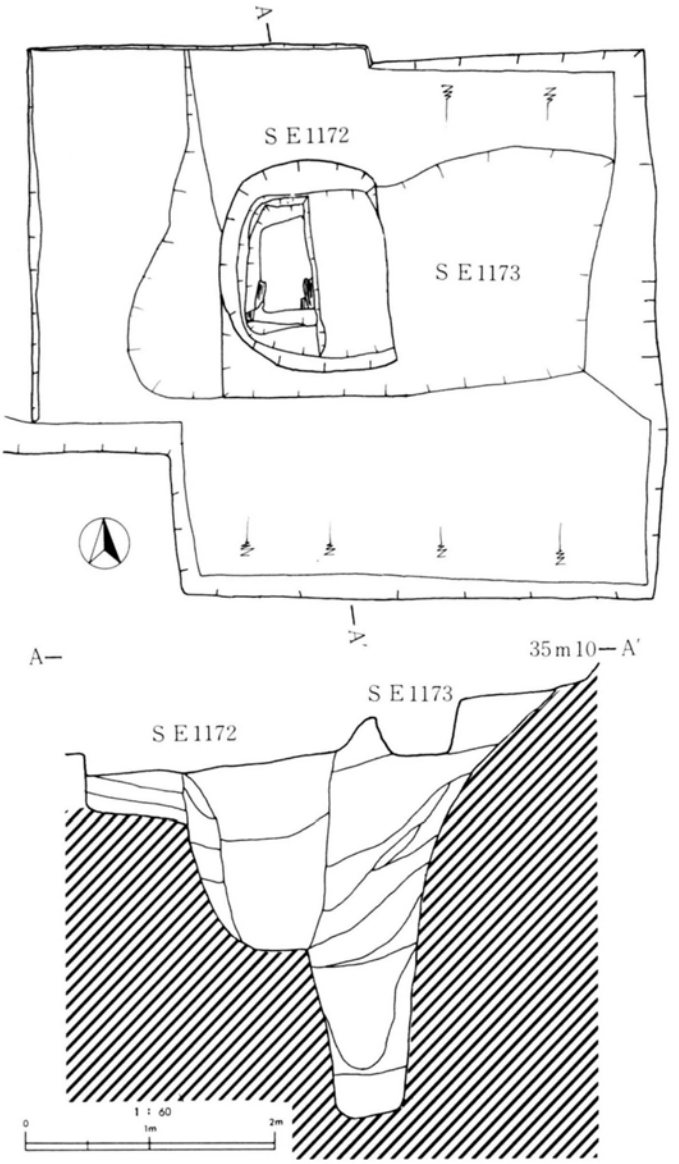


第49図　ＳＥ1171井戸跡井筒・曲物

形アテ具痕跡が認められる。2は静止糸切りの珠洲系中世陶器擂鉢である。内面は使用による磨滅で条線がわずかに認められる程度である。

木製品（3～7・9）：3、4は曲物の底板である。5は棒状の杭、6は板状の杭で井戸の側板と考えられる。7は箸である。9は直径72cm、高さ62cmの大型曲物で厚さ1.3cmの一枚板を曲げ、桜樺皮で綴じ、その外側を高さ19～20cmの曲物、三段で押え、さらに上段に高さ9cmの曲物を回している。三段の曲物と一枚板の間には4ケ所に幅12cmの縦板を入れている。上端内面に底板の痕跡が厚さ3cmの凹帯となって認められることから、本来は図面上端が底部で、井筒として使用するときに天地を逆にしたものである。内面のケビキは幅2cm間隔、桜樺皮綴じ部分にはケビキを施していない。

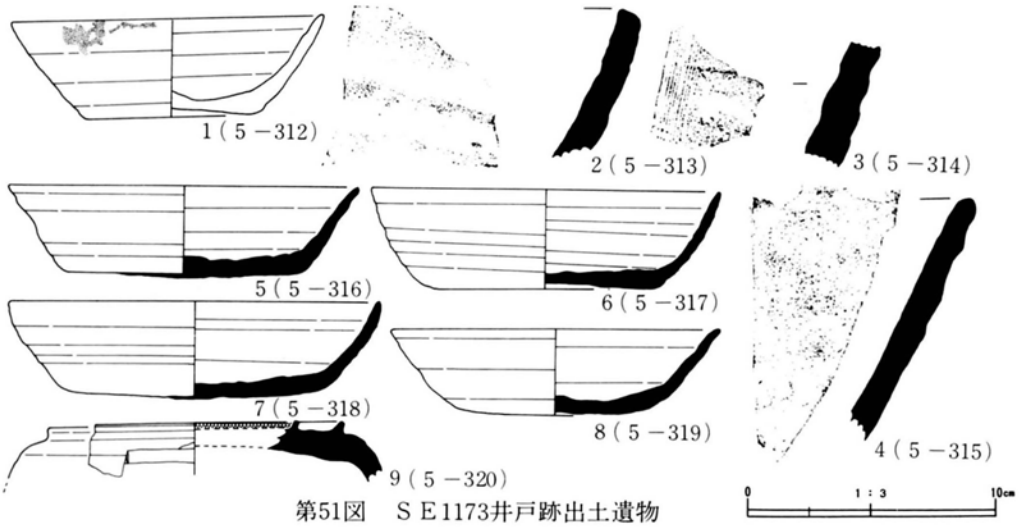
土製品（8）：円筒形、中型の土錘である。



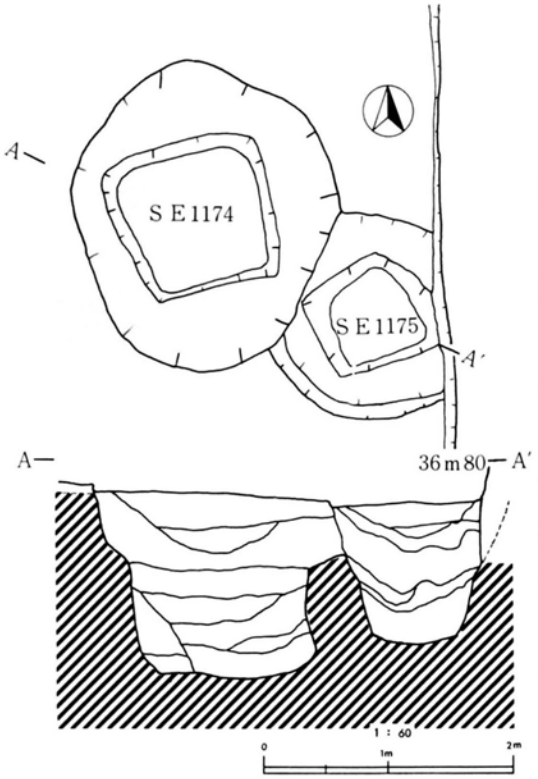
第50図　SE1172・SE1173井戸跡

SE1172井戸跡　（第50図・図版17）

調査区南東隅でSE1173と重複し検出され、これより新しい井戸跡である。平面形は東西1.3m×南北1.7mの丸味をもった方形である。確認面より約20cmまでは傾斜を付けて掘り下げられ、そこからほぼ垂直に掘り下げられる。底部は、東西40cm×南北50cmの方形となる。確認面から底部までの深さは2.0mである。井側は明確に検出されていないが、埋土より板材が出土しており、井側を有した可能性がある。



第51図　ＳＥ1173井戸跡出土遺物



第52図　ＳＥ1174・ＳＥ1175井戸跡

ＳＥ1173井戸跡　（第50図・図版17）

ＳＥ1172と重複して検出され、これより古い井戸跡である。平面形は東西3.0ｍ以上×南北1.7～1.9ｍの東西に長い長方形で、発掘区外にまでプランは延びている。断面は上部で大きく広がり、確認面より2.7ｍまではゆるやかな傾斜を付けて掘り下げられ、そこからほぼ垂直に掘り下げられる。確認面から底面までの深さは3.3ｍである。底部の平面形は未発掘のため不明であるが、南北50cmの幅で東側へ延びていくと考えられる。井側は認められない。掘削時の廃土(灰黄色砂及び白色粘土)をＳＥ1171が掘り込んでおり、これより古い。

ＳＥ1173出土遺物　（第51図・図版41）

１～４は埋土上層、５～９は埋土下層である。

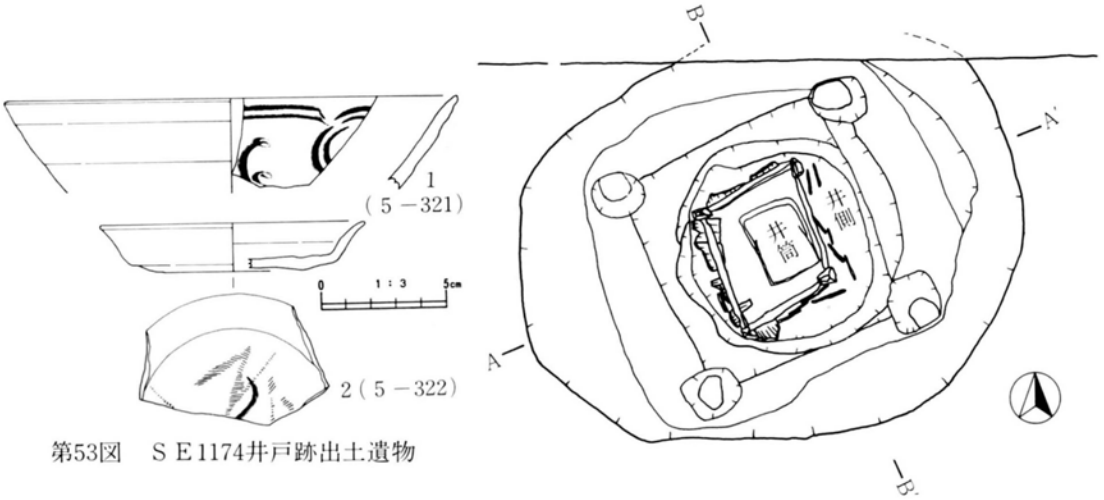
赤褐色土器（１）：糸切り後体部下端にわずかにケズリ調整を施す。燈明皿に使用。

中世陶器（２～４）：２～４は珠洲系中世陶器擂鉢である。

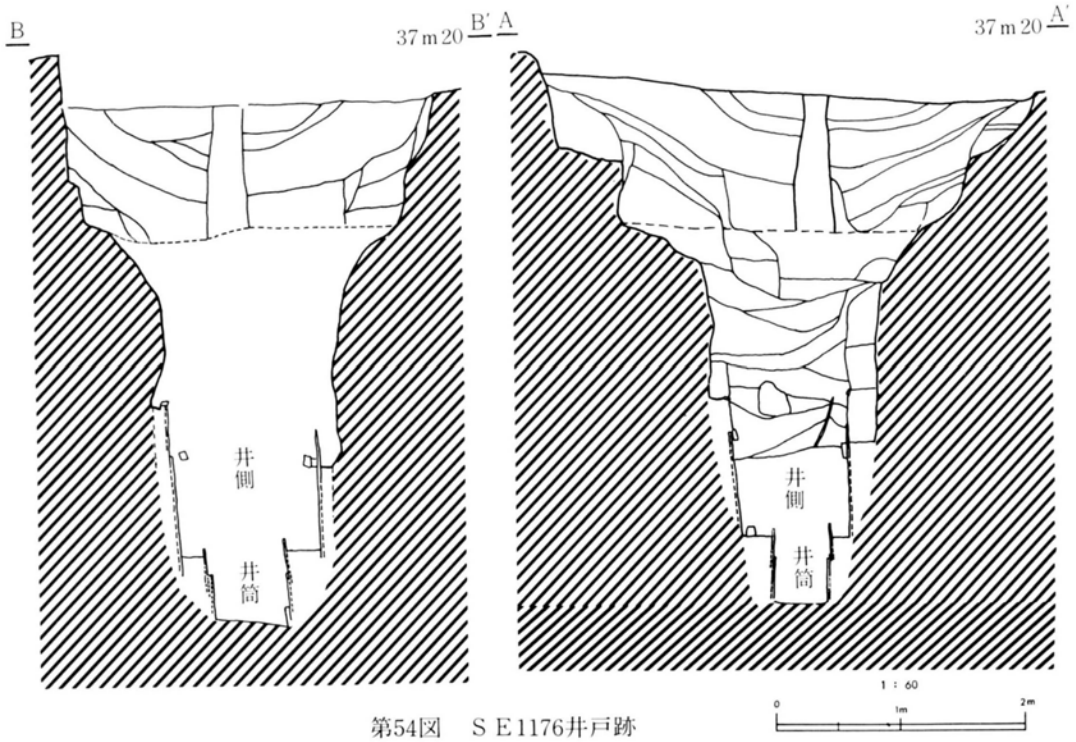
須恵器（５～９）：すべてヘラ切り無調整の坏である。

硯（９）：上面に２重の円圏が巡り、脚部に方形の透しがつく円面硯である。

ＳＥ1174井戸跡　（第52図・図版17）



第53図　ＳＥ1174井戸跡出土遺物



第54図　ＳＥ1176井戸跡

調査区東側北部で検出された第２層下から掘り込まれる井戸跡である。ＳＥ1175と重複し、これより古い。掘り方の平面形は東西2.1ｍ×南北2.4ｍのゆがんだ楕円形である。確認面より50cmまではゆるやかな傾斜を付けて掘り下げられ、そこから一辺1.2ｍの方形にすぼまり、底部まで垂直に掘り下げられる。確認面から底面までの深さは1.5ｍである。井側は認められないが、掘り方の形態と埋土の状況より材の抜き取りを受けた可能性が考えられる。

ＳＥ1174出土遺物　（第53図・図版41）

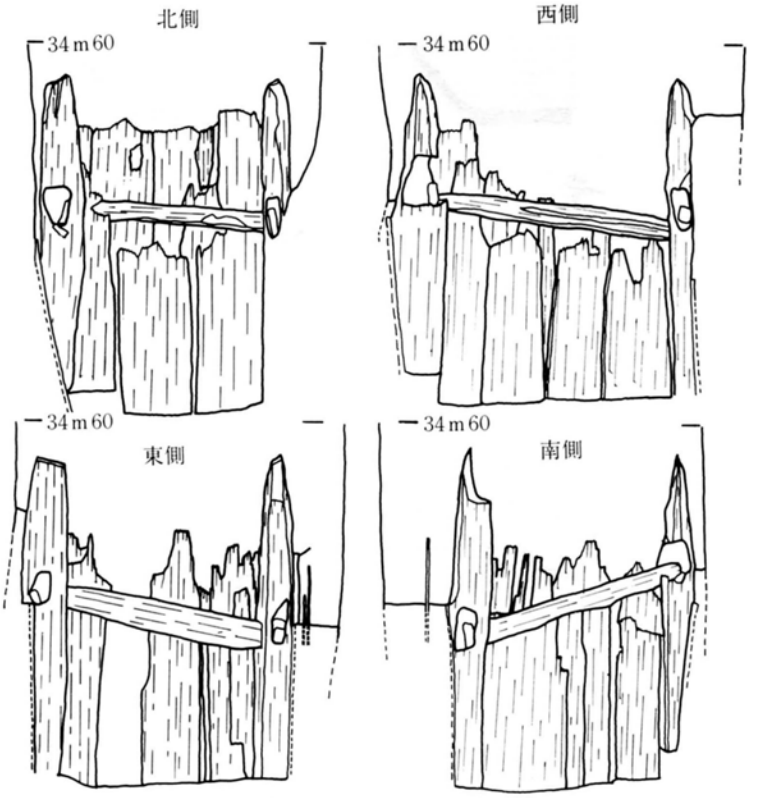
１、２は埋土出土である。

陶磁器（１・２）：１は青磁碗で、青緑色の薄い釉、胎土は須恵器色である。２は青磁皿で、青緑

色の薄い釉、胎土は須恵器質で底部は露胎である。

ＳＥ1175井戸跡　（第52図・図版17）

第２層より下から掘り込まれる井戸跡である。ＳＥ1174と重複し、これより新しい。掘り方の平面形は一部が調査区東辺にかかるため明確でないが、直径1.5ｍの円形になると考えられる。確認面より50cmまでは傾斜を付けて掘り下げられ、そこから東西1.0ｍ×南北0.8ｍの長方形にすぼまり、底部までほぼ垂直に掘り下げられる。確認面から底部までの深さは1.2ｍである。井側は認められないが、掘り方の形態と埋土の状況より材の抜き取りを受けた可能性が考えられる。



第55図　ＳＥ1176井側実測図

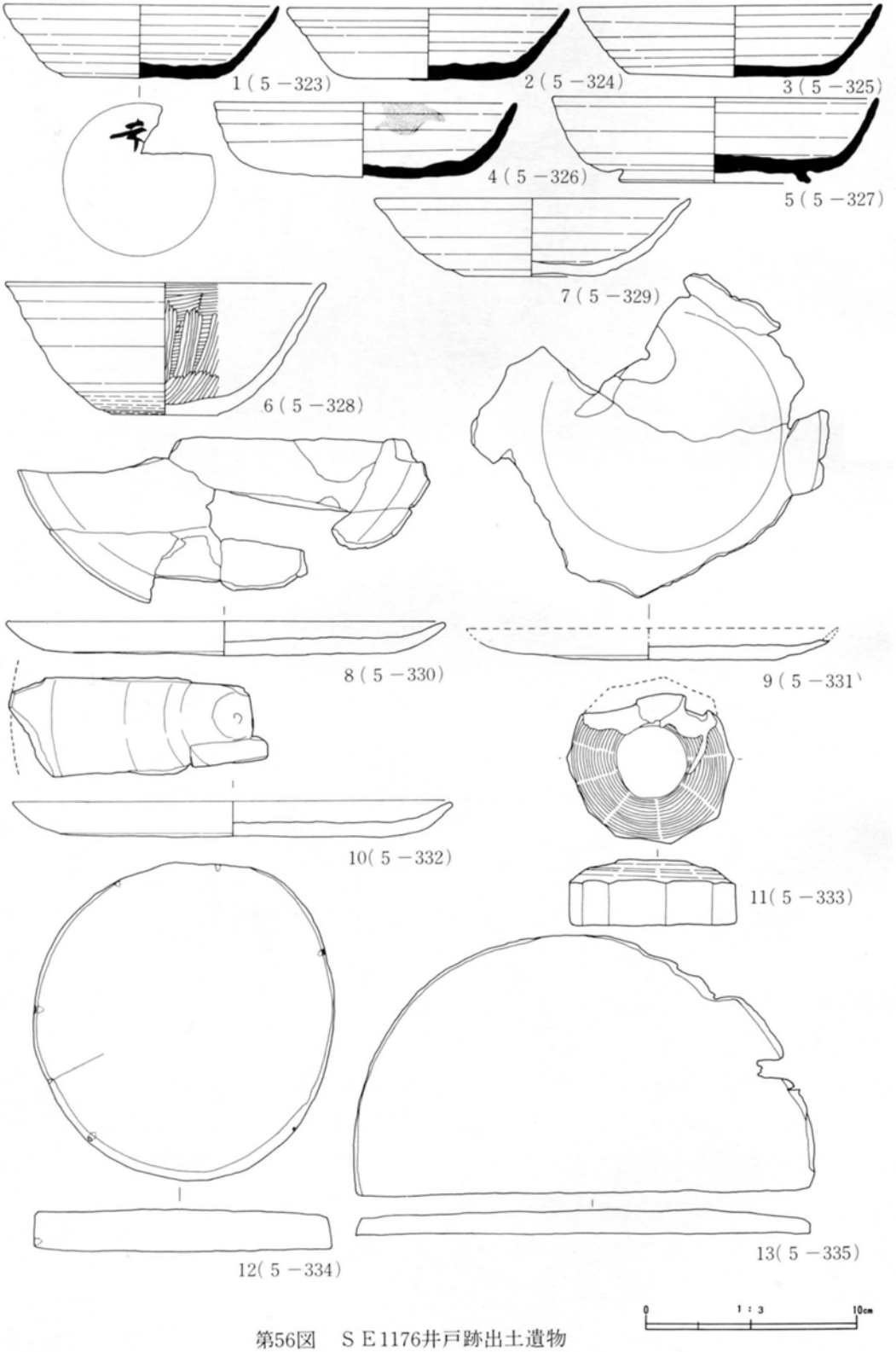
ＳＥ1176井戸跡　（第54・55図・図版18）

調査区東側古代整地層から掘り込まれる井側を有する井戸跡である。掘り方の平面形は東西4.1ｍ×南北3.3ｍの楕円形である。確認面より0.7ｍと1.2ｍ掘り下げたところに段を付けて掘り下げられ、1.2ｍの段部分では四隅に直径35～40cmの円形の柱掘り方を伴う。そこから直径1.7ｍの円形にすぼまり、底部まで垂直に掘り下げられる。確認面から底部までの深さは4.0ｍである。掘り方内側に一辺1.0ｍの方形の木組の隅柱横桟式の井側を有する。井側は底面より1.7ｍの高さまで検出、確認した。底部の井側内側では東西43cm×南北63cm、39cm×57cmの大型の方形曲物を２段に重ね埋め込み、井筒として使用している。

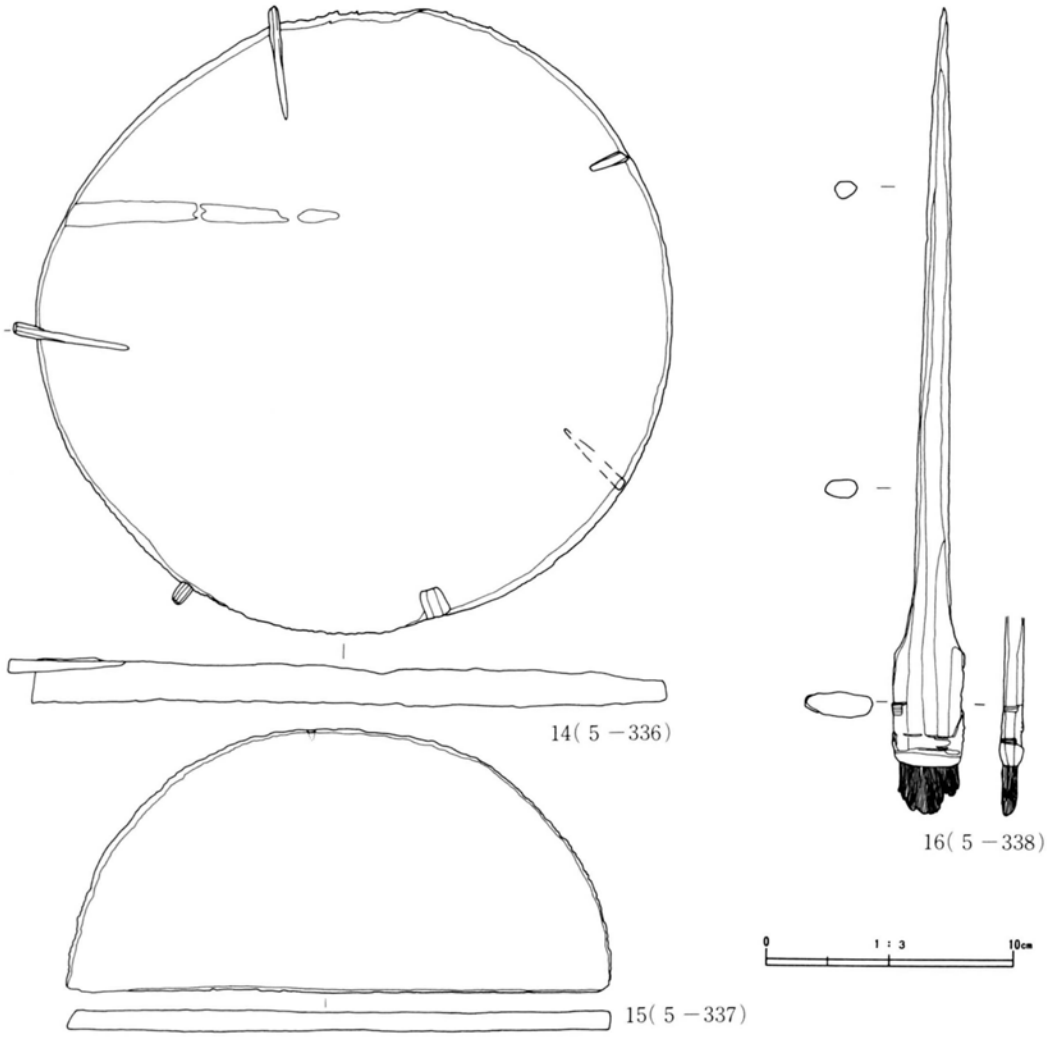
ＳＥ1176出土遺物　（第56～58図・図版41・42・43・44）

１、８、11は方形井筒裏込め、６、12、16は井側裏込め、９、10は底面からの出土で、17、18は井筒に使用した方形の曲物である。

須恵器（１～５）：１、２はヘラ切り無調整、３は底部全面ケズリ調整、４はヘラ切り後ていねい



第56図　ＳＥ1176井戸跡出土遺物



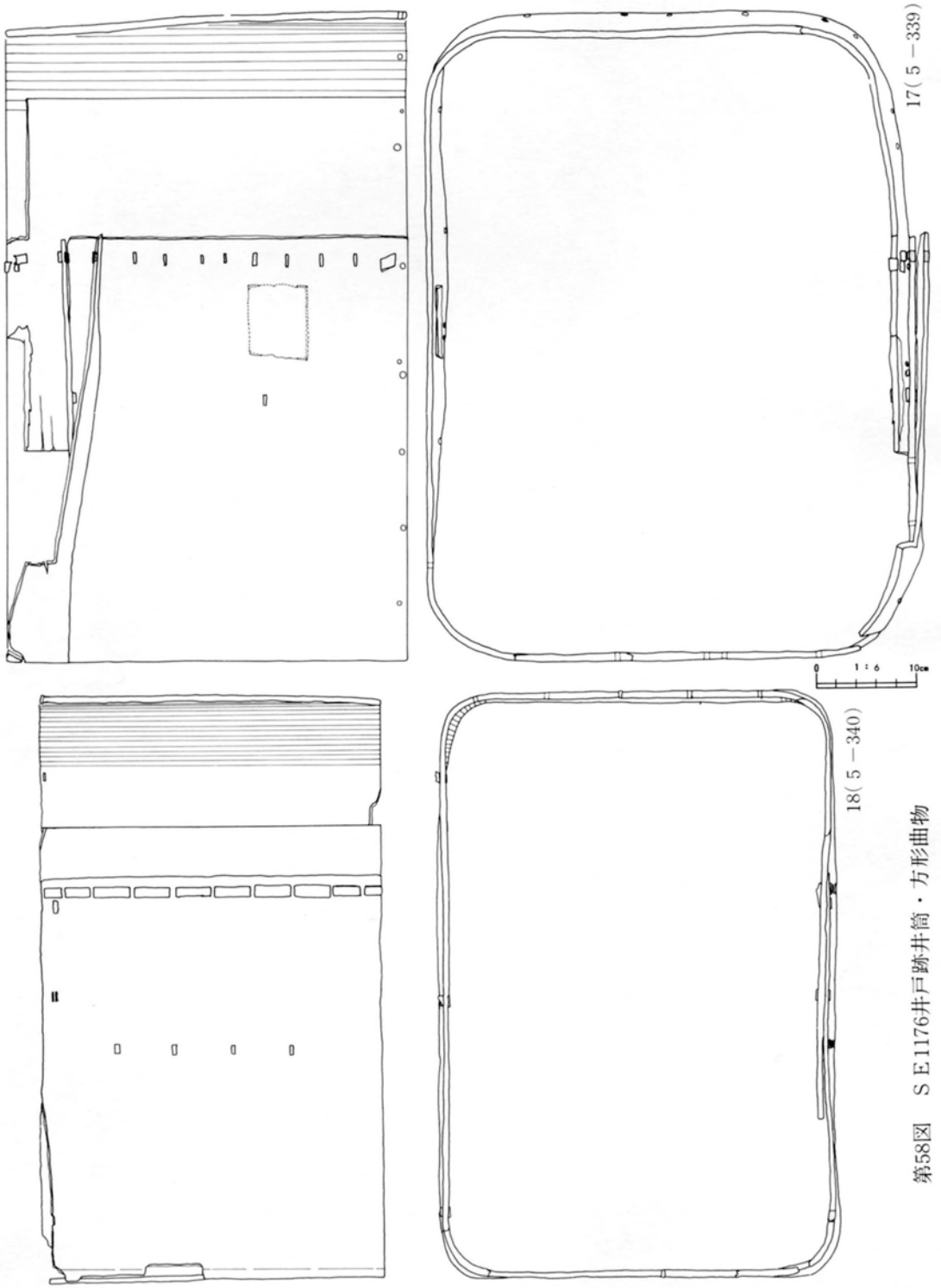
第57図　ＳＥ1176井戸跡出土遺物

な撫で調整を施す。１は底部に「寺」の墨書があり、４とともに燈明皿として使用。５はヘラ切りである。

土師器(６)：体部下端から底部全面にかけてケズリ調整を施す。内面はミガキ調整後黒色処理を施す。

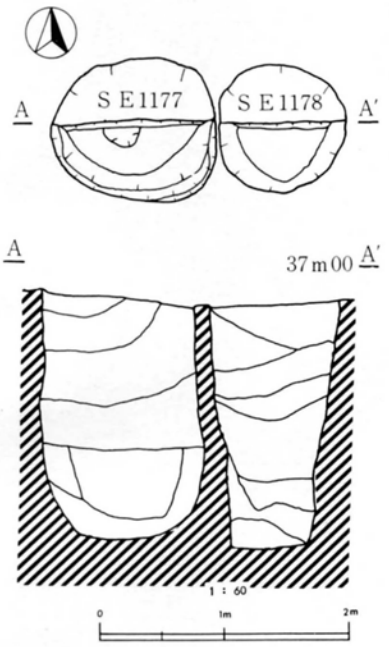
赤褐色土器(６)：糸切り無調整である。

木製品(８～16)：８～10は挽物の浅い皿でロクロ爪痕跡は認められない。11は側面を９～10角に面取りし、上面肩はていねいなロクロ仕上げである。12、15は曲物底板である。12は６本、14は６本の木釘のうち５本が現存している。16は漆刷毛である。柄の先端は尖せている。身部は平坦に作り、端部から柄の付根まで割った後にやや太めの毛を装着し、幅1.5cmの間を麻糸状の紐で締め付けている。17、18は井筒に使用した方形曲物で17が上段、18が下段に埋設されていた。17は62×44cm、高さ40cm、側板の桜樺皮綴じ部は２ケ所である。長辺７～９ケ所木釘あるいはその痕跡の孔が



第58図　ＳＥ1176井戸跡井筒・方形曲物

あり長編の桜樺皮綴じ部の対面に二次的使用の際に穿ったと考えられる方形の穴が認められる。図



第59図　ＳＥ1177・ＳＥ1178井戸跡

面下端に厚さ４cmの底板の痕跡が凹帯となって回る。底板を抜き曲物本来の状態で埋設したものである。18は17よりひとまわり小さいもので58×38cm、高さ34cm、側板の桜樺皮綴じ部は２ケ所である。図面上端長辺３ケ所に桜樺皮綴じ部、短辺に５ケ所木釘、あるいはその痕跡の孔があり底板を押えていたもので、天地を逆にして井筒としている。17、18とも内面のケビキは四隅だけに施している。

木簡：削り屑が７点出土している。木目、字体などから同一木簡からの削り屑で横長の材に７～８行にわたって書き込まれており、「之」、「知」の文字が読み取れるが、内容は不明である。

ＳＥ1177井戸跡　（第59図・図版19）

調査区東側北部で検出された素掘りの井戸跡である。ＳＥ1178の西側に隣接する。掘り方の平面形は東西1.3ｍ×南北1.1ｍの楕円形である。垂直に掘り下げられるが、中程でやや外側に膨らむ形となり、底部は丸底状となる。確認面より底部までの深さは1.9ｍである。ＳＥ1178との新旧関係は不明である。

ＳＥ1178井戸跡　（第59図・図版19）

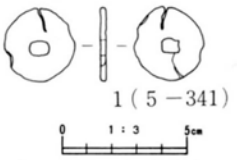
調査区東側北部で検出された素掘りの井戸跡である。ＳＥ1177の東側に隣接する。掘り方の平面形は直径1.0ｍの円形である。ほぼ垂直に掘り下げられ、底部は平底となる。確認面より底部までの深さは1.9ｍである。

ＳＡ1142布掘り溝　（第61・97図・図版19）

材木塀(柱列塀)の布掘り溝である。調査区西側を南北に伸びる幅30cm、深さ14～20cmの溝跡で北の未発掘区に延長していく。方位は北で約14度西に振れる。掘り方は削平により全体に浅くしか遺存しておらず、明確な材(柱)の痕跡は観察されなかった。調査区南側の第57次調査ではＳＤ1142とされていたが、検討の結果、鵜ノ木地区南部の堂風の建物(第30次調査検出)を中心に、一帯を東西約57～69ｍの範囲で区画する区画施設・材木塀(柱列塀)の布掘り溝であることが判明した。

ＳＡ1142出土遺物　（第60図・図版45）

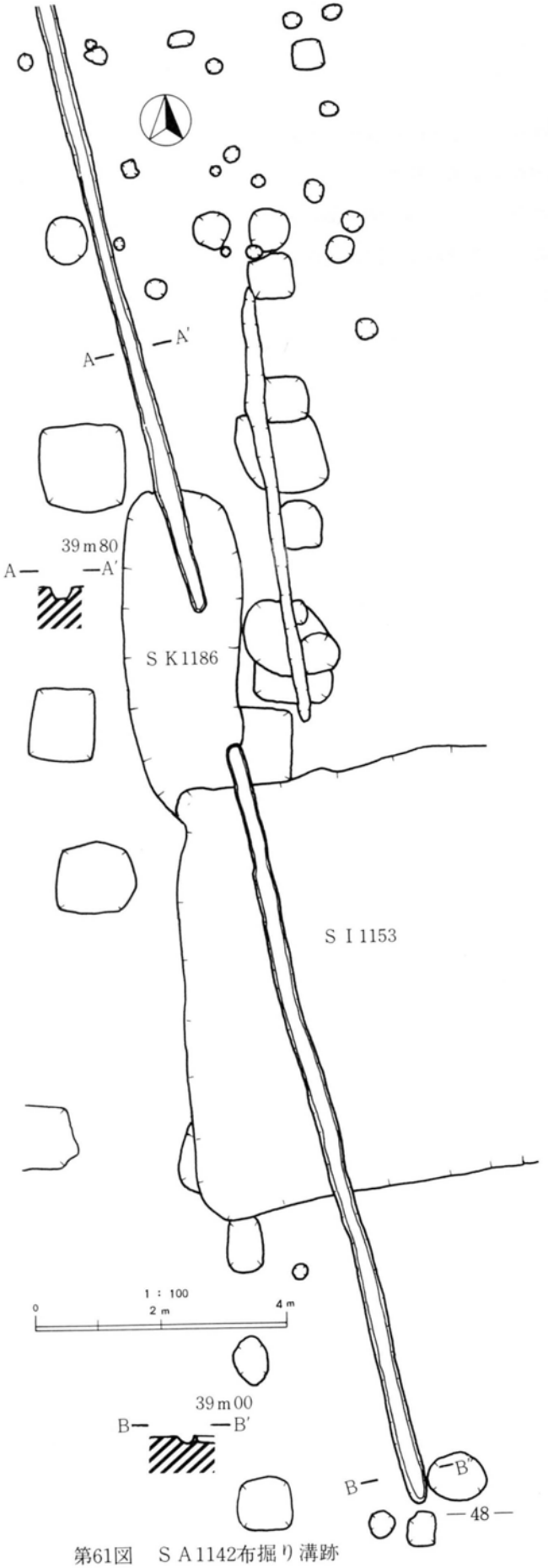
鉄製品：溝底面から出土した鉄銭である。



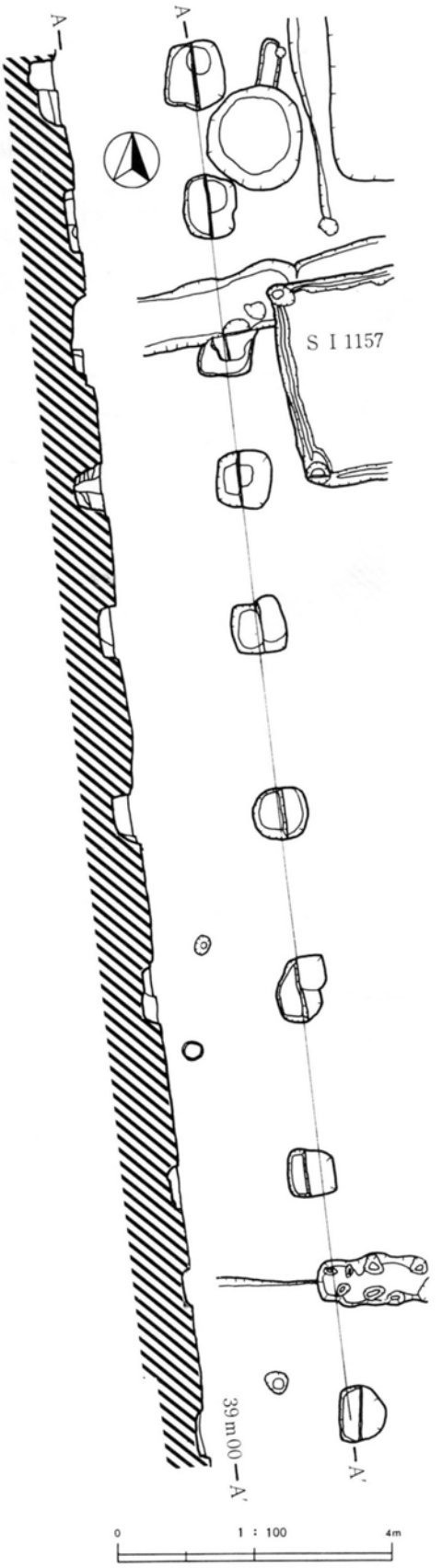
第60図　ＳＡ1142布掘り溝跡出土遺物

ＳＡ1179柱列　（第62図・図版20）

調査区西側中央で検出した９基の掘り方よりなる南北方向の柱列である。方位は北で約７度西へ



第61図　ＳＡ1142布掘り溝跡

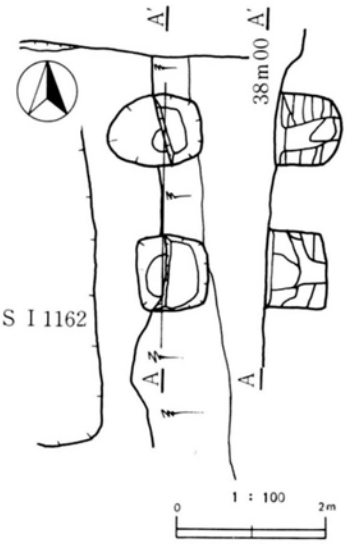


第62図　ＳＡ1179柱列跡

振れる。柱間間隔は北側より(2.1ｍ＋2.1ｍ＋2.0ｍ＋2.1ｍ＋2.7ｍ＋2.4ｍ＋3.0ｍ＋3.3ｍ)である。柱掘り方は、0.7～0.8ｍ×0.7～1.0ｍの隅丸方形で、深さは10～40cmである。柱痕跡で確認されたものは少ないが、直径25～40cmである。全体に削平により遺存度が悪く浅い。南半の掘り方には抜き取りが入る。ＳＩ1136と重複しこれより古い。

ＳＡ1180柱列　(第9図・図版1)

調査区西側で検出した4基の掘り方よりなる南北方向の柱列である。方位は北で約6度西へ振れる。柱間間隔は北側より(2.1ｍ＋2.1ｍ＋2.1ｍ)である。柱掘り方は70～80cm×60～70cmの隅丸方形で深さ40～60cm、直径22～28cmの柱痕跡が認められる。ＳＢ1147と重複し、これより新しい。



第63図　ＳＡ1181柱列跡

ＳＡ1181柱列　(第63図)

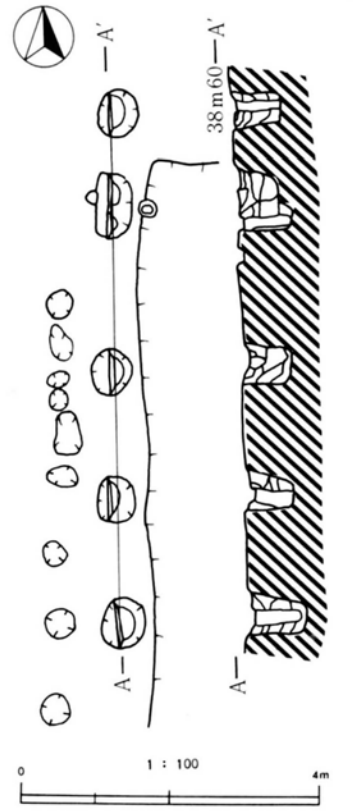
調査区西側北東隅で検出した2基の掘り方よりなる南北方向の柱列である。方位はほぼ真北である。柱間間隔は1.8ｍである。柱掘り方は東側半分が削平されており、東西1.2ｍ×0.9ｍの楕円と一辺0.9ｍの方形である。深さ80cm、直径30cmの柱痕跡が認められる。

ＳＡ1182柱列　(第64図・図版21)

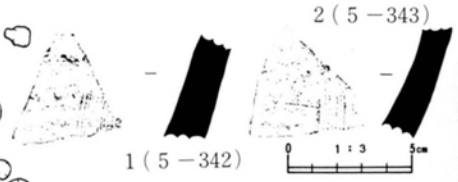
調査区西側ＳＡ1179の東で検出した5基の掘り方よりなる南北方向の柱列である。方位は北で約6度西へ振れる。柱間間隔は北側より(1.6ｍ＋1.8ｍ＋1.8ｍ＋1.6ｍ)である。柱掘り方は東西50cm×南北60cmの楕円で深さ60cm、直径14～20cmの柱痕跡が認められる。

ＳＤ1183溝跡　(第61図・図版19)

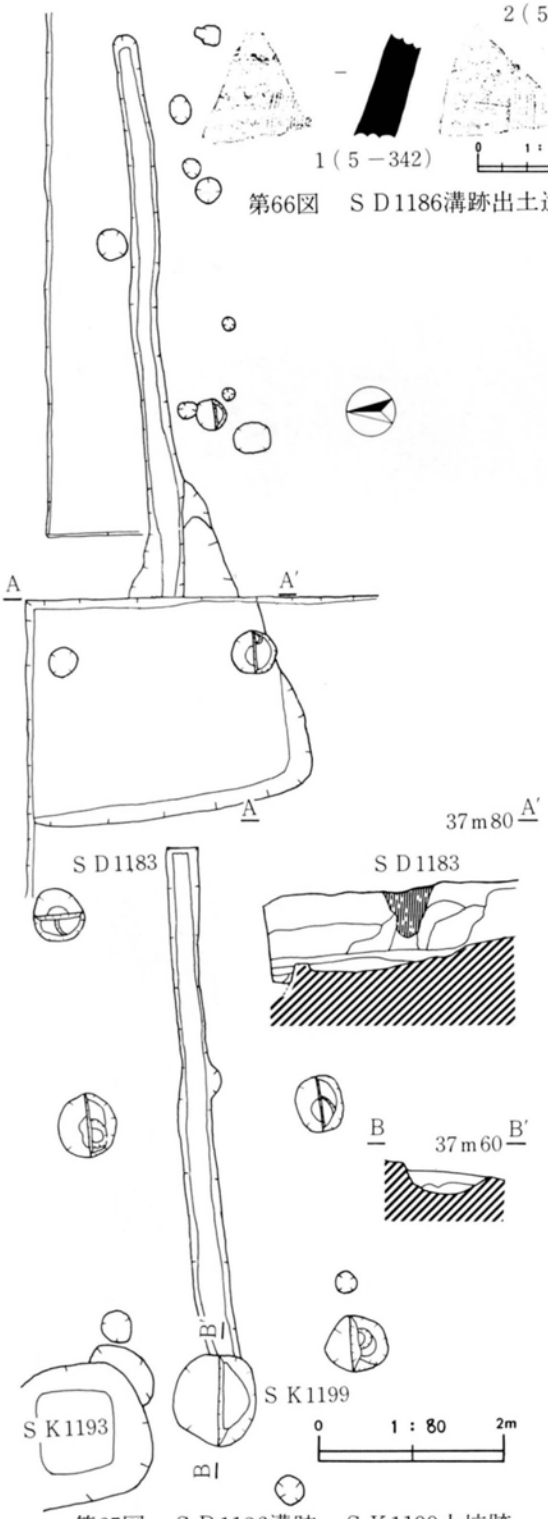
ＳＡ1142の東側で検出された。南北方向に走る幅20～30cm、長さ5.6ｍの溝跡である。ＳＢ1147、ＳＡ1180と重複し、これより新しい。



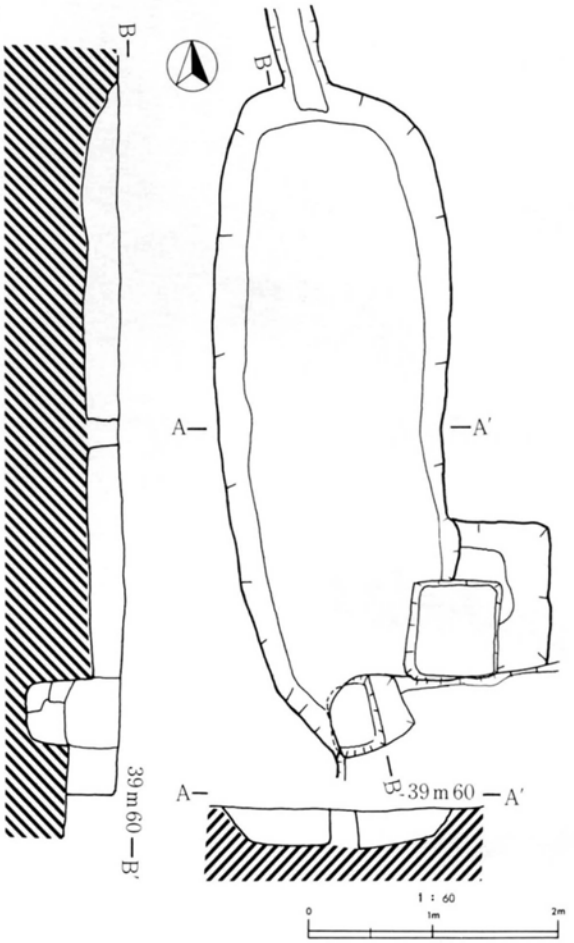
第64図　ＳＡ1182柱列跡



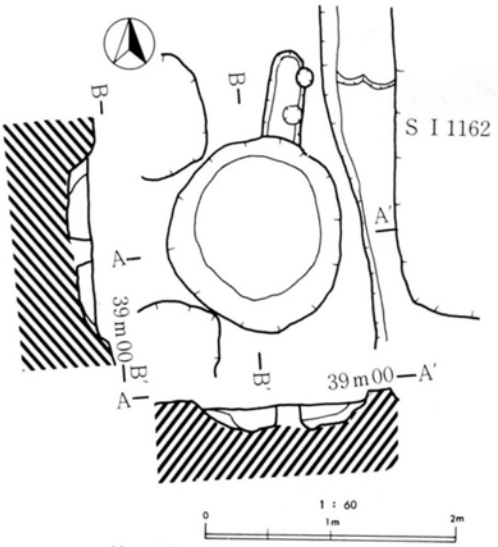
第66図　ＳＤ1186溝跡出土遺物



第65図　ＳＤ1186溝跡・ＳＫ1199土坑跡



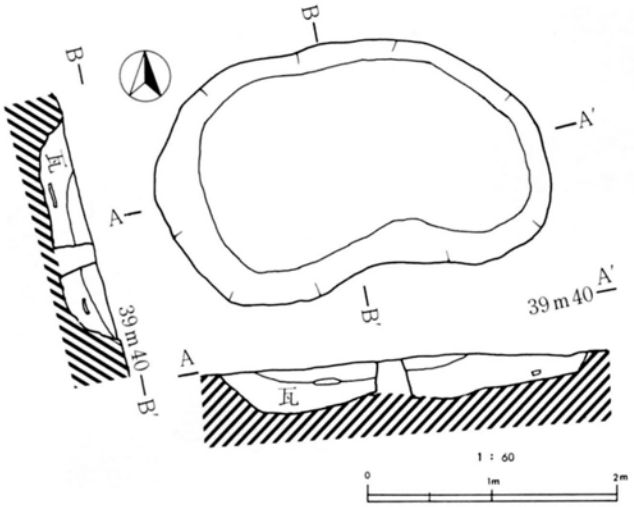
第67図　ＳＫ1189土壙跡



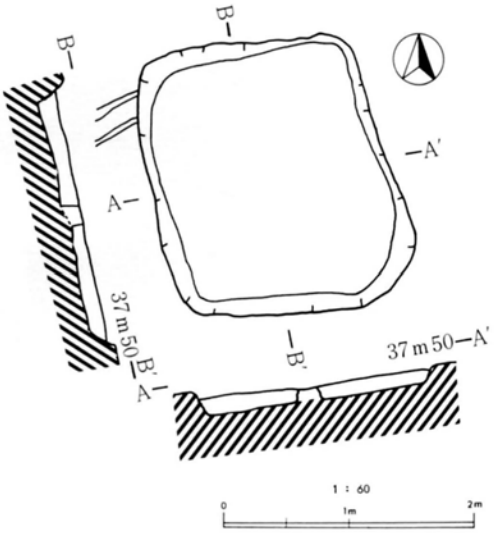
第68図　ＳＫ1190土壙跡

ＳＤ1186溝跡　（第65図・図版3）

発掘区東側の中世整地層上で検出された。ＳＢ1150と重複する位置にあるが、新旧関係は不明。東西方向に走る幅30～50cm、深さ40cm、長さ14ｍの溝跡である。昨年度の第57次調査でさらに西に



第69図　ＳＫ1191土壙跡



第70図　ＳＫ1192土壙跡

延びていることが確認されている。

ＳＤ1186出土遺物　（第66図・図版45）

中世陶器（１・２）：１、２は珠洲系中世陶器擂鉢である。

ＳＤ1187溝跡　（第13図・図版4）

ＳＩ1153の東辺部で検出された。南北方向に走る幅45cm、深さ18cm、長さ6.3ｍの溝跡である。ＳＩ1153、ＳＢ1148と重複し、これより新しい。

ＳＤ1188溝跡　（第25図・図版10）

ＳＩ1162の東辺部で検出された南北方向に走る幅75cm、深さ16cm、長さ6.0ｍの溝跡である。ＳＩ1162、ＳＩ1163と重複し、ＳＩ1162より新しく、ＳＩ1163より古い。

ＳＫ1189土壙　（第67図・図版5）

調査区西側で検出された大型土壙である。東西1.9ｍ×南北5.3ｍの楕円形で、深さ30cm、底部は平らで壁際になりやや急に立ち上がる。ＳＢ1146、SI1153、ＳＤ1142と重複し、ＳＢ1146より新しく、ＳＩ1153、ＳＤ1142より古い。

ＳＫ1190土壙　（第68図）

調査区西側北部で検出された。直径1.4ｍの円形で深さ18cm、壁はゆるやかに立ち上がる。

ＳＫ1191土壙　（第69図・図版22）

調査区東側北部で検出された。東西3.1ｍ×南北1.9ｍの楕円形で深さ30～35cm、底部はいくらか起伏があるが平らで、壁際になり急に立ち上がる。

ＳＫ1192土壙　（第70図・図版22）

調査区東側北部で検出された。東西1.85ｍ×南北2.2ｍの長方形で深さ15cm、底部は平らで壁際

になり急に立ち上がる。ＳＩ1154、1155と重複し、それらより新しい。

ＳＫ1193土壙　（第44図・図版15）

ＳＥ1169井戸跡の北側に隣接する浅い土壙。東西1.0ｍ×南北1.1ｍの方形で深さ10cmと浅い。位置的にＳＥ1169との関連が考えられるが、機能性格については不明である。

ＳＫ1194土壙　（第71図）

調査区東側南西部で検出された。東西1.0～1.2ｍ×南北3.8ｍのゆがんだ長方形で深さ40cm、底部は平らで壁は垂直に立ち上がる。ＳＢ1150と重複し、これより新しい。

ＳＫ1195土壙　（第72図）

調査区東側南西部で検出された。東西1.2ｍ×南北1.0ｍの楕円形で深さ35cm、壁は急に立ち上がる。ＳＢ1151、ＳＢ1152と重複し、これより新しい。

ＳＫ1196土壙　（第73図）

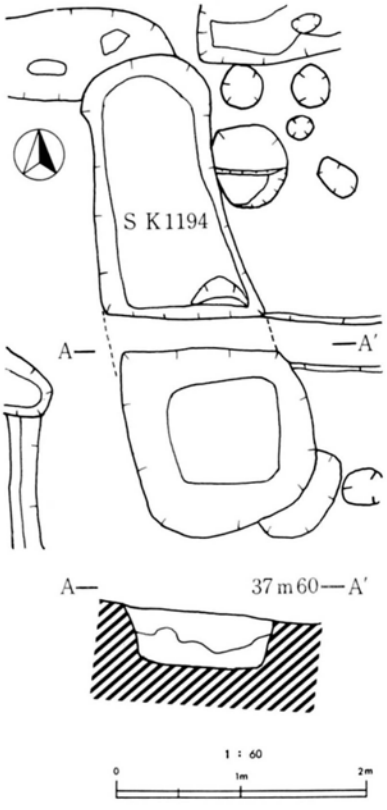
調査区東側南西部で検出された。東西1.35ｍ×南北1.0ｍの楕円形で深さ15cmと浅い。壁はゆるゆかに立ち上がる。ＳＢ1150と重複し、これより新しい。

ＳＫ1198土壙　（第74図・図版22）

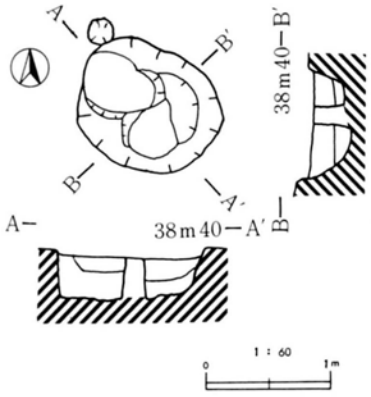
調査区東側南辺の中世整地層上で検出された。東西0.9ｍ×南北1.0ｍの楕円形で深さ60cmである。底部は四隅に直径６cmの小掘り方と中央に46cm×50cmの方形のくぼみを有する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

ＳＫ1199土壙　（第65図）

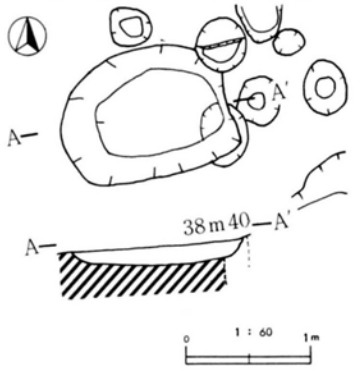
調査区東側南西部の中世整地層上で検出された。直径90cmの円形で深さ25cm、壁はゆるやかに立ち上がる。



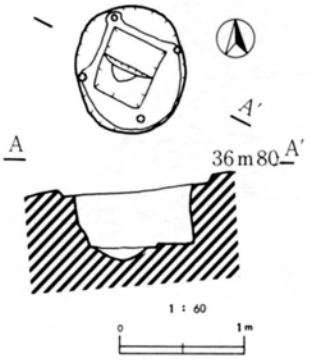
第71図　ＳＫ1194土壙跡



第72図　ＳＫ1195土壙跡



第73図　ＳＫ1196土壙跡



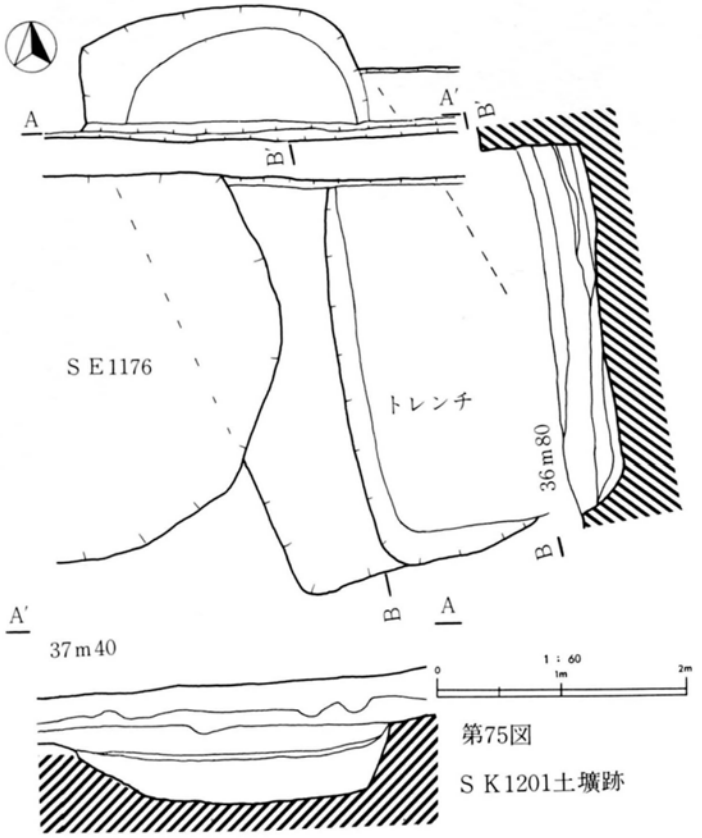
第74図　ＳＫ1198土壙跡

ＳＫ1201土壙　（第75図）

調査区東側南部で検出された。ＳＥ1176とトレンチにより大きく削平されている。東西2.2ｍ以上×南北4.8ｍの長方形と考えられる。深さ45～60cmで北側が深く、南側が浅くなる。壁は東側はゆるやかに、それ以外はやや急に立ち上がる。ＳＥ1176、ＳＤ1183、ＳＢ1150と重複し、これらより古い。

ＳＫ1201出土遺物　（第76図・図版45）

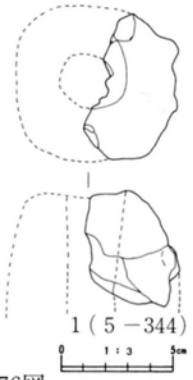
土製品：フイゴ羽口である。



第75図
ＳＫ1201土壙跡

ＳＸ1202焼土遺構
（第77図・図版23）

調査区東側の中世整地層上で検出された４基の焼土遺構のうちの１基。平面形は東西45～80cm×南北90cmの南北に長く中央がくびれた形であり、北側の円形が主体部、南側が前庭部と考えられる。落ち込みの深さは高い所で20cmを計るが、レベルでは円形部分が前庭部に比して５cm程低い。円形部から前庭部にかけての底部に炭化物、壁の一部に焼面が検出される。



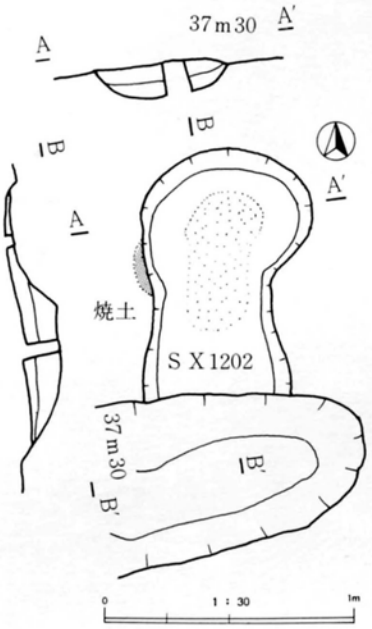
第76図
ＳＫ1201土壙出土遺物

ＳＸ1203焼土遺構　（第78図・図版23）

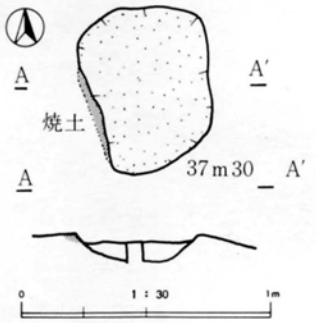
平面形は東西45cm×南北65cmのゆがんだ楕円形である。落ち込みの深さは20cmを計る。底部全体に炭化物、壁の上部に焼面が検出される。

ＳＸ1204焼土遺構　（第79図・図版23）

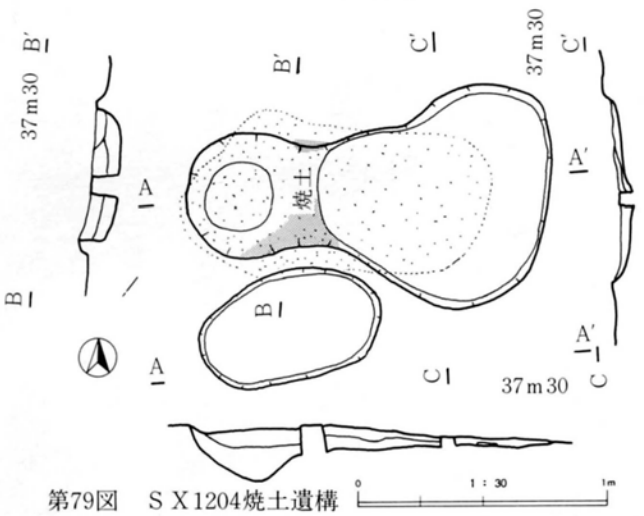
平面形は東西145cm×南北40～95cmで、大小の円形が連続し、中央がくび



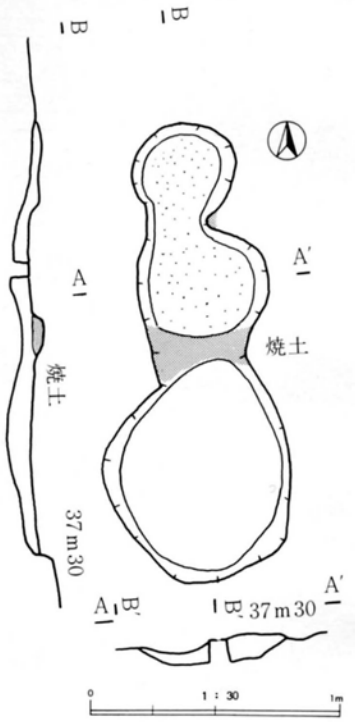
第77図　SX1202焼土遺構



第78図　SX1203焼土遺構



第79図　SX1204焼土遺構



第80図　SX1205焼土遺構

れる形である。西側の円形が主体部、東側が前庭部と考えられる。落ち込みの深さは5～20cmで、円形部が前庭部分に比して深くなっている。円形部から前庭部にかけて炭化物、くびれ部分の壁に焼面が検出される。円形部に粘土による上部構造を伴った可能性がある。SB1152と重複し、これより新しい。

SX1205焼土遺構　(第80図・図版23)

平面形は東西25～75cm×南北180cmで、大小3つの円形が連続し、2ケ所がくびれる形である。北側2つの円形が主体部、南側が前庭部と考えられる。落ち込みの深さは8～10cmである。円形部に炭化物、くびれ部分の壁に焼面と埋土に焼土が検出される。円形部に粘土による上部構造を伴っ

た可能性がある。ＳＢ1151、ＳＢ1152と重複し、これより新しい。

ＳＧ1206沼地跡　(第3・4図・図版23・24)

東側調査区に検出された沼地跡は、現地形では湿地(通称雨池)の西岸にあたる部分であり、古代以降現在に至るまで鵜ノ木地区東部に沼地が存在し堆積していることが確認された。ＳＧ1206の堆積層は上層より表土層(耕作土)、暗褐色土・灰褐色土層(中世整地層)、上層スクモ層(植物遺体層)、灰褐色土層(古代整地層)、下層スクモ層(植物遺体層)・黒色土層(腐食した地山粘土層)である。表土層は暗褐色土(耕作土)と褐色土(旧耕作土)よりなっている。中世整地層は沼地岸側にあたる西側と南側では暗褐色、沼地内へ向かって厚く堆積していく部分は灰褐色、上層スクモ層直上では黒色を呈している。古代整地層は中世整地層に比して、堆積が厚くない。部分的に上層スクモ層との間にスクモの堆積が認められ、２層に分かれる可能性がある。下層スクモ層は岸部分より沼地中央の北東方向へ向け急傾斜で落ち込み、厚く堆積しており、北東隅トレンチでは深さ約２ｍを計った。

ＳＧ1206と上層整地層出土遺物

(中世整地層出土)　(第81・82図・図版45・46・47)

須恵器(１・２)：１はヘラ切り後無調整の底部で判読不能の墨書がある。２は口縁部には波状文が施された大型甕である。

かわらけ(３～８)：３、４は小皿、５～７は坏か埦でいずれも糸切り無調整である。８は、手捏ねの花瓶と考えられる。

中世陶器(９～25)：すべて珠洲系中世陶器である。９は静止糸切りの鉢。10は静止糸切りで体部下端にケズリ調整、15は肩から胴部にかけて波状文が施された壺である。11～14、17、18は擂鉢である。17は、内面条線は波形の不規則な施文である。16は片口鉢で内面条線は認められない。19～26は甕である。いずれも外面は平行タタキ、内面は無文円形のアテ具痕跡が認められる。

陶磁器(27～34)：27は口禿げの白磁碗で乳白色を呈する。28は青磁碗で褐色を帯びた青緑色を呈する。29は青白磁壺で外面に鳳凰の浮彫りが認められる。30～34は青磁碗でそれぞれ片切彫の文様が認められる。

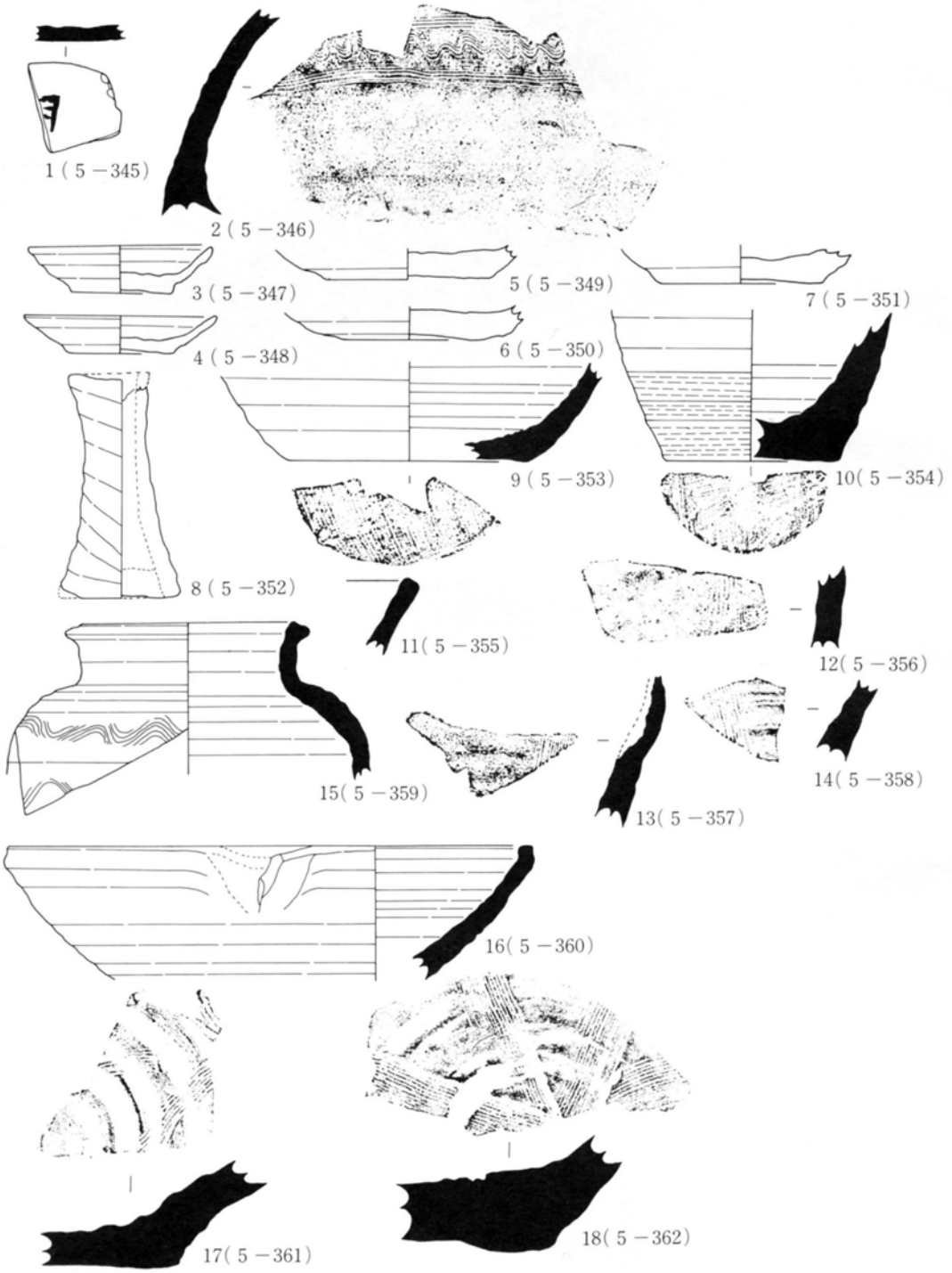
鉄製品(35)：小刀である。

石製品(36)：縄文時代の石箆である。

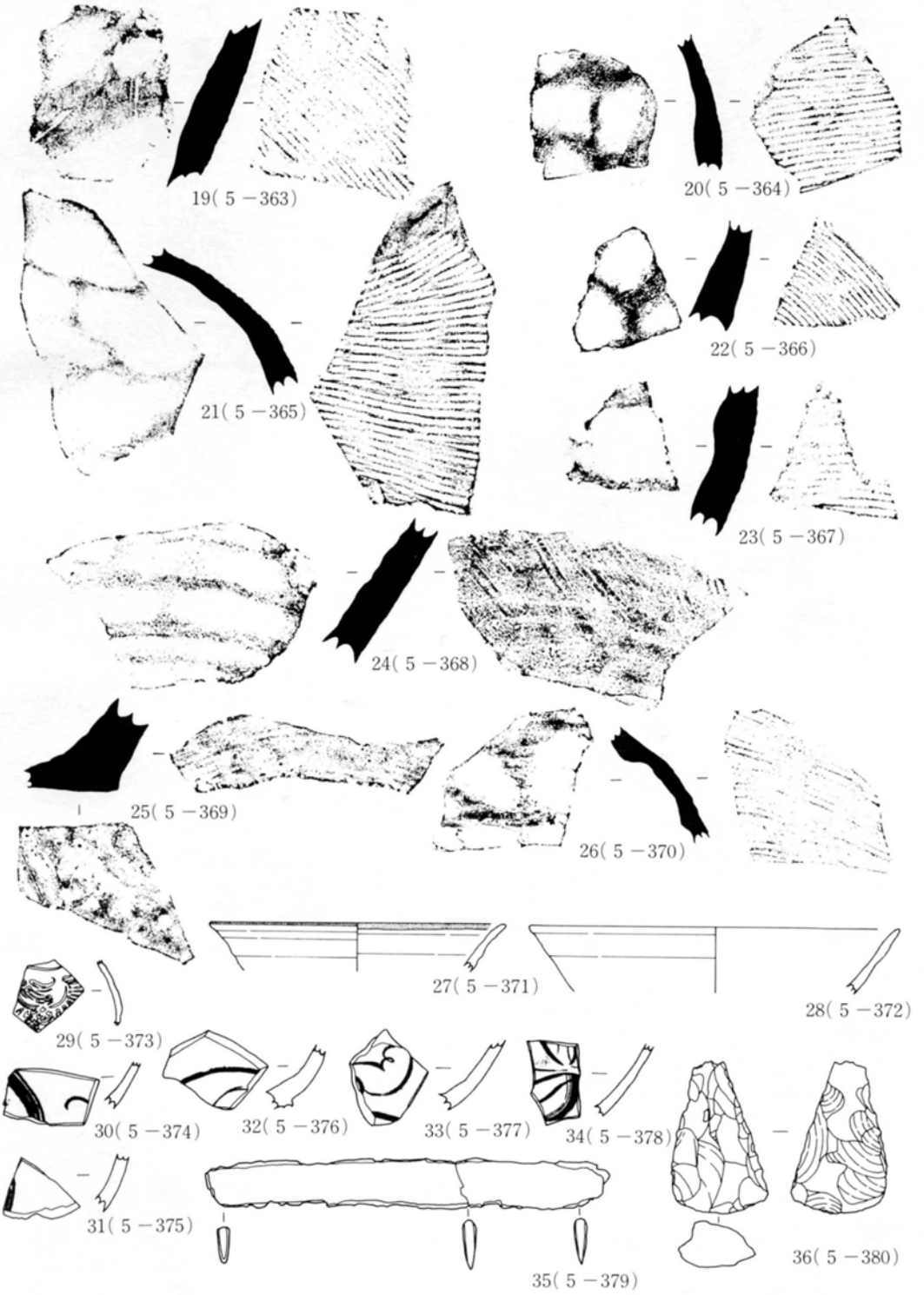
(中世整地層下面・上層スクモ層上面出土)　(第83図・図版48)

中世陶器(９～25)：すべて珠洲系中世陶器である。１、２は擂鉢で、２は、磨滅のため内面条線は認められない。波状文壺である。４～７は甕で、外面は平行タタキ、内面は無文円形アテ具痕跡が認められる。

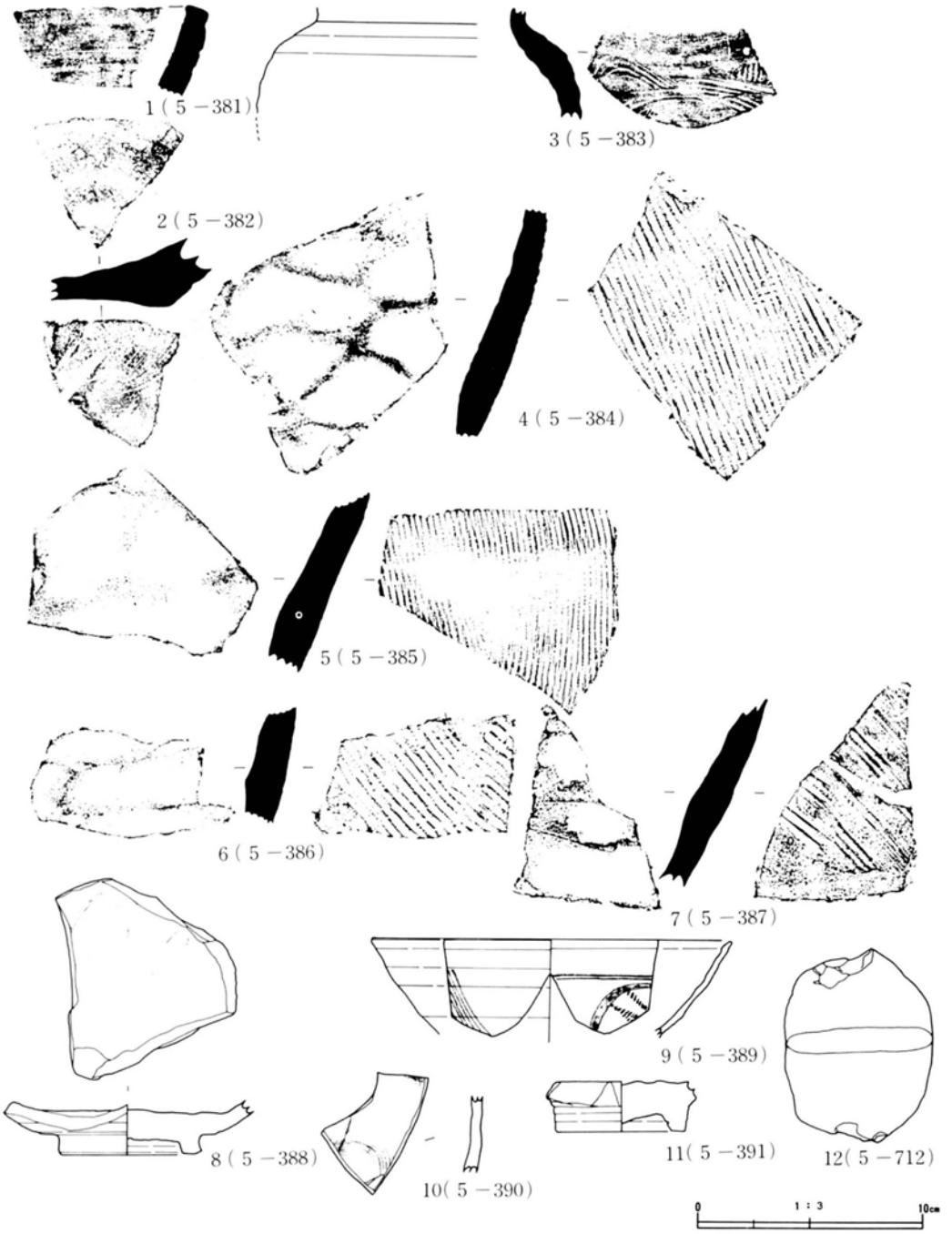
陶磁器(８～11)：すべて青磁碗である。８の見込みは片切彫の劃花文、内面は沈線文と列点文で



第81図　ＳＧ1206沼地跡中世整地層出土遺物



第82図　ＳＧ1206沼地跡中世整地層出土遺物



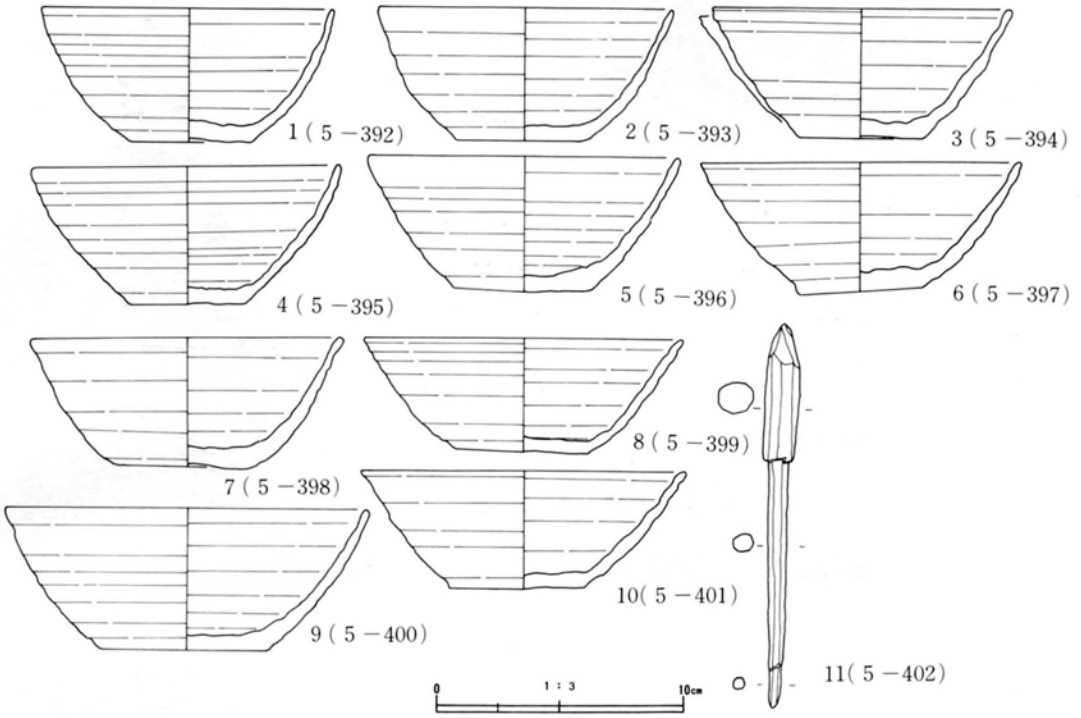
第83図　ＳＧ1206沼地跡中世整地層下面・上層スクモ層上面出土遺物

ある。10の内面見込みは沈線文、外面は露胎、高台内には頭巾状突起が認められる。

石製品(12)：縄文時代の石錘である。

（上層スクモ層出土）　（第84図・図版49）

赤褐色土器（１～１０）：すべて糸切り無調整で、土圧によるものか体部にユガミのある土器が多



第84図　ＳＧ1206沼地跡上層スクモ層出土遺物

い。

木製品(11)：鏃状を呈する木製品である。

(古代整地層出土)　(第85・86図・図版49・50・51)

須恵器(１～18)：１は静止糸切り後体部下端から底部周囲にかけてケズリ調整を施す。２～３、５～８、11はヘラ切り後撫で調整を施す。６は燈明皿。７は「橘」、８、11は「寺」の墨書がある。４、９、10は糸切り、４は底部周辺にケズリ調整、他は無調整である。12は肩部にケズリ調整を施した蓋である。12～15は台付坏である。13は体部下端から台内部周辺にケズリ調整を施し、切り離しは不明である。16は銅椀を模したと考えられる。18は三段構成の長頸壺で、肩部に２条、２段の平行沈線がまわる。体部下半はケズリ調整後に横位の手持ちケズリ調整を施す。台内部は撫で調整である。

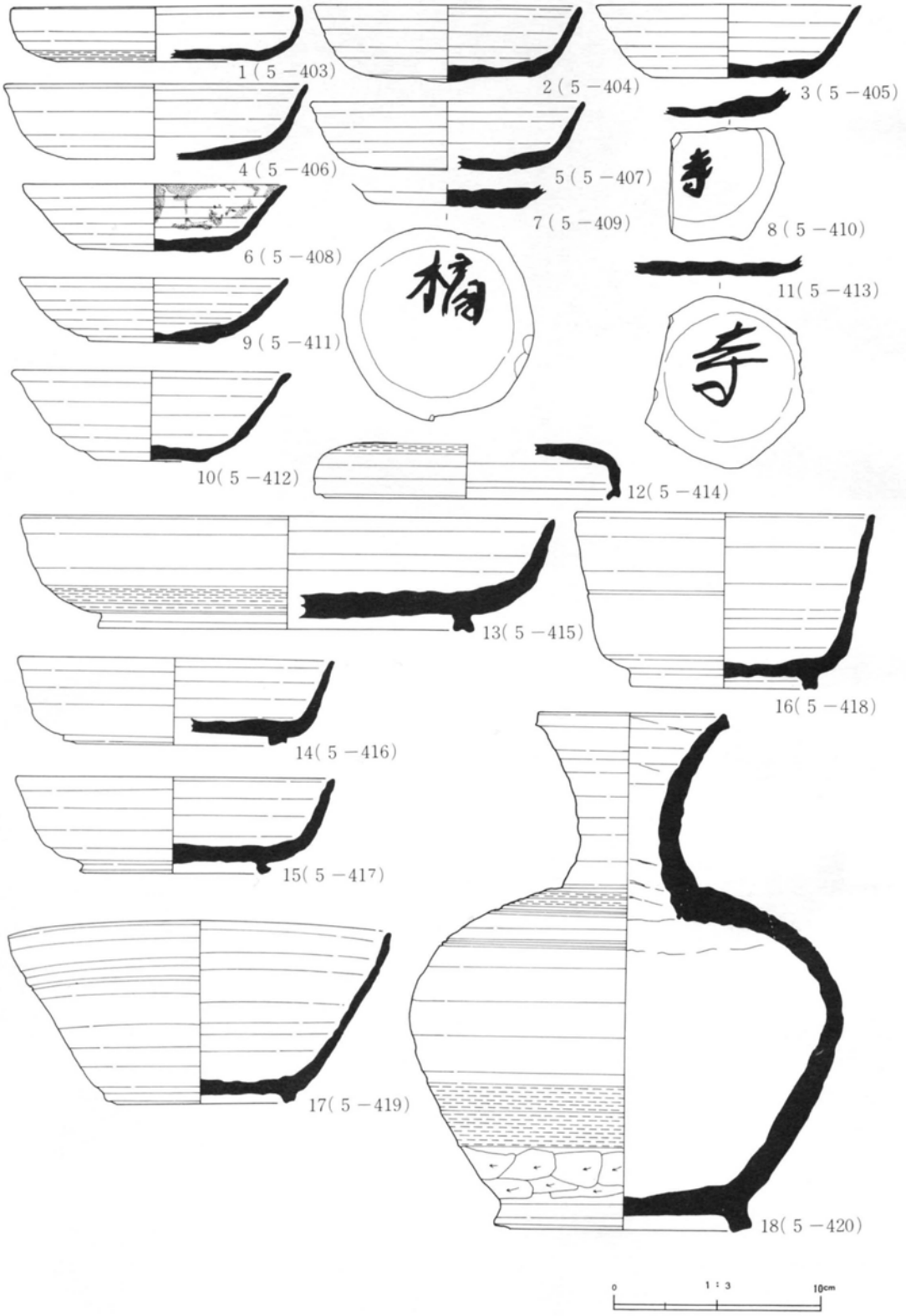
赤褐色土器(19～22)：すべて糸切りである。19、20は体部下半にケズリ調整を施す。21、22は無調整である。

土師器(23)：手捏ねのミニュチュア土器で内面に指撫で調整痕跡が認められる。

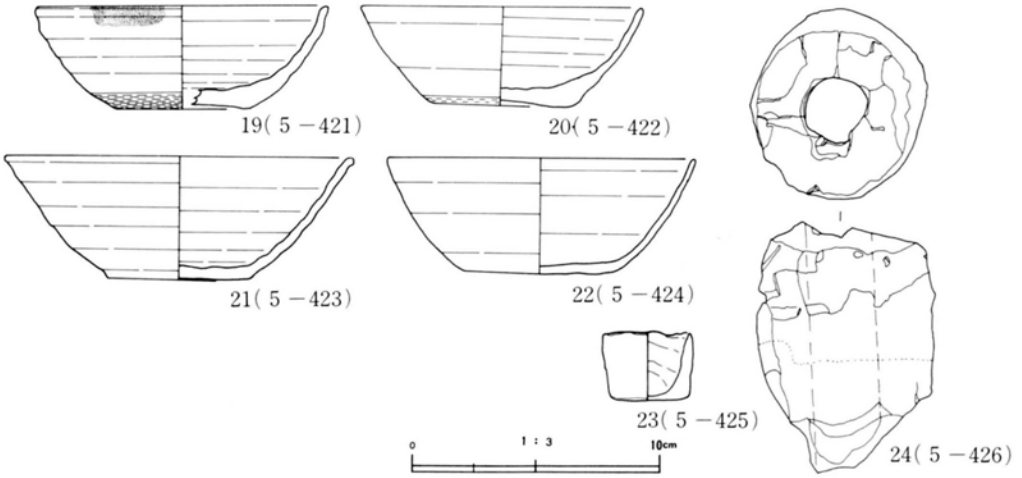
土製品(24)：フイゴ羽口である。

(下層スクモ層出土)　(第87図・図版51)

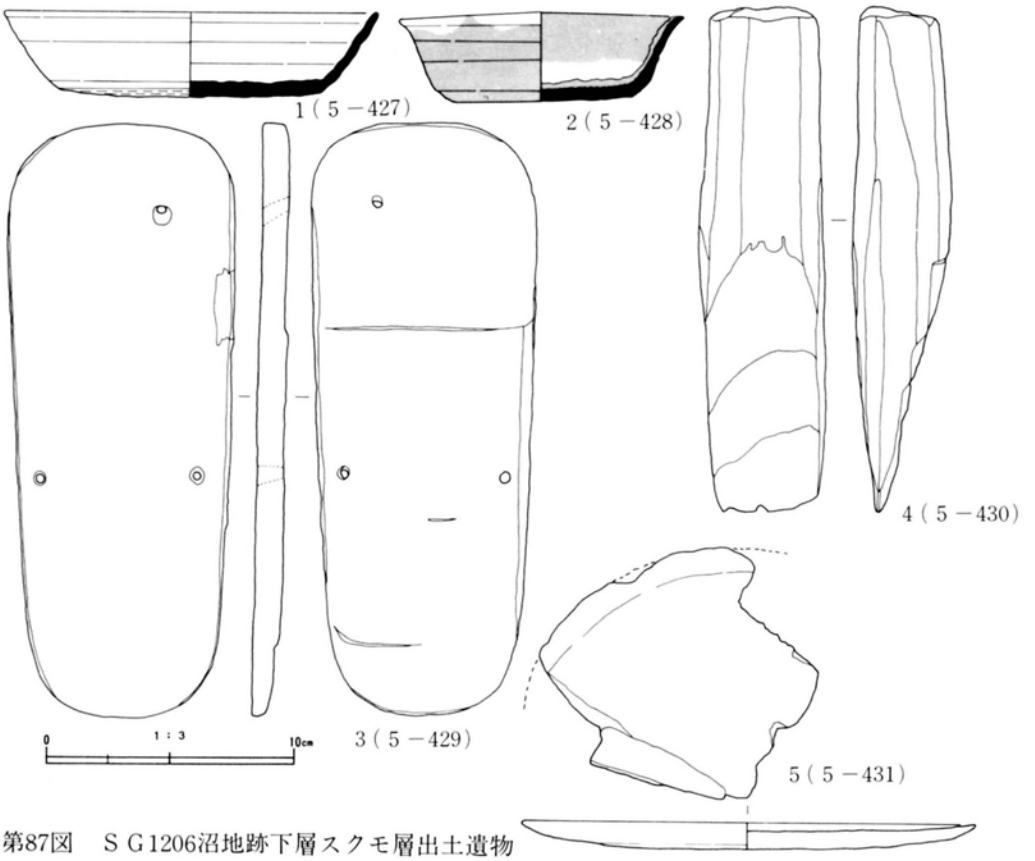
須恵器(１・２)：両者とも底部全面ケズリ調整のため切り離しは不明である。２は内外面、特に



第85図　ＳＧ1206沼地跡古代整地層出土遺物



第86図　ＳＧ1206沼地跡古代整地層出土遺物

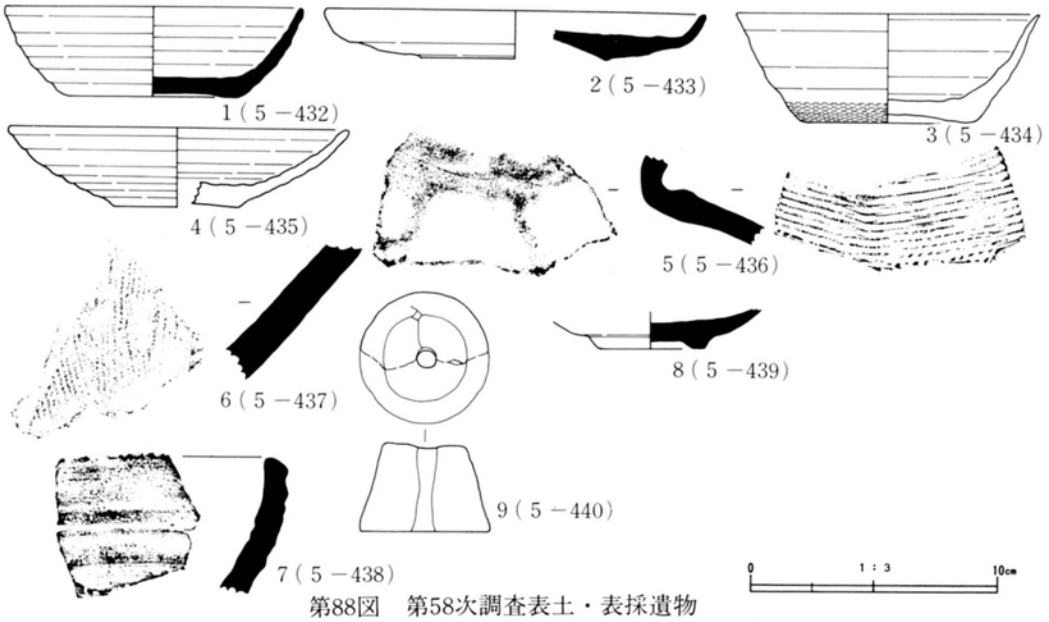


第87図　ＳＧ1206沼地跡下層スクモ層出土遺物

内面には厚く漆が付着しており、漆容器として使用されたものと考えられる。

木製品（３～５）：３は鼻緒前壺が内側に寄った下駄である。底の前後に加工痕跡が認められるが連歯を作りだした痕跡かどうかは不明である。底の後端が特に磨り減っている。４は楔である。５は挽物皿で、ロクロ爪跡は認められない。

３）　その他の出土遺物



第88図　第58次調査表土・表採遺物

表土　（第88図・図版50）

須恵器（1・2）：1はヘラ切り無調整。赤褐色で胎土は軟化している。2は糸切り無調整の皿である。

赤褐色土器（3・4）：3は糸切り、体部下端にケズリ調整を施す。4は糸切り無調整である。

中世陶器（5～7）：すべて珠洲系中世陶器である。5は甕、6、7は擂鉢である。

陶磁器（8）：体部下端から高台内部まで露胎である。

土製品（9）：台形状の紡錘車である。

III　第 59 次 発 掘 調 査

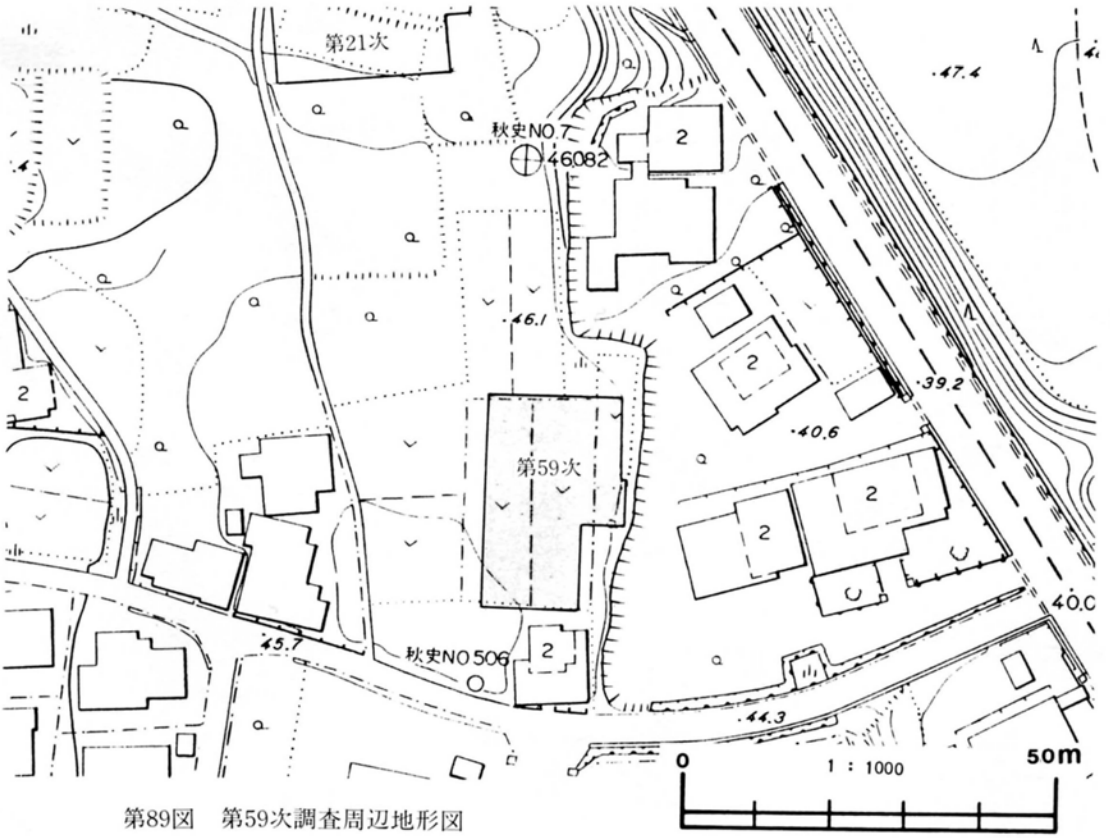
1）　調査経過

第59次調査は焼山地区を対象に、平成４年９月18日から11月17日まで実施した。

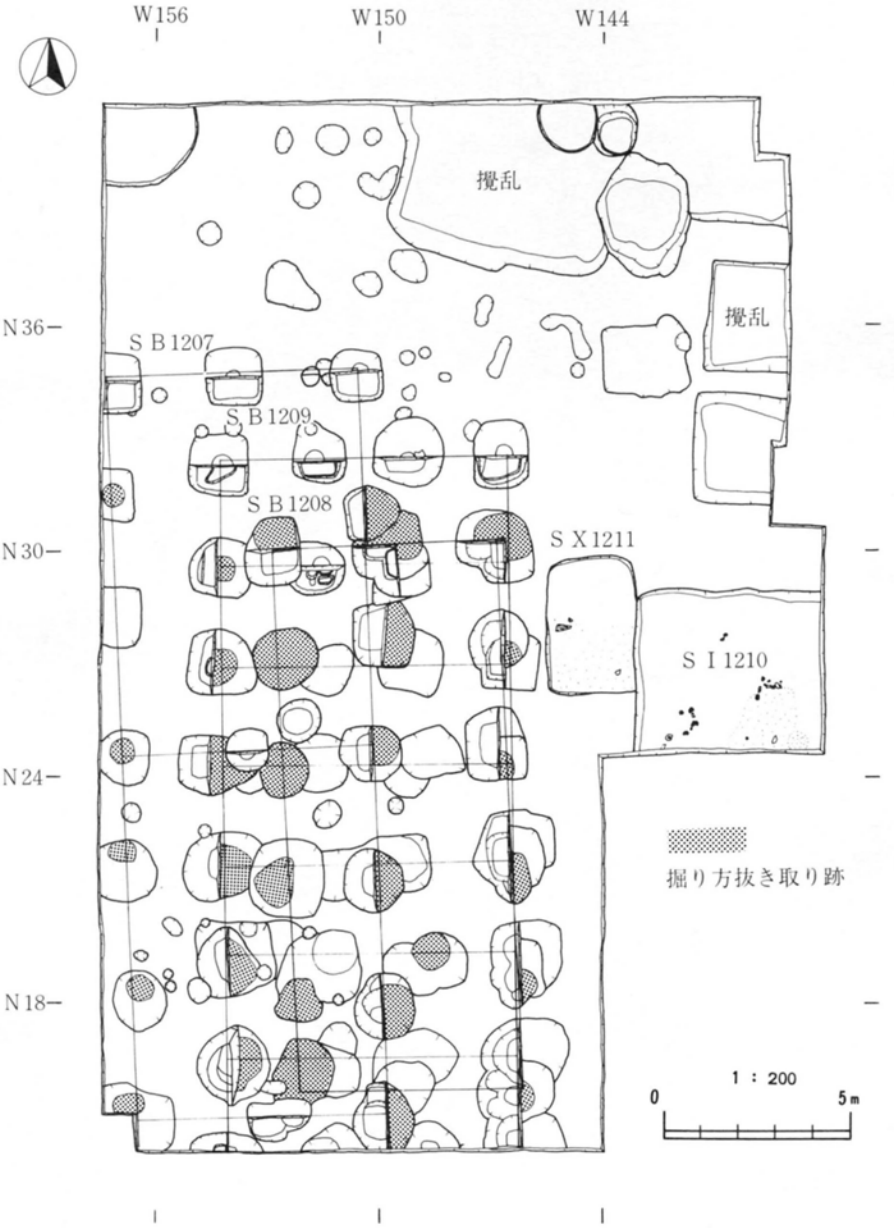
発掘調査面積は462㎡(140坪)である。調査地の位置する焼山地区は政庁から外郭西辺に至る地区であり、同地区北部では第４次国営調査が実施され、北土塁、推定櫓跡、竪穴住居跡、土師器窯跡が検出されたとしている。その後、第21次調査が国営調査地を含めて実施され、北西外郭線は検出されなかったものの、竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出している。調査区は第21次調査地の南側にあたり、現状は平坦な竹やぶとなっていた。

第59次調査は、焼山地区中央部における遺構の広がりを追及することを目的として実施した。調査予定地は竹やぶとなっていたため、下刈作業を行った後グリッド設定を行った(9月18日～10月2日)。

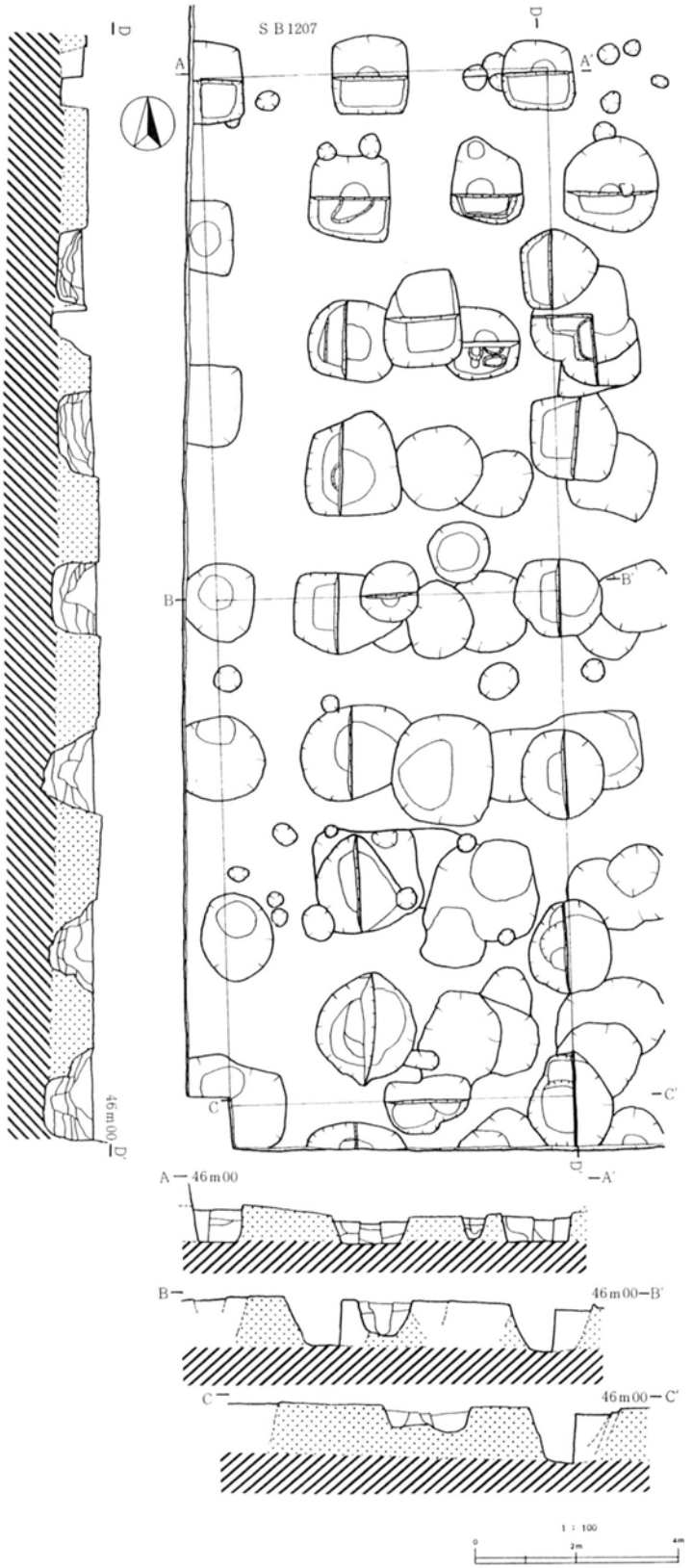
表土除去作業を開始したところ、表土の厚さは30cm前後と浅く、その直下の地山飛砂層が遺構面となっていた。調査区南側より表土除去作業を行ったところ、北側の一部は遺構面が後世の攪乱により失われていることが判明した(10月5日～16日)。



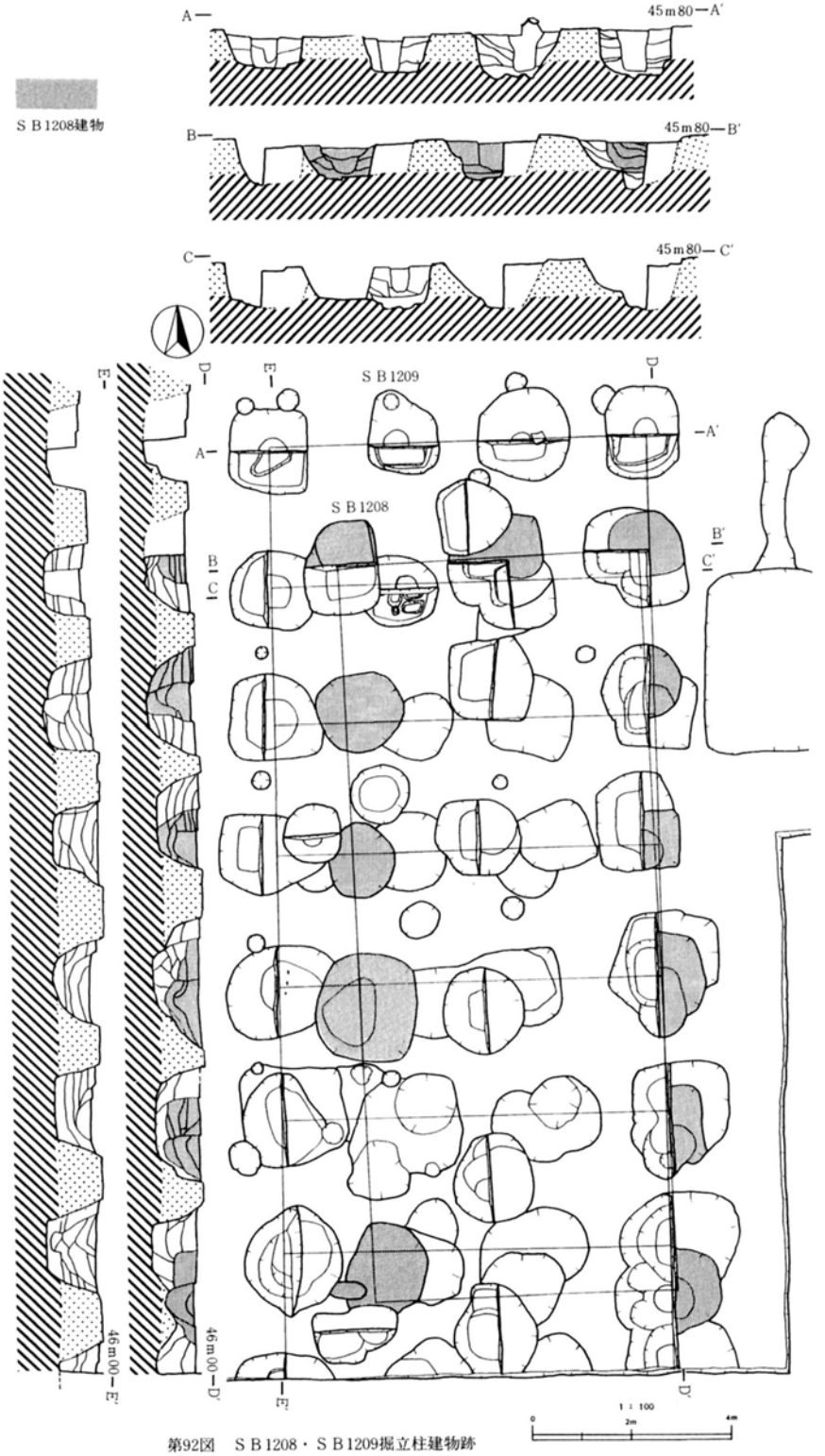
第89図　第59次調査周辺地形図



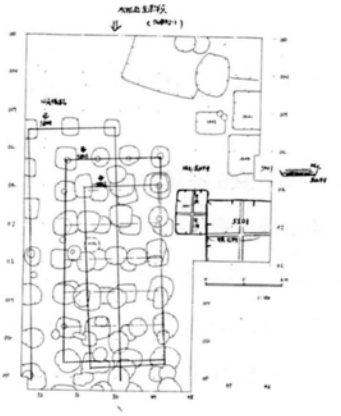
第90図　第59次検出遺構図



第91図　SB1207掘立柱建物跡



第92図　S B 1208・S B 1209掘立柱建物跡



表土を除去した後、北側より遺構面の精査を行っていった。調査区東辺付近に方形の落ち込みを3基検出したが、表土より掘り込まれている攪乱であることが確認された。東側中央部では方形プランの焼土と炭化物の落ち込みが検出されＳＸ1211とした(10月19日)。

グリッドのベルトの土層断面を実測し、除去しながら遺構面を精査していったところ、中央部から西側にかけて一辺1.5～2.0ｍの方形や、直径1.5ｍ前後の円形の大規模な掘り方が多数重複して検出された。特に南側には、炭化物か充満した抜き取り穴と考えられる落ち込みが多く検出された(10月20日～26日)。

検出された掘り方群を精査し検討した結果、全て南北棟の３棟の重複する掘立柱建物跡を確認した。新しいものからＳＢ1207は梁間２間×桁行６間以上(柱間3.3ｍ)、ＳＢ1208は梁間２間×桁行５間(柱間3.0ｍ)、ＳＢ1209は総柱建物で梁間３間×桁行７間以上(柱間2.4ｍ)であることが判明した(10月27日～28日)。

調査区東辺中央の褐色砂の落ち込みを精査し、ＳＩ1210を検出した。

ＳＸ1211、ＳＩ1210の掘り下げを行いベルトの実測と写真撮影を行った後、調査区の全景写真撮影を行った(10月29日)。

調査区の遺構検出が終り、遺り方を設定、平面実測を行った(10月30日～11月4日)。

掘立柱建物跡の掘り方断ち割り作業を行い、土層断面図を作成し写真撮影を行った。掘り方はほとんどが地山粘土層面まで掘り込まれており、そこを基盤として建物を構築したと考えられた(11月5日～11日)。

掘り方断ち割り後の全景写真撮影を行い(12日)、器材を搬収し11月17日に調査を終了した。

2）　検出遺構と出土遺物

ＳＢ1207掘立柱建物跡　(第91図・図版25・26)

地山飛砂層上で検出した梁間２間(3.3ｍ＋3.3ｍ)、桁行６間以上(3.3ｍ＋3.3ｍ＋3.3ｍ＋3.3ｍ＋3.3ｍ＋3.3ｍ＋…)の南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約３度西に振れる方向となる。柱掘り方は１辺1.5ｍの方形または直径1.5～1.7ｍの円形、深さは60～100cmで、地山粘土層まで堀り下げている。柱痕跡は直径40cm、深さ40～80cmのものが認められる。ＳＢ1208、1209と位置的に重複する掘り方には柱抜き取りが入っている。東桁行南半の柱抜き取りには炭化物が多く混入する。間仕切りの掘り方が南北３間ごとに２ケ所検出されており、桁行は９間以上となる可

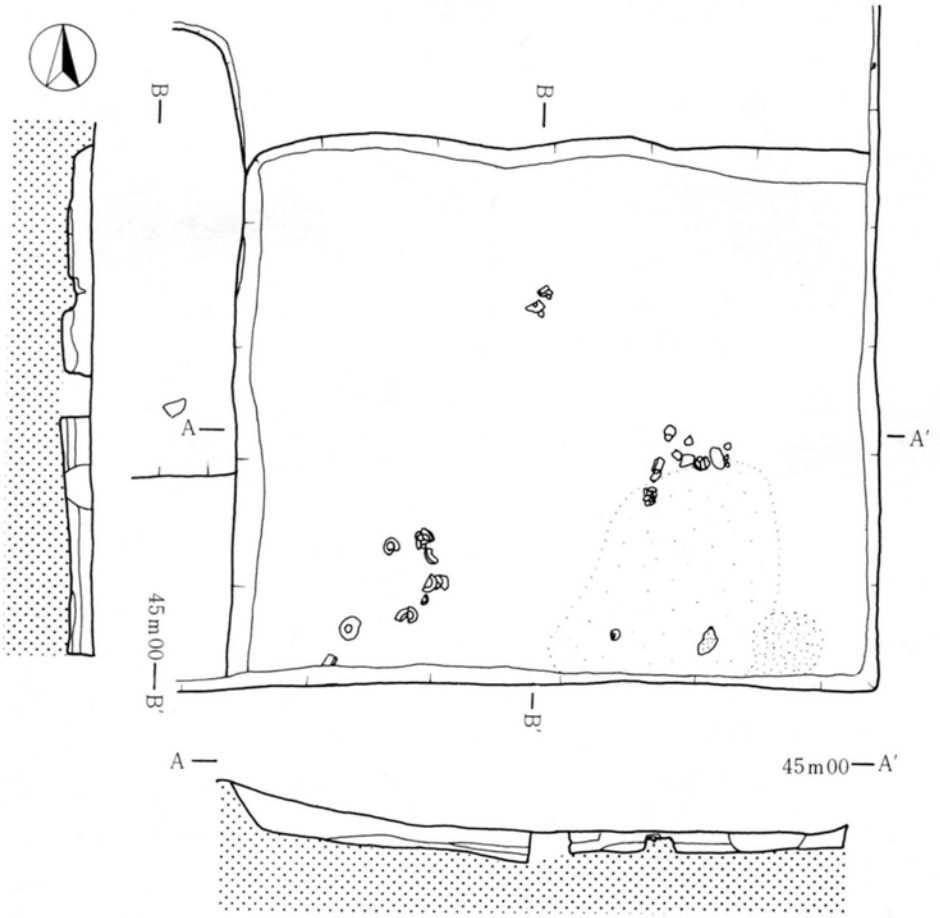
能性がある。ＳＢ1208、1209と重複し、これらより新しい。

ＳＢ1208掘立柱建物跡　（第92図・図版27）

地山飛砂層上で検出した梁間２間(3.0ｍ＋3.0ｍ)、桁行５間(3.0ｍ＋3.0ｍ＋3.0ｍ＋3.0ｍ＋3.0ｍ)の南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約３度西に振れる方向となる。柱掘り方は直径1.5～2.0ｍの円形、深さは60～90cmで地山粘土層まで掘り下げている。南北梁間のものが浅い。柱痕跡は掘り方全てに柱抜き取りが入るため不明である。桁行南半の柱抜き取りには炭化物が多く混入する。ＳＢ1207、1209と重複し、1207より古く、1209より新しい。

ＳＢ1209掘立柱建物跡　（第92図・図版27・28・29）

地山飛砂層上で検出した梁間３間(2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ)、桁行７間以上(2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋…)の南北棟、総柱の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行がほぼ真北を



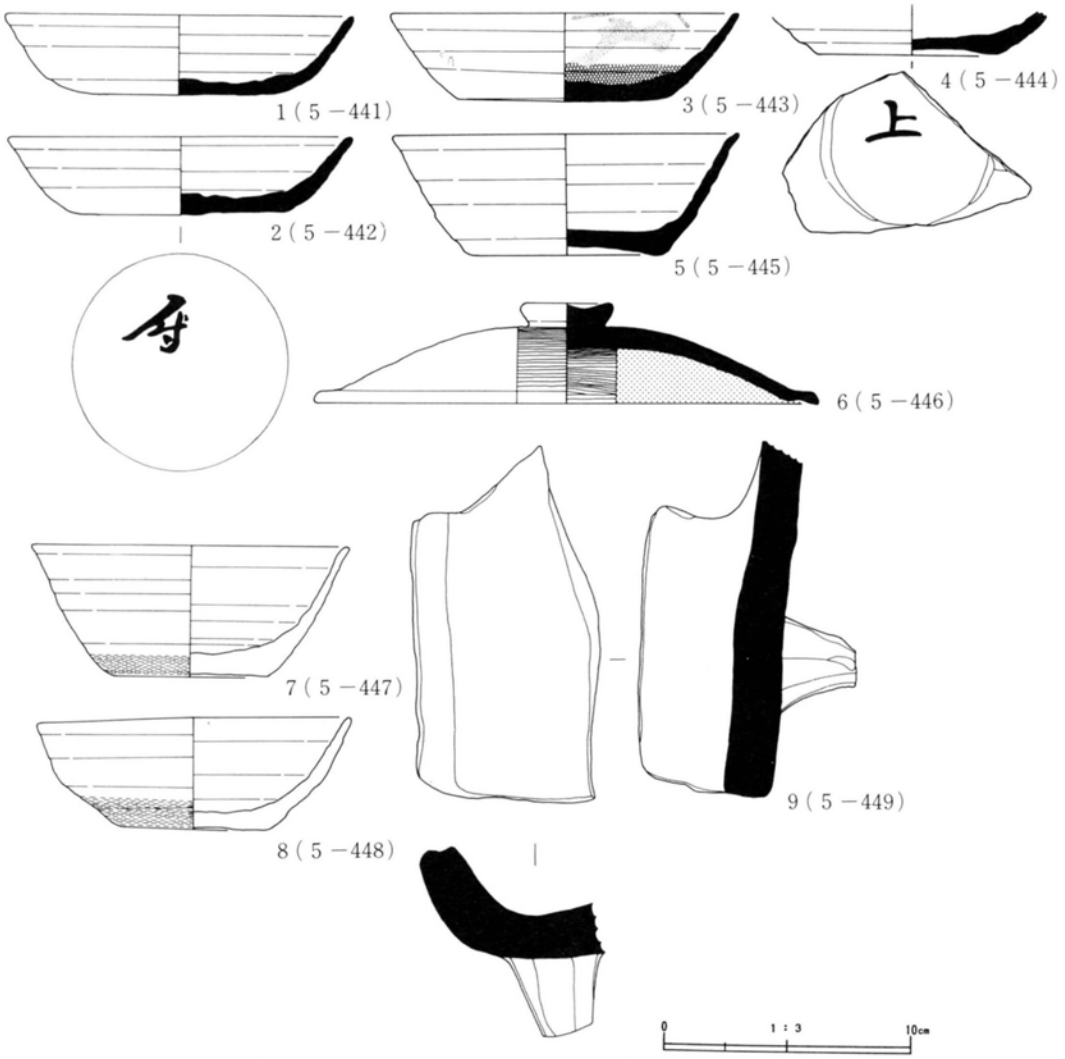
第93図　ＳＩ1210竪穴住居跡

向く。柱掘り方は直径1.5～2.0ｍの円形または１辺1.4～1.8ｍの不整方形で、規則性に欠ける。深さは60～100cmで地山粘土層まで掘り下げている。柱痕跡は直径40～50cm、深さ60～80cmのものが認められる。東桁行の掘り方はＳＢ1208により破壊されており不明だが、北梁間の掘り方以外には柱抜き取りが入っている。ＳＢ1207、1208と重複し、これらより古い。

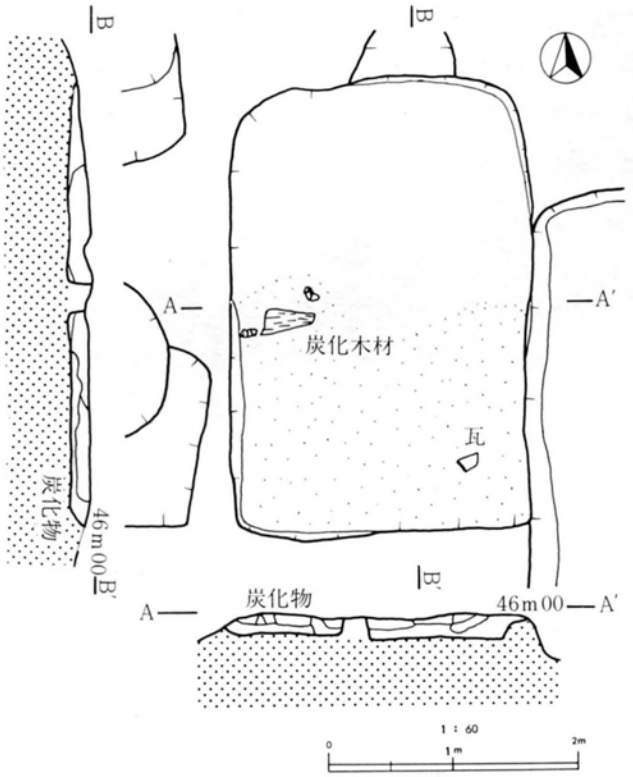
ＳＩ1210竪穴住居跡　（第93図・図版29）

調査区東辺で検出された。平面形は調査区外にかかるため不明であるが、東西5.0ｍ以上×南北4.2ｍ以上の方形である。西壁はほぼ真北を向く。カマドは認められないが、南西の床面に焼土・炭化物が検出される部分がある。住居壁はゆるやかに立ち上がり高い部分で35cmを計る。ＳＸ1211と重複し、これより古い。

ＳＩ1210出土遺物　（第94図・図版53）



第94図　ＳＩ1210竪穴住居跡出土遺物



第95図　ＳＸ1211焼土遺構

須恵器（１～５）：１～３はヘラ切り撫で調整の坏である。２は底部に「厨」の墨書、３は内面を硯に転用している。４、５は糸切り無調整の坏で、４は底部に「上」の墨書がある。

土師器（６）：内外面をミガキ調整し、内面黒色処理を施したロクロ使用の蓋である。

赤褐色土器（７、８）：７、８はいずれも体部下端にケズリ調整を施している。

硯（９）：風字硯の陸部破片である。

炭化米（図版53・10）：床面から特殊な遺物として、おにぎり状の炭化米の塊が出土した。

ＳＸ1211焼土遺構　（第95図・図版29）

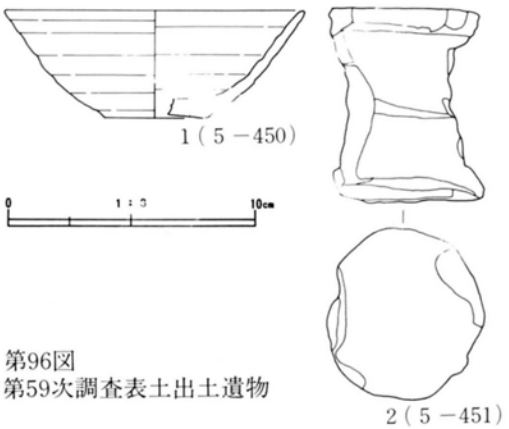
平面形は浅いくぼみ状で東西2.4ｍ×南北3.1ｍの南北に長い長方形である。炭化物、炭化材が底部に見られ、炭化物層の上を埋土が覆うような状態で検出された。落ち込みは深いところで15cmを計る。

3）　その他の出土遺物

表土　（第96図・図版53）

赤褐色土器（１）：糸切り無調整である。

土製品（２）：近世以降の焼台である。



第96図
第59次調査表土出土遺物

Ⅳ まとめ

1） 第58次調査検出遺構と年代について

第58次調査では掘立柱建物跡７棟、竪穴住居跡13軒、井戸跡13基、区画施設(柱列塀・材木塀)の布掘り溝、柱列、土壙、焼土遺構、溝、沼沢地とその整地地業などの遺構を検出している。各遺構はその重複関係、方位、沼沢地の整地層との層位関係から時期区分が可能である。大きくは中世と古代の遺構に区分され、さらに細分される。ここでは、沼沢地(ＳＧ1206)の整地地業の様相を整理し、その後各遺構の時期区分、年代についてまとめてみたい。

○ＳＧ1206沼沢地の整地地業と年代

今次調査区東側一帯は通称雨池と呼ばれ、現状でも地盤の軟弱な窪地となっている。

検出したＳＧ1206沼沢地(湿地)としたものは、その南岸から西岸にかけての一部分であり、中央部については未調査となっている。沼沢地は古代においては、スクモ層(植物遺体層)が深さ1.5ｍ以上堆積する状態で開口していたが、９世紀中葉に整地地業がなされ、西岸から南岸を中心に埋められている。整地土は、沼沢地中央部で薄い状況となるが、今次の調査では古代の整地の範囲を限定することができなかった。古代の整地地業の時期の根拠となったものは、整地土に包含される土器の年代観によるものである。この古代整地土からは、底部全面ケズリ調整のある須恵器坏、佐波理椀を模した須恵器台付坏など古い様相のものと、ヘラ切り無調整、糸切り無調整の須恵器坏、赤褐色土器Ｂとしたケズリ調整のあるもの、赤褐色土器Ａとした糸切り、無調整、非黒色処理、酸化炎焼成の土器など比較的新しい様相のものまで混在し、出土している。最も新しいと考えられる糸切り無調整の須恵器坏、赤褐色土器Ａの年代を検討してみると、糸切りの須恵器坏は口径を１とした時の底径比が0.37と小さいもので、赤褐色土器Ａも底径比が0.39と同様に小さいものである。秋田城跡出土土器の編年が確定していない現段階で明言することができないが、第54次調査のＳＧ1031土取り穴の紀年のある木簡、漆紙文書と伴出すする土器群とその上・下の層位から出土する土器の様相から判断すると、10、11層とした土層の出土土器に類似する(註１)。

この層は元慶２年(878)の乱の焼土層の下層、延暦10(791)～14年(795)の木簡層の上層に位置するもので、この木簡層の直上層(14層)はⅢ期外郭材木塀の構築に伴う整地層となっている。Ⅲ期外郭の年代は８世紀末から９世紀前半が考えられている。この上層にある10、11層はしたがって９世紀以降、元慶２年(878)の焼土層以前となる。

ＳＧ1206沼沢地の古代整地地業の時期はこの第54次調査の10、11層と類似する土器様相から９世紀中葉の年代に求められよう。９世紀中葉の古代整地地業の後、整地土上面には再びスクモ層が形成され、湿地化している。このスクモ層は上層スクモとして下層のスクモ層と明確に区別が可能であり、この上層スクモ内からは糸切り無調整の赤褐色土器Ａがまとまって出土しているが、削り調

整のある赤褐色土器Bの混入がなく、須恵器坏類も小片が数点出土するだけでその比率が極めて少なくなる。

上層スクモは中世まで形成され、SG1206は湿地となっていたようで、上層スクモの上面からは青磁碗(龍泉窯系劃花文碗、同安窯系櫛描文碗)、珠洲系陶器擂鉢、甕、波状文壺、ロクロ使用の「かわらけ」とみられる厚手の酸化炎焼成の土器などが出土している。

この上層スクモの上層にはさらに整地地業が行われ、深いところで1mを超し、その範囲も古代整地を大きく上回るものである。この段階で付近の旧地形に大きな変動があったことが窺え、生活面は東側湿地内まで拡大していった。井戸跡の多くのものや、調査区東側の総柱の掘立柱建物跡はこの中世の整地地業以降に構築されたものである。

中世整地土からは輸入陶磁器として、鳳凰の浮彫のある青白磁壺片、龍泉窯系劃花文碗、1点だけ口禿げの白磁碗が出土している。国内産のものでは珠洲系陶器擂鉢、甕、波状文壺、厚手の「かわらけ」、小型皿状の「かわらけ」などがある。

これら上層スクモ上面、中世整地土内出土の輸入陶磁器の年代は大宰府編年によると、龍泉窯系青磁劃花文碗、同安窯系櫛描文碗が龍泉窯系I－4類に、同安窯系I類にそれぞれ分類され、これらはIII期1小期としている12世紀中葉から13世紀初頭に多くなり、口縁部に釉のない、いわゆる口禿げの白磁碗は白磁IX類に分類されIII期2小期(13世紀中葉)に出現し、同3小期(13世紀後半から14世紀中葉)に1割を超す多さになるとされている(註2)。

またI－5類とされている龍泉窯系青磁蓮弁文碗が大部分占めるのはIII期2小期(13世紀中葉)とされているが、この類の青磁は含まれていない。

一方、国内産の珠洲系陶器をみると無文の擂鉢、曲線状の内面条線の擂鉢、波状文壺などから珠洲陶II期に分類されるものを主体にI期のものがわずかに混るもので、I期は寺社一号窯式(1150～1200年)、II期は法住寺三号窯式(1200～1250年)の年代観が与えられている。(註3)

また、「かわらけ」とした厚手の酸化炎焼成の土器、小型の皿状の酸化炎焼成の土器は赤褐色土器Aとの関連が明確でないが、秋田城跡では鵜ノ木地区から集中的に出土する土器群である。県内では大館市の矢立廃寺から12世紀～13世紀代の白磁四耳壺、碗、珠洲系陶器などとともに出土している。

また、12世紀代の岩手県平泉藤原氏関連遺跡からもこの種の「かわらけ」が多く出土している。

以上のことから中世整地土内出土の遺物の年代は大宰府編年に従うと、青磁では12世紀中葉から13世紀初頭、13世紀中葉のものは含まれていない。また、白磁は13世紀中葉に出現し、14世紀中葉までに位置づけられるものがある。

国内産の珠洲系陶器では珠洲陶II期～III期(1200～1300年)、13世紀代に位置づけられるものが主体となっている。

しかし、「九州北部と東北日本海域では龍泉窯系青磁の初現ないし流通の一般化が半世紀程遅れ

るとみられることは留意すべきであろう。」とする吉岡康暢氏の指摘がある(註４)。このことを考慮に入れ、国内産の陶器の年代を中心に輸入陶磁器の時期を勘案すると、上層スクモ出土の陶磁器は一部「かわらけ」など12世紀代の古いものを含むものの、13世紀代におさまるものと考えられる。

○検出遺構の時期区分について

今次調査で検出した各遺構を前述のＳＧ1206沼沢地の整地地業との層位関係と、遺構の重複関係、方位から以下のように大きくＩ～Ⅴ期に区分することができる。

Ⅰ期　竪穴住居跡の中でその重複関係、出土遺物からもっとも古いと考えられるＳＩ1165、掘立柱建物跡では鵜ノ木地区の建物群の中でＡ類とした建物方位が真北に近い値をとるＳＢ1147、同規模で位置をズラして建て替えられたと考えられるＳＢ1146がこの時期に区分され、Ａ類に属するＳＥ406井戸跡から出土した木簡の紀年から８世紀前半年代が考えられる。

Ⅱ期　竪穴住居跡の中で一辺約５～６ｍの比較的大型のものが多く、後述のⅢ期の小型住居と重複しこれより古いもので、ＳＧ1206沼沢地の古代整地地業以前に位置づけられるものである。ＳＩ1136、1137、1153、1154、1160～1162がこの時期に区分される。重複関係があり、さらに小期に区分可能である。年代はＩ期以降、Ⅲ期の構築がＳＧ1206古代整地以降であることから、下限は９世紀中葉となる。上限については出土遺物、調整不明の赤褐色土器坏があるものの、体下端にケズリ調整のある赤褐色土器Ｂ、ヘラ切り後、軽い撫で調整を施す須恵器坏が主体をしめることから８世紀末、９世紀前半を中心とする時期に位置づけられる。鵜ノ木地区建物群Ｂ・Ｃ類のいずれかの時期に属する可能性がある。ＳＥ1173もこの時期に位置づけられる。

Ⅲ期　ＳＧ1206沼沢地の古代整地面に確実に構築されたＳＢ1149、ＳＩ1164、ＳＥ1176と、ＳＩ1164と同規模、同方位で、Ⅱ期の竪穴住居跡と重複し、これより新しいＳＩ1157～1159、1163、ＳＡ1142をこの時期に区分した。やはり重複があり細分が可能である。一辺約３～3.3ｍの小振りな住居跡がほとんどである。調査区東側のＳＩ1156は一辺約7.5ｍと大きいものであるが重複関係からこの時期に位置づけてある。住居方位が約10～12°北で西に振れており、区画施設の布掘り溝としたＳＡ1142の北で西に14°振れる方向と近似しており、この区画施設の方位規制が窺える。この布掘り溝は、鵜ノ木地区建物群Ｄ類とした建物と方位が近似しており、この時期に属するものと考えられる。年代的には、ＳＧ1206沼沢地の古代整地と同時かそれ以降であり、９世紀中葉から後半の時期が考えられる。

Ⅲ期・Ⅳ期以降

ＳＧ1206沼沢地の中世整地以前のもので、ここではＳＥ1171だけが確実にこの時期である。井戸跡で重複し、古いものとしているＳＥ1174などもこの時期に入る可能性がある。ＳＥ1171井筒埋土・覆土からは珠洲系陶器Ⅱ期の甕、擂鉢、ＳＥ1174からは13世紀代に位置づ

けられる龍泉窯系劃花文碗、同安窯系櫛描文皿などが出土しており、13世紀代に廃棄、埋没していたものでその構築年代は12世紀代に遡ることも考えられる。

Ⅴ期　ＳＧ1206沼沢地の中世整地面に構築されたＳＢ1150、ＳＥ1166、1169、1172とこれと構造的に同じＳＢ1151、1152、ＳＥ1167、1168、1174、1177、1178、ＳＤ1186、ＳＸ1202～1205がこの時期に入る。総柱の掘立柱建物跡、方形の井側痕跡のある井戸跡、素掘りか円形曲物を埋設したとみられる円形掘り方の井戸跡、焼土遺構などで、重複関係があることから、さらに小期に細分可能である。年代的には中世整地と同時かそれ以降であるが、珠洲系陶器Ⅳ期のものがみとめられないことから、13世紀代いっぱいで14世紀まで降ることはないものと考えられる。

○ＳＡ1142区画施設(柱列塀・材木塀)布掘り溝について

Ⅲ期時期区分されるＳＡ1142布掘り溝は、今次の調査では南北約25ｍにわたって検出している。昨年度の第57次調査ではさらに南に７ｍ延びていることが確認されているが、それ以南では削平のため不明となっている。ただし、これと方向が一致するＳＢ1130掘立柱建物跡が南約20ｍに位置していることから、さらに南に延長される可能性がある。また、これまでの鵜ノ木地区の調査結果では、第30次調査でＳＡ414、500としたＳＡ1142と方向の一致する柱痕跡のある布掘り溝を本次調査地の西側で確認している。この布掘り溝は北で直角に東に曲がり、ＳＡ414と連続することが考えられる。布掘り溝の区画する範囲は狭いＳＡ414で東西約57ｍ、広いＳＡ500で東西約69ｍとなり、12ｍの間隔を生じている。

この東西約57～69ｍの区画のほぼ中央にはＳＢ487、488とした重複する２間×３間に四面廂の堂風の掘立柱建物跡が位置している。建物跡は鵜ノ木地区建物群Ｄ類に分類され、北で西に約15°前後振れる特徴をもち、ＳＡ414の方位とほぼ一致する。このことから区画施設はこの建物跡に付随するもので、建物方位の一致する東南のＳＢ1130をも内に取り囲むものと考えられる。区画内の中心的な堂風の建物跡については、もう少し検討が必要であるが、Ⅲ期の年代が９世紀中葉から後半の年代が考えられることから、天長７年(840)の大地震で倒壊したと記録されている「四天王寺、四王堂舎」の再建に関連する建物跡の可能性がでてきている。なお、以前からも鵜ノ木地区からは「寺」「王寺」の墨書の出土数が多かったが、今次の調査でも５点ほど出土している。

２）　第59次調査の検出遺構について

政庁の西側、焼山地区に調査区を設定した本次調査では、狭い範囲であったものの掘立柱建物跡がほぼ全体調査区内に入る状態で検出された。

調査対象地の周辺は昭和30年代の国営調査結果では倉庫跡とされた掘立柱建物跡や竪穴住居跡などを検出している。

掘立柱建物跡は東西２間・南北５間、東西３間・南北７間の倉庫跡とした南北棟と、東西５間・

第97図　鵜ノ木地区検出遺構略図

南北３間(後の調査で２間に訂正)の櫓跡とした東西棟の３棟である。

その後昭和52年、櫓跡とした地区の再調査が第21次調査として実施され、ここでも竪穴住居跡と東西２間・南北６間の南北棟のＳＢ314掘立柱建物跡を検出している。

本次調査でも重複する状態で３棟の南北棟の掘立柱建物跡を検出しており、３棟の建物跡を新しい順に概観してみると以下のようになる。

ＳＢ1207：梁間２間(柱間隔3.3ｍ)、桁行６間以上(柱間隔3.3ｍ)、建物方位Ｎ３°Ｅ、３間ごとに間仕切りが入り、この間仕切り位置から推定すると９間かそれ以上の長大な建物となる。北梁間の柱３本を除き抜き取りがあり、抜き取り埋土には炭化物が多量に入る。

ＳＢ1208：梁間２間(柱間隔3.0ｍ)、桁行５間(柱間隔3.0ｍ)、建物方位Ｎ３°Ｅ、柱掘り方には抜き取りがあり、炭化物が多量に入る。

ＳＢ1209：梁間３間(柱間隔2.4ｍ)、桁行７間以上(柱間隔2.4ｍ)、総柱建物であるため７間の可能性がある。建物方位はほぼ真北、北梁間の柱４本を除き抜き取りがある。

この結果、焼山地区では現在のところ東西棟が１棟、南北棟が６棟存在することが確認された。このうち、側柱のみの建物跡が５棟、総柱建物が２棟である。南北棟建物は一辺１～1.5ｍの大きな柱掘り方を伴うもので、南北５間が２棟、６間が１棟、７間が１棟、７間以上と考えられるものが２棟である。建物方位はほぼ真北のものと、わずかに振れるものがあり、この７棟が同時に存在したものではなく、本次の調査により最低３時期の変遷があることが確認された。

これら建物跡の性格、配置、規模の数値については、国営調査地区の再調査も含め、今後の調査を待たなければならないが、現在南北に長大な建物が集中するこの地区は国営調査結果の倉庫跡という結論も含め、西方の実務官衙ブロックとして位置づけられるものと考えられる。年代的には今次調査の最も古いＳＢ1209の掘り方埋土から瓦片が出土しており、国営調査でも須恵器、瓦片の出土が報告されていることから、これら建物跡に限れば８世紀前半の創建に伴うものは無いものと考えられる。しかし、第21次調査のＳＢ314建物跡の柱掘り方埋土からは、遺物の出土がないことから、この建物に関しては創建時の可能性がある。いずれにしても今後の調査で西方官衙ブロックの成立時期と変遷について明確にしてゆかねばならない。

註1:平成元年、同二年秋田城跡発掘調査概報　　秋田市教育委員会 1990、1991

註2:「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」横田賢治郎・森田勉『九州歴史資料館研究論集』1978

註3:「日本海域の土器・陶器」・中世編　吉岡康暢　六興出版 1989

註4:　　同　上

V　第39次発掘調査出土木製遺物

ここで述べる木製遺物は、昭和59年４月から７月まで実施した第39次調査で出土したもので、整理、保存処理日程の都合から未報告となっていたものである。

第39次調査地は、東外郭の中央部外側で沼沢跡の北岸部が検出されている。この沼沢跡は北方約100ｍに位置する空素沼に達する沢頭にあたり、これがある時期に飛砂によって塞き止められ沼沢化したと推定される。埋土の下層からは縄文中期末葉の遺物が出土している。

沼沢跡を覆う整地は２枚認められた。整地Ｉは中世陶器を含み、その年代は珠洲系中世陶器の編年によれば、法住寺３号窯II群土器と類似することから13世紀頃を中心とする年代が考えられる。スクモ層の上面を覆う整地IIは、須恵器、土師器、赤褐色土器等が出土し、赤褐色土器の古いタイプが含まれないことから９世紀後半以降と考えられる。

木製遺物の年代は、共伴した多くの土器等から整地IIときわめて近い９世紀後半頃中心と考えられる。

なお、沼沢跡埋土の出土遺物の詳細については『秋田城跡発掘調査概報』昭和54年度、同59年度報告書を参照されたい。

○挽物　（第98・99図・図版54・55）

１～７は浅く器肉の薄い無台の皿で、いずれもロクロ爪痕跡は認められない。８～12は台付の皿であるが、内刳りを行わない擬高台である。９は体部が立ち上がるが、８、10～12は立ち上がりのほとんどない扁平な皿である。８、11はロクロ爪痕跡が認められる。13～15は擬高台の椀である。14はロクロ爪痕跡が認められる。

○曲物蓋　（第99図・図版55）

16は蓋板の周縁に低い段を巡らして、側板を桜樺皮によって４ヶ所で結合した蓋である。

○曲物底板　（第99図）

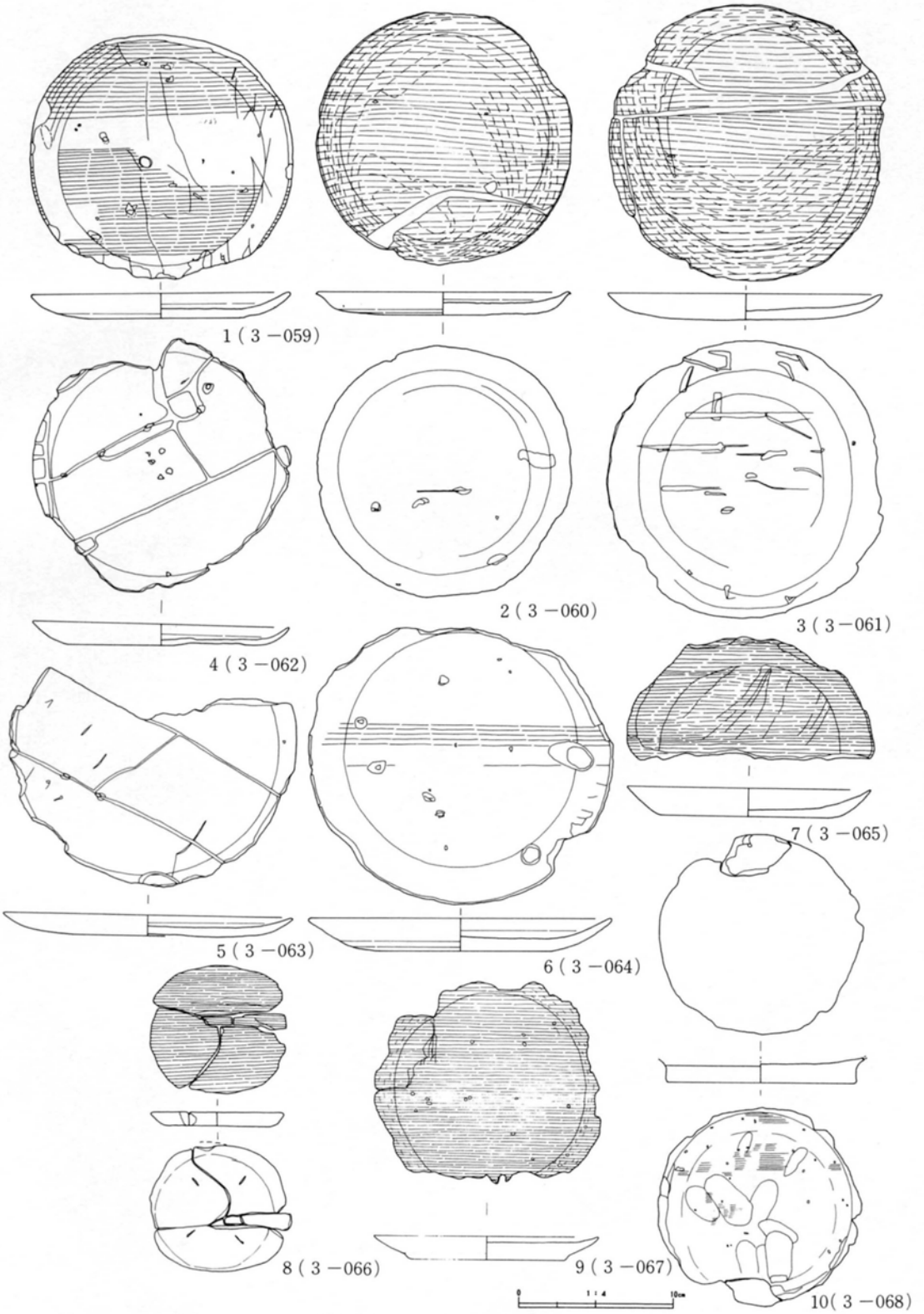
17は側面に５ヶ所の木釘痕跡の認められる底板である。18は側板である。

○漆塗製品　（第100図・図版55）

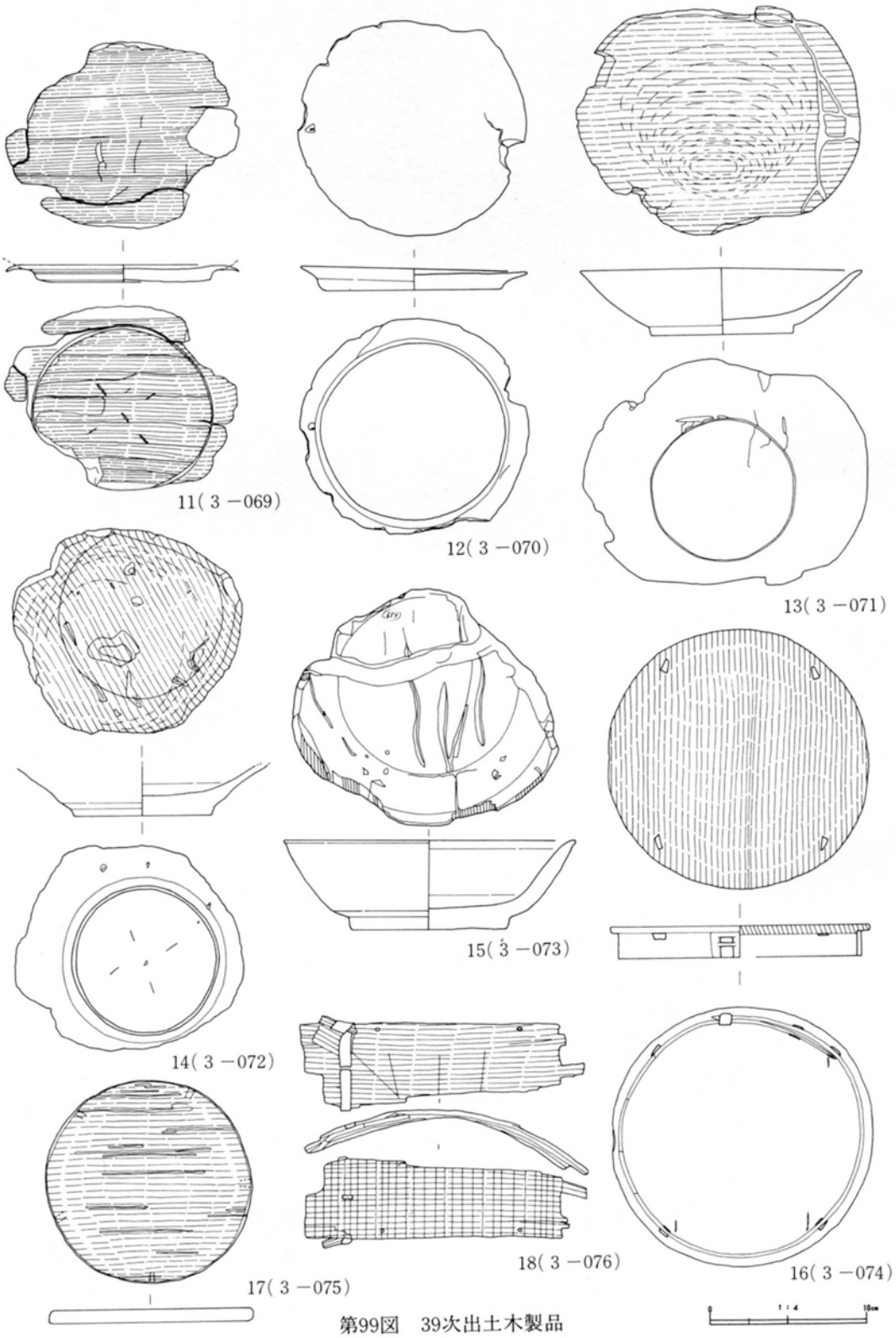
19～21は浅い黒漆塗りの皿である。20、21は木質部が腐食し漆膜のみが遺存している。

○祭祀遺物　（第101～104図・図版56・57）

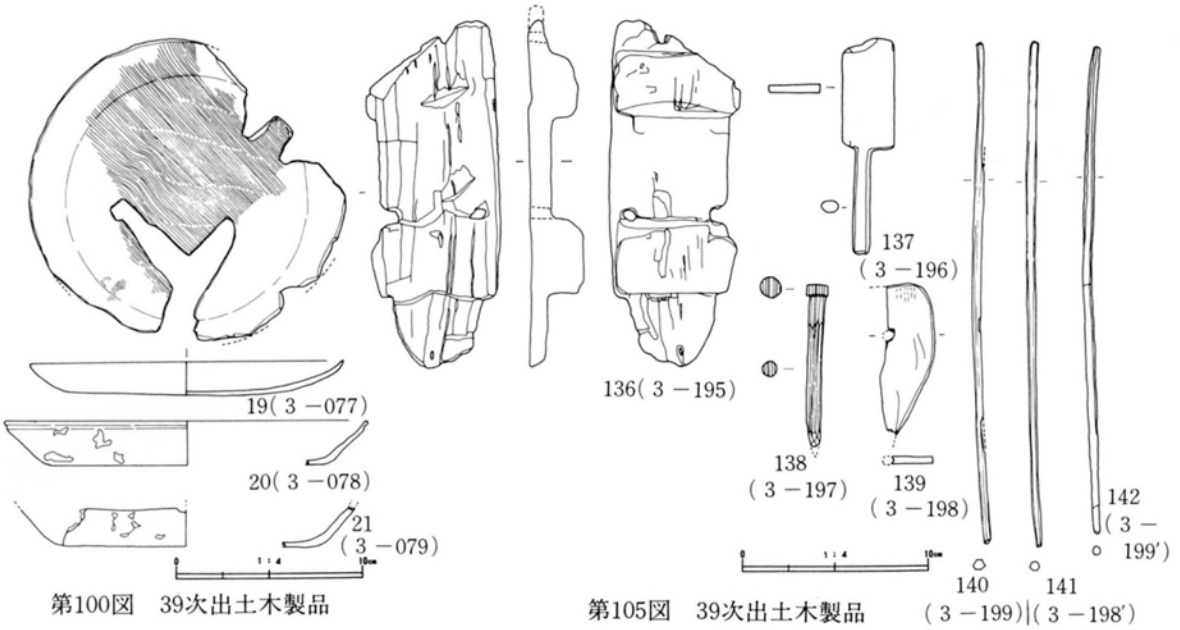
22～29は人形である。22は36cm以上の大型で頭上に冠状のかぶり物を表現する切り込みがある。26、29は墨書で顔、29は頭上にかぶり物を描いている。30は馬形であるが下腹部に串を差し込む穴は認められない。31は木札で上部中央に小孔を穿っているが墨書等は認められない。勧請札のようなものであろうか。32、33は矢羽状製品で、人形等の周辺で検出されている。39、40も矢羽状製品



第98図　39次出土木製品



第99図　39次出土木製品



第100図　39次出土木製品　　第105図　39次出土木製品

と考えられる。41～135は斎串類である。41～49は上部と中間部の２ヶ所を細くし、更に両側面に５回以上の細かい切り込みを施し、ささくれ状を作りだしている。また上端部は板と平行方向か直行方向に割りを入れている。なお、先端部は欠損しているが尖っているものと考えられる。50～114は上端部を圭頭、下端部を尖らせたもので、その大部分は上端部に割りを入れている。形態としては棒状と板状が認められ、長さは最大が71cm以上、最小が10cmであるが、製作に当っては長さに規格性が認められる。115～135は上端部が平坦か丸味を持ち大部分に割りが入る。棒状と板状のものが認められる。

○下駄　（第105図・図版57）

136は細身の連歯下駄である。鼻緒前壺が欠損している。

○題籤　（第105図・図版57）

137は題籤である。

○木針状木製品　（第105図・図版57）

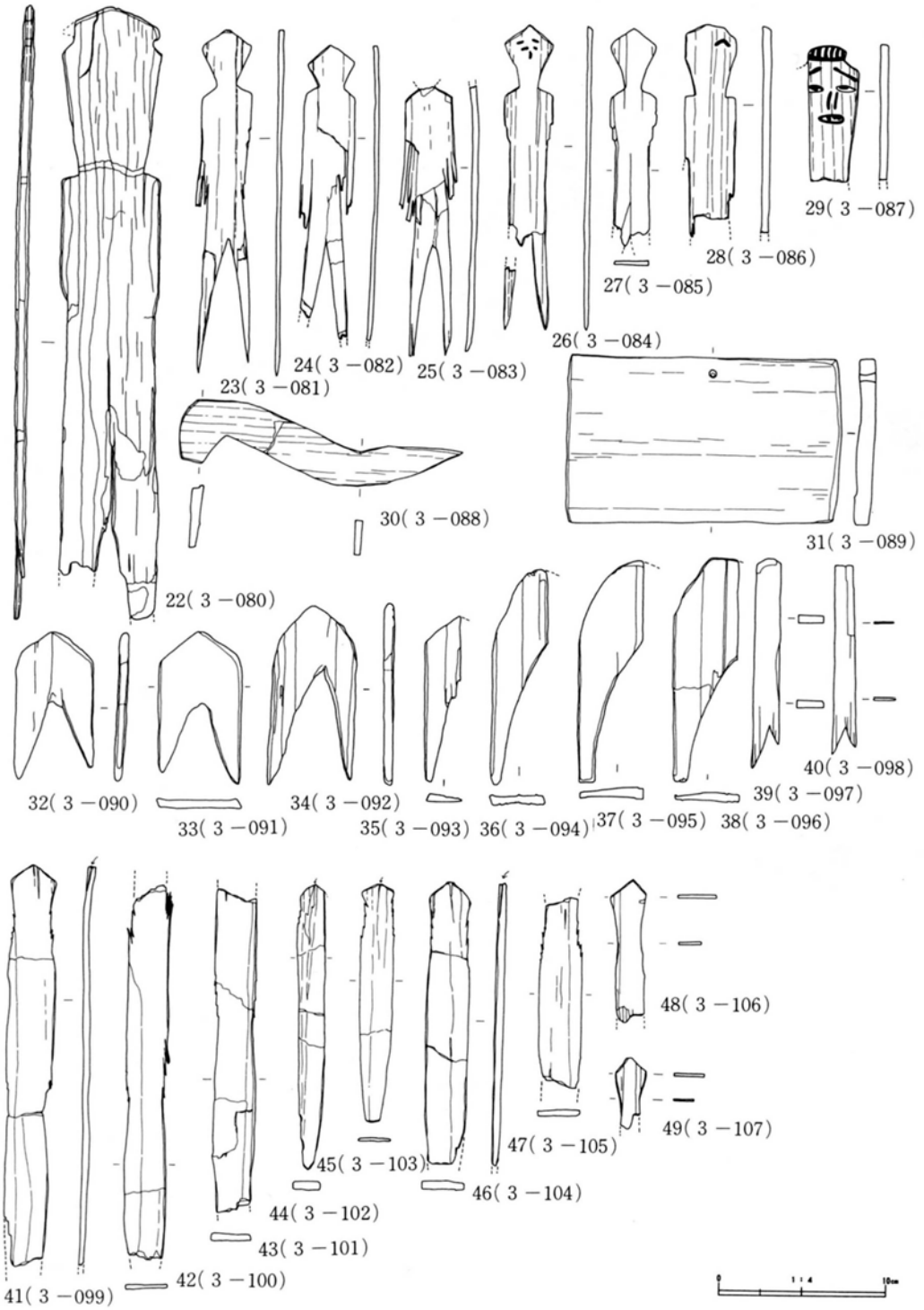
138は上部に凸部を作りだした断面が円形の棒状を呈する木針状のものである。

○不明木製品　（第105図・図版57）

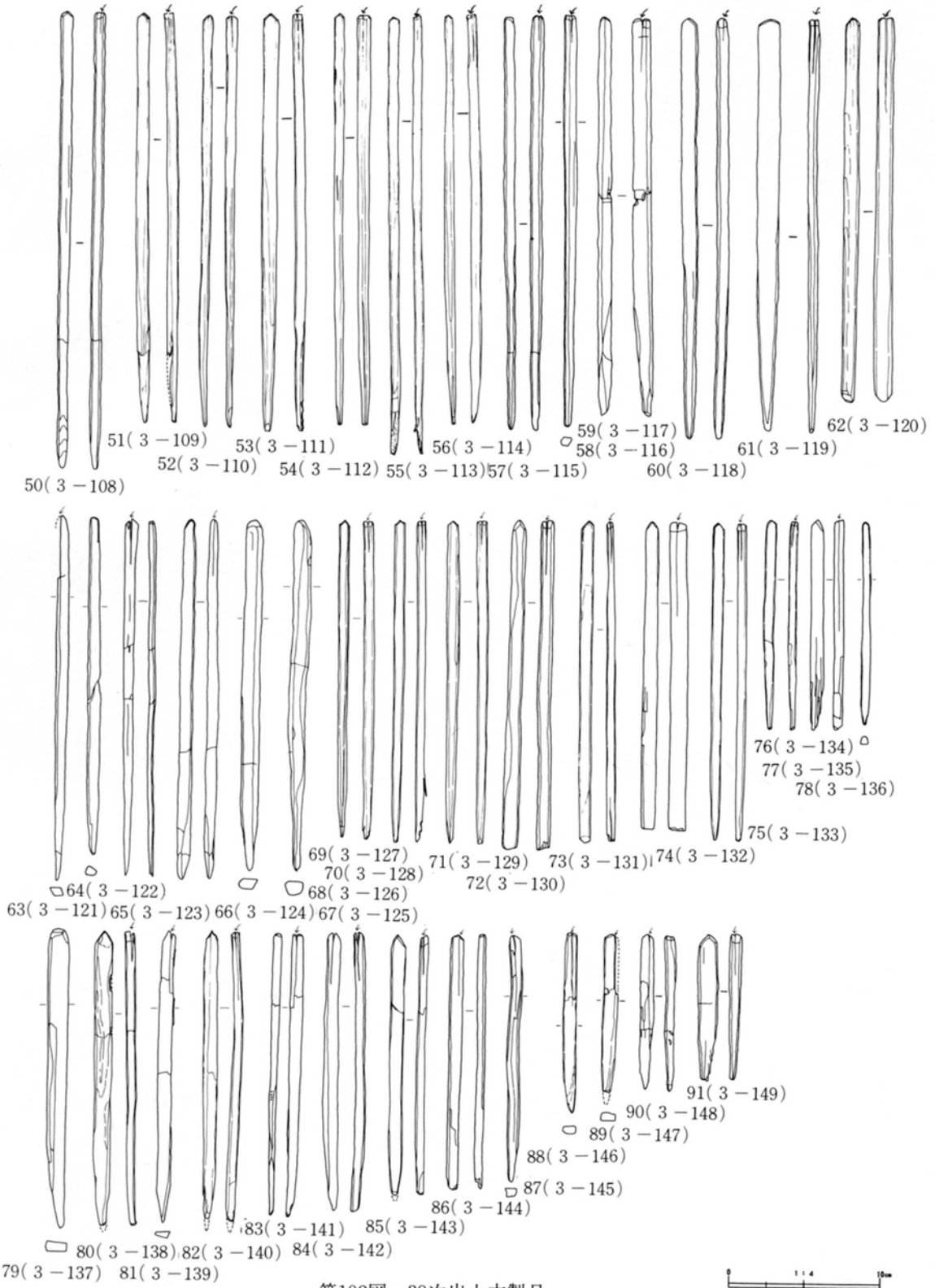
139は中央部に小孔を穿つた用途不明の箆状を呈する木製品である。

○箸　（第105図・図版57）

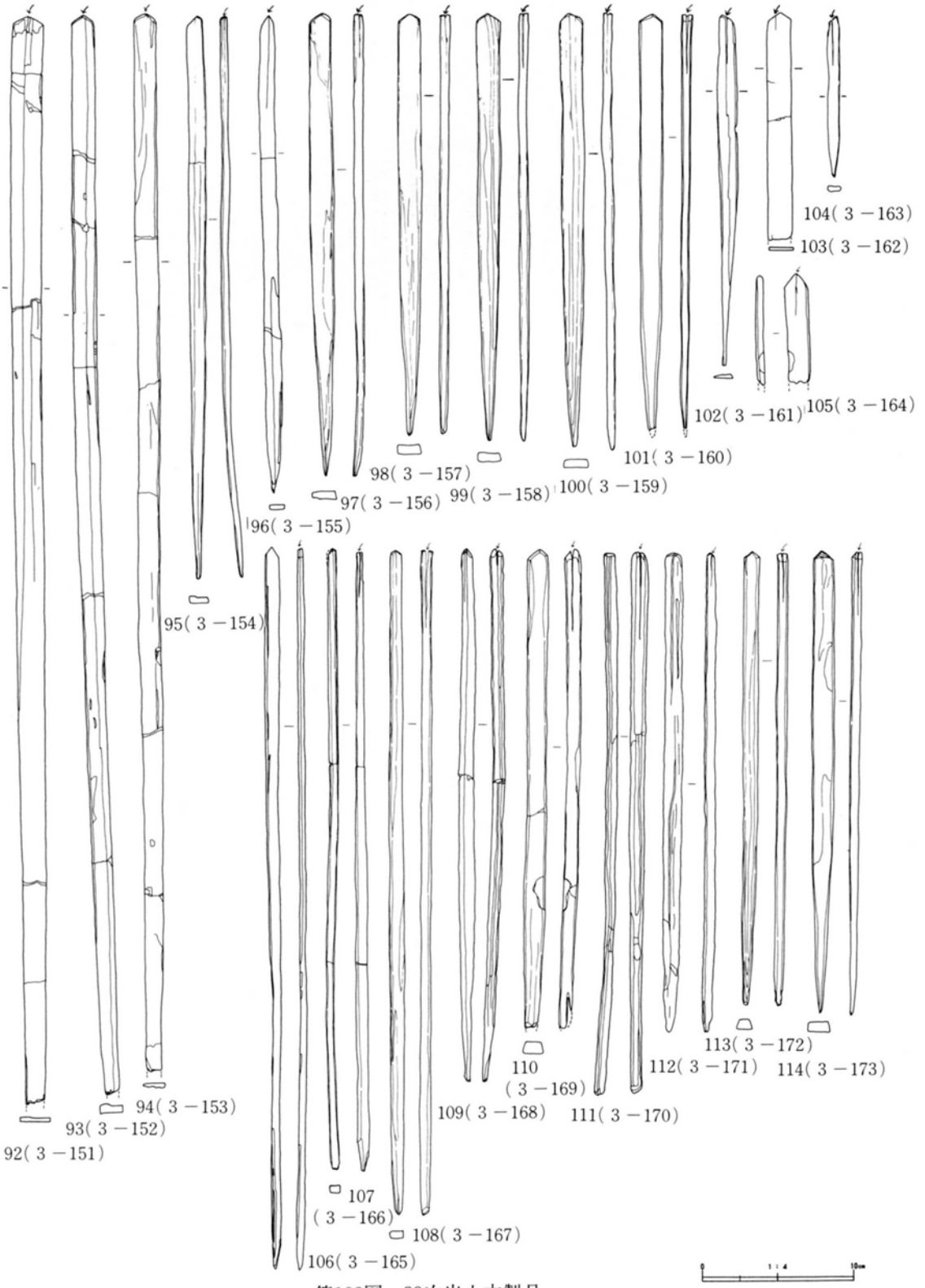
140～142は両端を細く削りだした箸である。



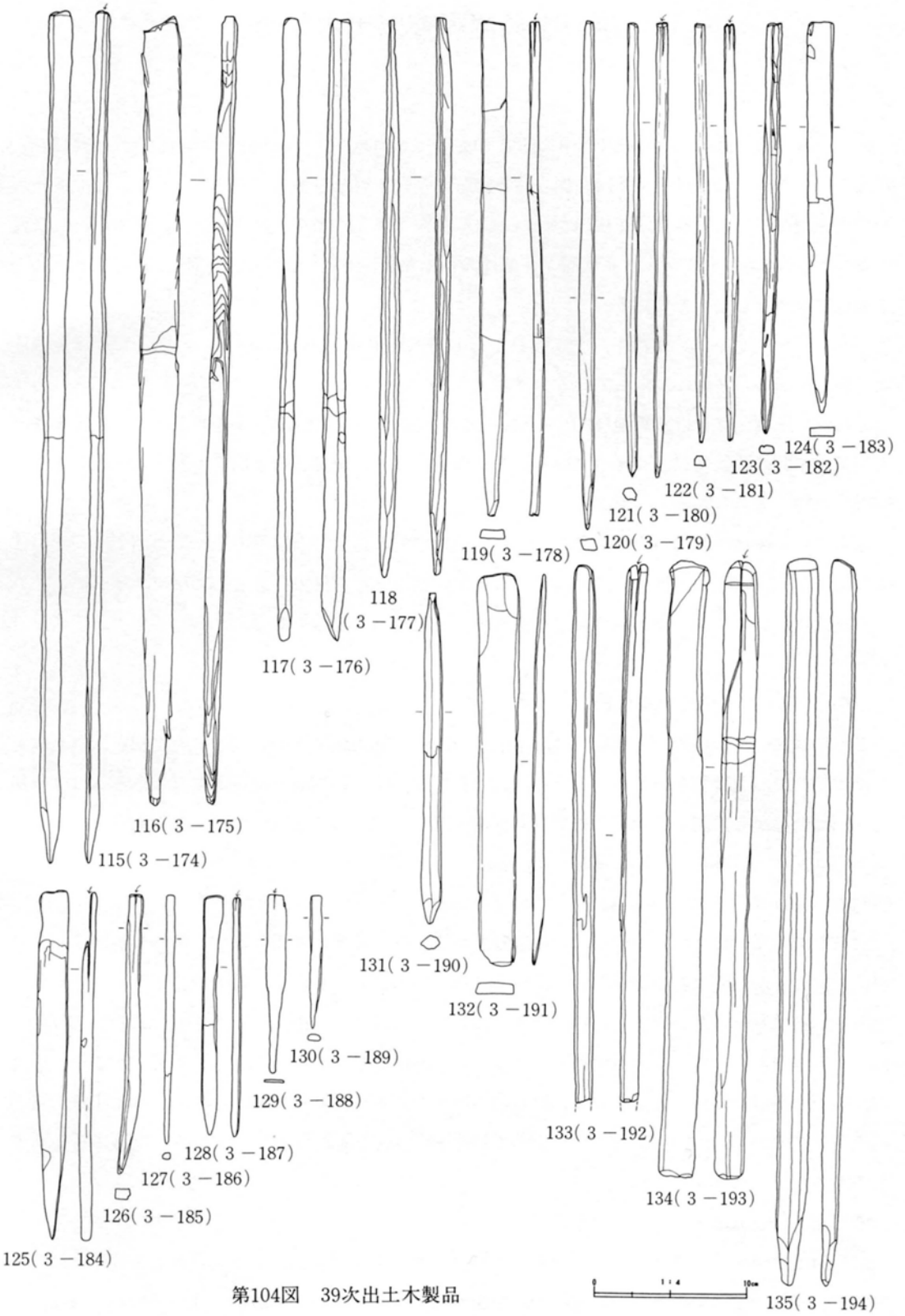
第101図　39次出土木製品



第102図　39次出土木製品



第103図　39次出土木製品



第104図　39次出土木製品

Ⅵ　第54次発掘調査出土木製遺物

第54次調査は、秋田城跡の東外郭中央部で平成元・２年度の２ケ年継続して実施した。その結果、外郭東門とそれに取り付く築地跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡等多数の遺構とともに、築地構築時の粘土採掘跡である土取り穴が検出された。土取り穴は南北約20ｍ、東西約15ｍ、深さ約7.5ｍ(現地表面から)の不整形を呈し、基盤層が保水性のある粘質土(寺内層)のため沼地化したことから、木製遺物が遺存したものである。

土取り穴埋土からは、生活用品や祭祀具としての木製遺物と300点を越える木簡、30点以上の漆紙文書、土器等が多量に出土している。

これらの木製品は、創建築地(733)の土取り穴最下層や「延暦十年」.「延暦十四年」銘の木簡、天平宝字年間の漆紙文書と共伴していることから上限は八世紀第２四半期、下限は八世紀第４四半期頃の遺物と考えられる。

このように多量の遺物が出土したことから、整理期間の都合で土器等の遺物については、その都度概報で述べ、木簡や漆紙文書については『秋田城出土文字資料集Ⅱ』として平成３年度に、そして木製遺物については、今年度の概報で報告することにしたものである。

○挽物　(第106・107図・図版58)

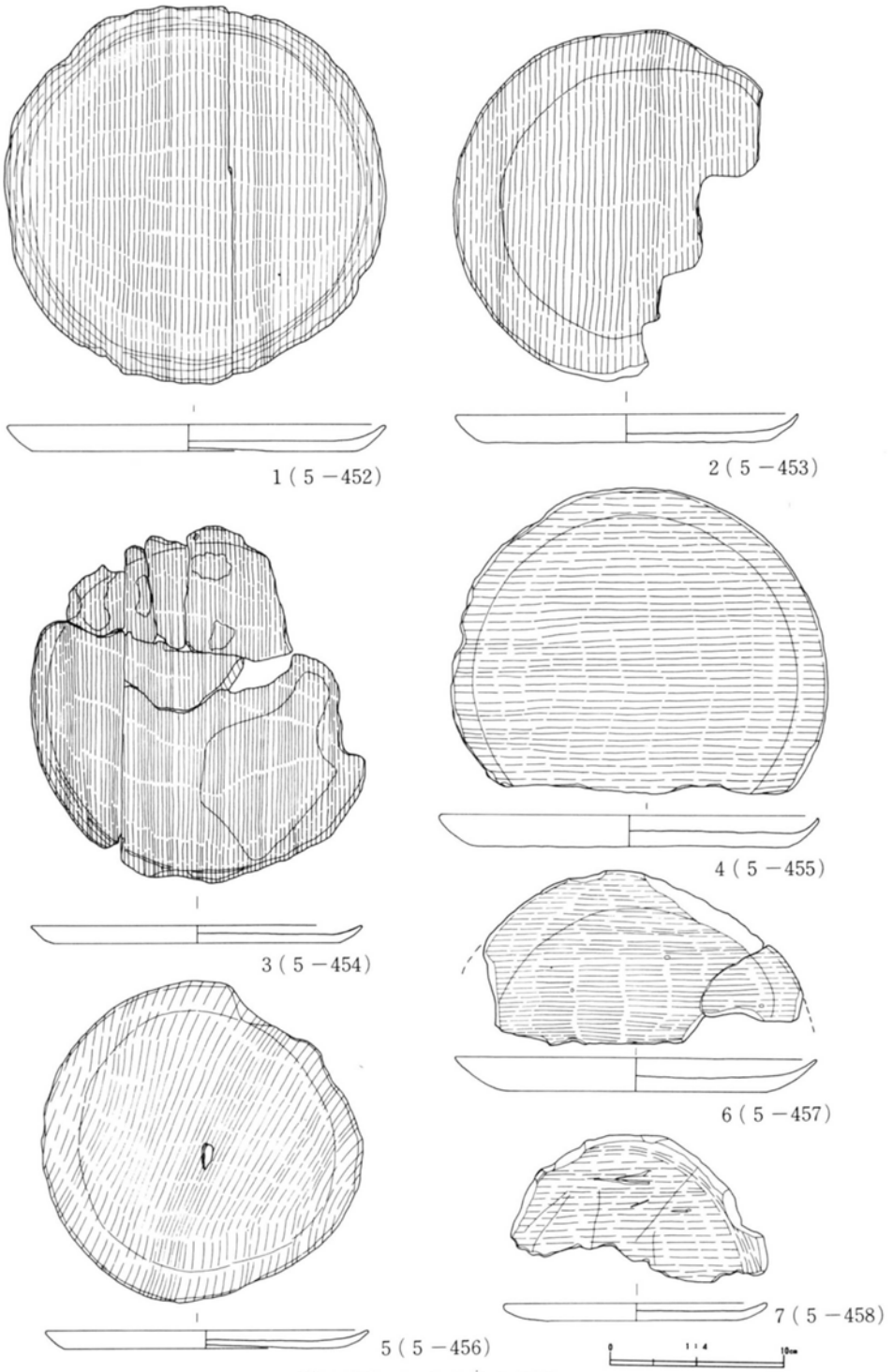
１～10は浅い無台の皿で、木取りは縦木取りである。外面底部は周縁までロクロ挽き、取りはずし後は削りで器面調整を施している。11、12は台付きの皿で、木取りは縦木取りである。11は擬高台、12は台部から内側に２cm程度までロクロ挽きをし、取りはずし後は削りで器面調整を施しているが、ロクロ爪痕跡がわずかに遺存している。

○刳物　(第107・108図・図版59)

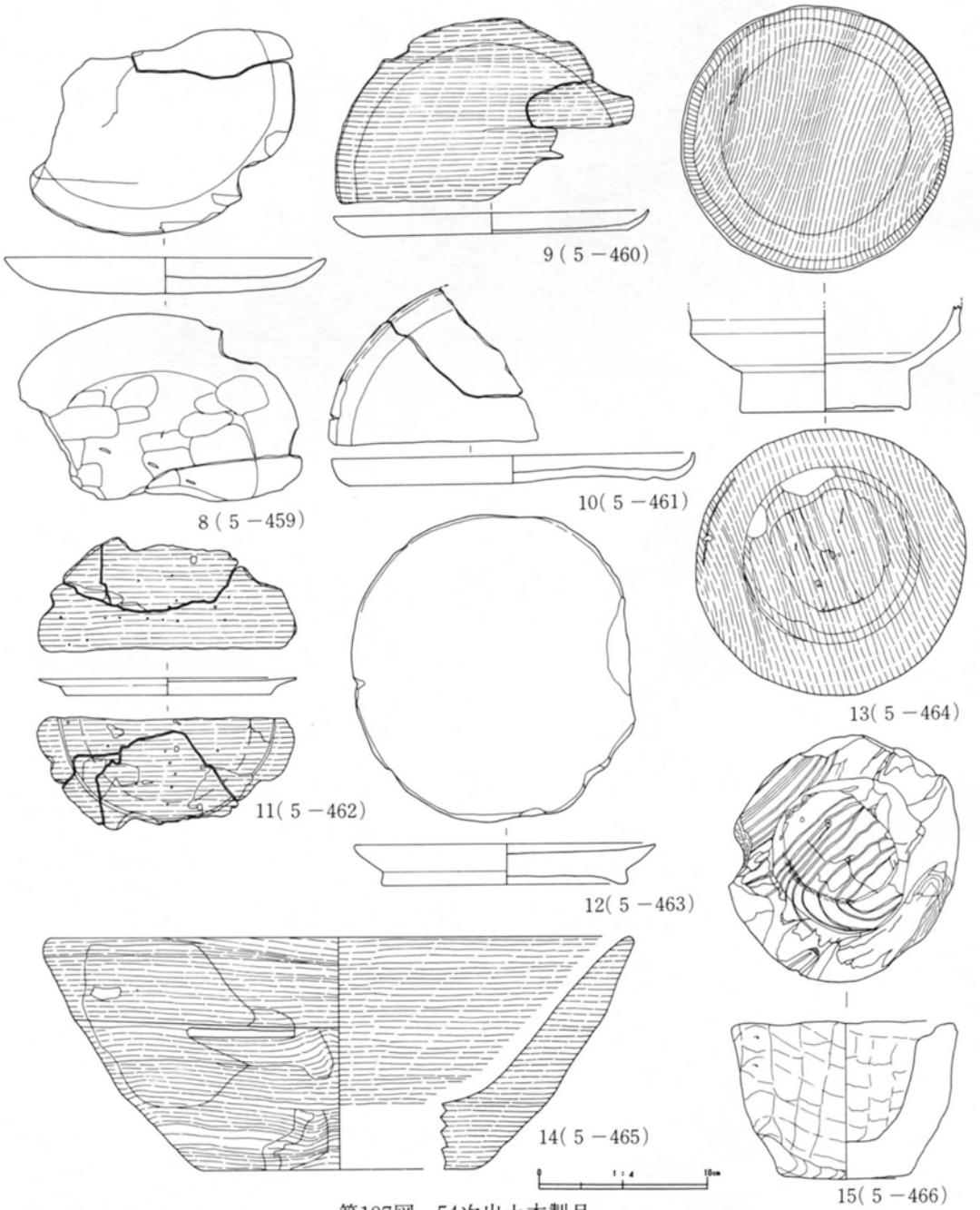
14は器肉の厚い鉢状で、木取りは縦木取りである。内面は比較的滑らかで、はつり痕跡はあまり明確ではないが内面は約５面くらいに面取りされていると考えられる。約５分の１ほどの遺存状況である。15は厚ぼったい椀状の刳物である。内外面ともはつり・削り痕跡が明瞭である。16は桝である。内外面ともはつり痕跡が明瞭で厚ぼったい。外面は稜線が隅丸を呈し、安定性が悪い。また内面の一辺が緩く傾斜しているのは、計量物の廃出を容易にするためであろうか。水による計量の結果、約700ccの容量である。なお本遺物は土取り穴の最下層から出土しており、創建に近い所産と考えられる。

○容器蓋　(第108図・図版59)

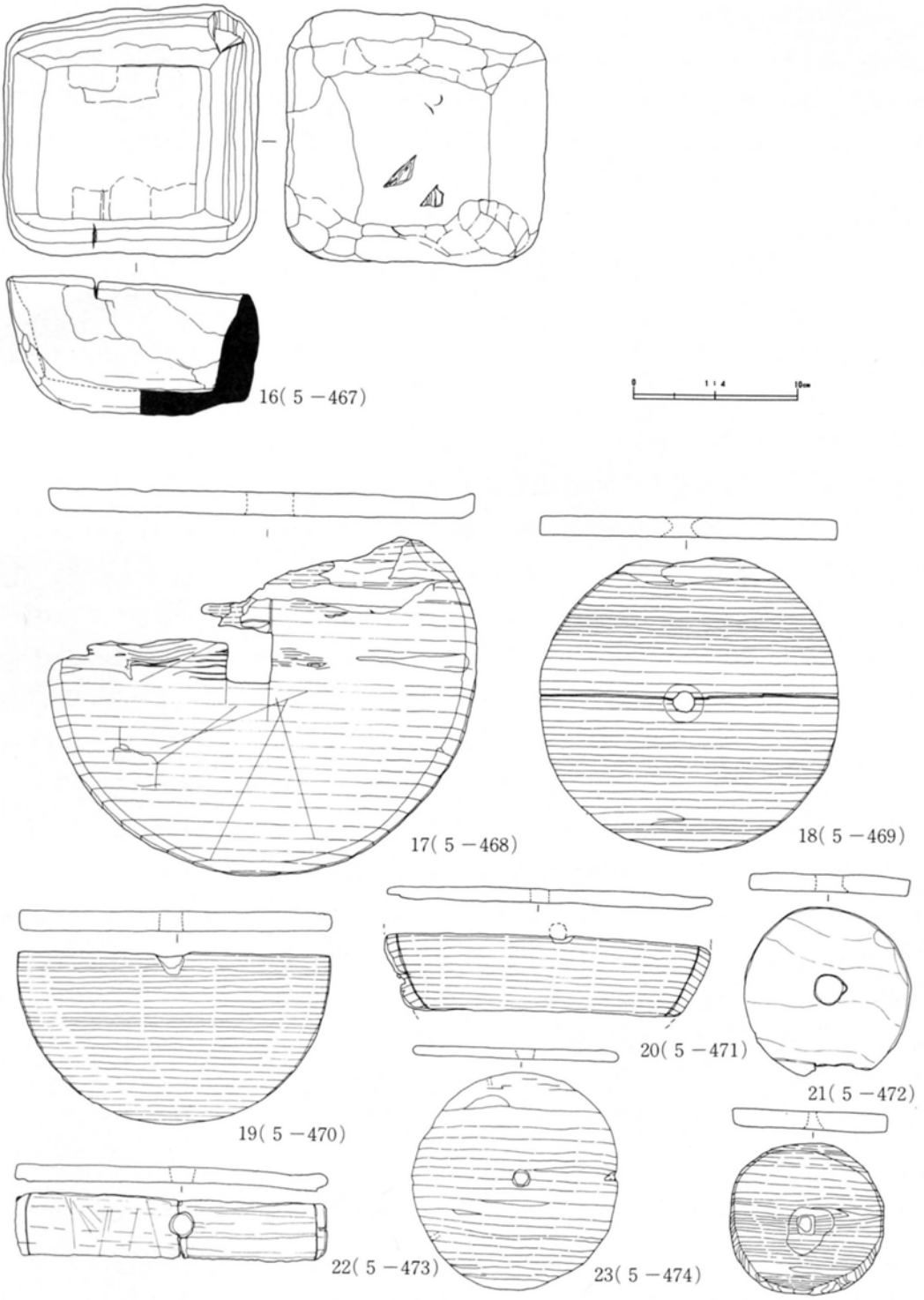
17～24は中央に穴を穿った容器の蓋と考えられるが、蒸器との関係も考えられる。17は方形の穴である。20、22は曲物の蓋、23は曲物の底板を転用したものである。21、24は小型の蓋である。



第106図　54次出土木製品



第107図　54次出土木製品



第108図　54次出土木製品

○曲物　（第109・110図・図版59・60）

30、33、34を除き底板は欠損。大きさから4種類に大別できる。Aは12～13cmで31、33、Bは14～16cmで28～30、34、Cは17cmで27、Dは20～22cmで25、26である。26、30は下部に一重の箍をまわす。35、36は土圧のために伸びきったもので側板に柄の小孔が穿たれていることから柄杓と考えられる。37は底板に木釘が認められることから曲物柄杓、38はその柄と考えられるが同一個体か否かは不明である。

○曲物底板　（第110・111図・図版61）

39が10ケ所、42が4ケ所、43が2ケ所の木釘が認められる。

○曲物蓋　（第111・112図・図版61）

46、48～51は側板が欠損している。蓋板はすべて周縁に低い段をめぐらし、側板は桜樺皮によって4ケ所で結合されている。

○方形曲物　（第112図・図版61）

52は隅丸方形あるいは楕円形の曲物と考えられる。53は1辺に切り込みをいれて作り出しているが左右異形である。樺皮および痕跡が直線的に4ケ所で認められる。

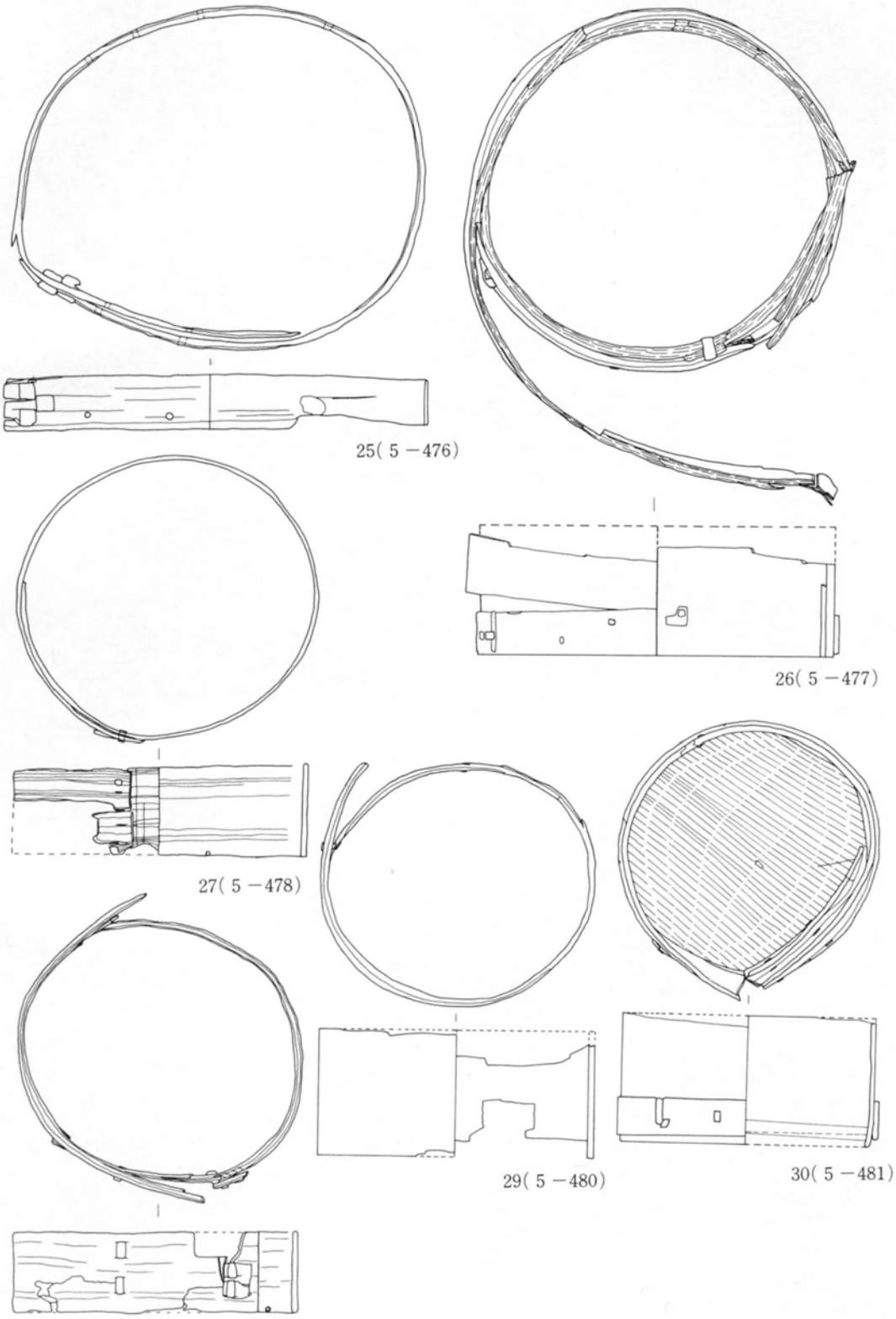
○漆塗り製品及び漆工具　（第113図・図版61・62）

54は上げ底風の台がついた大皿であるが、埋没時の土圧で全体がいびつである。外面は台端部までロクロ挽きし、取りはずし後は底部を粗く削りだしている。55は無台の大皿である。外面底部はロクロ爪付近まで挽きだし、取りはずし後は削り調整を施している。54、55ともに内外面黒漆塗り仕上げであるが、見込みに無数の刃物痕跡が認められる。56は無台の大皿で木取りは縦木取りである。内面のみ黒漆塗りであるが剝落が著しい。見込みに無数の刃物痕跡が認められる。

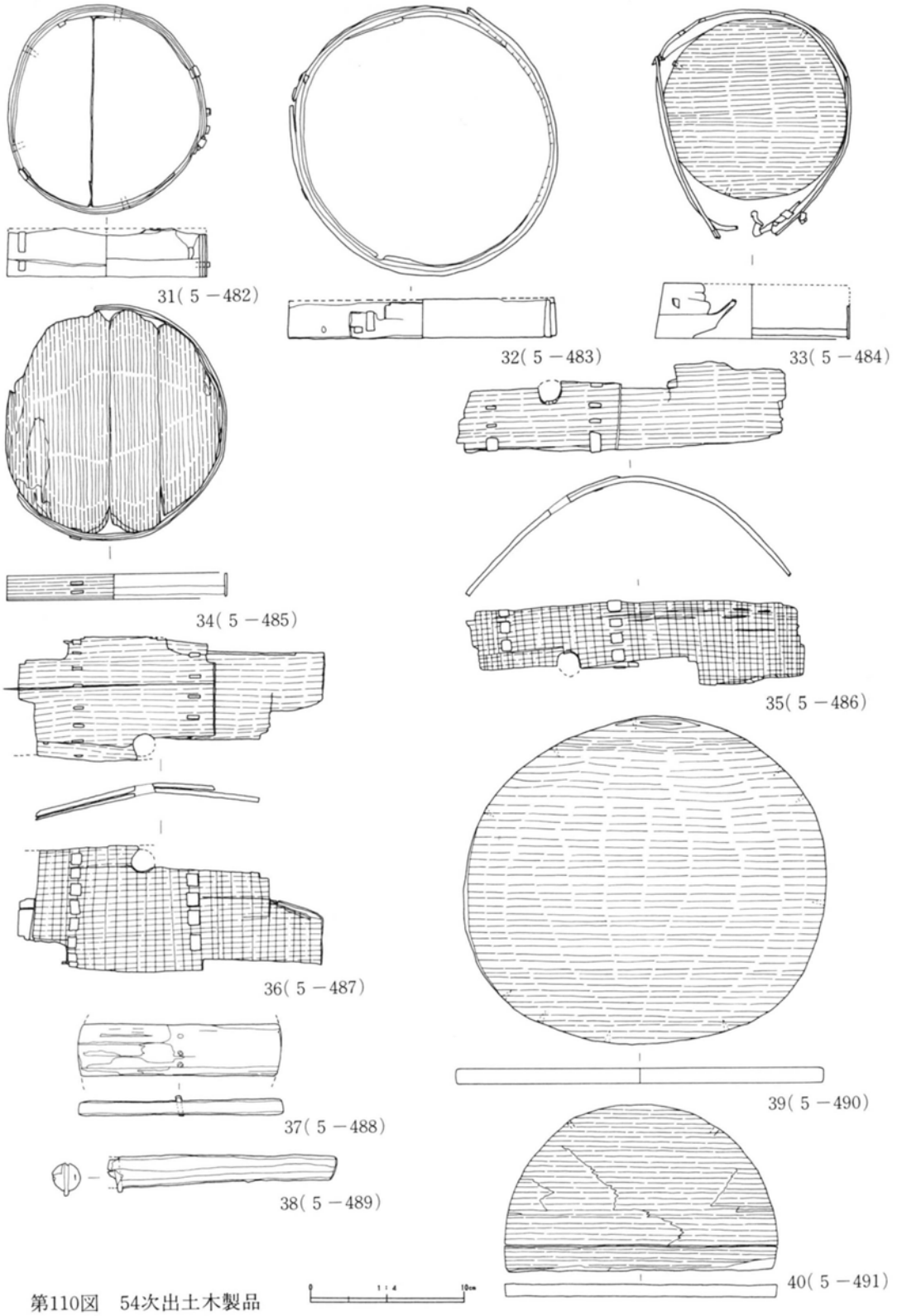
57は内面のみに黒漆塗りを施した椀である。底部に「利□□」の刻字が認められる。58は薄手の小皿で、内外面とも光沢のある黒漆塗りである。59は擬高台の椀である。内外面ともに黒漆塗りであるが大部分が剝落している。60、61は曲物底板である。60、61は内面のみ黒漆塗りで、60は無数の刃物痕跡が認められ、中央部の漆の剝落が著しい。62は漆塗り用の刷毛である。漆で固まった毛は遺存状態が良好である。箆状に削りだした先端を割って毛を挟み込んでいる。63は藁状の植物繊維を1cm～1.5cm程の束にしたものをやや細目の同じような植物繊維で編んだ製品に漆が染み込んだ(染み込ませた)ものであるが、小片のため形態用途は不明である。64は半分にちぎれた漆のしぼり布である。麻布と考えられるが未鑑定である。

○下駄　（第114・115図・図版62・63）

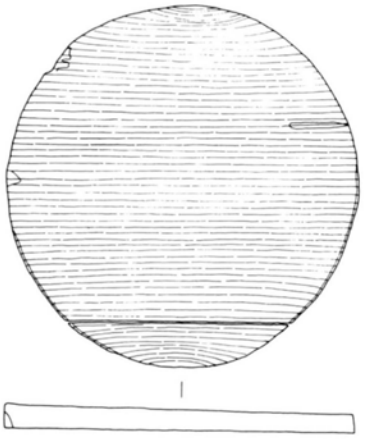
66は明確な連歯下駄であるが、67～69については、元来あった歯が欠けたものを継続使用したものと考えられ、67は後部に、68は前部に歯の痕跡が認められる。69は前・後端が著しく磨り減っている。65は裏の鼻緒前壺と後壺の間をわずかに削りだしている。70、71は元来歯がない平板と考えられる。平面形は65、67は小判型、66、68、70は前、後端部が半円形、69、71は隅丸方形を呈する。



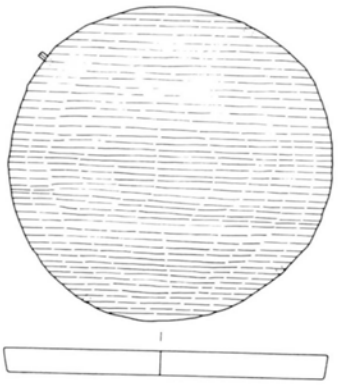
第109図　54次出土木製品



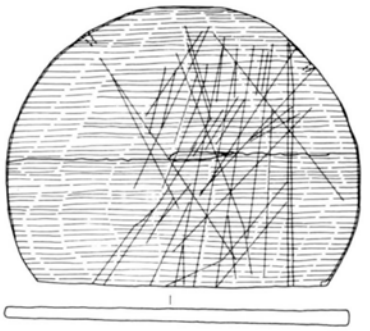
第110図　54次出土木製品



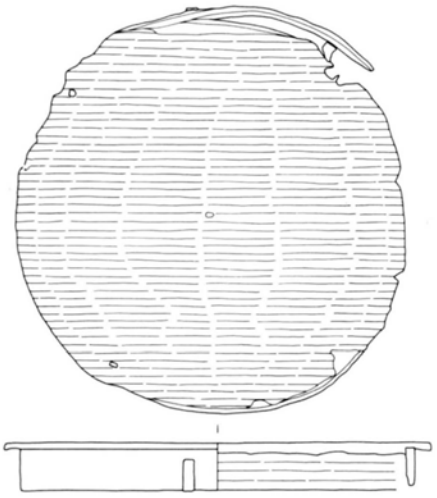
41(5 －492)

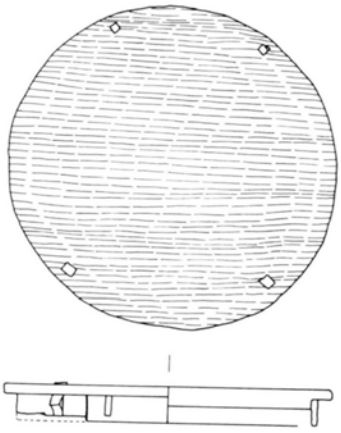


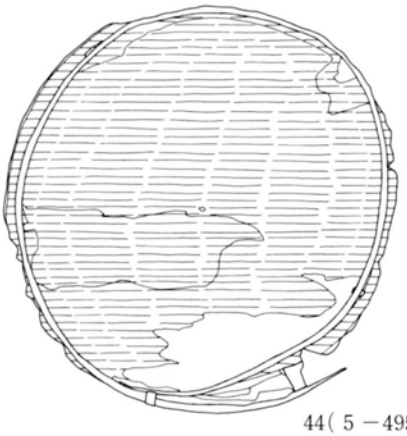
42(5 －493)



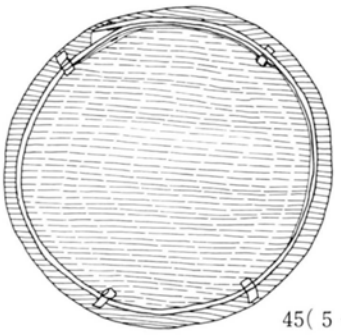
43(5 －494)



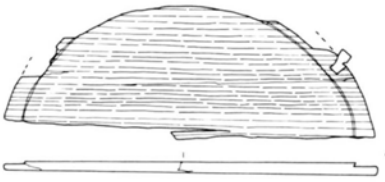




44(5 －495)

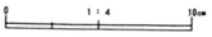


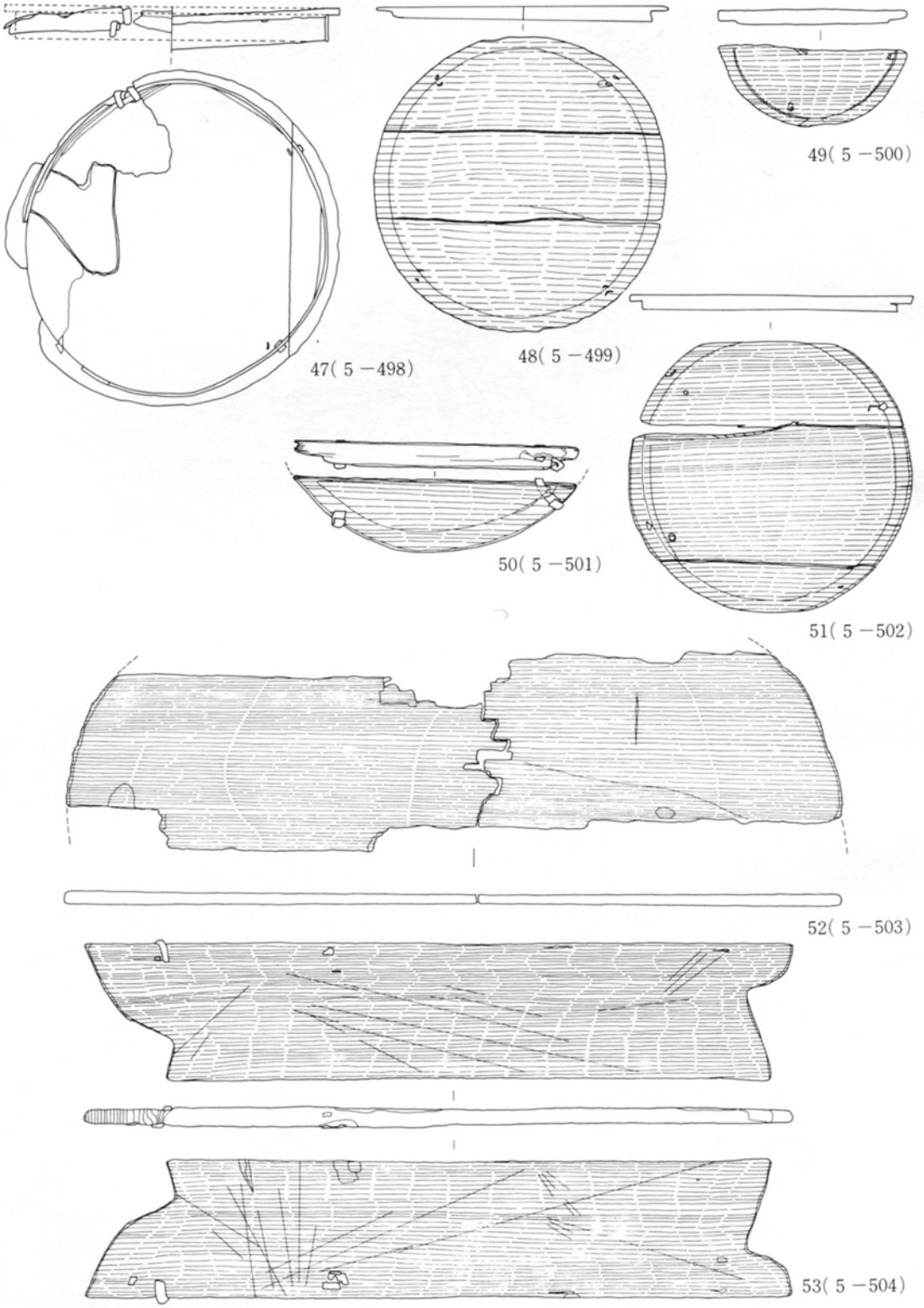
45(5 －496)



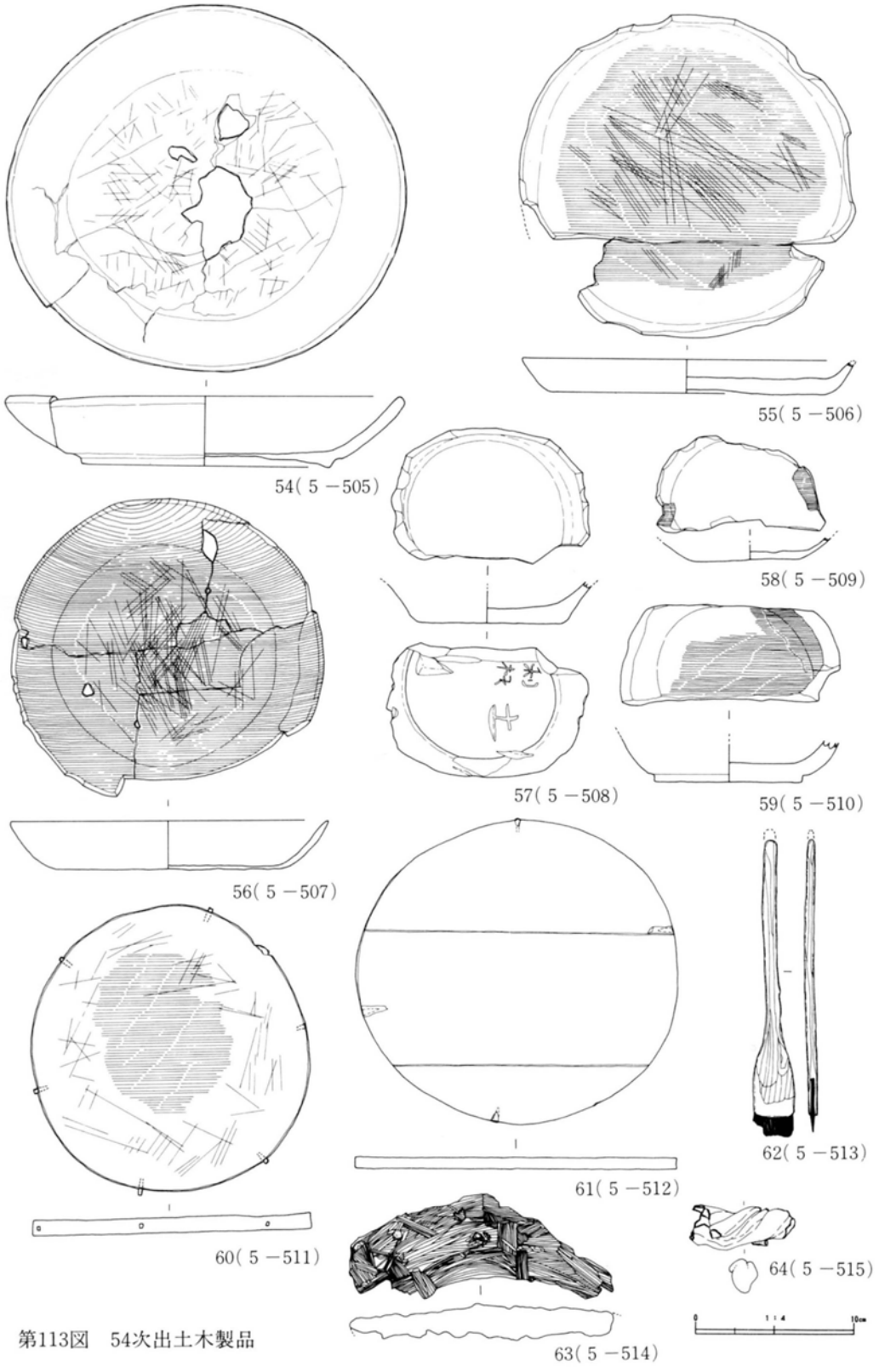
46(5 －497)

第111図　54次出土木製品

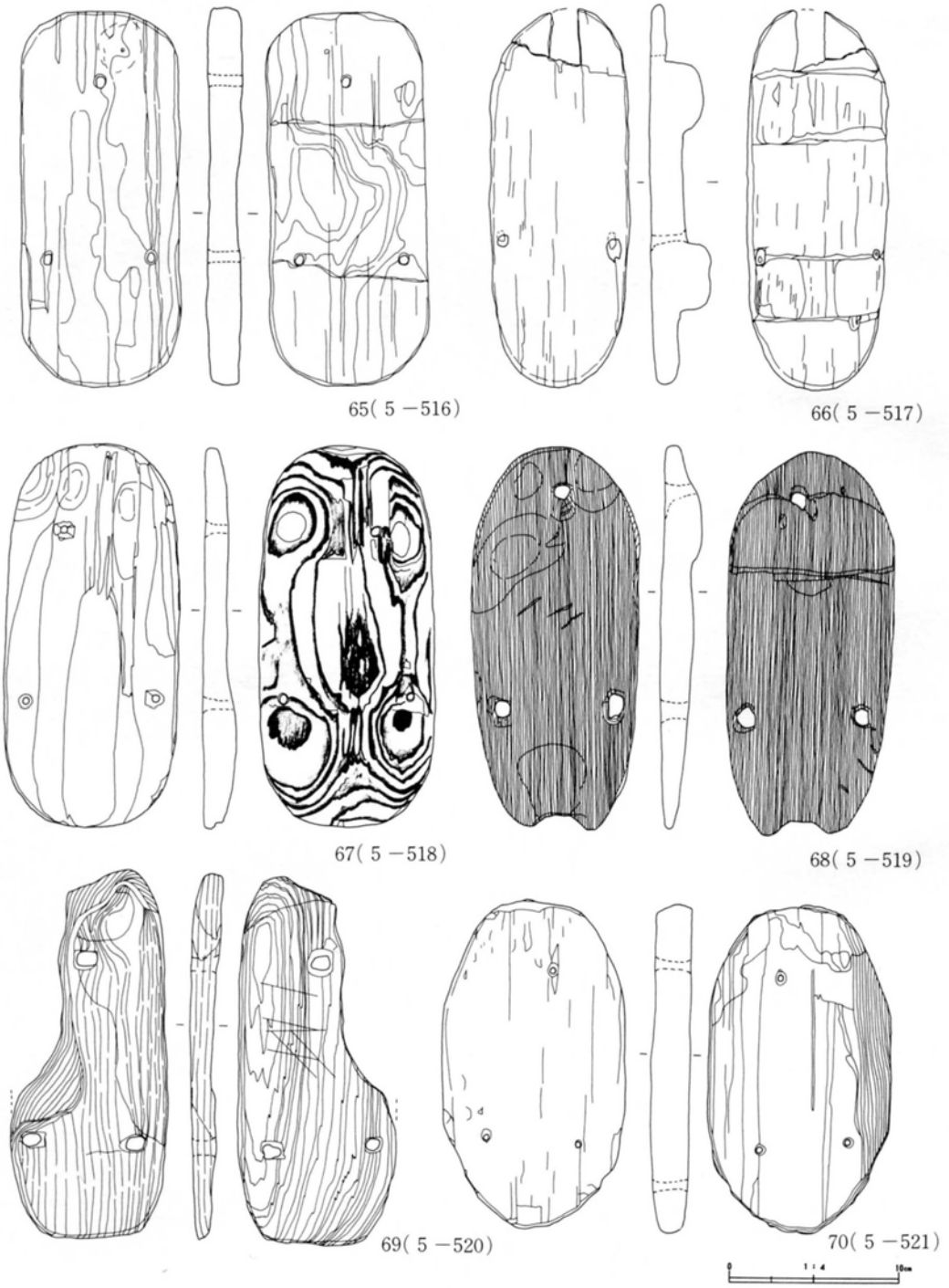




第112図　54次出土木製品



第113図　54次出土木製品



第114図　54次出土木製品

鼻緒前壺は中央より内側によるものが多く67、71は顕著である。69は焼けた痕跡が認められ、鼻緒壺の平面形はやや隅丸状を呈する。

○楔　（第115・図版63）

72は肉厚、73はやや薄手の楔である。

○杓子・篦　（第115図）

74は杓子、75、76は篦である。

○木針　（第115図・図版63）

77～81は中央部から少し寄った場所に楕円形の穴を穿った木針と考えられる。

○笏状木製品　（第115図・図版63）

82は上端が下端より少し幅広く、各辺を面取りし両面を滑らかに仕上げた薄板で、笏と考えられる。檜扇未製品とも考えられるが長さ、幅ともやや異なる。

○桶状木製品　（第115図）

83の板片は緩い弧を描き、両側面は中心部に向かって面取りされている。しかし外面には箍等の痕跡は認められない。

○刀子鞘　（第115図・図版63）

84～90は刀子鞘である。84は刀身部を刳り抜いた２枚の板を細い繊維によって４ケ所で巻いて接着している。鞘尻部は製作段階から内部が見えるような削りがなされているが、意識的な造作ではなく単なる削りすぎと考えられる。84～87は板の合せ目がわからない程精巧な作りである。

○檜扇　（第116図・図版64）

91～96は檜扇である。91は骨の先端部が広く、要部が狭くなった薄板６枚一組を木鋲で止めている。先端部での綴紐用の小孔は認められない。扇端部骨の中央よりやや上方に「鷹取」の墨書が認められる。92～94は要部に一個、先端に近い部分に二個の小穴を穿った檜扇で、先・下端部は半円形に面とりしている。95は扇端部の一枚と考えられる。

○定規状木製品　（第116図・図版64）

97～102は側面に切り込みを入れた木製品である。102は短部が７～８cm、長い部分が25cmに切り込みを入れている。両端が面取りされていることから完成品と考えられるが、これが完成品かあるいは、これを分断した97～98がそうであるのかは不明である。材質は堅く、広葉樹と考えられ木簡等墨書には適さない材質と思われる。

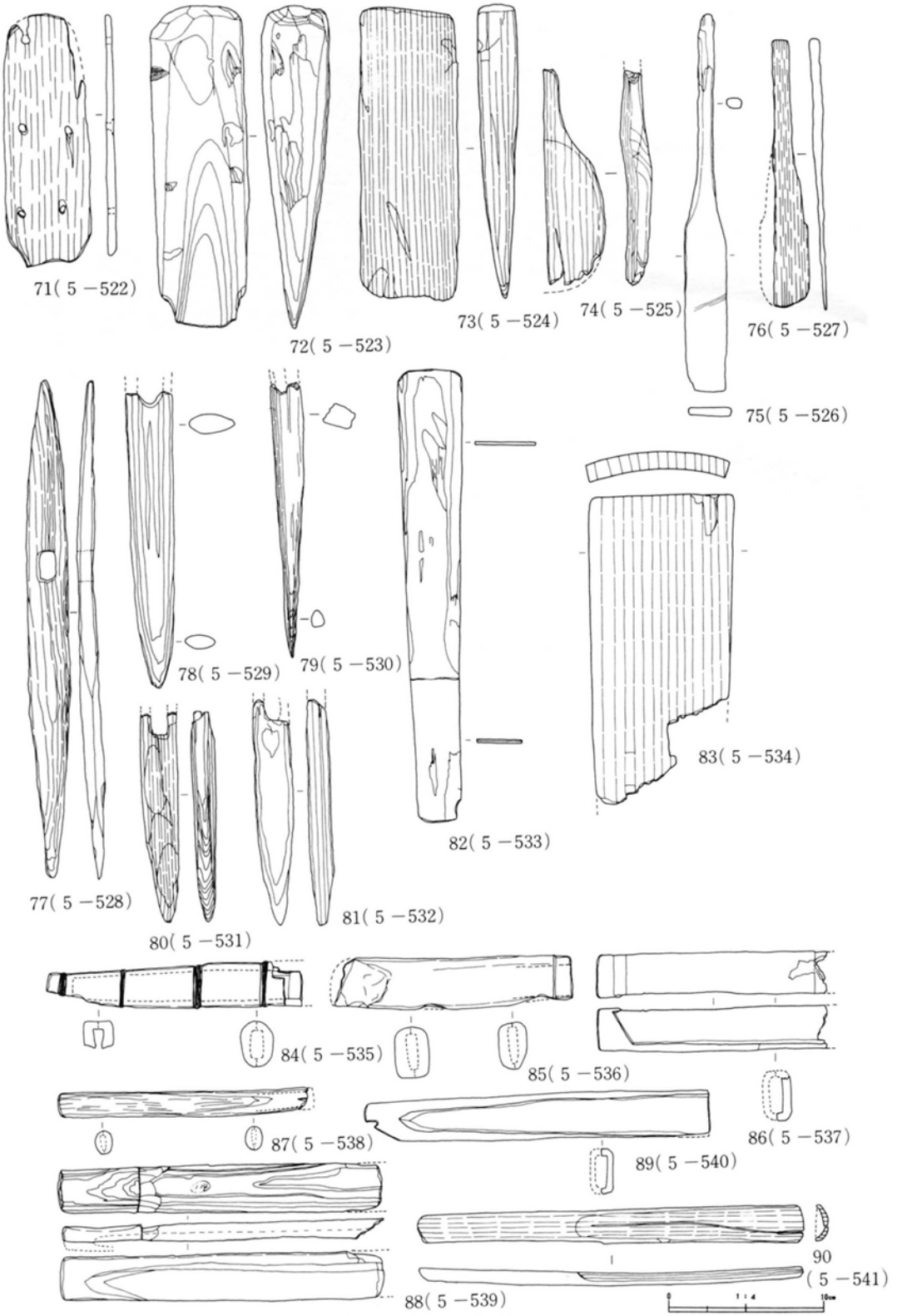
○櫛　（第116図・図版64）

103は梳櫛である。

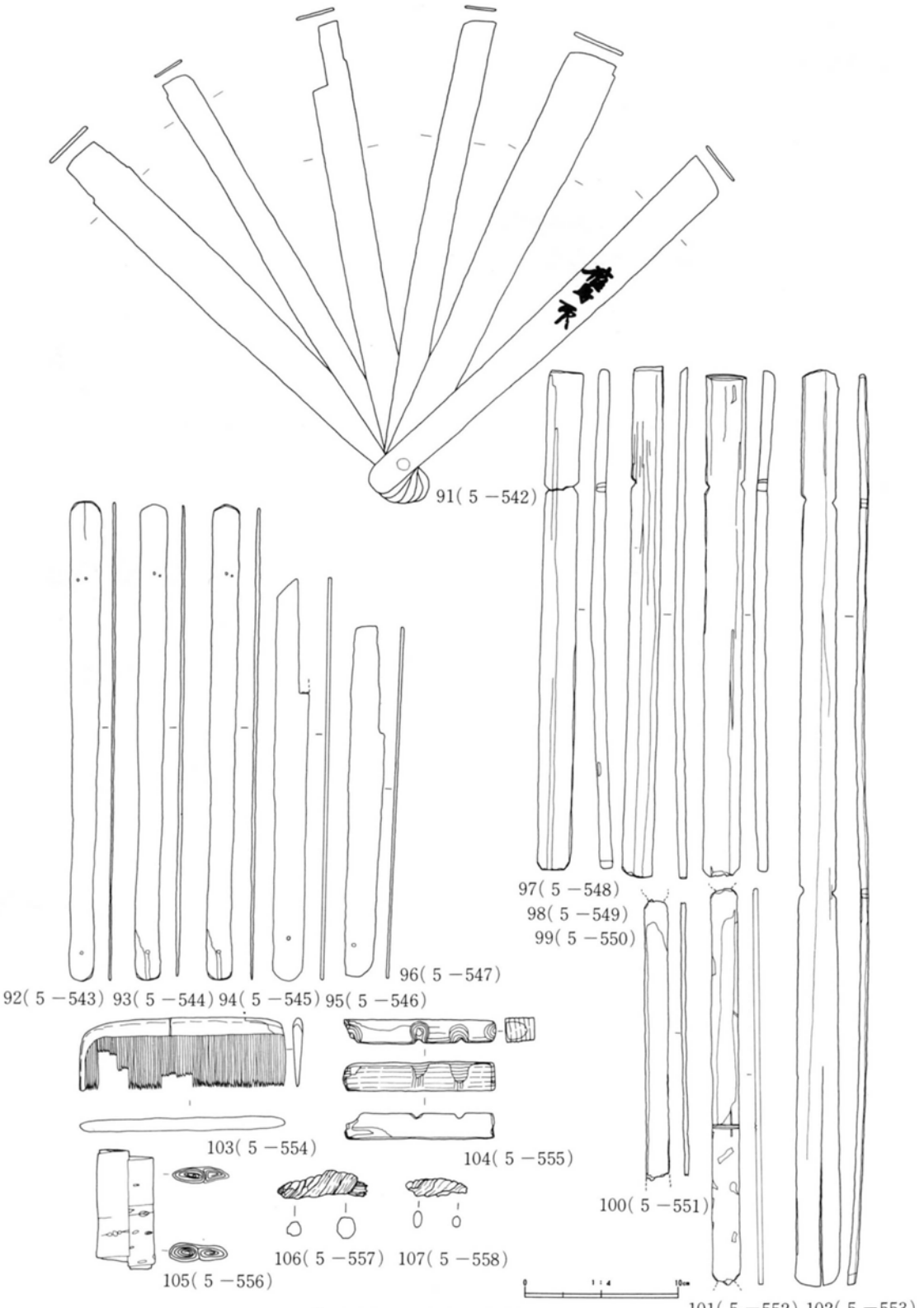
○火鑽臼　（第116図・図版64）

104は３ケ所に使用痕跡がある。

○桜樺皮　（第116図・図版64）



第115図　54次出土木製品



第116図　54次出土木製品

105は曲物用に採取されたと思われる未使用の桜樺皮である。

○縄状植物繊維　（第116図・図版64）

106、107は細い植物繊維を縄状に束ねた断片である。

○斎串　（第117・118図・図版64・65）

108、109は頭部を圭頭にし、両側面から切り込みを入れ頸部を作り出したその部分から下方向に向けて10数ケ所の切り込みを入れささくれ状にした斎串で、下端部は尖せている。110、111は頭部を圭頭にし、少し下の両側面に間隔を開けて上方向から上下２段に切り込みを入れている。112は幅広薄板の頭部を圭頭にし、上方向から両側面に３ケ所の小さな切り込みを入れている。113、114は112より小型で切り込みは下方向から入れている。109、111を除き、いずれも上端に割りを施す。115～127は板あるいは棒状の材を頭部を圭頭、下端を尖せ、また上端部は割りを施す。128は上・下部を削り調整を施す。129、130は頭部をほぼ半円形に整形し、その下方両側面に２～３段の切り込みを入れ、下端は尖らせている。131～134は、上下部を斜め方向に削りだしたものである。135、136は両側面を斜め方向に切断して二等辺三角形状を呈するものである。137、142は棒状で上下端を尖せたものである。143、151は頭部を平坦に面取りした板・棒状で、下端は尖せている。

○各種祭各種祀具　（第118図・図版65・66）

152は舟型を木簡に転用したもので、舟底部に「×手　矢田部小黒」の墨書が認められる。153は頭をやや下向きに左に向け、左前足を上げ、馬体に斑班点を描いた斑馬である。154、155は馬形である。156は木簡を琴柱に転用したもので、一面には

「〔眷ヵ〕□眷眷
×〔賜ヵ〕　×
□□」

他の１面には「□□
〔為ヵ〕
×偽觀□×
□□」

の墨書がある。157は刀形である。158～161は鏃形である。158、159については篦状製品とも考えられるが、平坦部の端部が尖っていることから鏃形と考えた。162は陽物状を呈する。

○棒・板状木製品（第119図・図版66）

163～170は上下端部を平坦にした棒状製品である。168は一端を切り込み、他端を斜めに切断している。いずれも用途不明である。171、172は板状を呈する。171は一端を両面から削っており、楔とも考えられる。

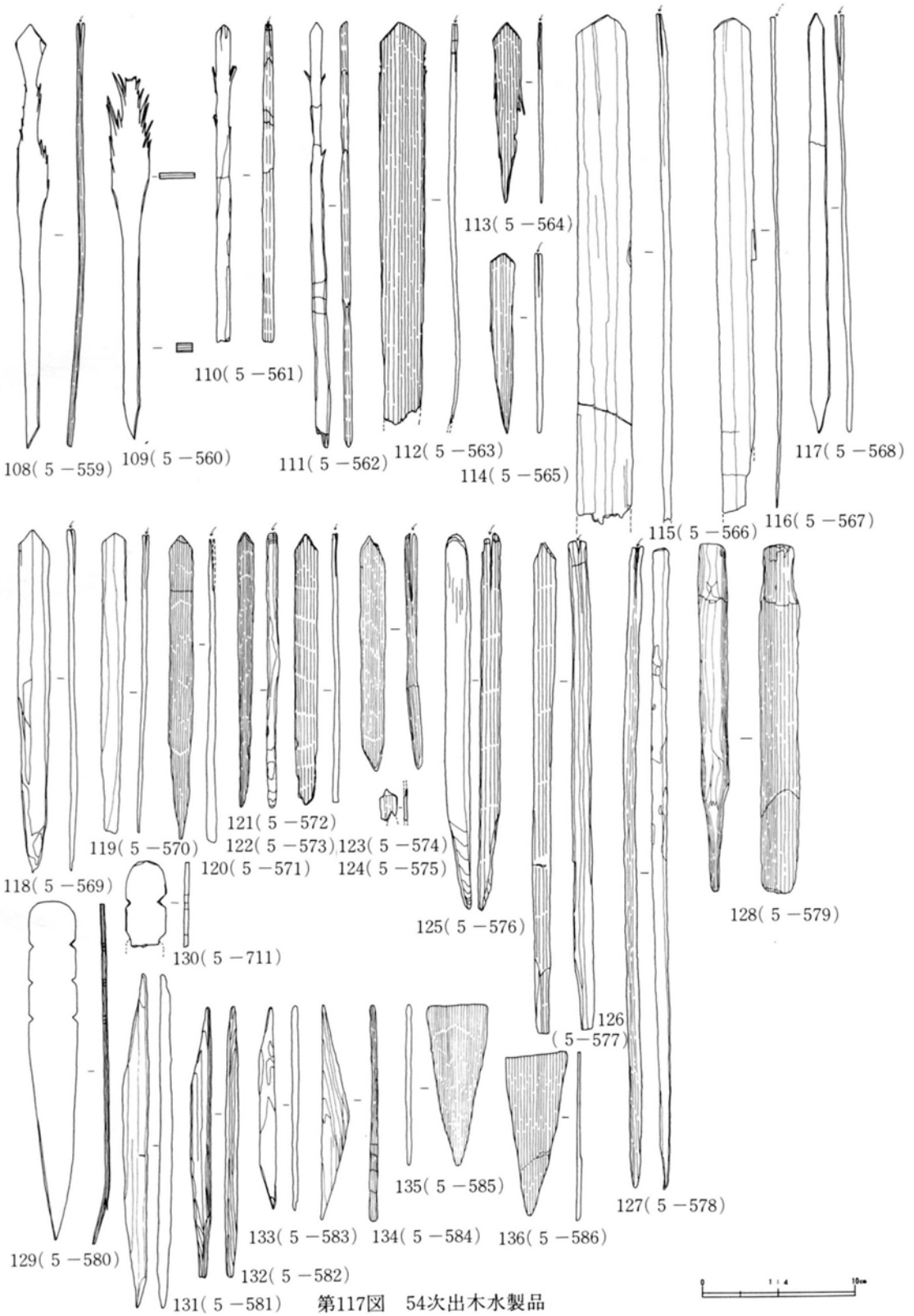
○箸（第119図・図版66）

箸は本調査地から多数出土しているが、ここにはその一部を図示した。173～185は長さの異なる箸である。最も出土量が多い箸は17.2cm～17.5cmの長さである。

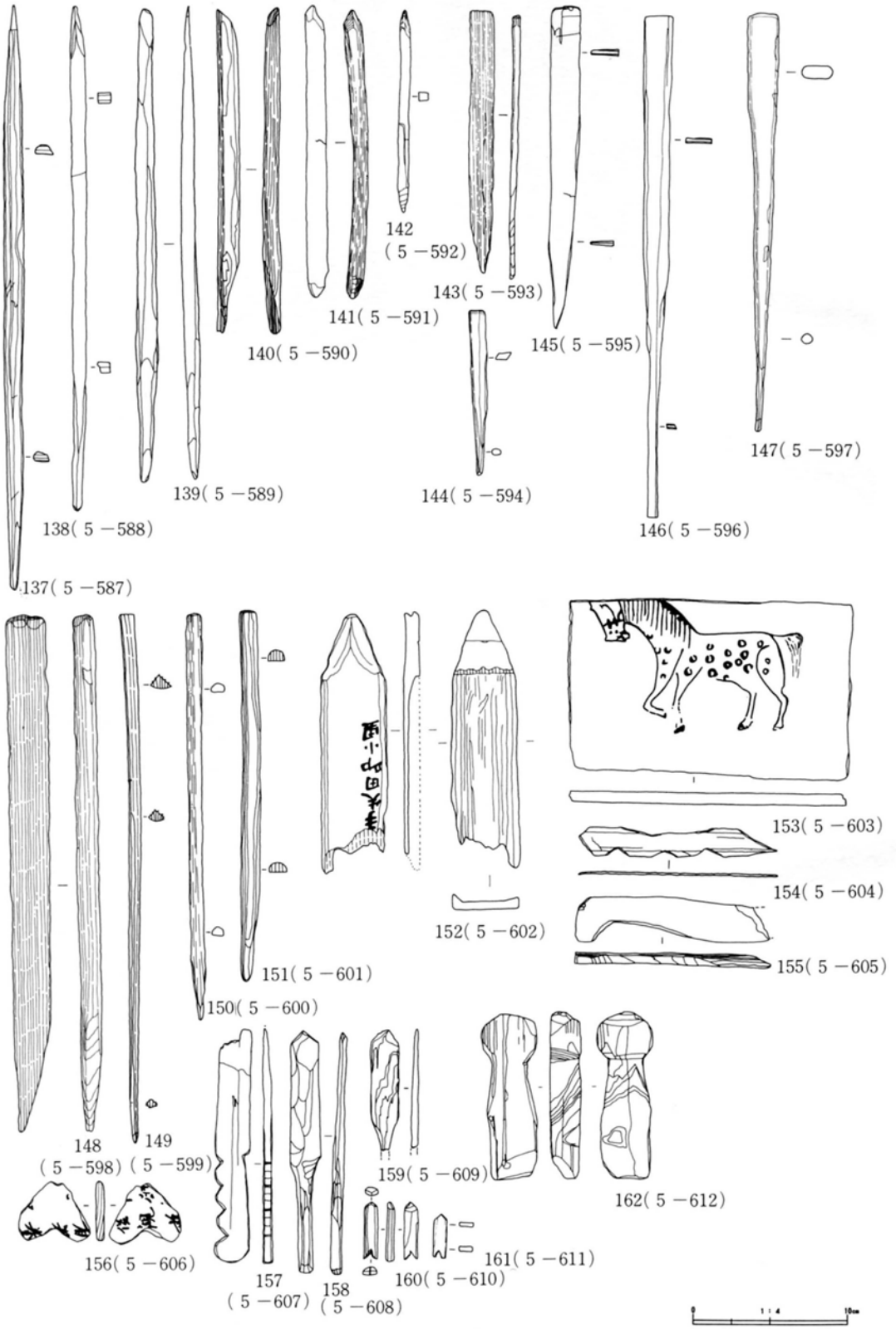
○木錘（第120図・図版66）

186～191は中央部を削り凹めた木錘である。

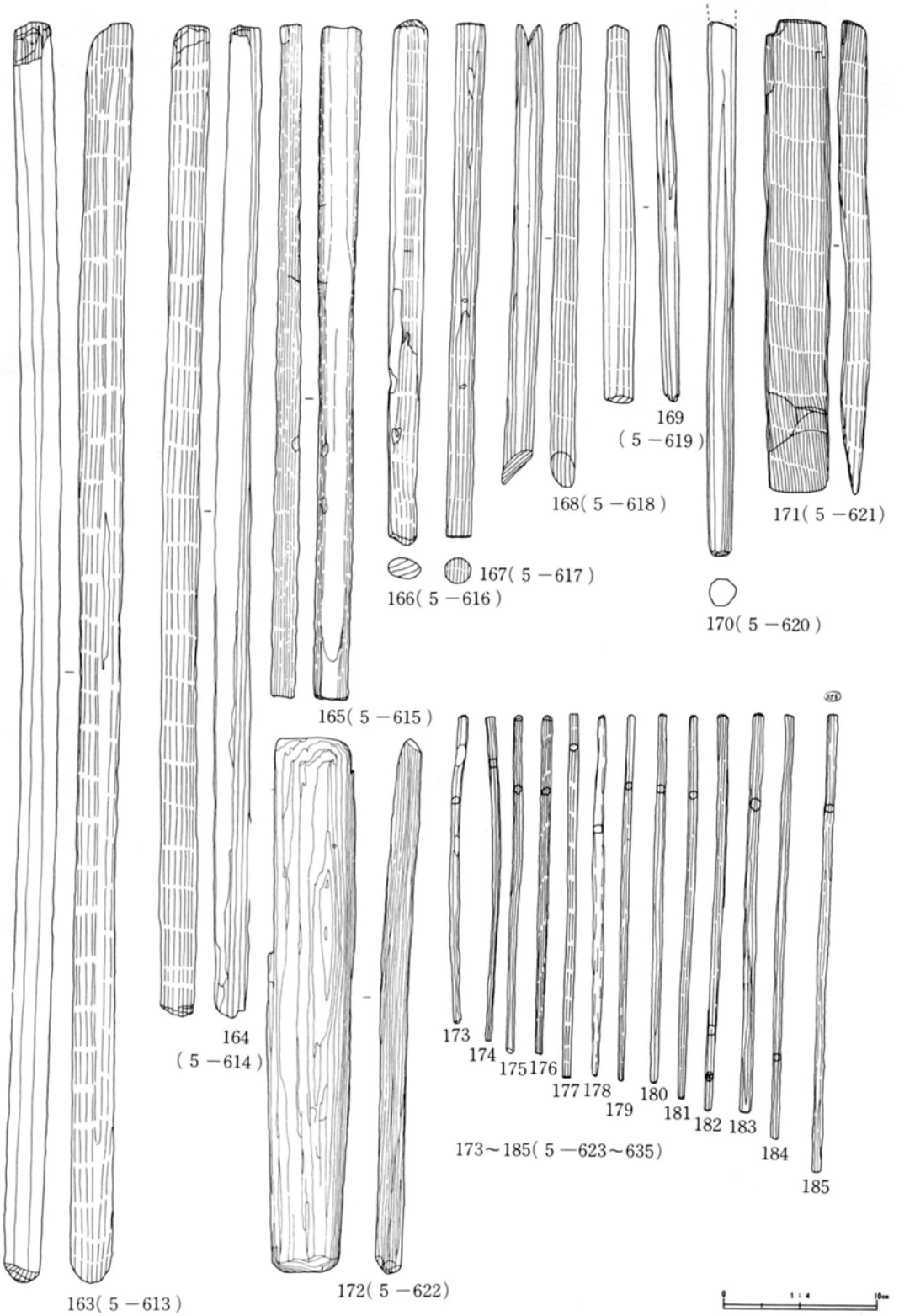
○ロクロ具（第120図・図版66）



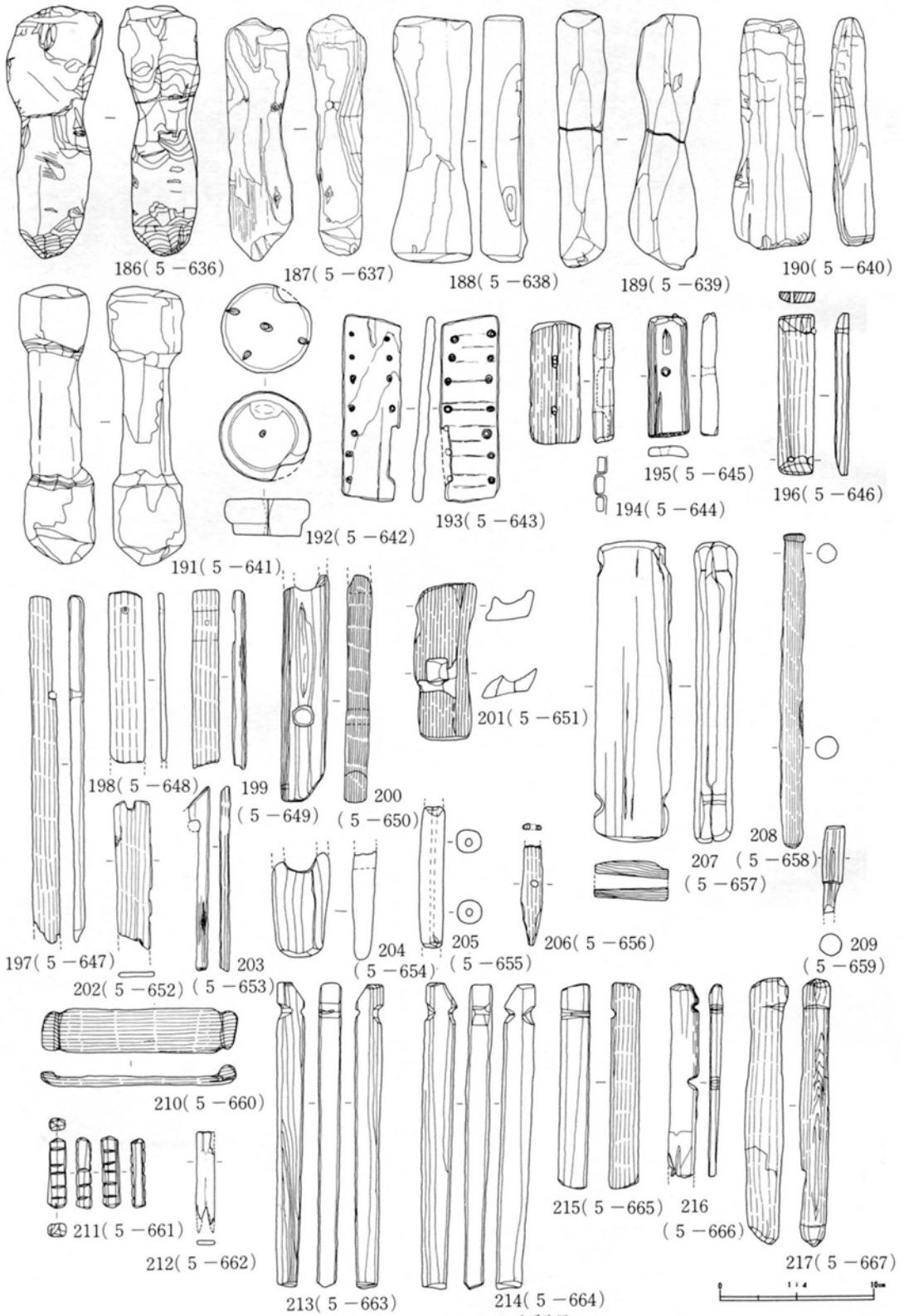
第117図　54次出木水製品



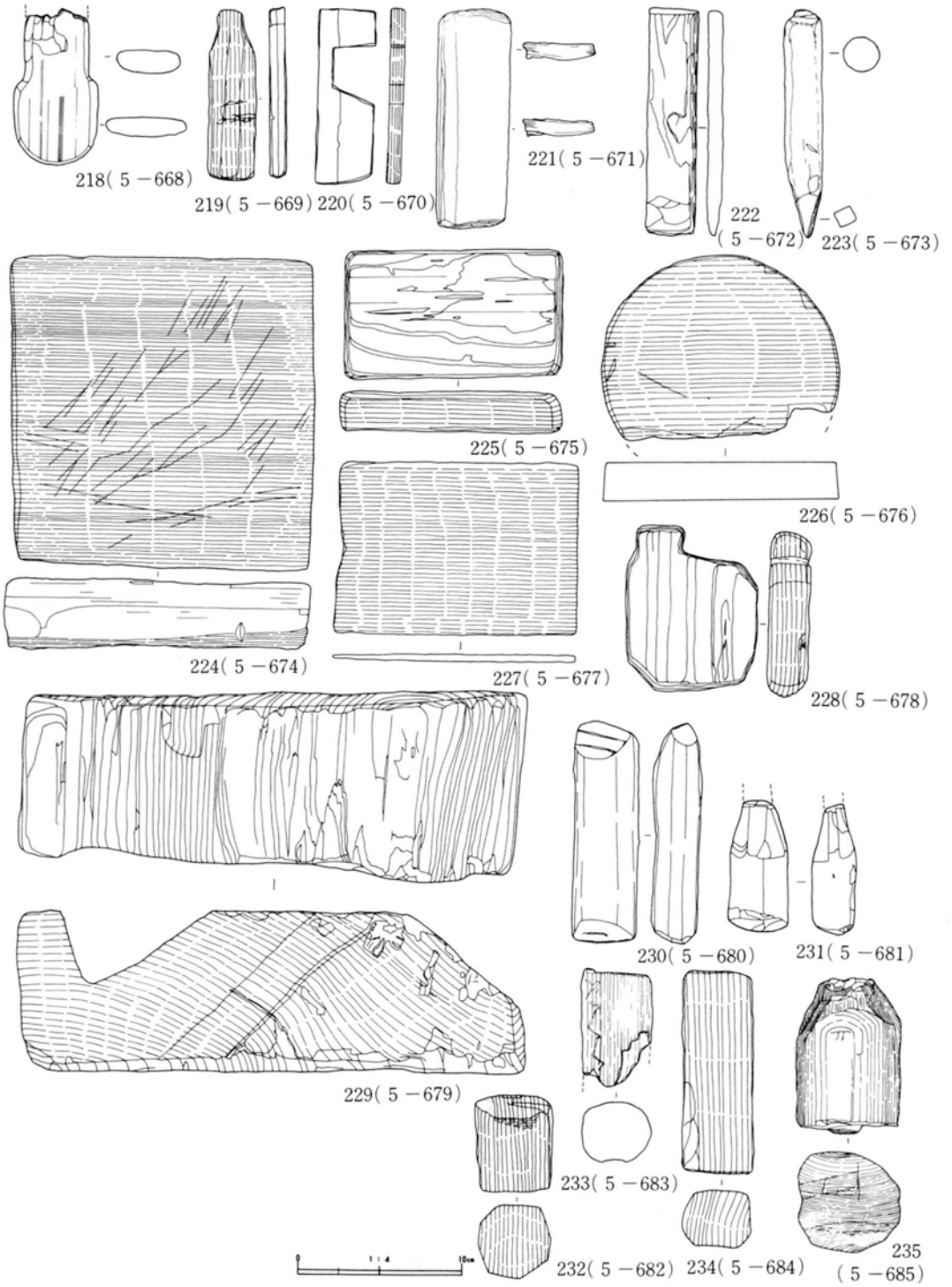
第118図　54次出土木製品



第119図　54次出土木製品



第120図　54次出土木製品

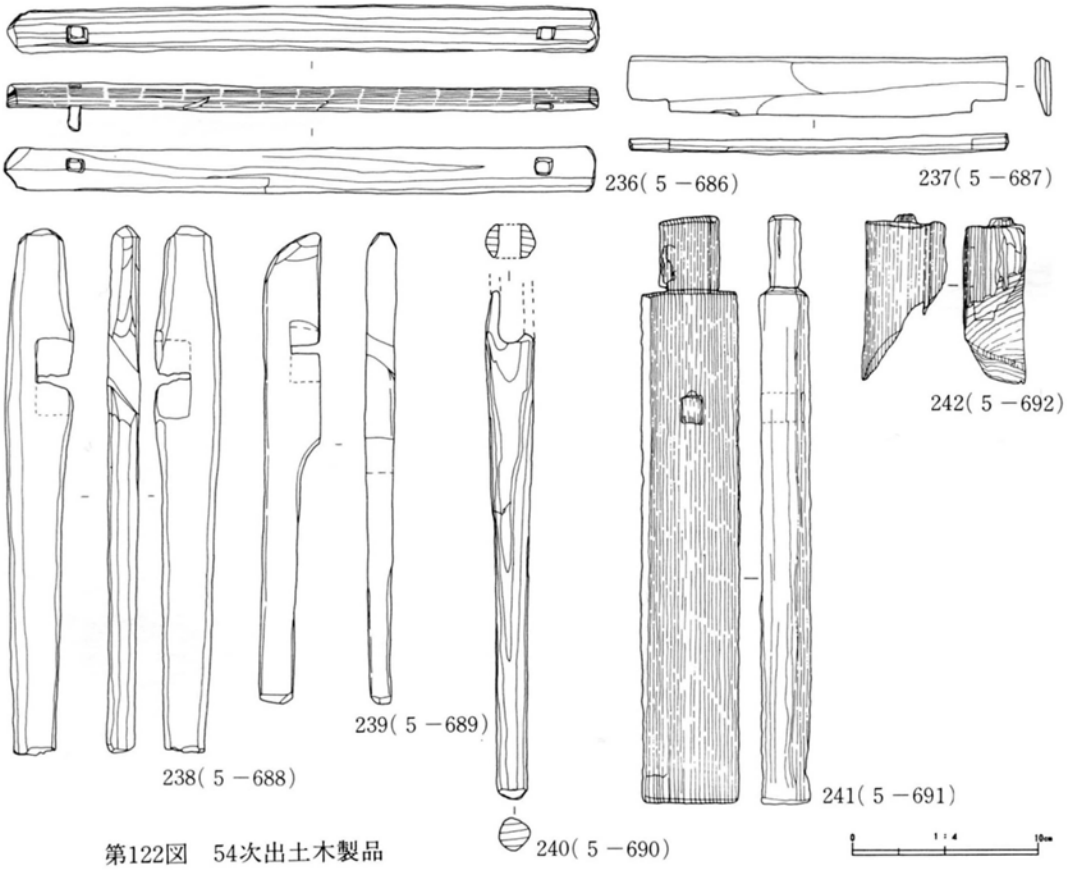


第121図　54次出土木製品

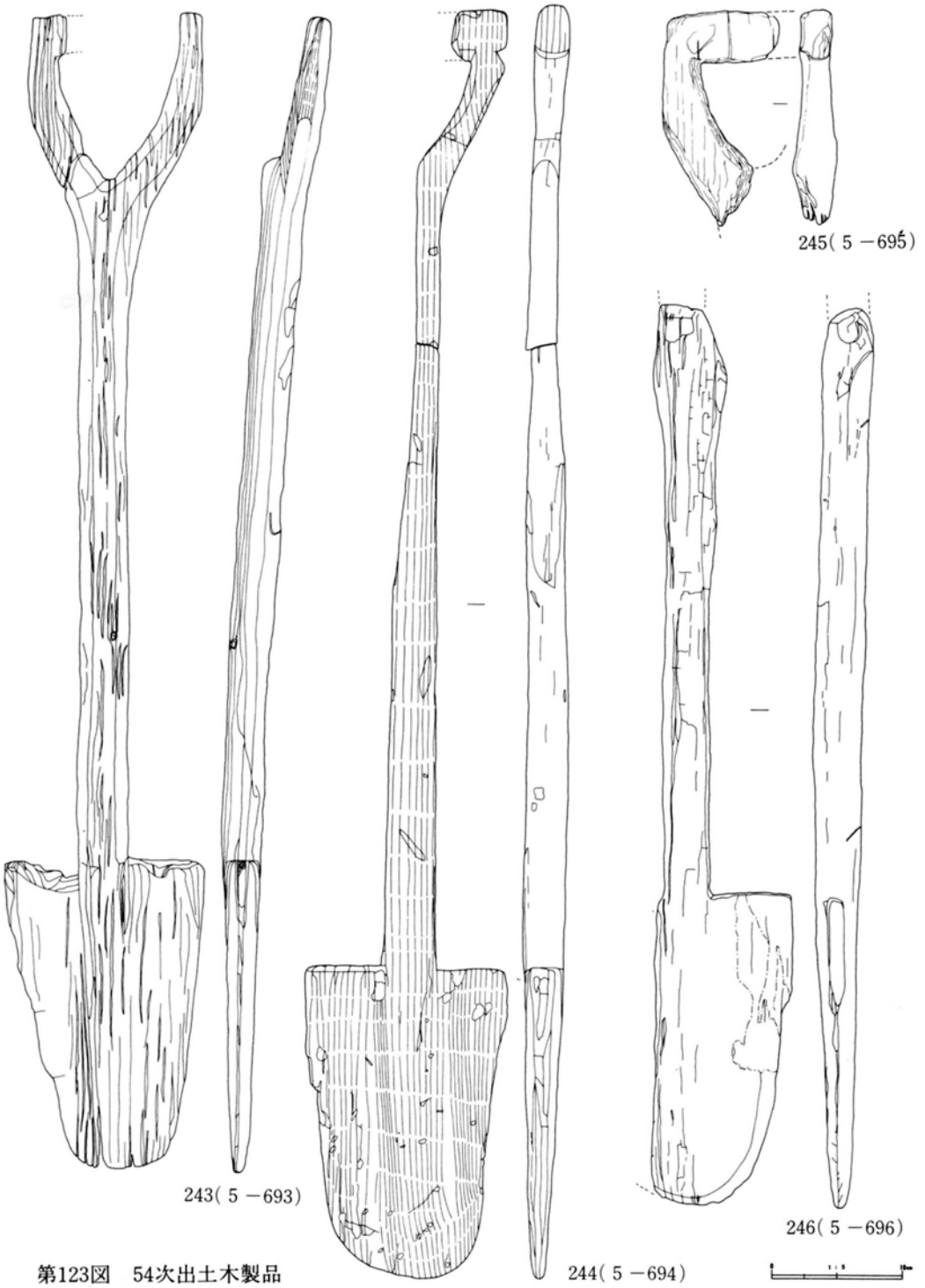
192は中心部に小孔が貫通し、一面の十字方向の端部に4個のロクロ爪痕跡が遺存するものである。

○不明木製品（第121図・図版66・67）

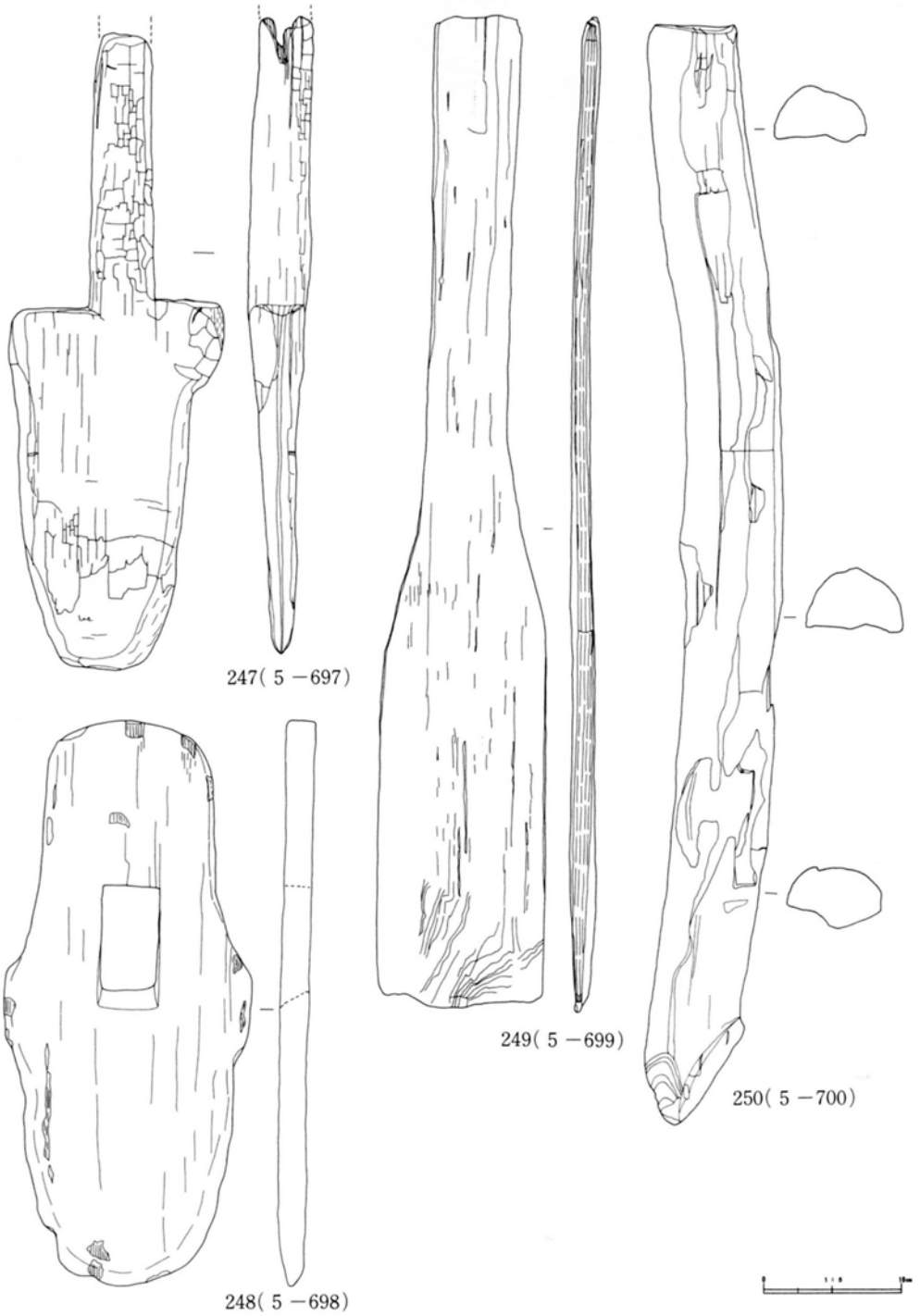
193～206までは材の一部に小孔が穿たれているものである。193は板の長軸の両サイドに7個の小孔を対称的に穿ったものである。194は板の中軸上に沿って2個の小孔を穿ったもので、磨り減った様子から自在鉤と考えられる。195は中心に小孔を穿ったもの、196は欠損しており詳細は不明だが上部右端と下部左端に小孔を穿っている。197は一方の右側に、198、199は上部中軸上に小孔を穿っているが、199は小孔の上下に凹みがあり、他の材が組み合うものと考えられる。200は円形、201は方形の孔が穿たれている。202は上端部に円形の切り込みがある。205は棒の中心部に小孔を穿っている。207は長方形の比較的厚みのある材の側面を刳り抜き、上下部に切り込みを入れたもので、使用中に縦方向に割れたものと考えられる。210も同用途と考えられる。209は木針か栓と考えられる。211は4面体の3面に5・3・5の刻みを入れた算木状の製品である。212は祭祀具か。213、214は人形状を呈する。217は両端を丸く面取りし、上部に小さい切り込みを入れている。218は一端を丸く、219は方形の篦状を呈する。220は台形状の切り込みがある。221は長方形の板、222は一端を削り薄い楔状を呈する。223は丸棒の先端を尖らせている。224、225は分厚い、227は薄手



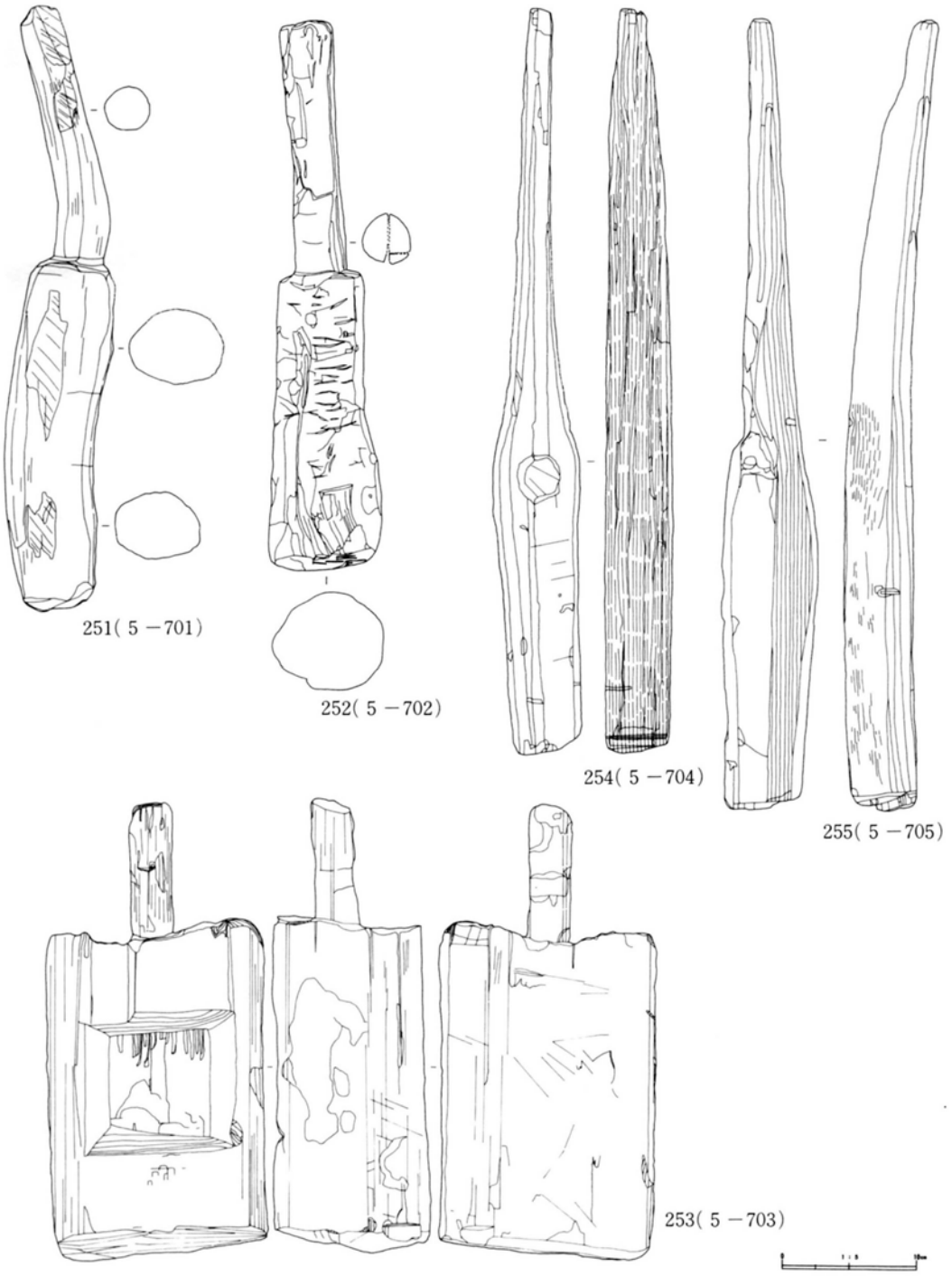
第122図　54次出土木製品



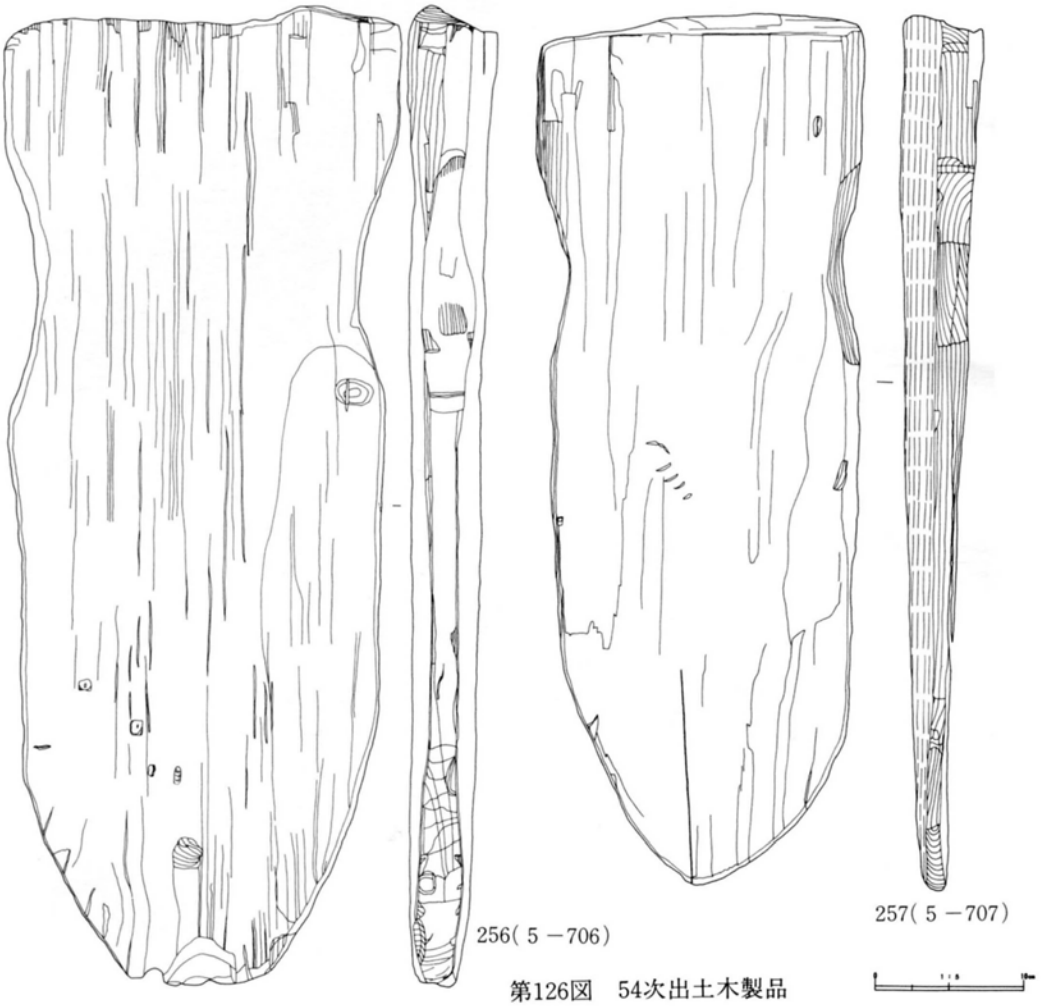
第123図　54次出土木製品



第124図　54次出土木製品



第125図　54次出土木製品



第126図　54次出土木製品

の方形材である。224は刃物痕跡が一定方向に認められる。226は分厚い円形材である。228は角を面取りし、一辺に凸部を作りだしている。229は建築部材と考えられる。231は粗削りされ、他端は欠損している。232は上下端を平坦にし、八角形に面取りしている。235は製品を作った際の木端か。

○部材（第122図・図版67）

236は棒状の両端に方形の穴を穿ち、一方には短い止め具と思われる部材が挿入されている。237は箱物の部材と思われる。238、239は側面に斜め方向の切り込みを入れている。240は容器の柄と思われる。236は机等の脚部の一部と考えられる。242は円柱の上面に欠損した凸部が認められる。

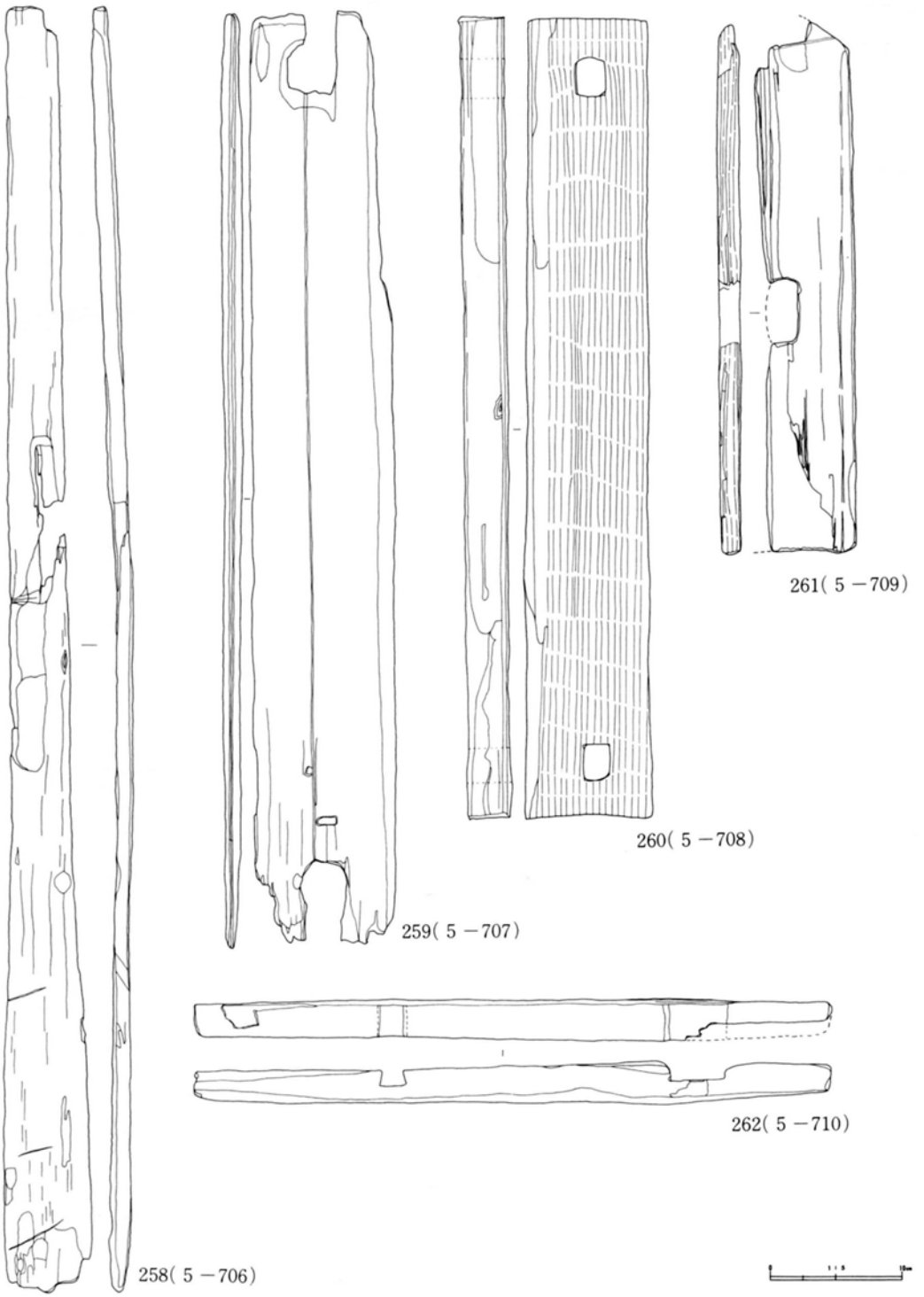
○鋤（第123・124図・図版68）

243〜247は鋤である。244は把手の外側面に切り込みが認められる。

○鍬（第124図・図版69）

248は鍬の身部である。柄穴の刃先側が斜方向に作りだされている。柄は出土していない。

○箆（第124図・図版69）



第127図　54次出土木製品

249は大型の篦である。

○杭（第124図）

250は先端を尖らせた杭である。

○横槌（第125図・図版69・70）

251、252は柄と身部を明確に作りだした断面円形の槌である。253は断面が隅丸方形で一面に方形の凹みを作るが、この用途は不明である。254、255は柄が長く、柄部と身部を明確に作りださない形態である。

○田下駄状製品（第126図・図版70）

256、257は一端を平坦にし、そのやや下方にくびれ部を作り、他端をやや尖った半円形にした田下駄状を呈するが、鼻緒壺がなく未製品と考えられる。

○部材（第127図・図版71）

258は一端が幅広くなり、中央より少し上に四角の枘穴が認められる。全体に薄手であることから農具等の部材と考えられる。259～261は厚手の板で上下部に四角の枘穴、262は幅の異なる継ぎ手の溝が２ヶ所あることから机、台脚の部材と考えられる。

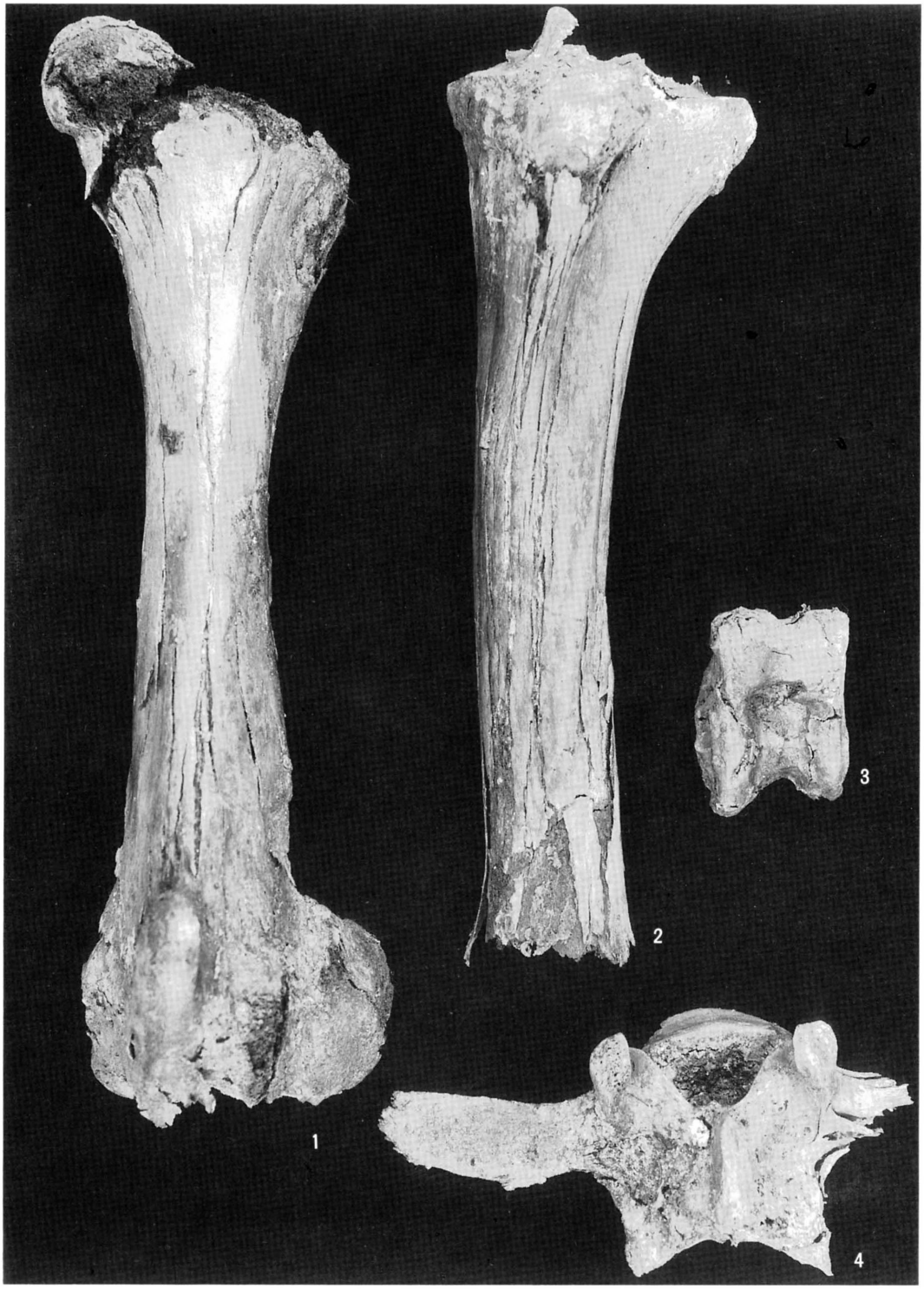
V　秋田城跡58次発掘調査で出土した動物遺体

国立歴史民俗博物館　　西　本　豊　弘

秋田城跡第58次調査のＳＥ1171井戸跡埋土より出土した動物遺体のうち、比較的保存状態の良い４点が筆者のところに届けられた。それらは、表面が剝離しつつあり、ビビアナイトの付着によってかろうじて消失するのを免れた遺体であった。その内容は、左大腿骨・左脛骨・左距骨・腰椎であり、すべてウシの成獣の骨であった。大腿骨は、近位部が少し破損していたが、ほぼ全体が残っていた。脛骨は中間部から遠位部が欠損していた。計測値を示したが、大きさからみてこれらの４点は同一個体のものと思われる。古代・中世のウシとしてはかなり大きいものである。秋田城跡でては、この４点以外にも動物の骨が出土しているので、それらの資料も加えて、改めて論じることとしたい。

ウシの骨の計測値（単位mm）

１．左大腿骨	最大長	323.0±	遠位部幅	96.0±
２．左脛骨	現存長	283.0	近位部幅	95.2±
３．左距骨	最大長	66.3	前部幅	45.0
４．腰椎	椎体長	59.5		



ＳＥ1171井戸跡出土牛骨
１．左大腿骨　２．左脛骨　３．左距骨　４．腰椎

秋田城跡環境整備事業

1．平成４年度の整備（鵜ノ木地区第一次10ケ年計画）

平成４年度の整備は、平成３年度まで整備した鵜ノ木地区の西端地を対象とした。

本地区は大部分、鵜ノ木地区で整備の対象としている古代の遺構が検出されてない地域であったため、古代の遺構があるところまでは遺構面復元のための盛土を行い、その他については民有地境界との間でスリッケとすることとした。本地区は、表示すべき遺構がないこと、整備基本計画において原風景の復元を基調と位置付けていることからその一環として古代木の実園の造成を行うこととした。また、これを機会に地区全体の植栽計画、休養施設の配置計画の見直しを行った。

１）　整備内容

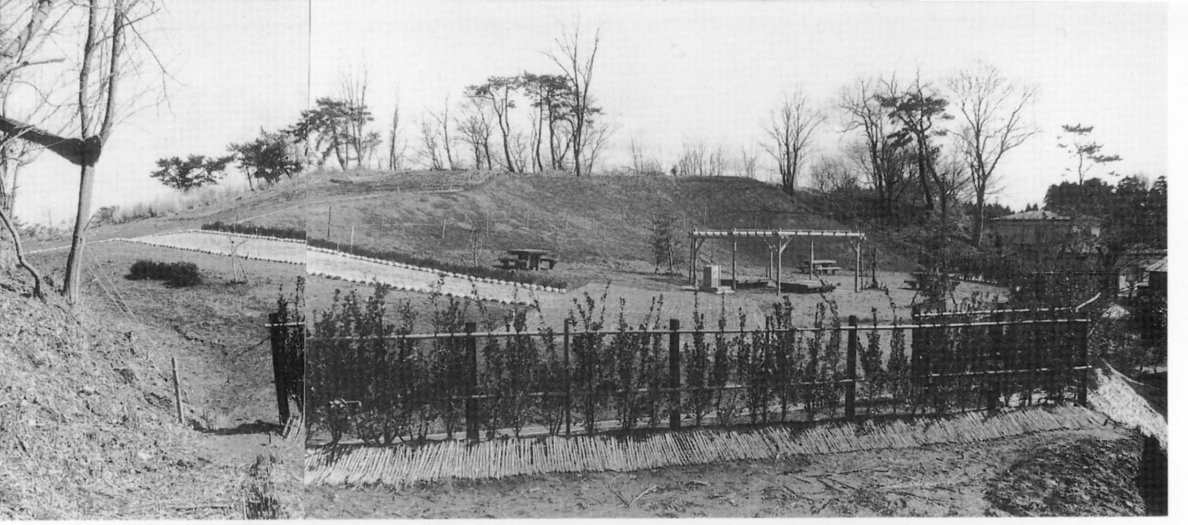
環境復元の一環として古代木の実園を造成し、トチ、カヤ、ナツメ、梅、アケビ、オニグルミの植栽を行った。また、継続して使用している玉石ブロック（L＝0.6ｍ、32kg/ケ）は、Ｇ・Ｌからの立ち上がりが10cmと目立つため、周辺に下木を植栽し立ち上がりを見せないこととした。本地区の園路は、管理用園路と位置付けており、その末端の処理（車回し）として園路の終点に植生ブロック（225×225×80mm・空隙率34%）を設置し、周囲の芝と一体化させることをねらいとした。また、休養施設として野外卓３基、縁台（1.8×1.8ｍ）２基を日陰柵の下に設置することとした。この縁台につていは、平成２年度でも井戸覆屋広場のところに設置したところ、テーブルやベンチとしての機能はもちろん昼寝用など多様な使われ方をしており好評であったため、再度使用することとした。

工事の概要は次の通りである。

実施地区　　鵜ノ木地区（第４期工事）

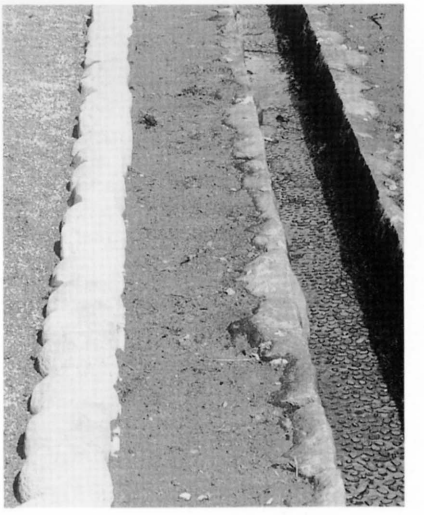
実施面積　　2,060㎡　　総事業費　　20,000千円

工　種	細　目	数　量	金　額	備　考
敷地造成工	土　工	1式	4,663	切土42㎥・盛土1,420㎥（赤土・山砂）
園　路	法覆工	68㎡	105	法面整形、ワラ芝
広場工	排水工	1式	2,716	180型U型側溝54ｍ・雑割石溝78ｍ・玉石ブロック149ｍ　他
	路面工	211㎡	645	砕石舗装（路盤C－400.1ｍ厚・表層0.05厚）・植生ブロック50㎡
修　景	植栽工	1式	867	トチ、カヤ、ナツメ、アケビ、オニグルミ、他 下木
施設工	芝　工	1,700㎡	233	種子吹き付け
	日陰柵	1式	471	4.5×5.6ｍ
休養施設	ベンチ	1式	1,619	野外卓3基・縁台2基・ウッドブロック10㎡
給水設備		1式	930	水飲み台1基・ポリエチレン管ℓ＝110ｍ
直接工事費計			12,249千円	

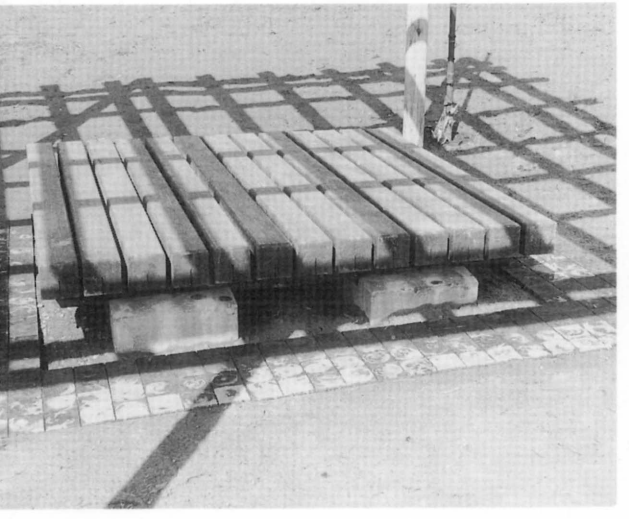


平成５年度整備地

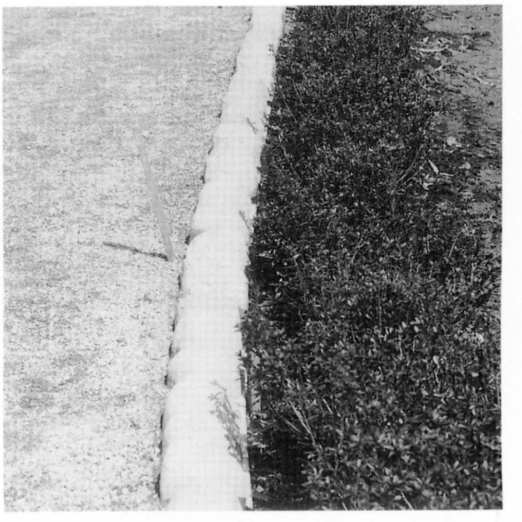
植生ブロック



玉石ブロック（植栽前）

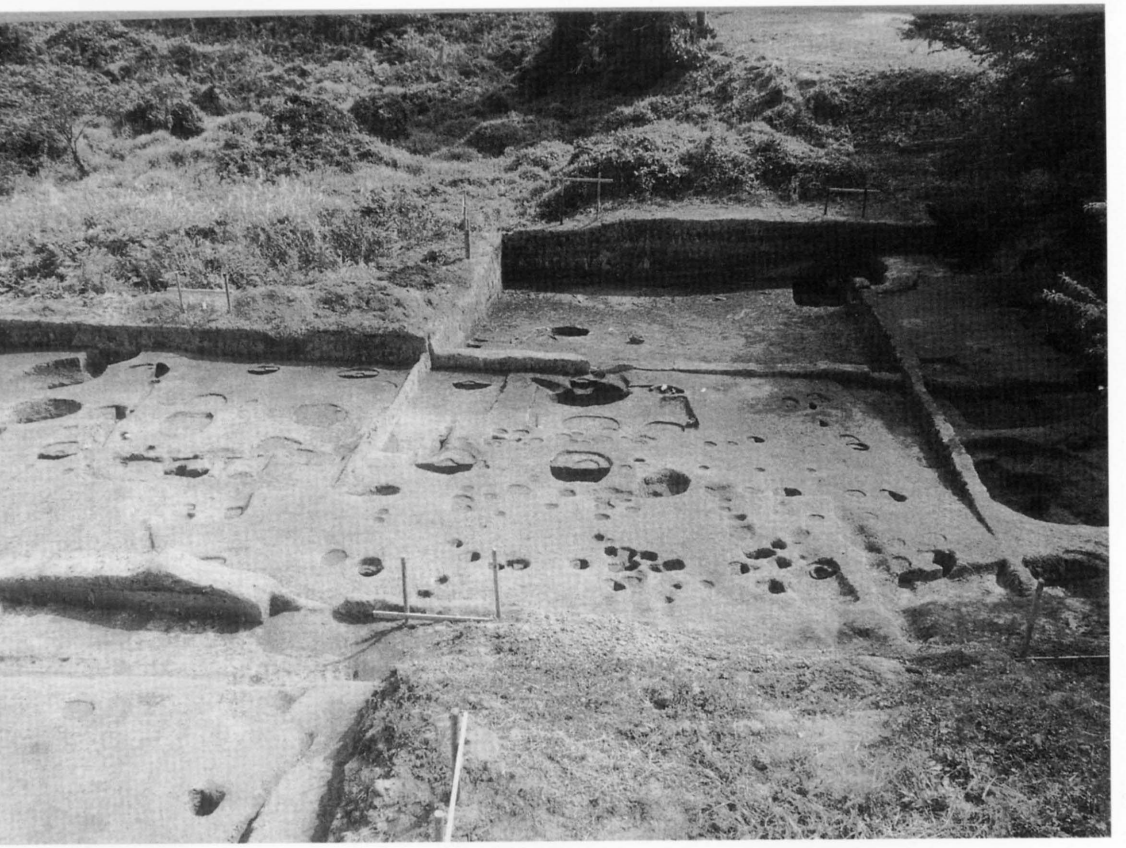


縁　台



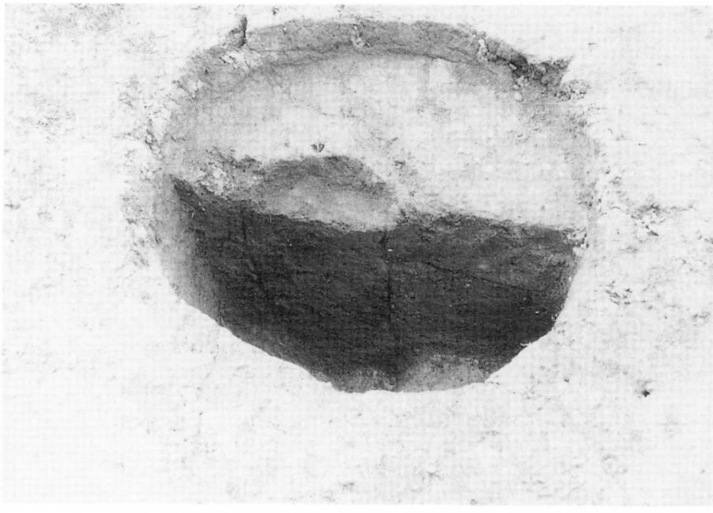
玉石ブロック（植栽後）

図版 1　上・第58次調査航空写真（西から）
下・第58次調査西側遺構全景（南から）

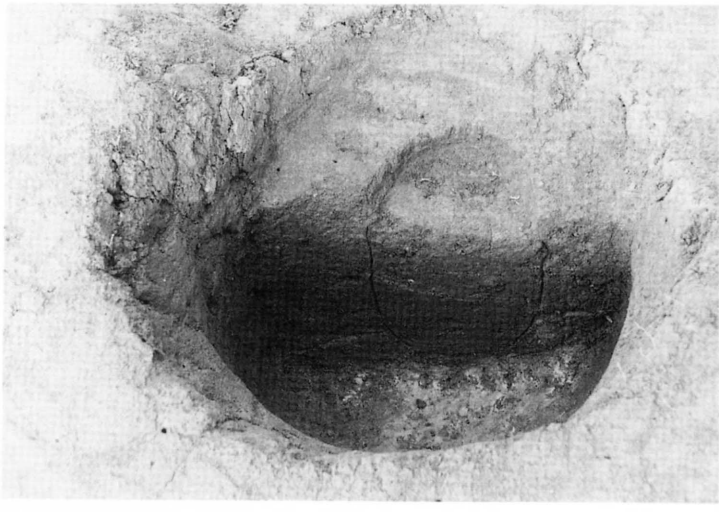


図版 2　上・第58次調査東側上層遺構全景（北から）
下・第58次調査東側下層遺構全景（西から）

ＳＢ1150建物跡
ＳＤ1186溝跡（東から）

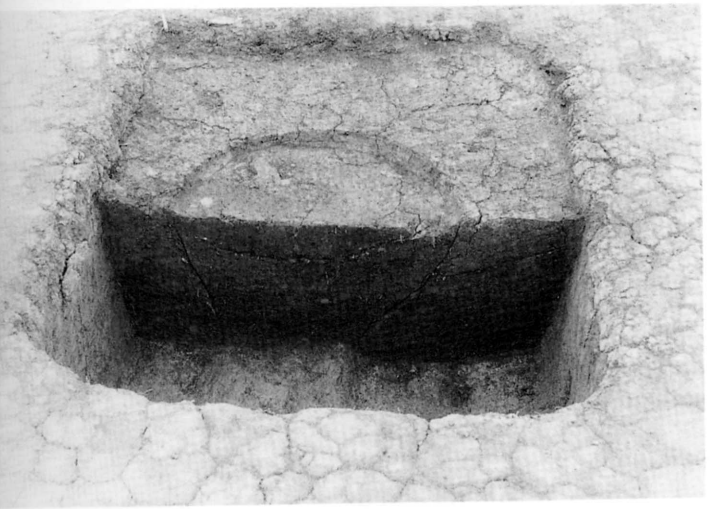


ＳＢ1150建物跡
掘り方断面

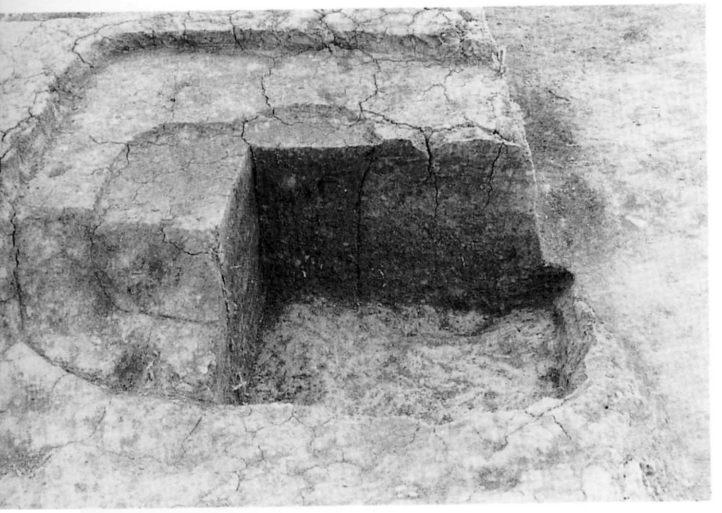


図版 3

ＳＢ1146建物跡（南から）

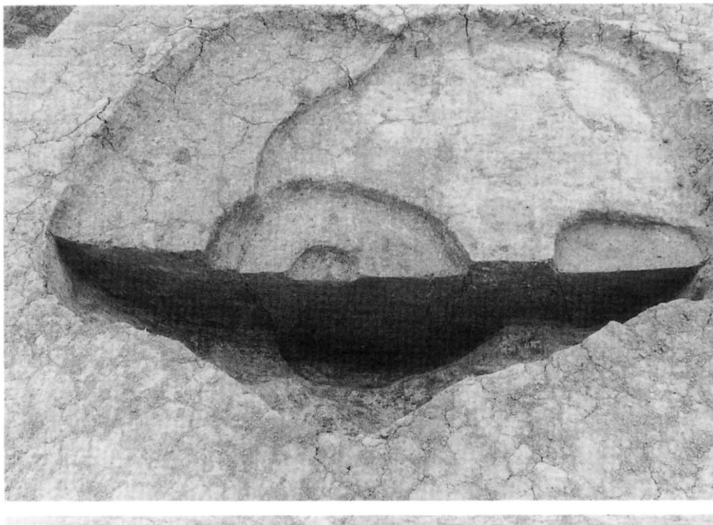


ＳＢ1146建物跡
掘り方断面

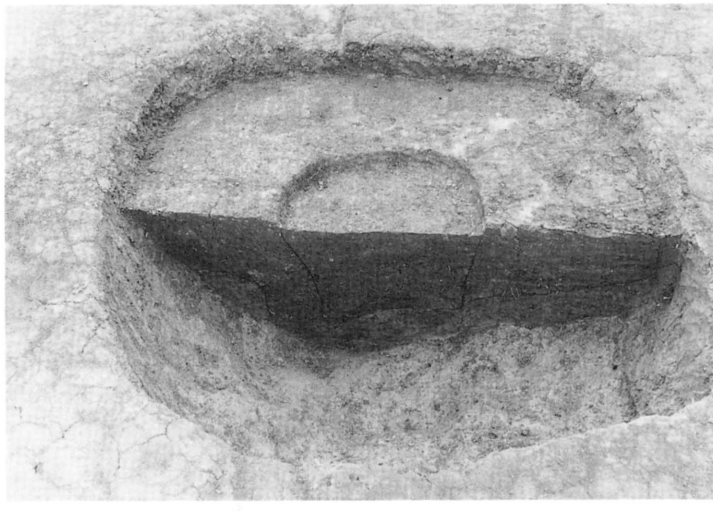


図版 4

ＳＢ1147建物跡
ＳＫ1189土壙跡（南から）

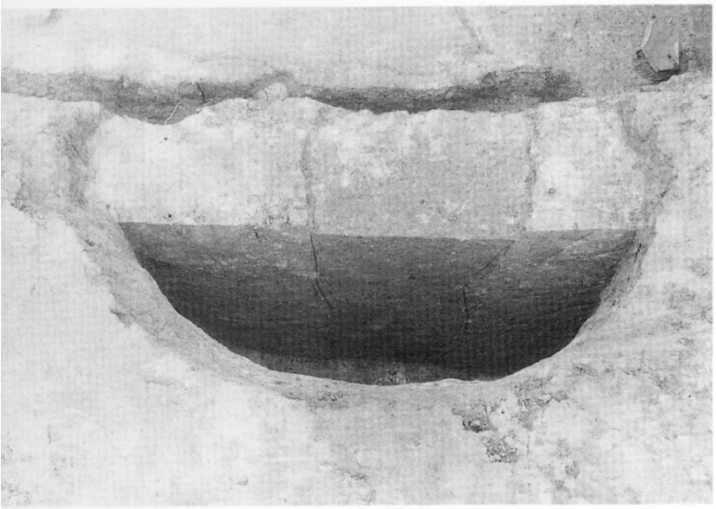


ＳＢ1147建物跡
掘り方断面

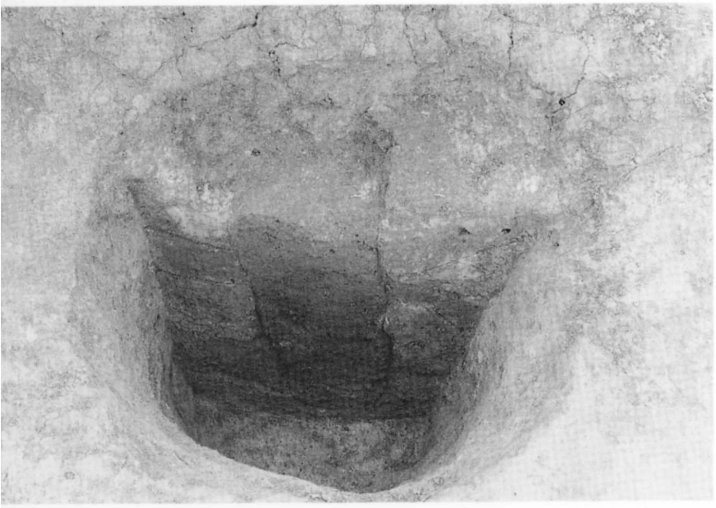


図版5

ＳＢ1149建物跡（南から）

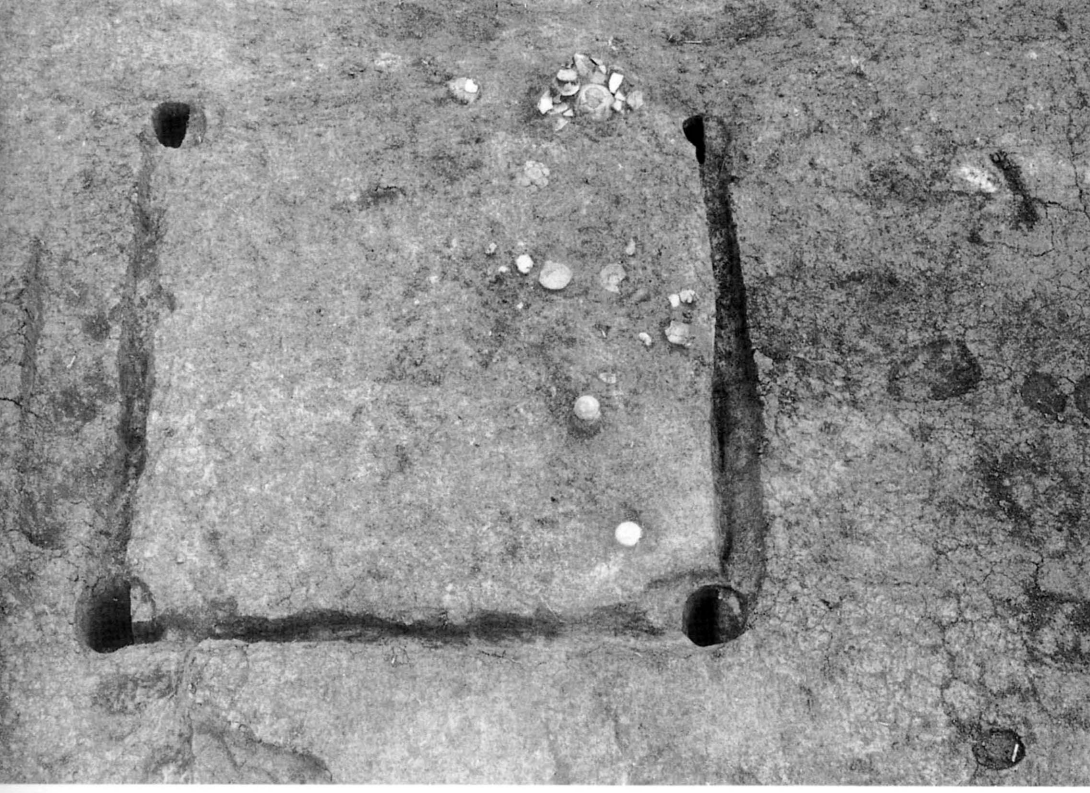


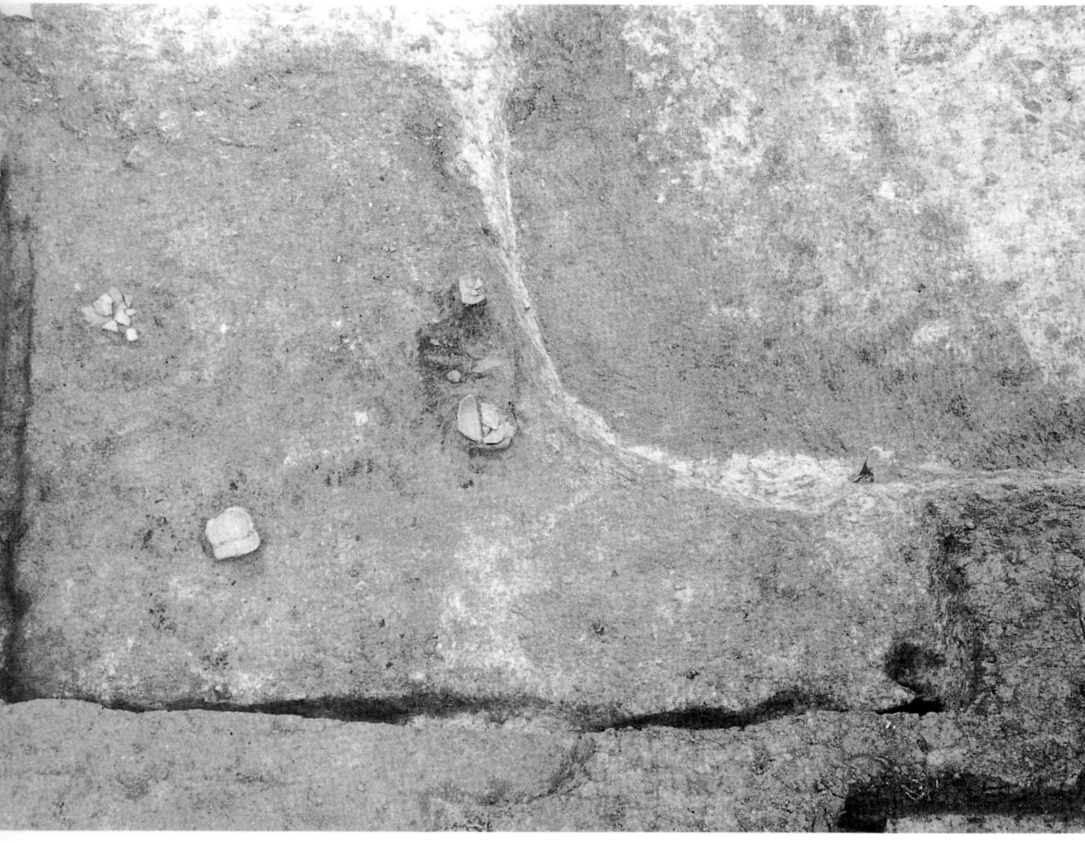
ＳＢ1149建物跡
掘り方断面



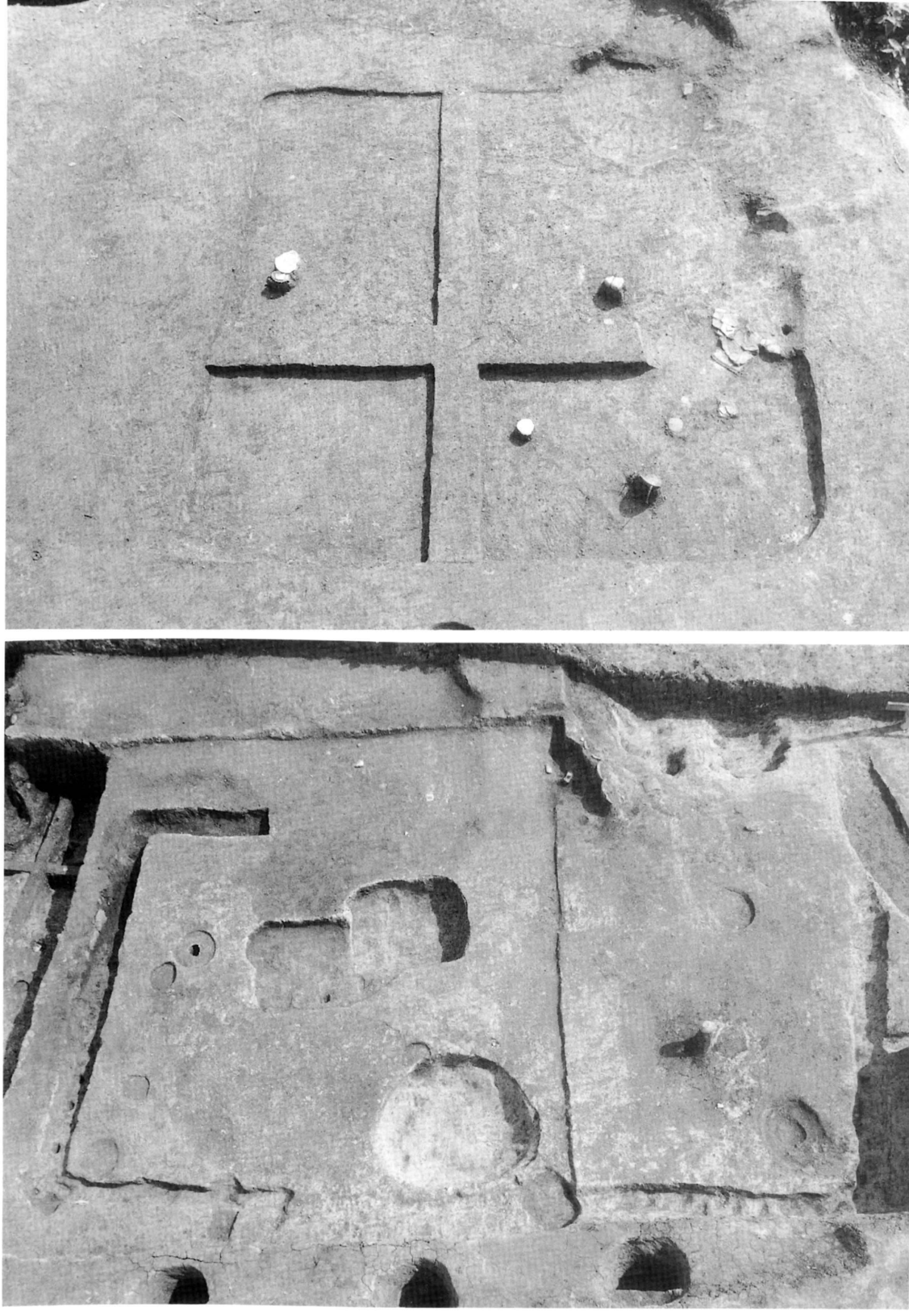
図版 6

図版 7　上・ＳＩ1153竪穴住居跡（南から）
下・ＳＩ1154, ＳＩ1155, ＳＩ1156竪穴住居跡（南から）

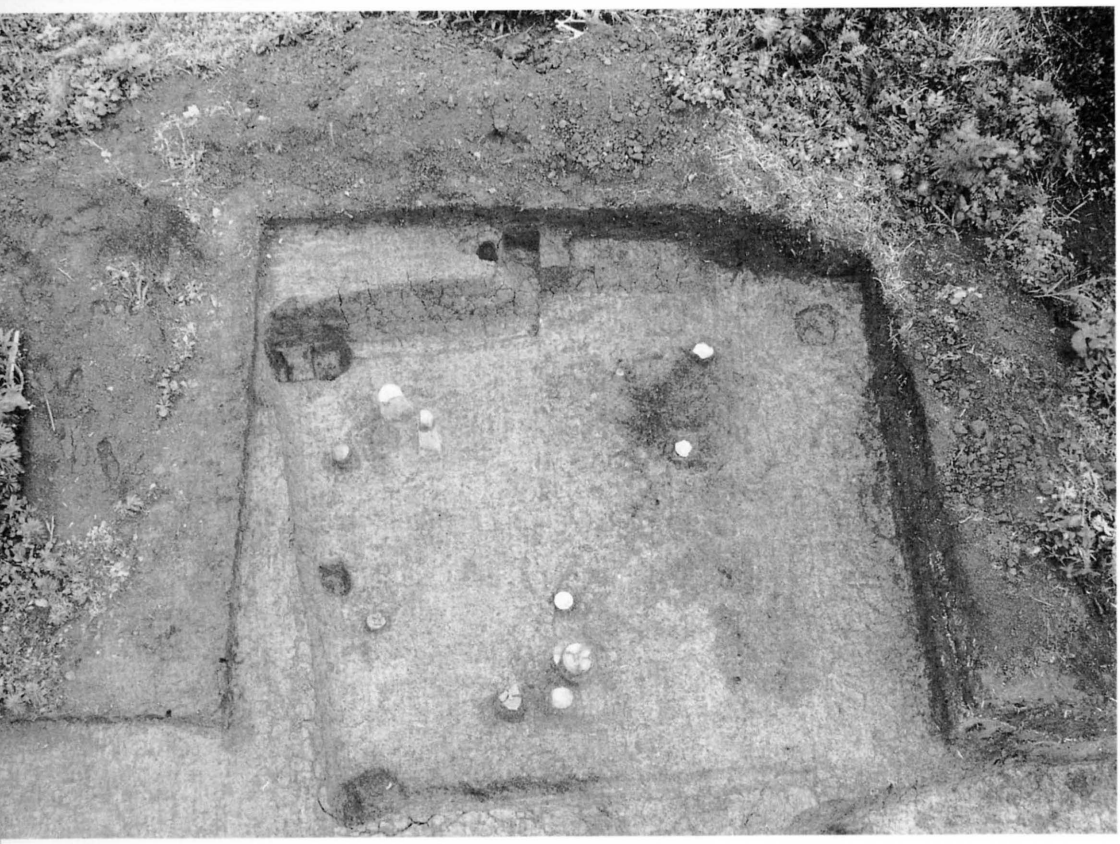




図版 8　上・ＳＩ1157竪穴住居跡（西から）
下・ＳＩ1158竪穴住居跡（西から）



図版 9　上・ＳＩ1159竪穴住居跡（西から）
下・ＳＩ1160, ＳＩ1161竪穴住居跡（西から）

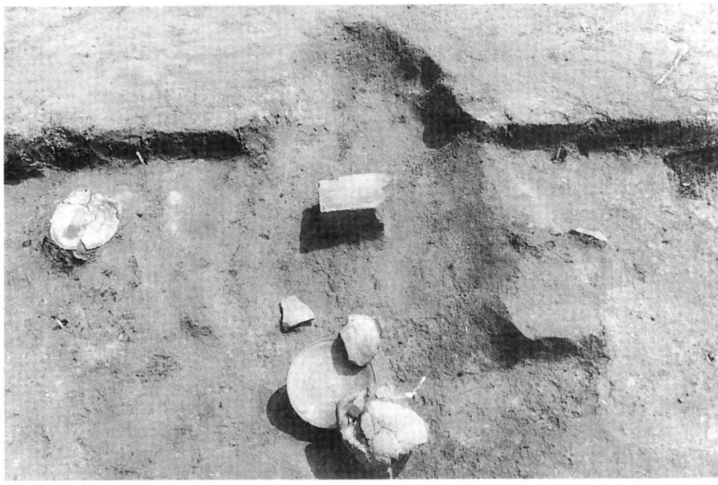


図版10　上・ＳＩ1162竪穴住居跡（西から）
下・ＳＩ1163竪穴住居跡（南から）

ＳＩ1160カマド

ＳＩ1161カマド

ＳＩ1162カマド

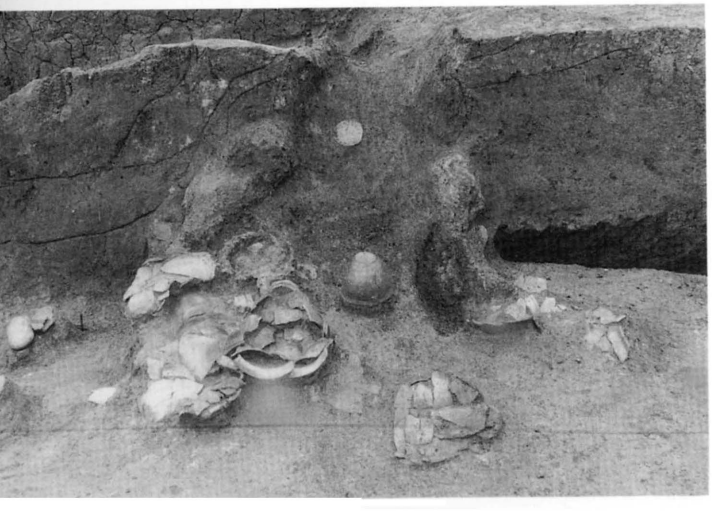


ＳＩ1157カマド

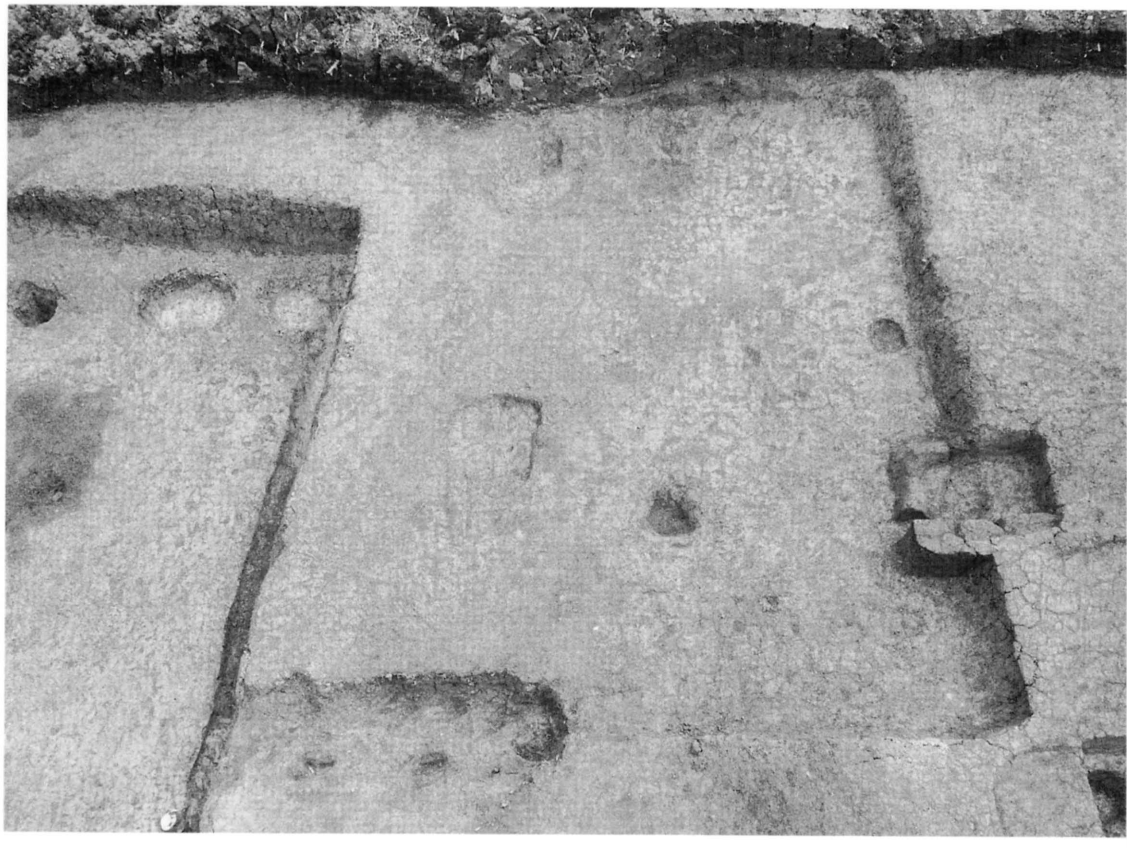
図版11

ＳＩ1164竪穴住居跡

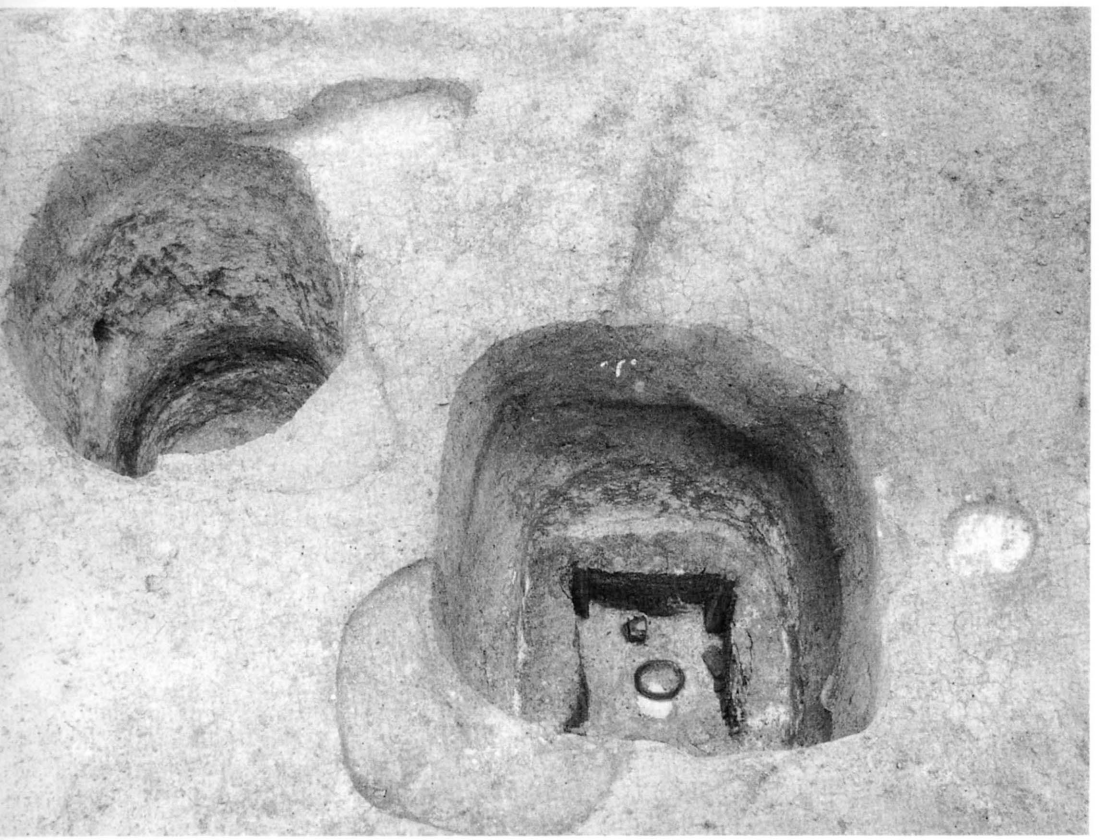
ＳＩ1164カマド



ＳＩ1165カマド

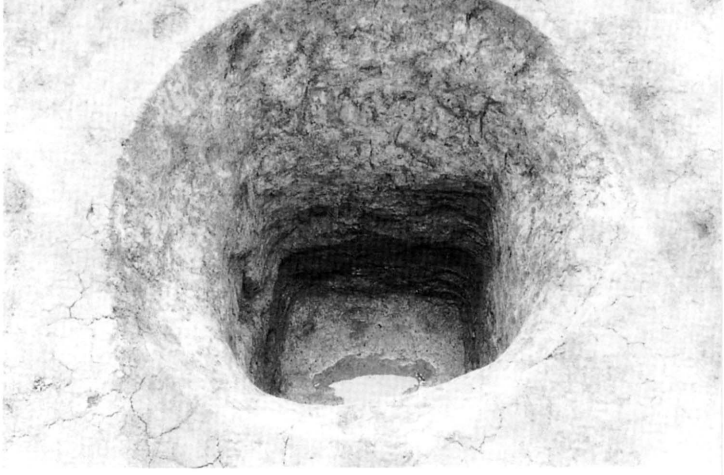


図版13　上・ＳＩ1165竪穴住居跡（西から）
下・ＳＩ1136竪穴住居跡（北から）

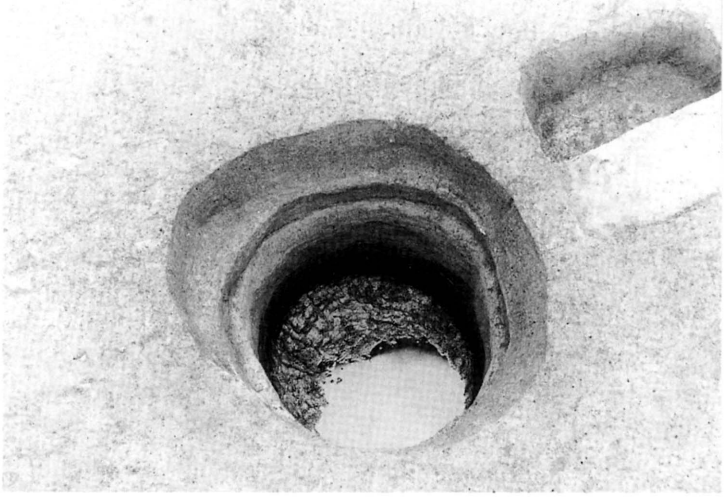


図版14　上・ＳＩ1137竪穴住居跡（西から）
下・ＳＥ1166, ＳＥ1167井戸跡（南から）

ＳＥ1168井戸跡
（南から）



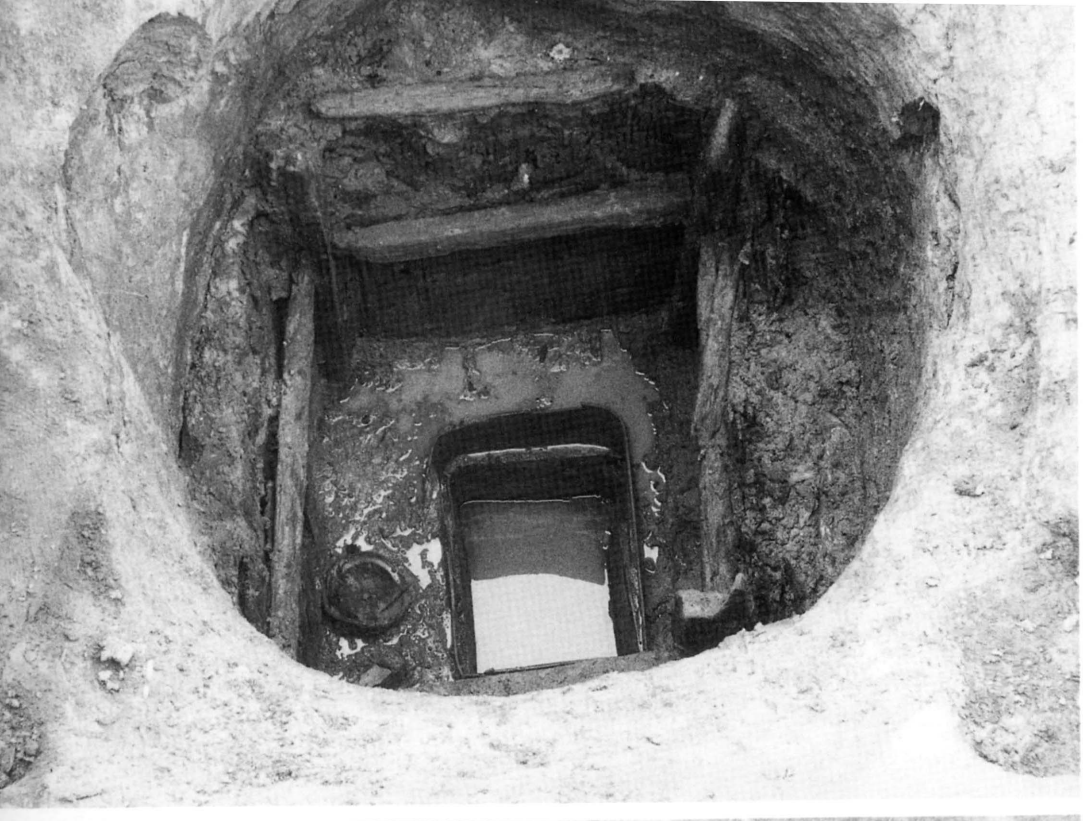
ＳＥ1169井戸跡
ＳＫ1193土壙
（東から）



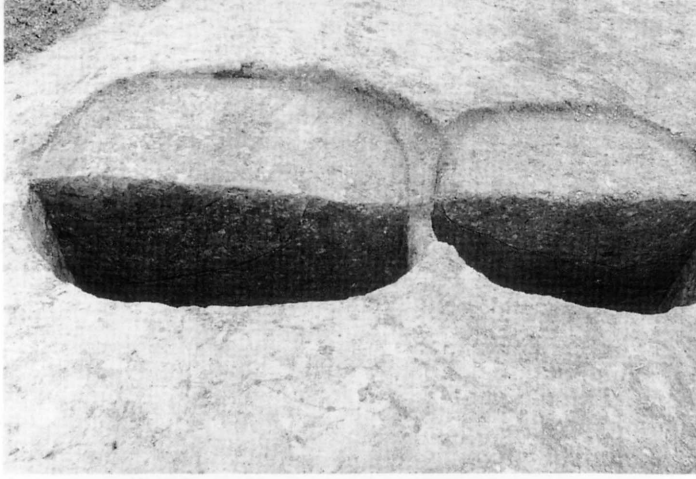
図版15
ＳＥ1171井戸跡（南から）

図版16　上・ＳＥ1171井戸跡牛骨出土状況（西から）
下・ＳＥ1171井戸跡曲物井筒

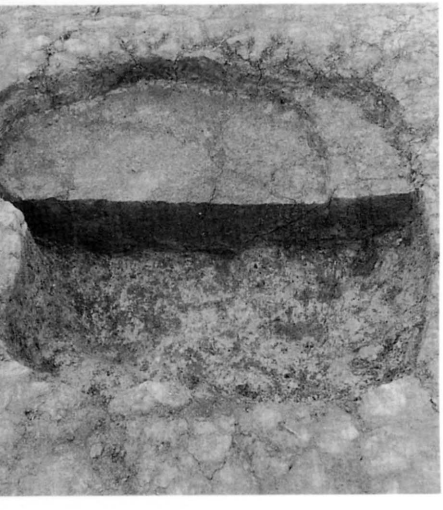
図版17　上・ＳＥ1172, ＳＥ1173井戸跡（西から）
下・ＳＥ1174, ＳＥ1175井戸跡（南から）

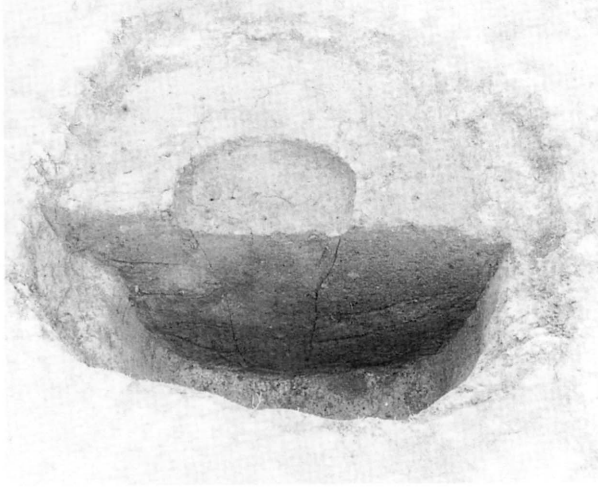


図版18　上・ＳＥ1176井側出土状況（南から）
下・ＳＥ1176井戸跡（南から）

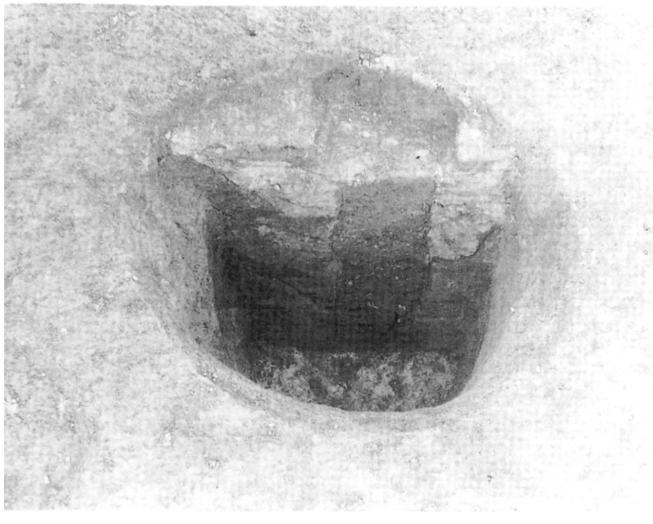


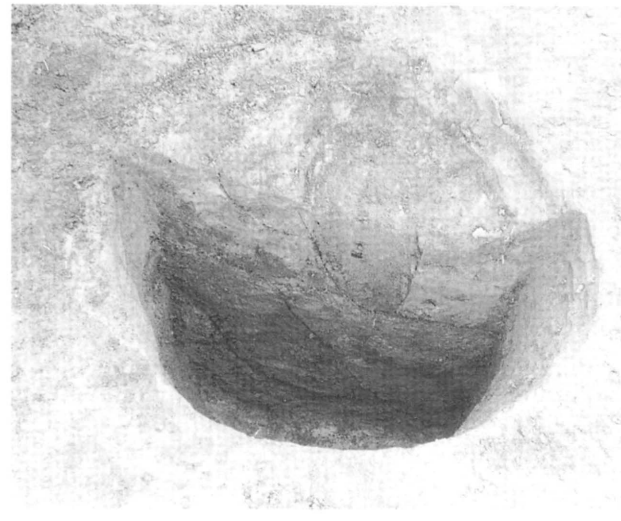
図版19　上・ＳＥ1177, ＳＥ1178井戸跡（南から）
下・ＳＡ1142布掘り溝（南から）





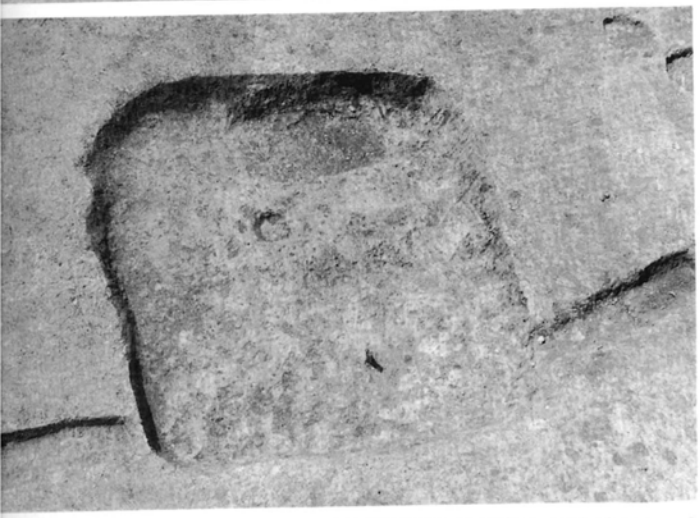
図版20　上・ＳＡ1179柱列（南から）
下・ＳＡ1179柱列掘り方断面



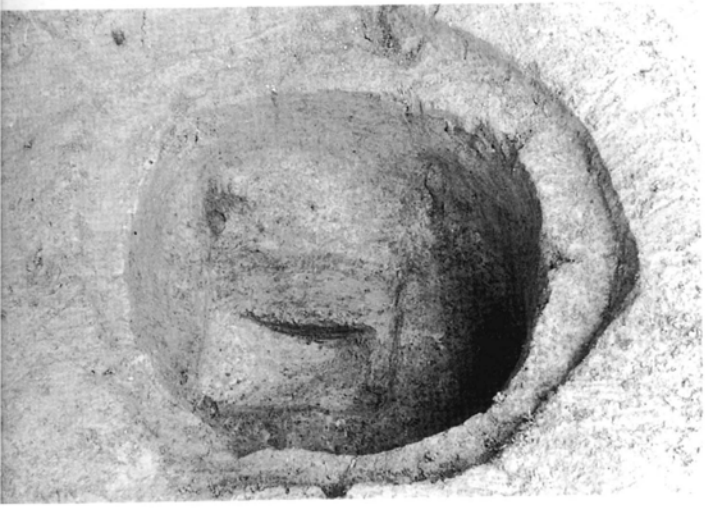


図版21　上・ＳＡ1182柱列（南から）
下・ＳＡ1182柱列掘り方断面

ＳＫ1191土壙

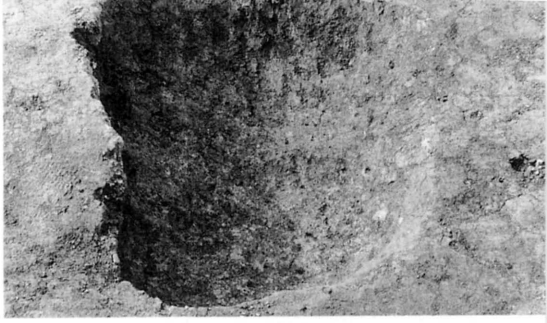


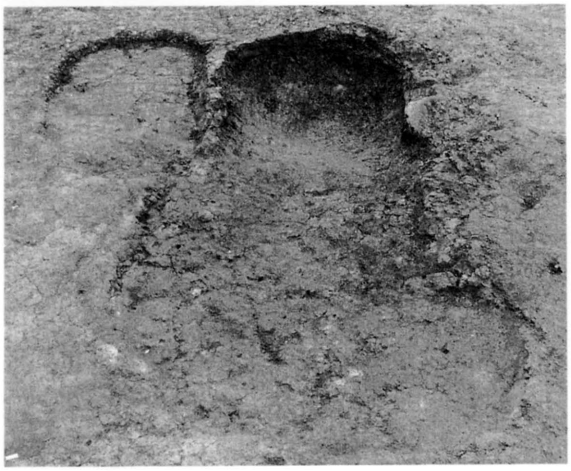
ＳＫ1192土壙

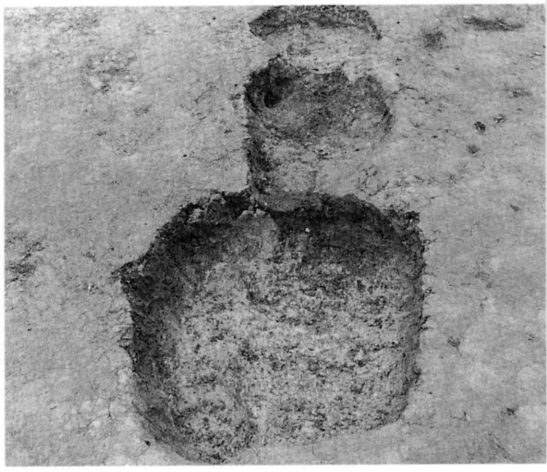


ＳＫ1198土壙

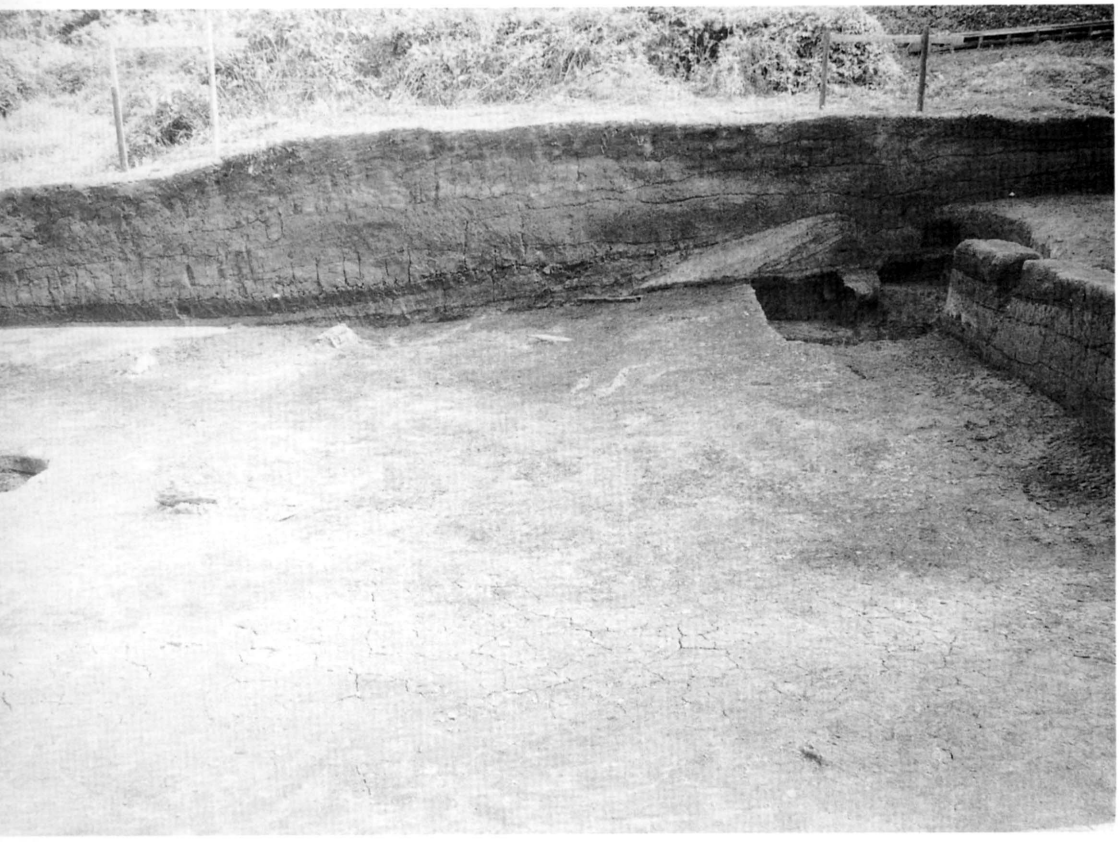
図版22





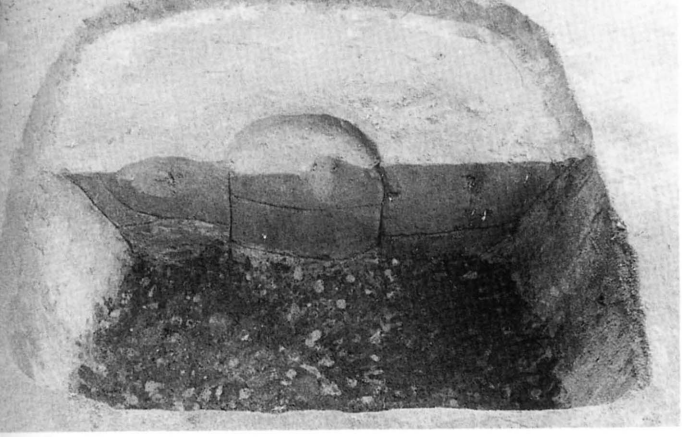


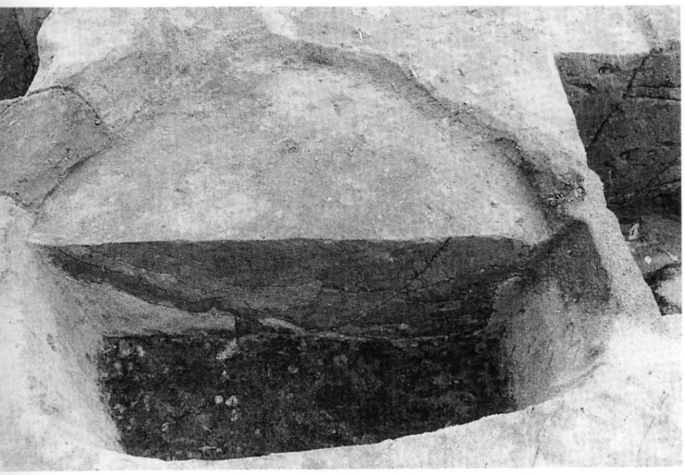
図版23　上・ＳＸ1202焼土遺構　ＳＸ1203焼土遺構
中・ＳＸ1204焼土遺構　ＳＸ1205焼土遺構
下・ＳＧ1206沼地跡（西から）

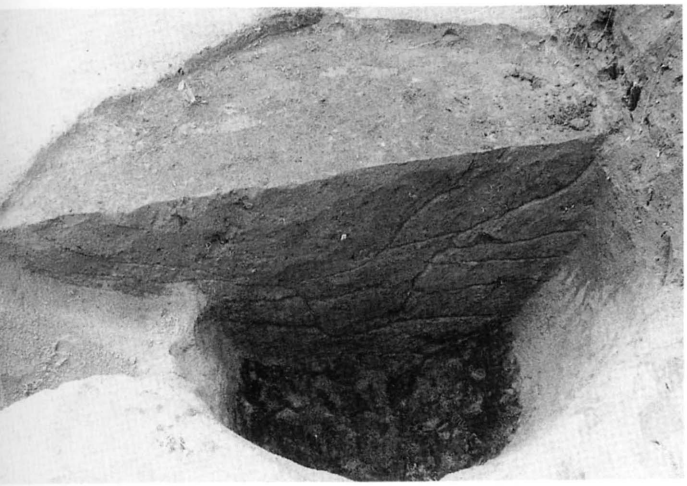


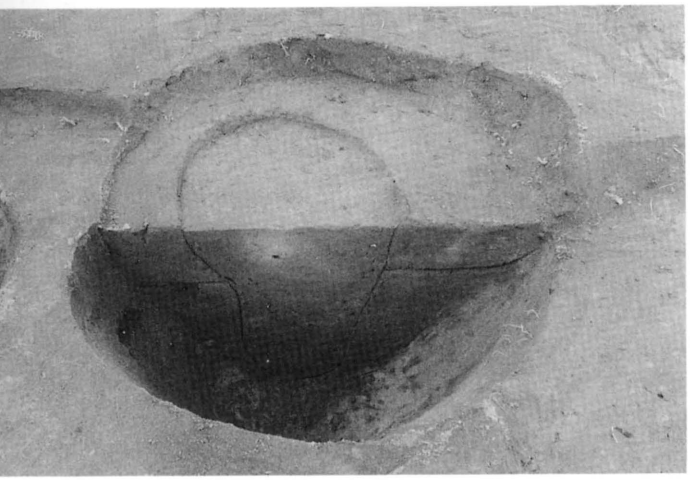
図版24　上・東側調査区北壁東半土層断面（ＳＧ1206土層堆積状況）（南から）
下・東側調査区東壁南半土層断面（ＳＧ1206土層堆積状況）（西から）

図版25　上・第59次調査遺構全景（北から）
下・ＳＢ1207建物跡（北から）







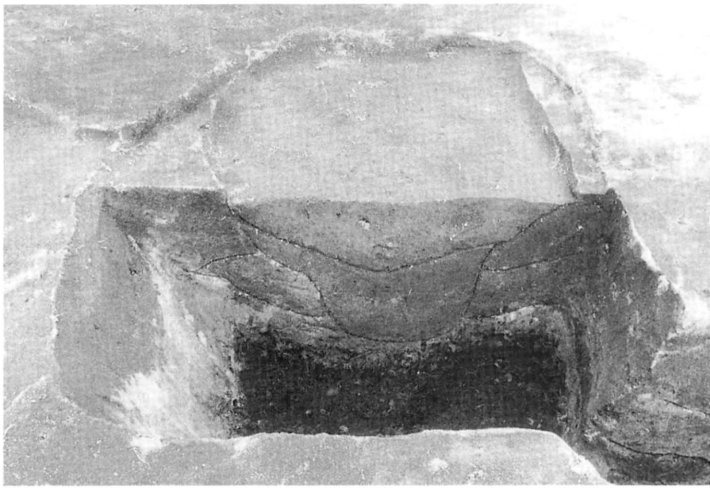


ＳＢ1207建物
掘り方断面図

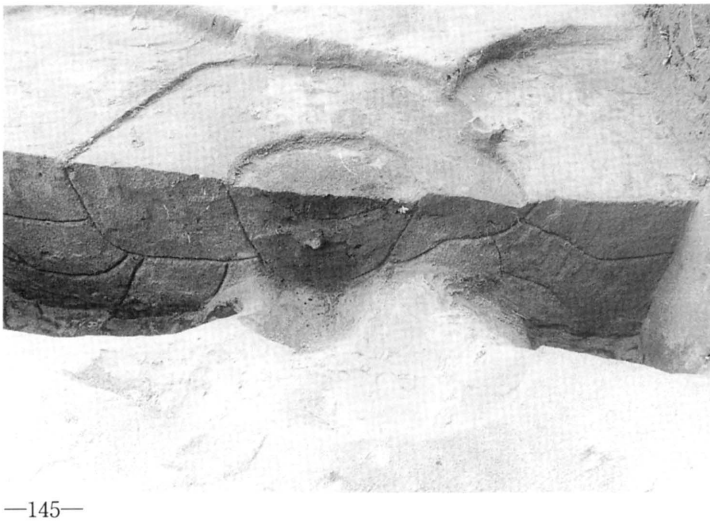
（間仕切り掘り方）

図版26

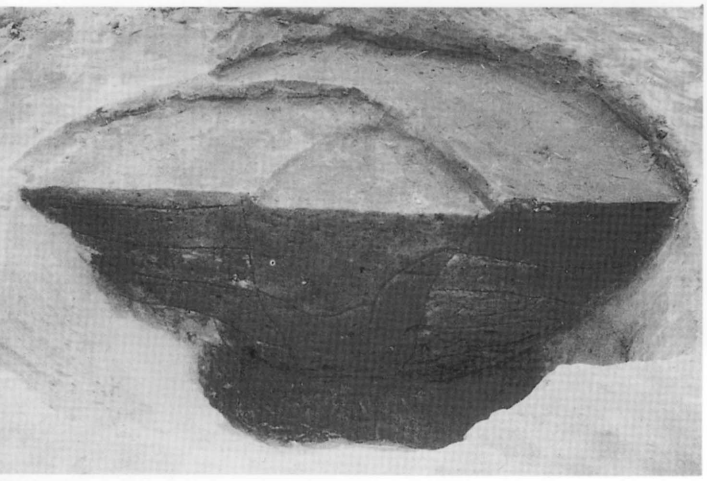
ＳＢ1208・ＳＢ1209建物跡

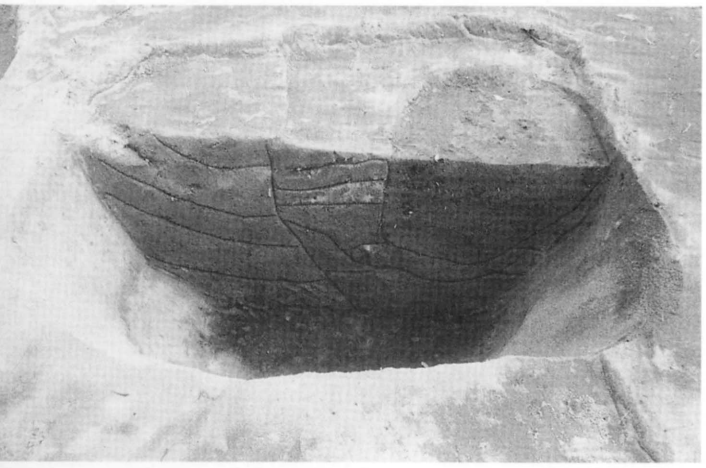


ＳＢ1208建物跡
掘り方断面

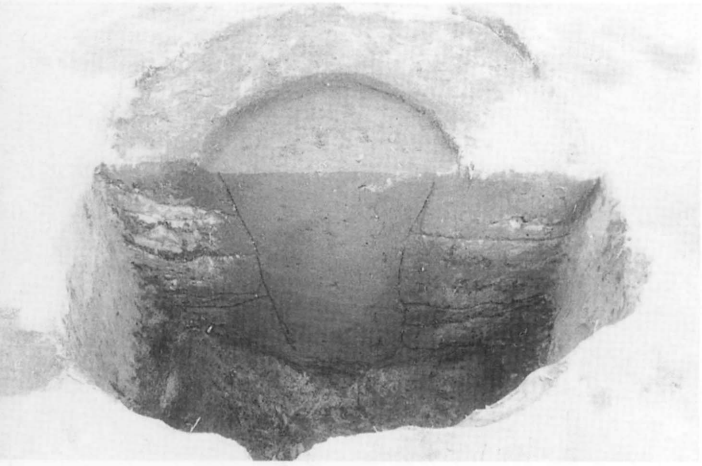


図版27



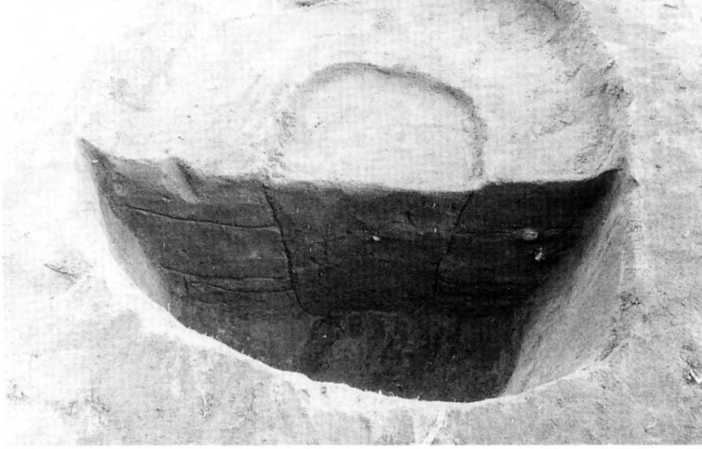


ＳＢ1208・ＳＢ1209建物跡
掘り方断面（重複）

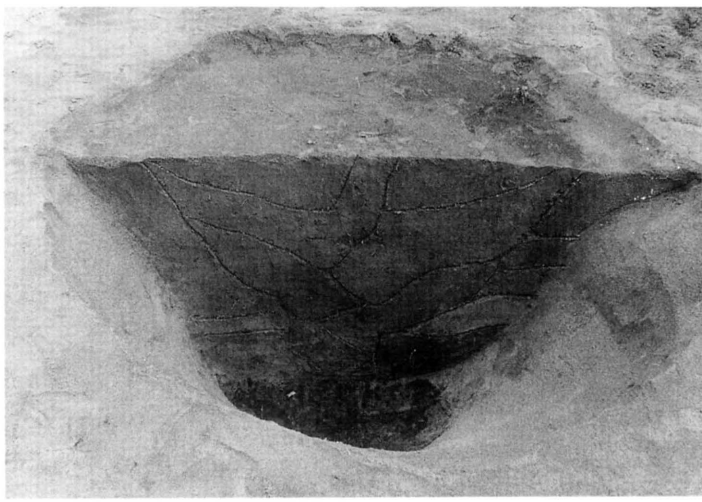


ＳＢ1209建物跡
掘り方断面

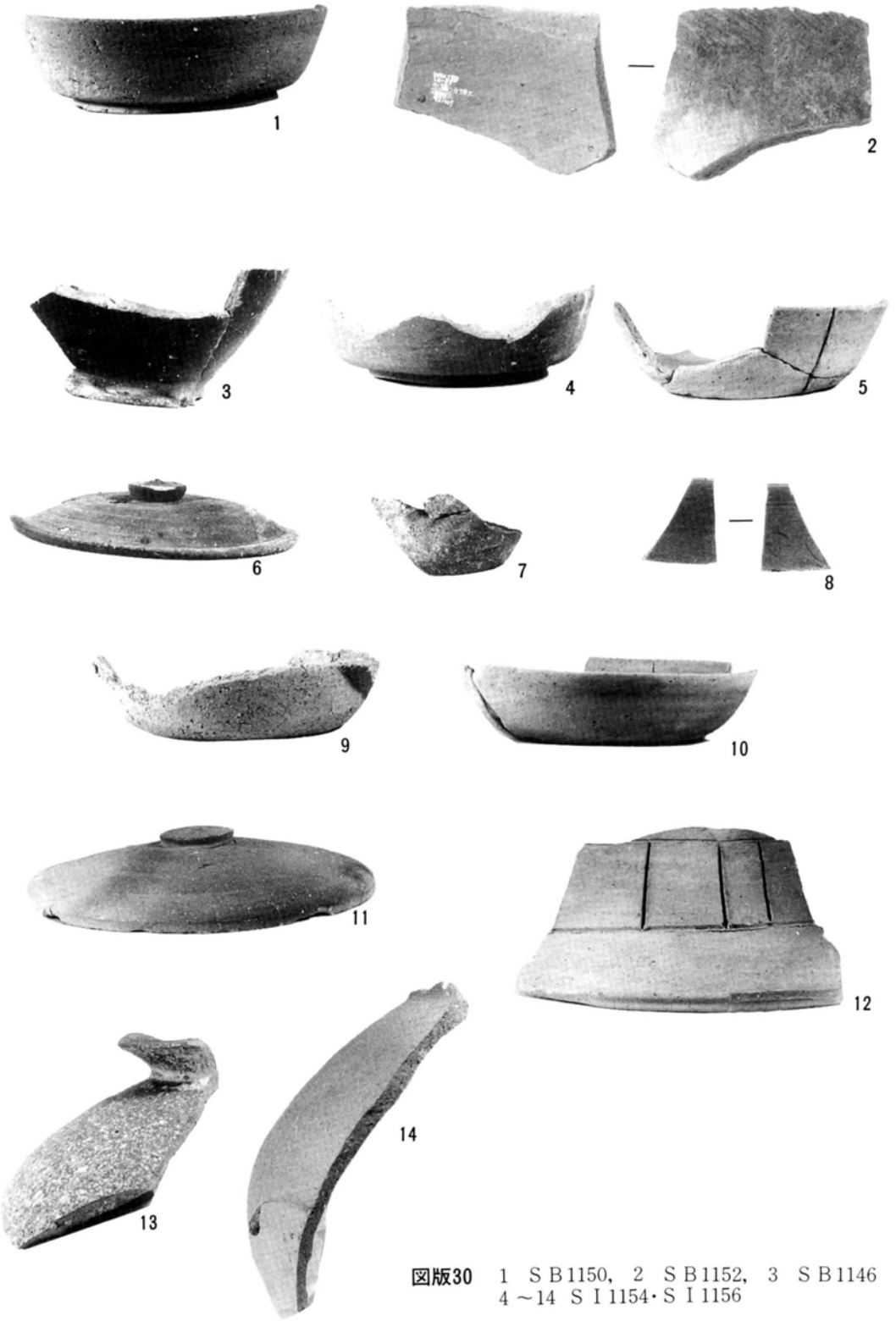
図版28



ＳＢ1209建物跡
掘り方断面

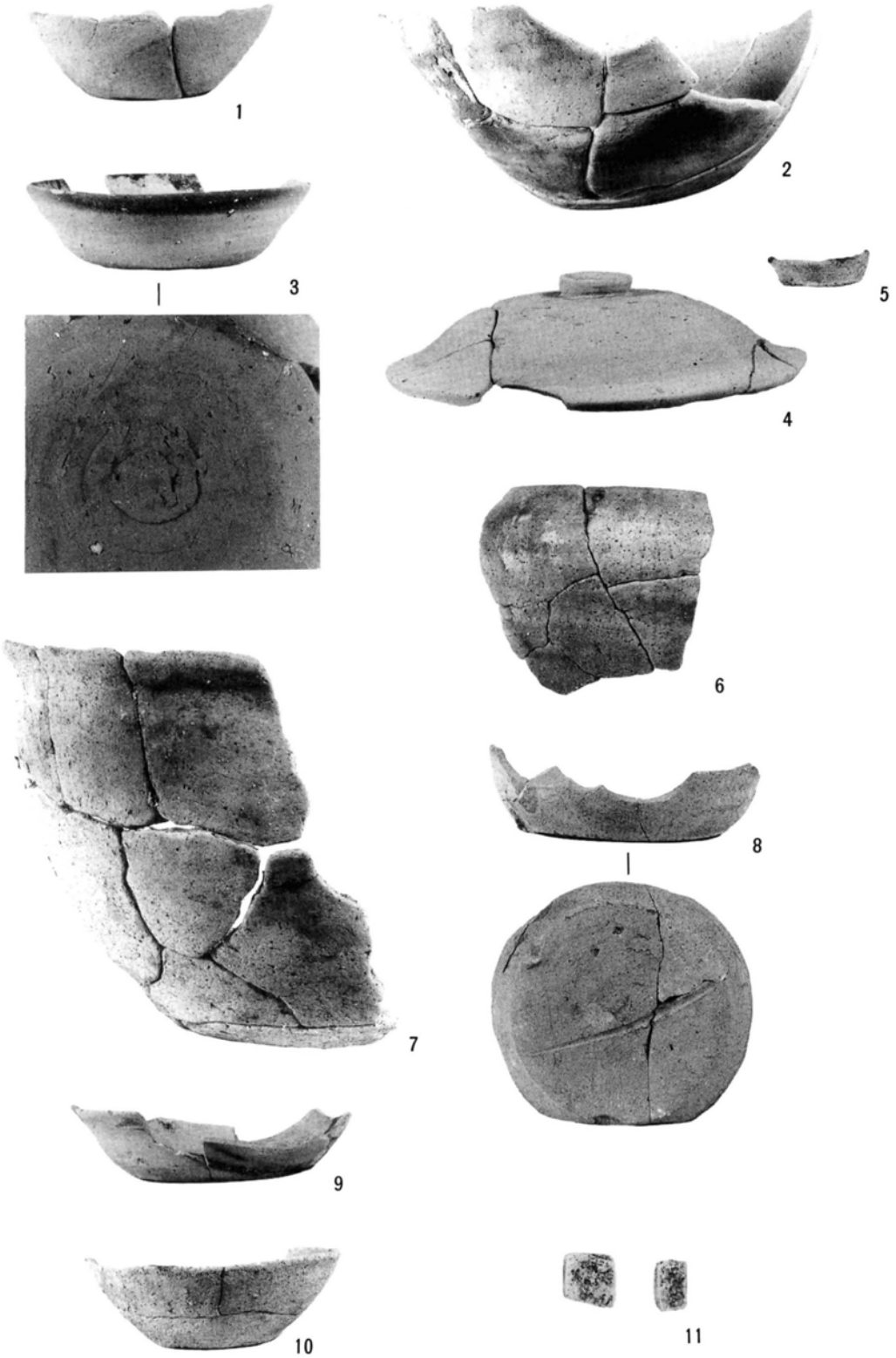


図版29
ＳＩ1210竪穴住居跡
ＳＸ1211焼土遺構

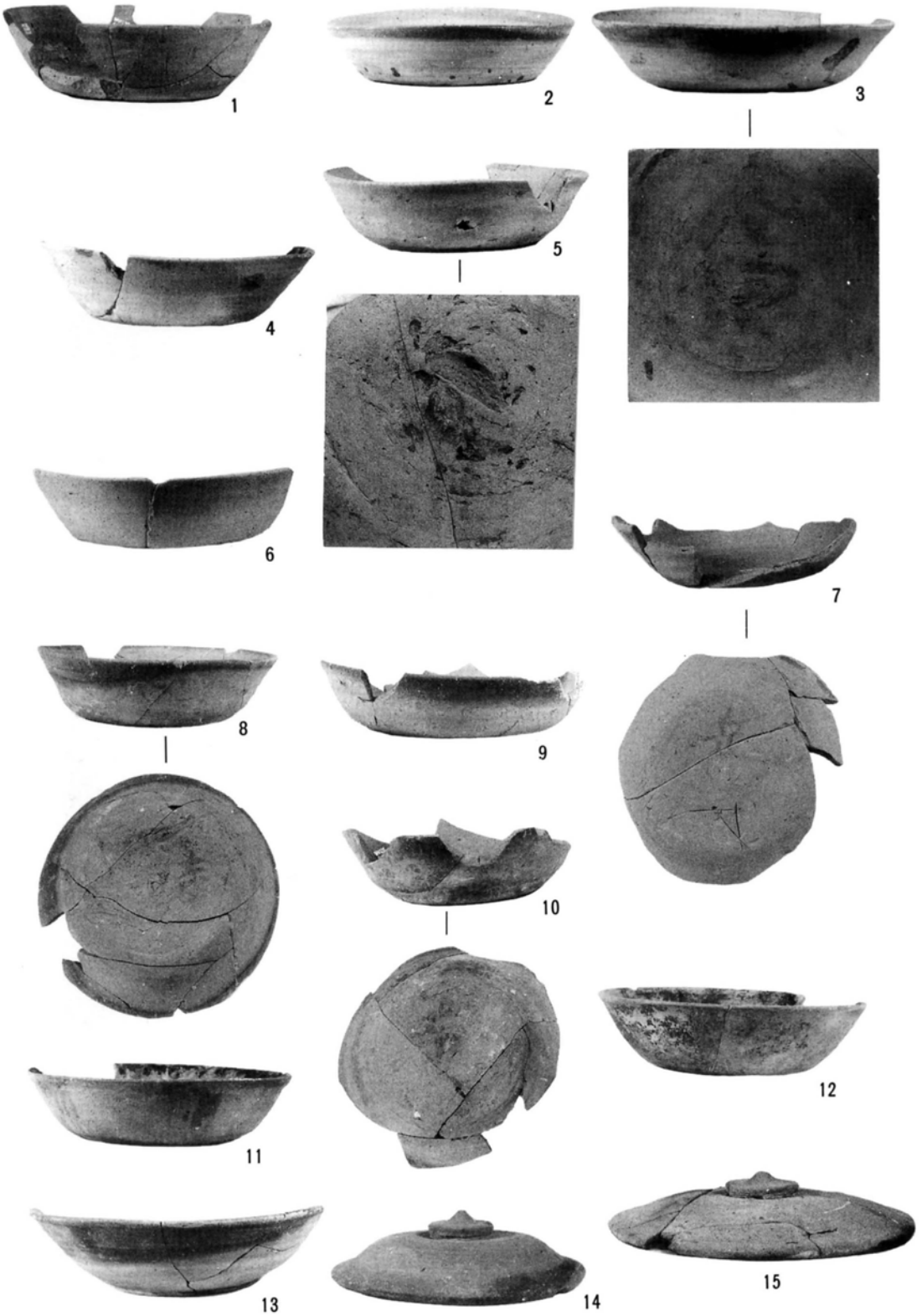


図版30　1　ＳＢ1150，2　ＳＢ1152，3　ＳＢ1146
4～14　ＳＩ1154・ＳＩ1156

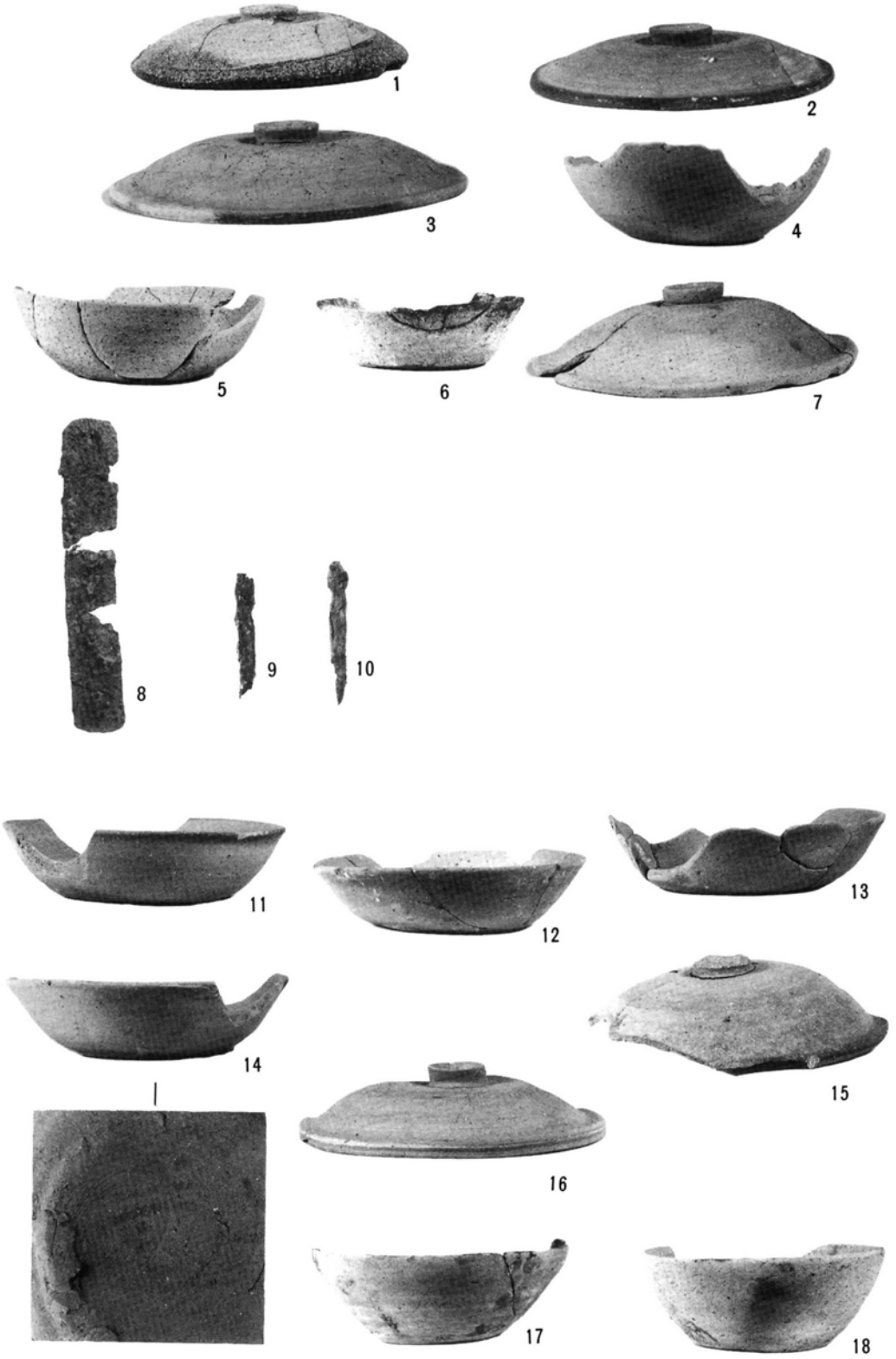
図版31　1～9　S I 1157，10～11　S I 1158



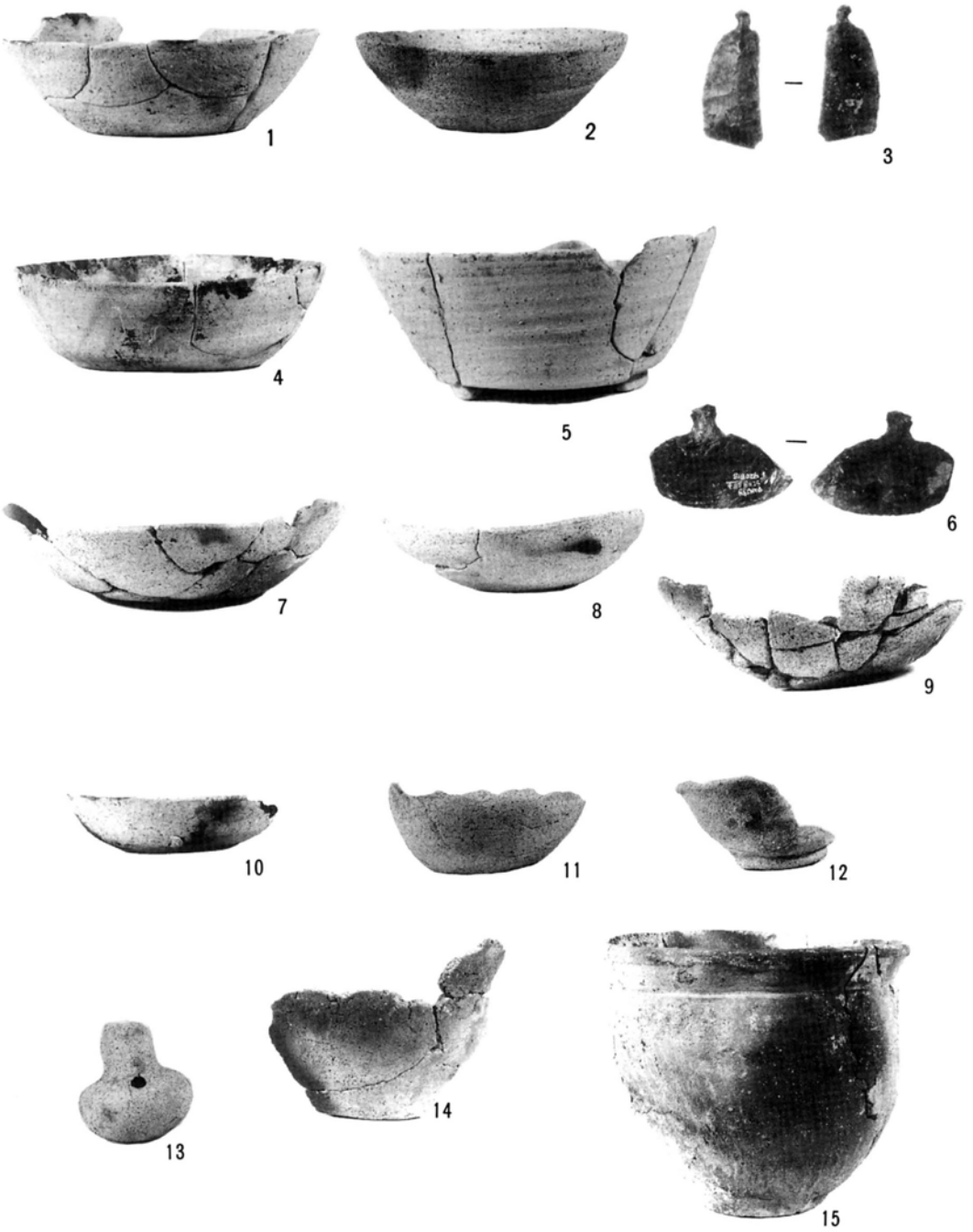
図版32　1～2　S I 1158,　3～11　S I 1159・S I 1160・S I 1161



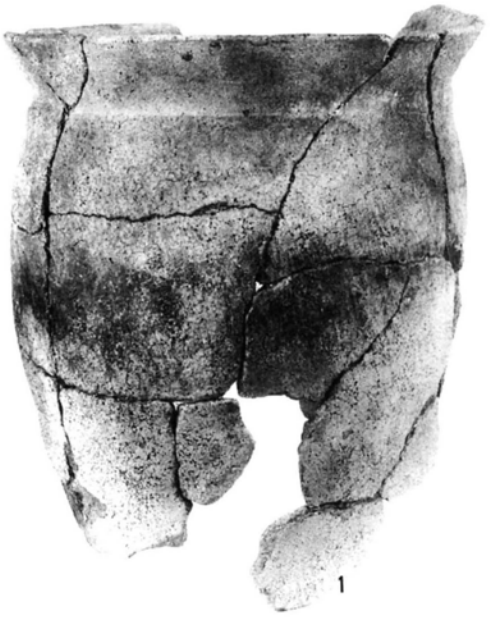
図版33　1～15　S I 1162



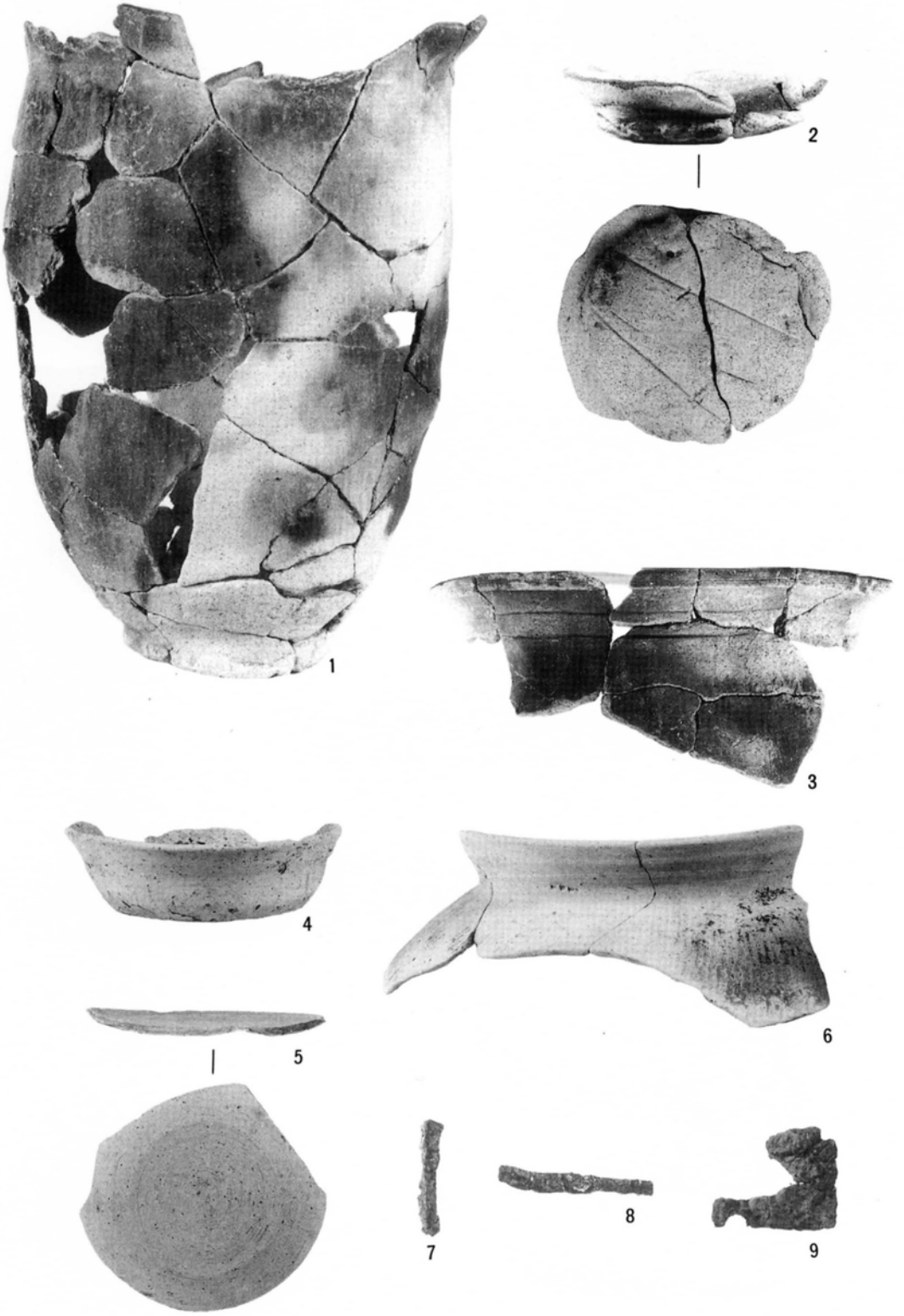
図版34　1～10　S I 1162, 11～18　S I 1163



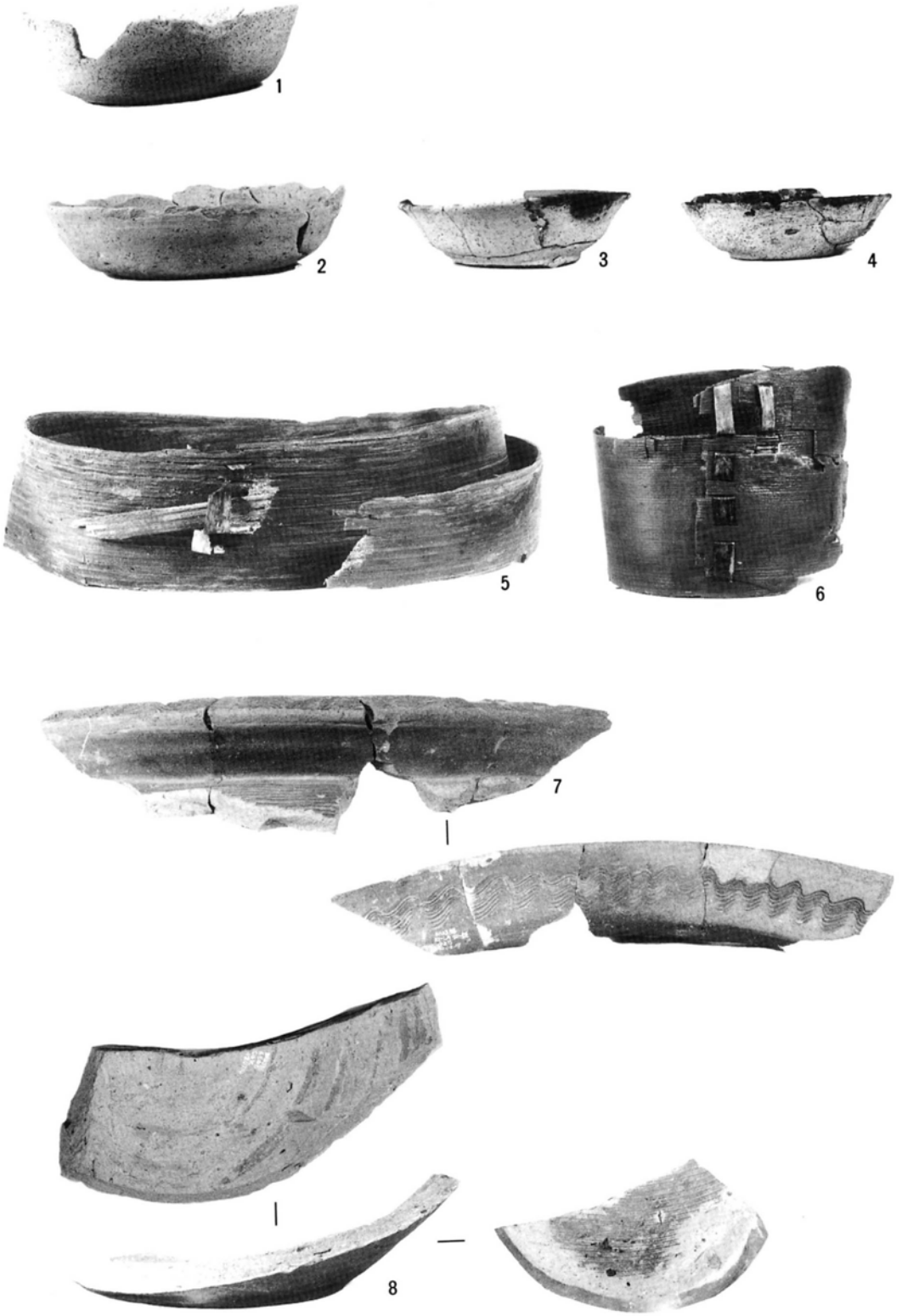
図版35　1～3　S I 1163,　4～6　S I 1164,　7～15　S I 1165



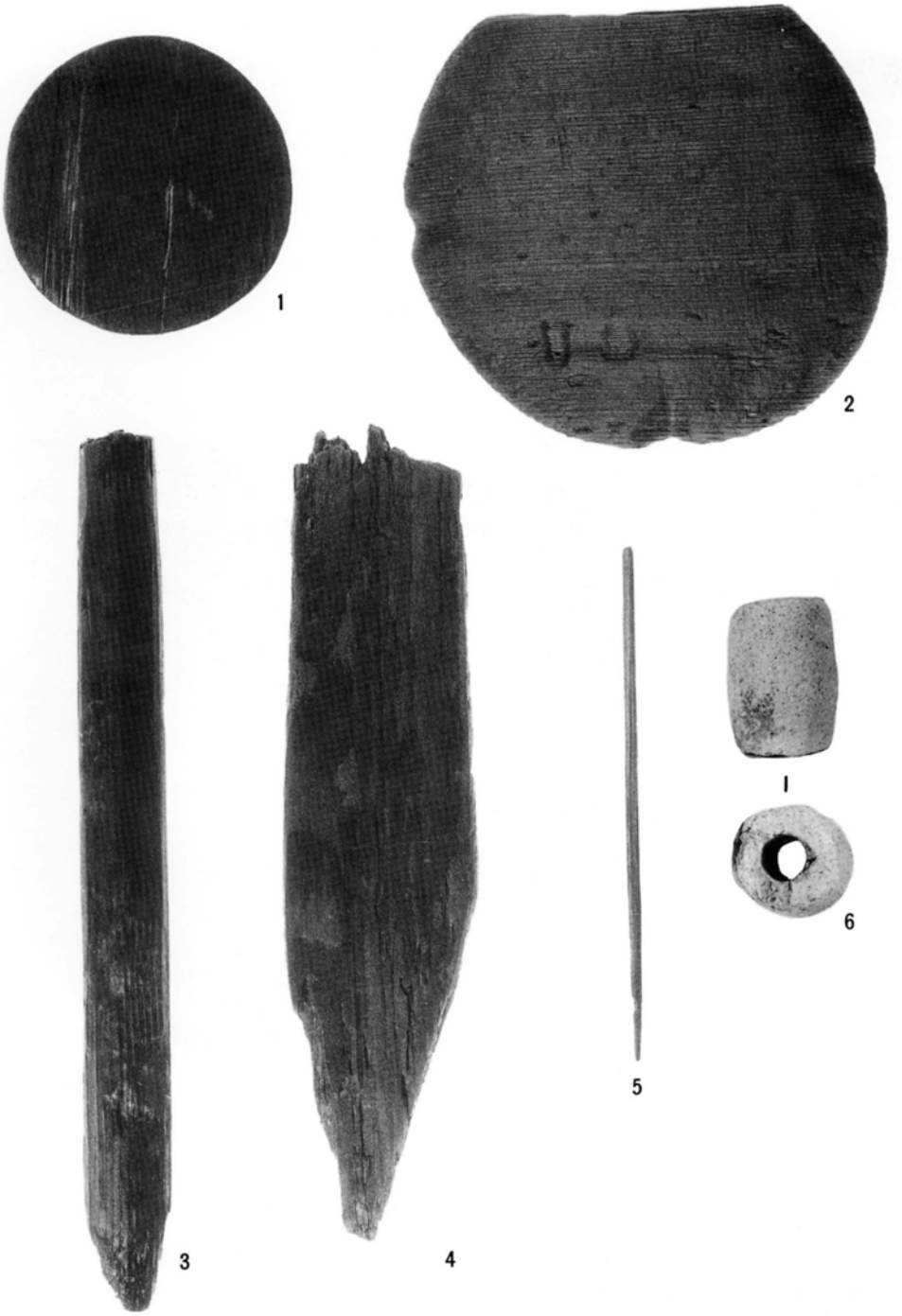
図版36　1～4　S I 1165



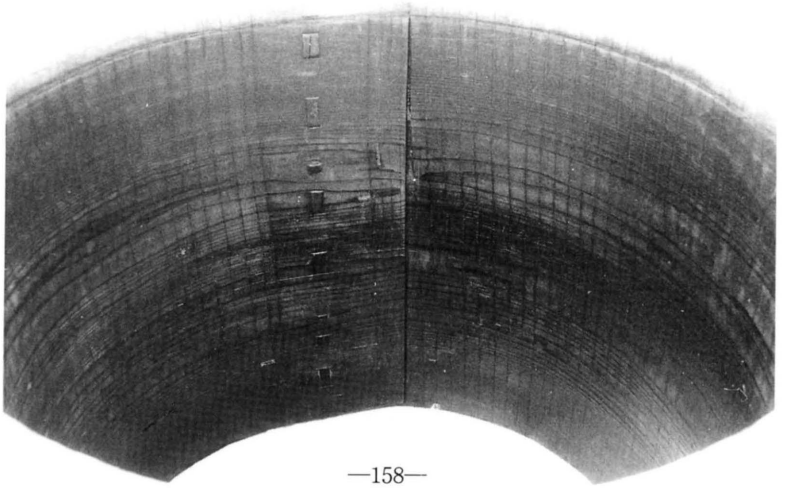
図版37　1～9　S I 1165



図版38　1　S I 1136,　2～4　S I 1137
5～6　S E 1166,　7～8　S E 1171

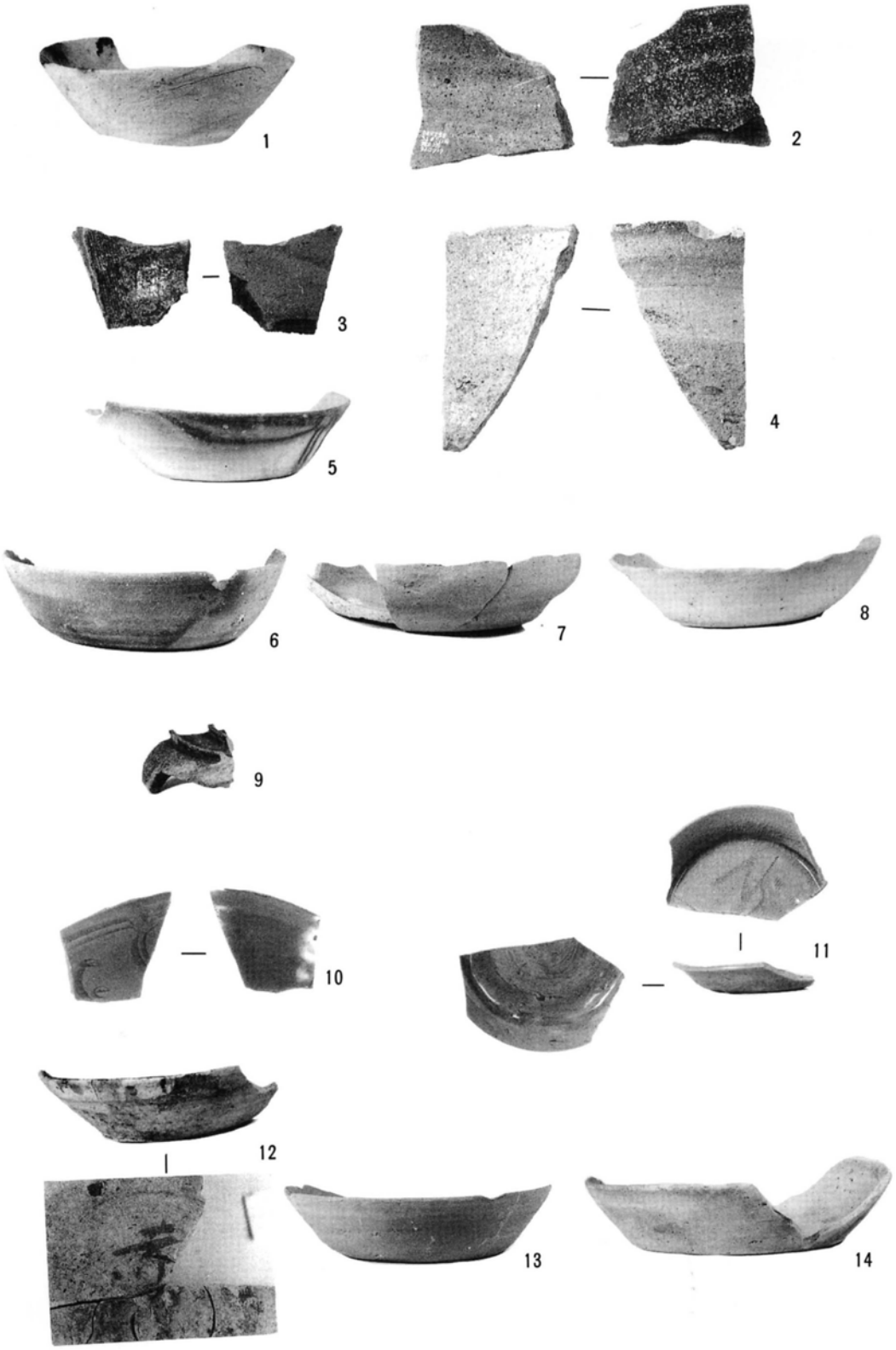


図版39　1～6　ＳＥ1171

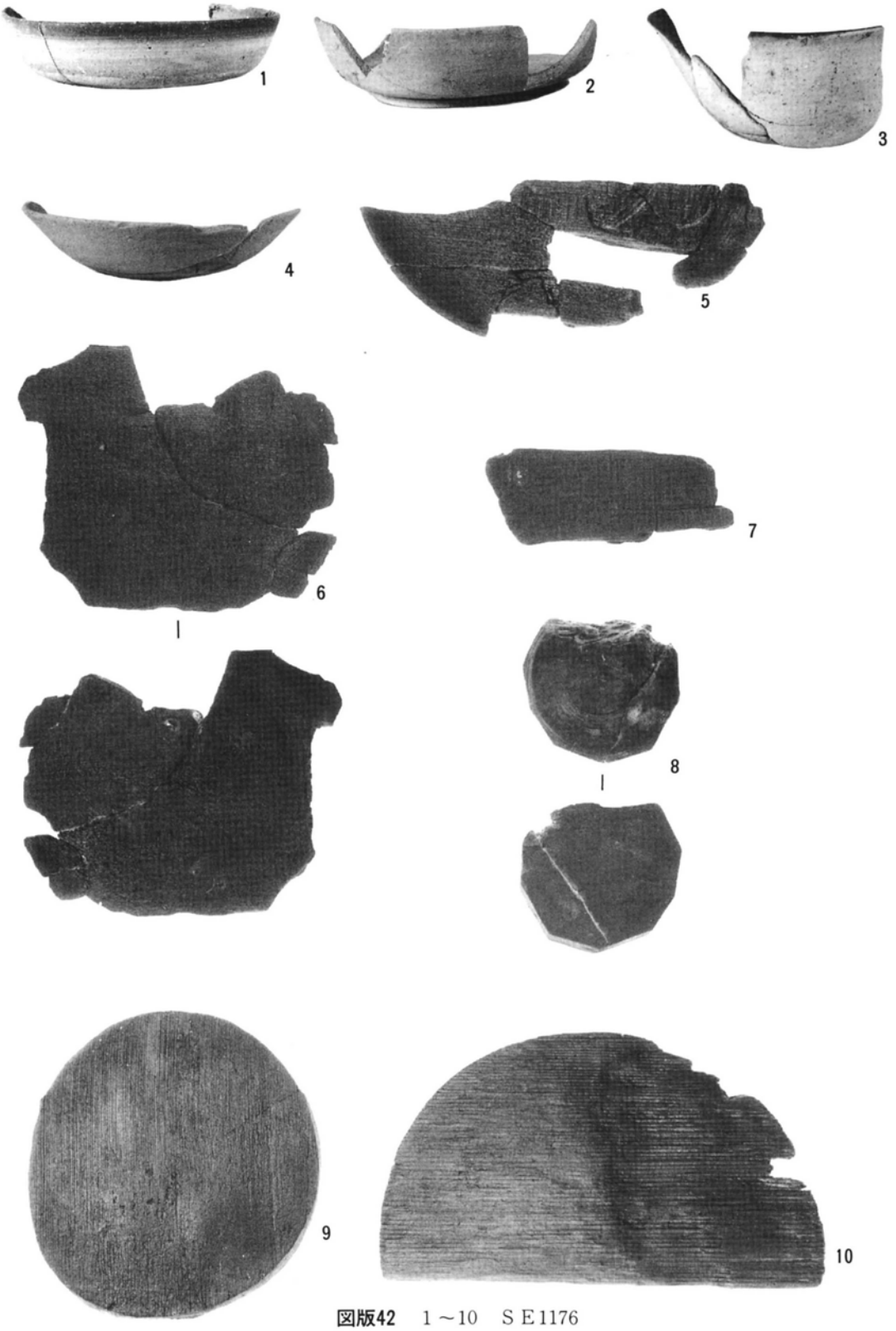


図版40
ＳＥ1171井筒

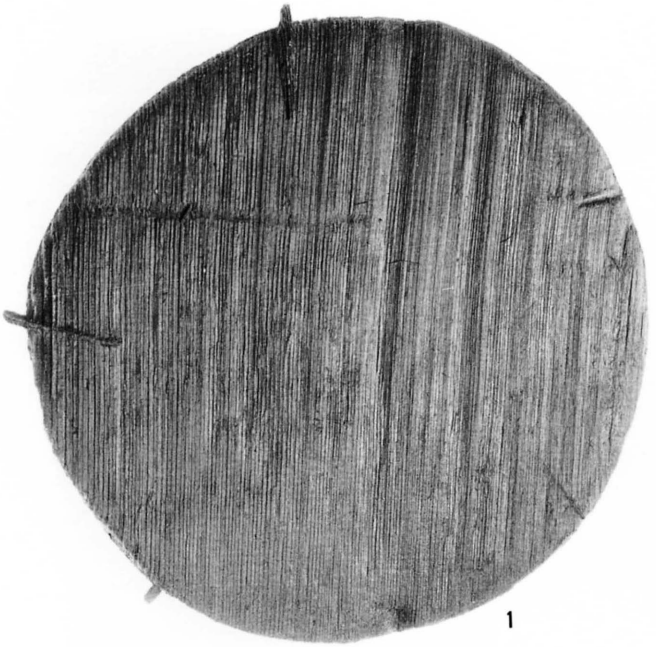
(1/5)



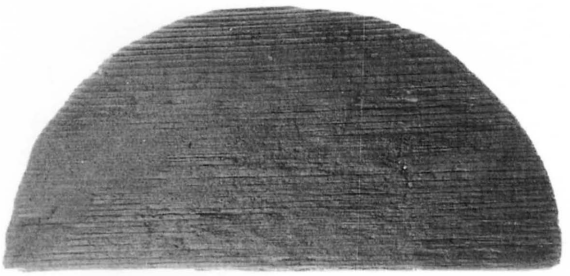
図版41　1～9　S E1173，10～11　S E1174
12～14　S E1176



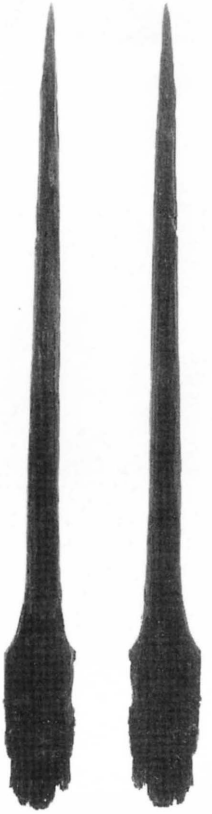
図版42　1～10　ＳＥ1176



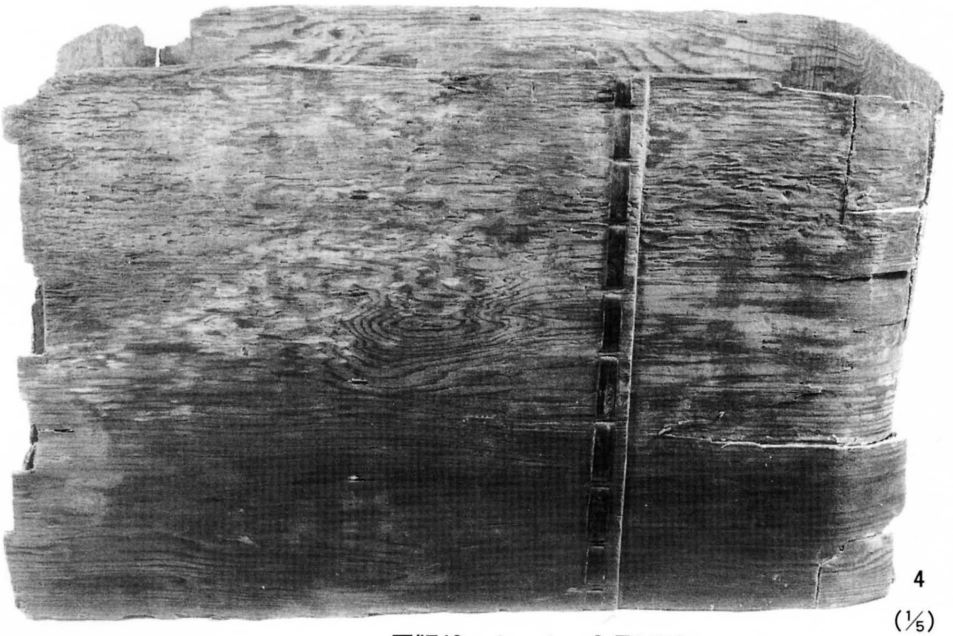
1



2



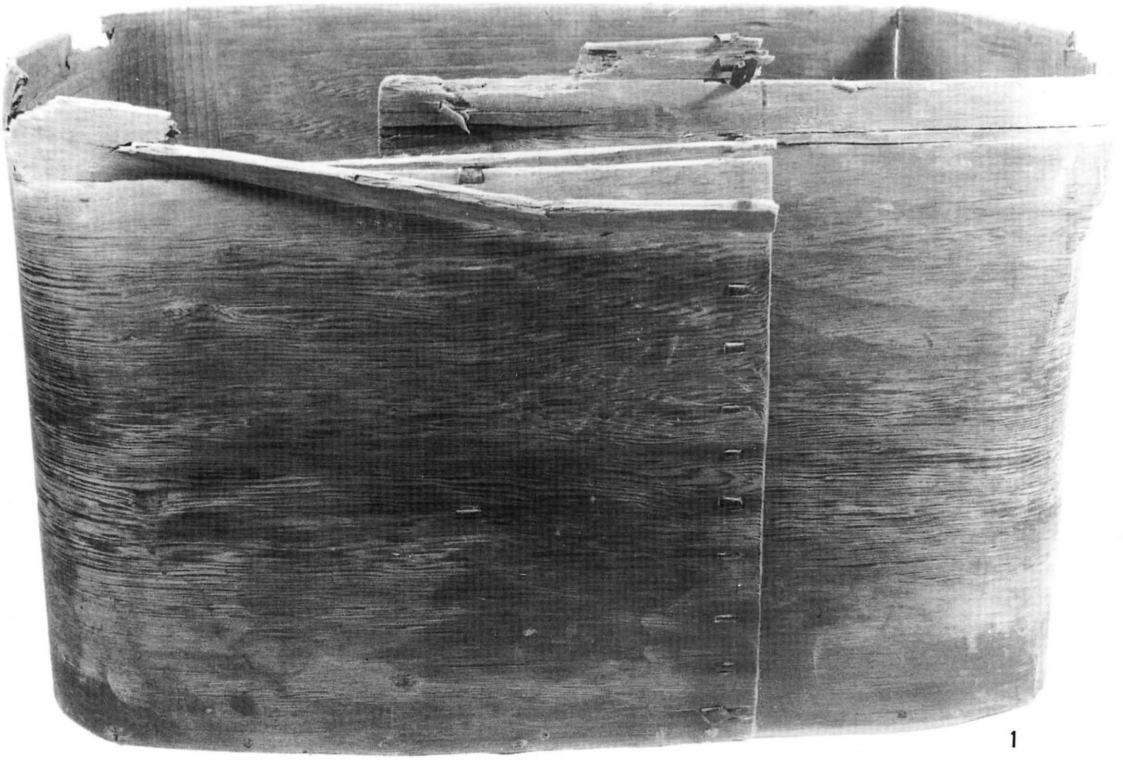
3



4

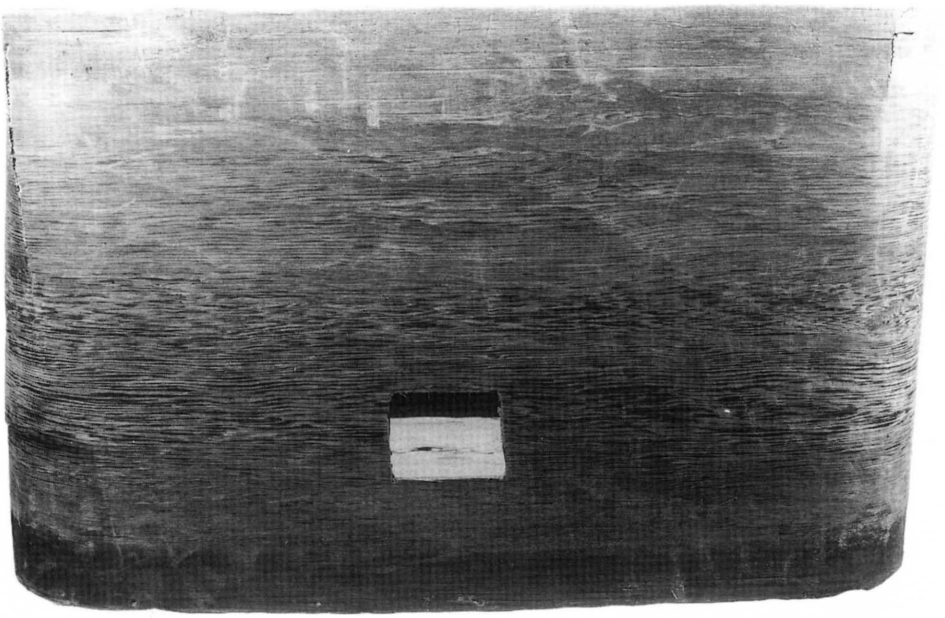
(1/5)

図版43　1～4　S E1176

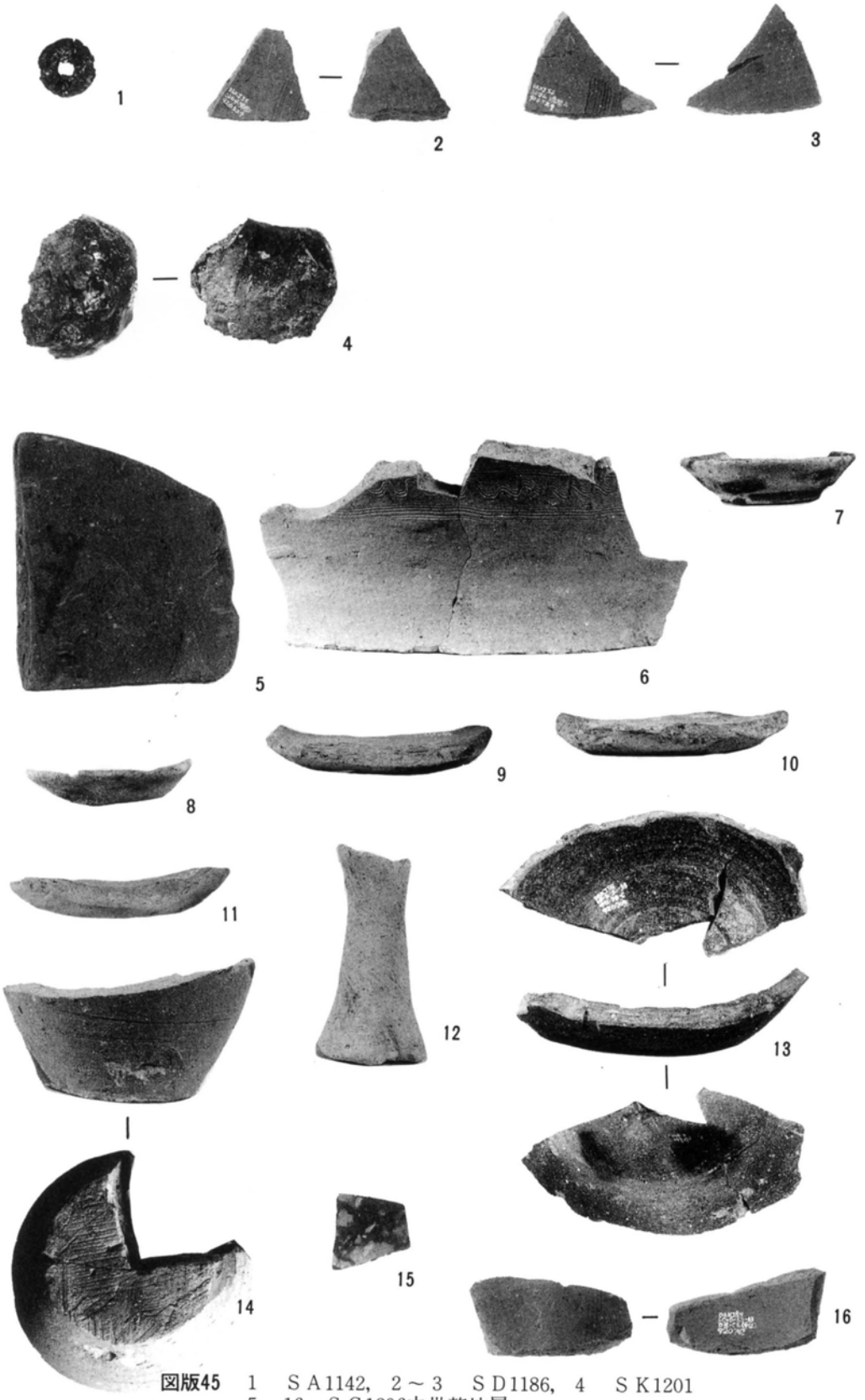


1

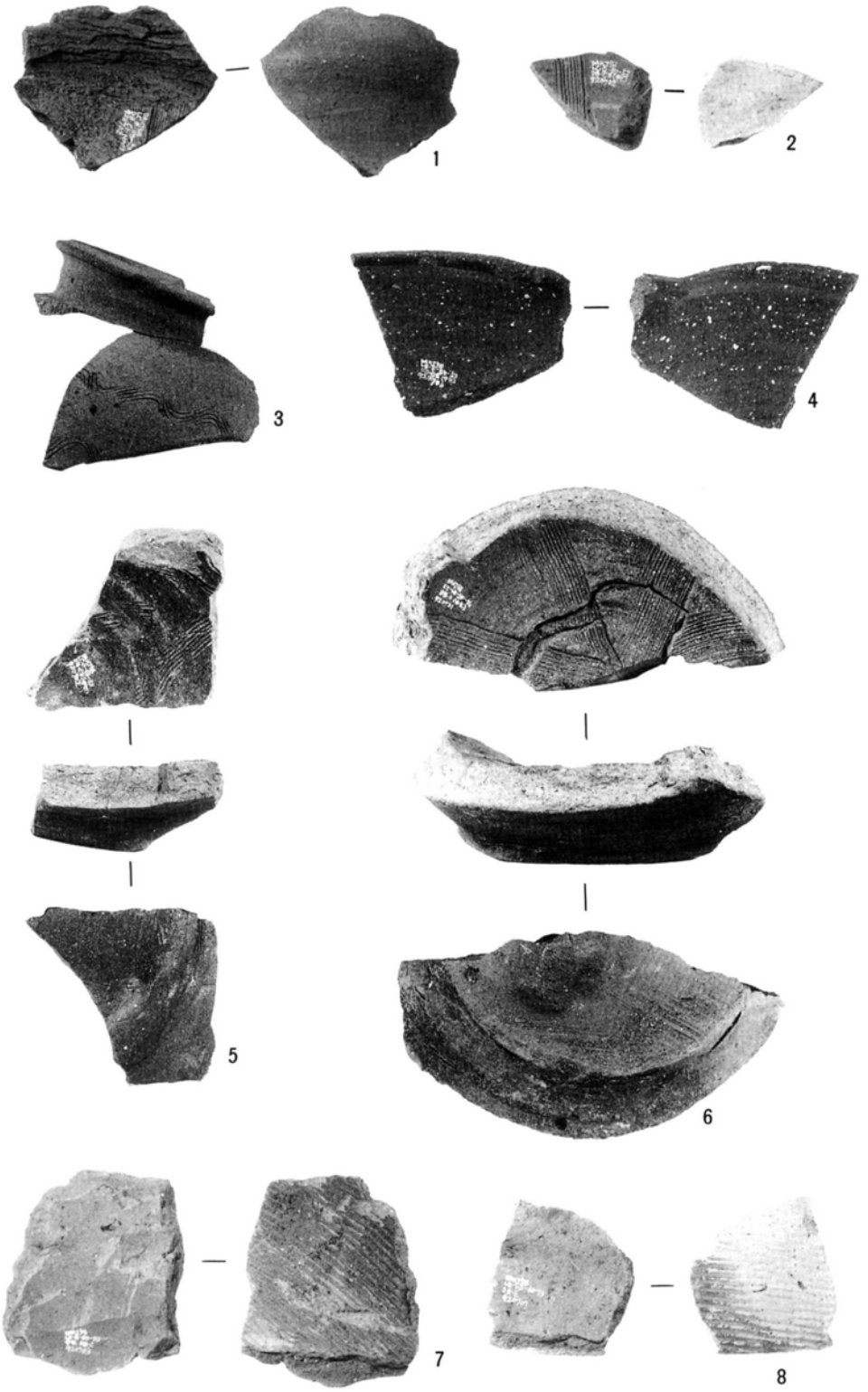
(1/5)



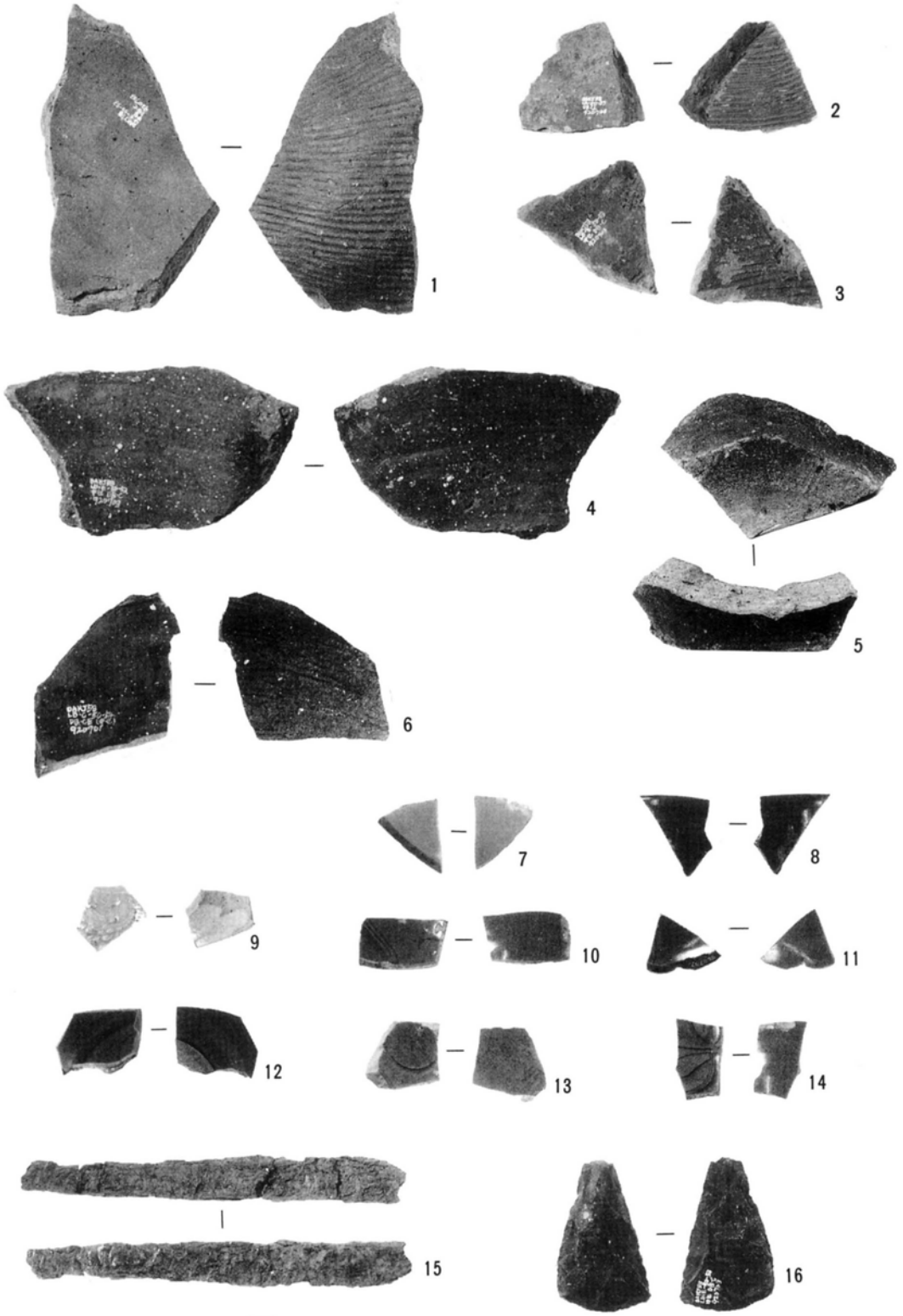
図版44　1　ＳＥ1176



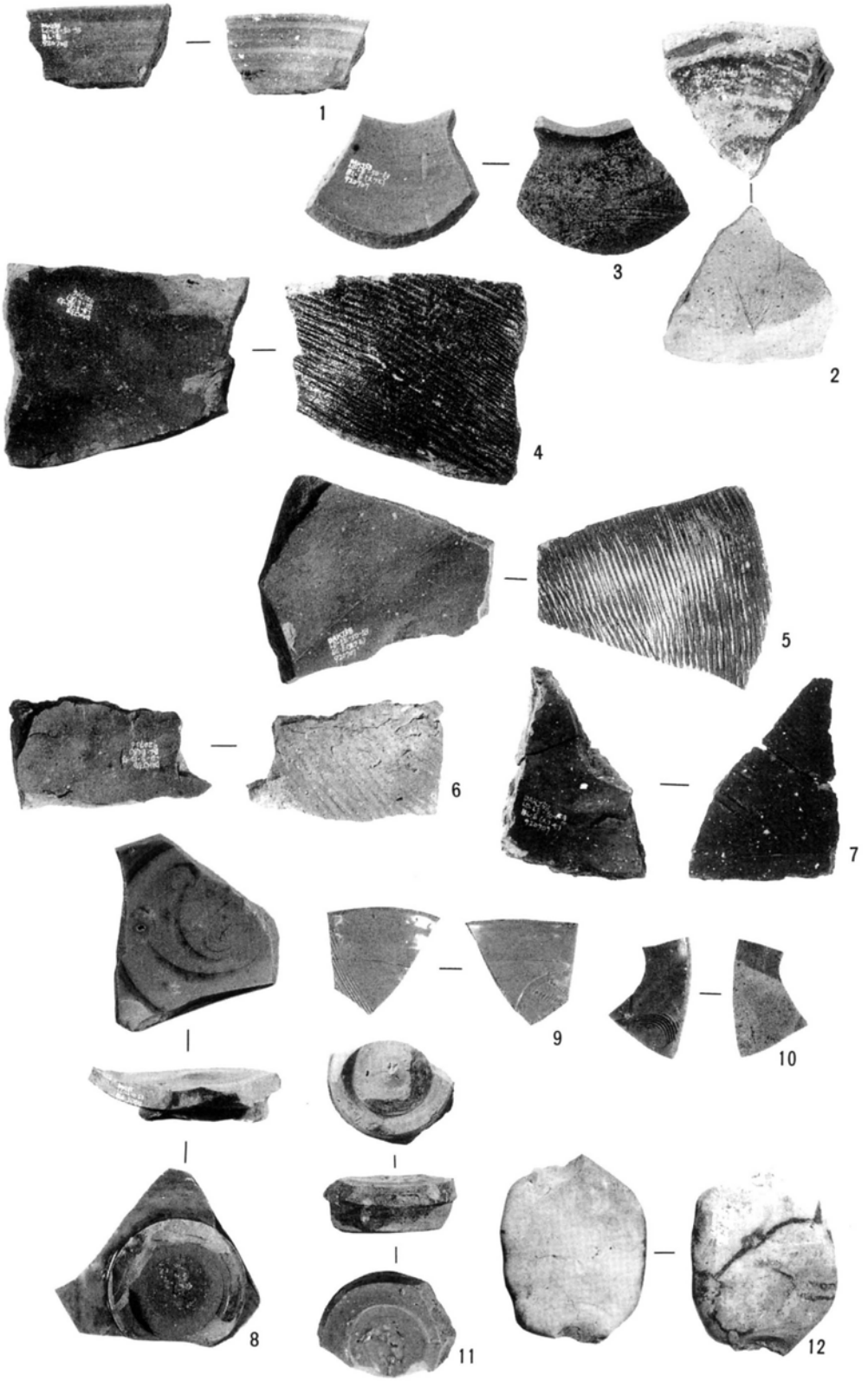
図版45　1　ＳＡ1142，　2～3　ＳＤ1186，　4　ＳＫ1201
5～16　ＳＧ1206中世整地層



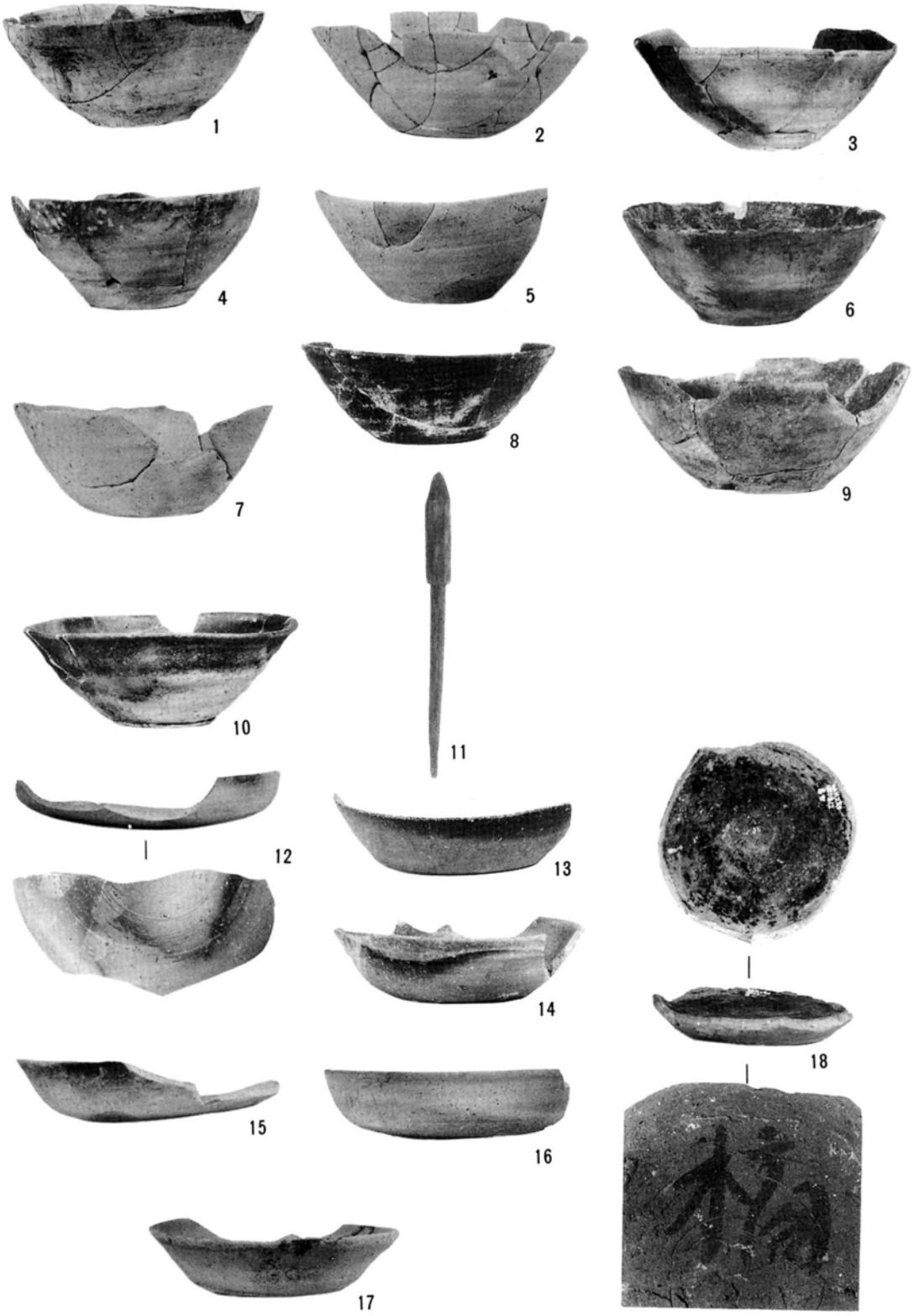
図版46　1～8　ＳＧ1206中世整地層



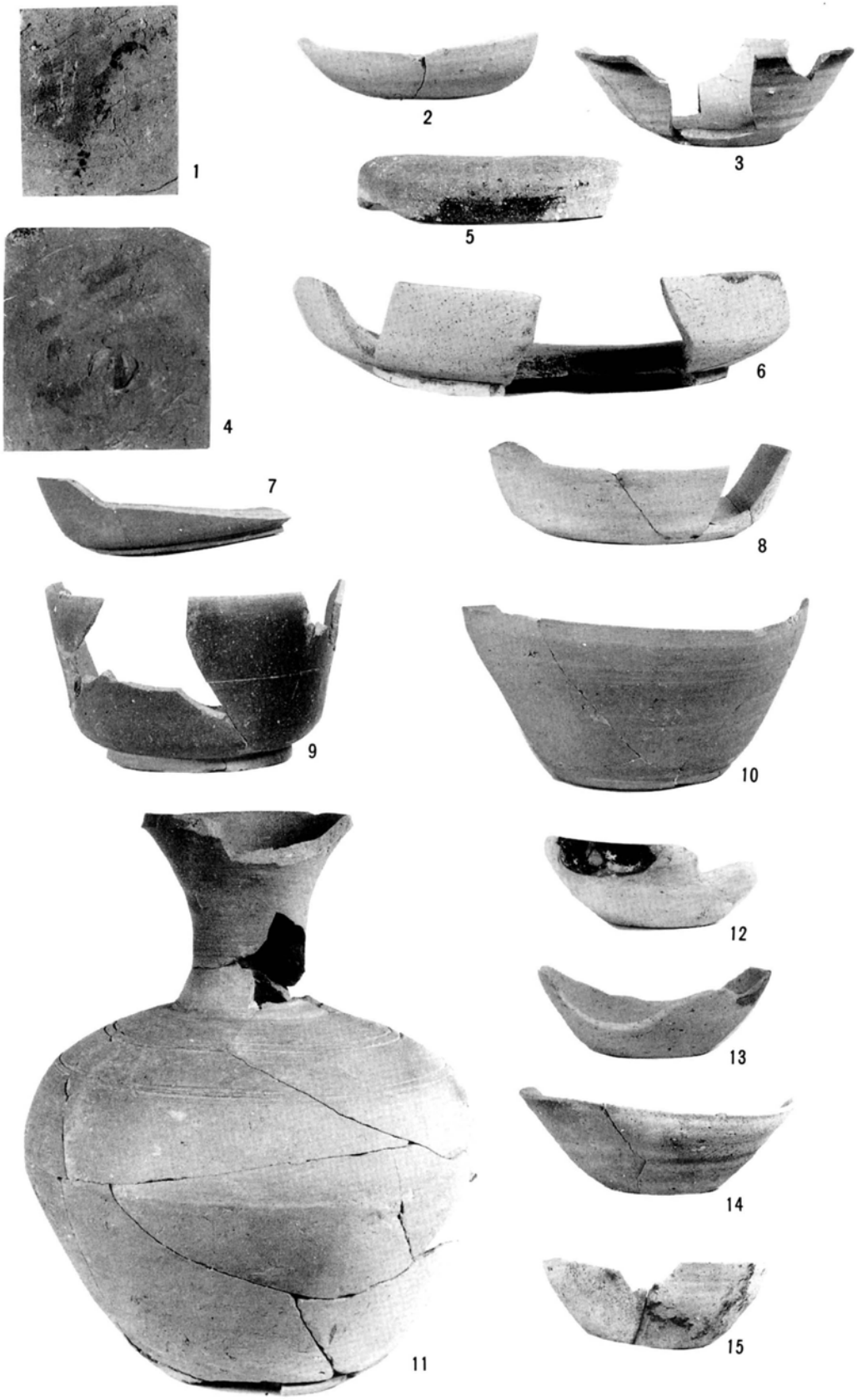
図版47　1～16　ＳＧ1206中世整地層



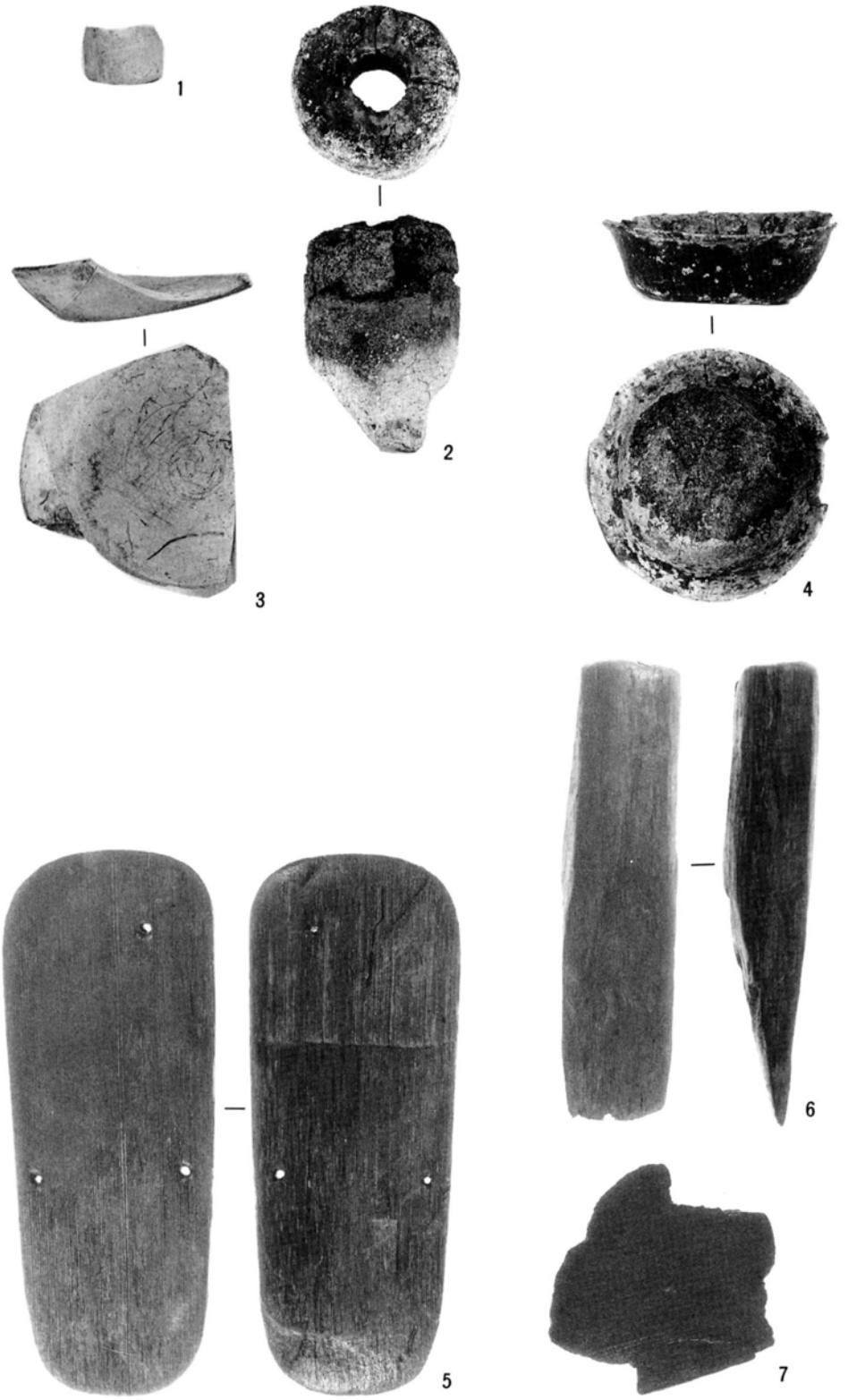
図版48　1～12　ＳＧ1206中世整地層下面・上層スクモ層上面



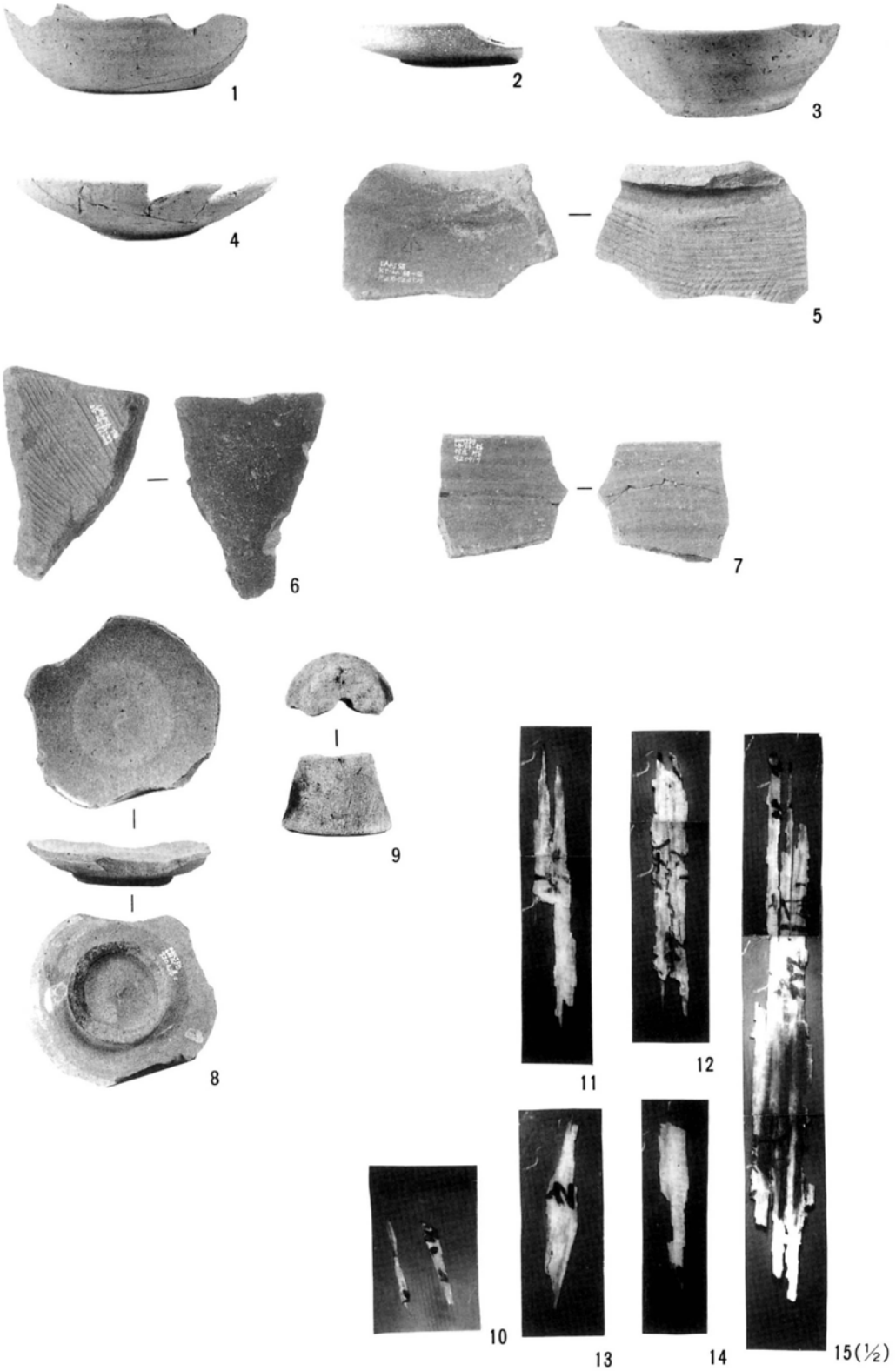
図版49　1～11　ＳＧ1206上層スクモ，12～18　ＳＧ1206古代整地層



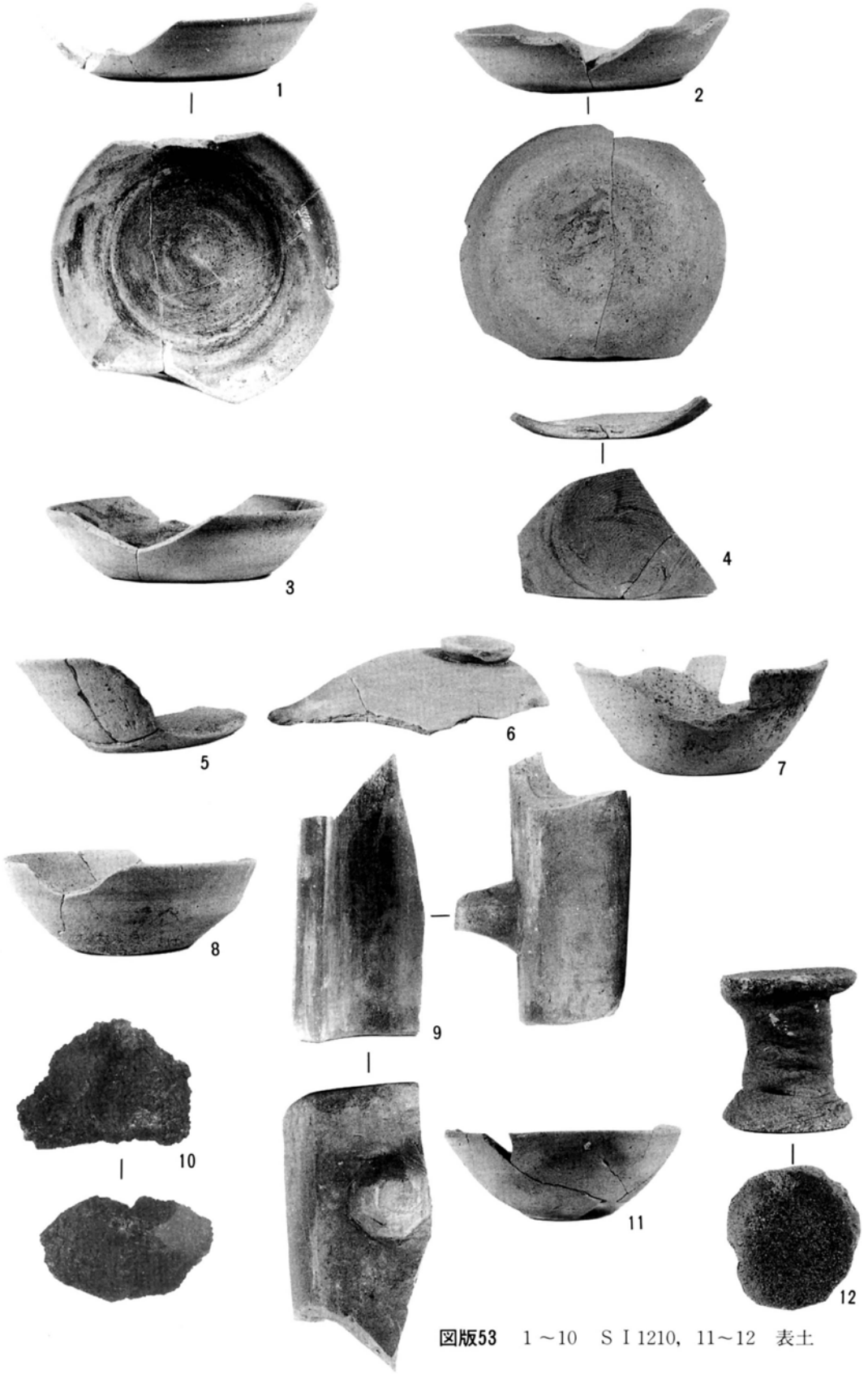
図版50　1～15　ＳＧ1206古代整地層



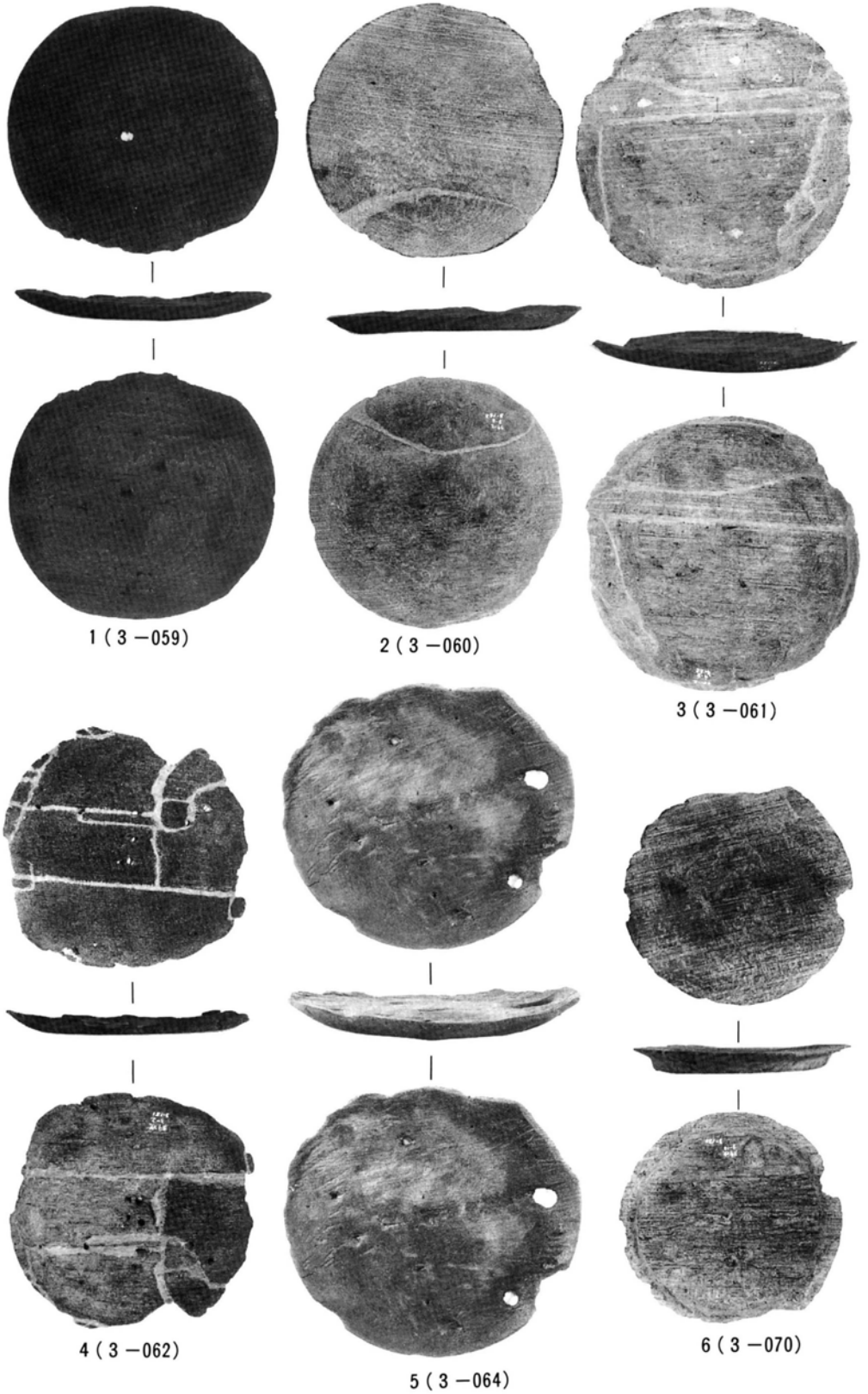
図版51　1～2　ＳＧ1206古代整地層，3～7　ＳＧ1206下層スクモ



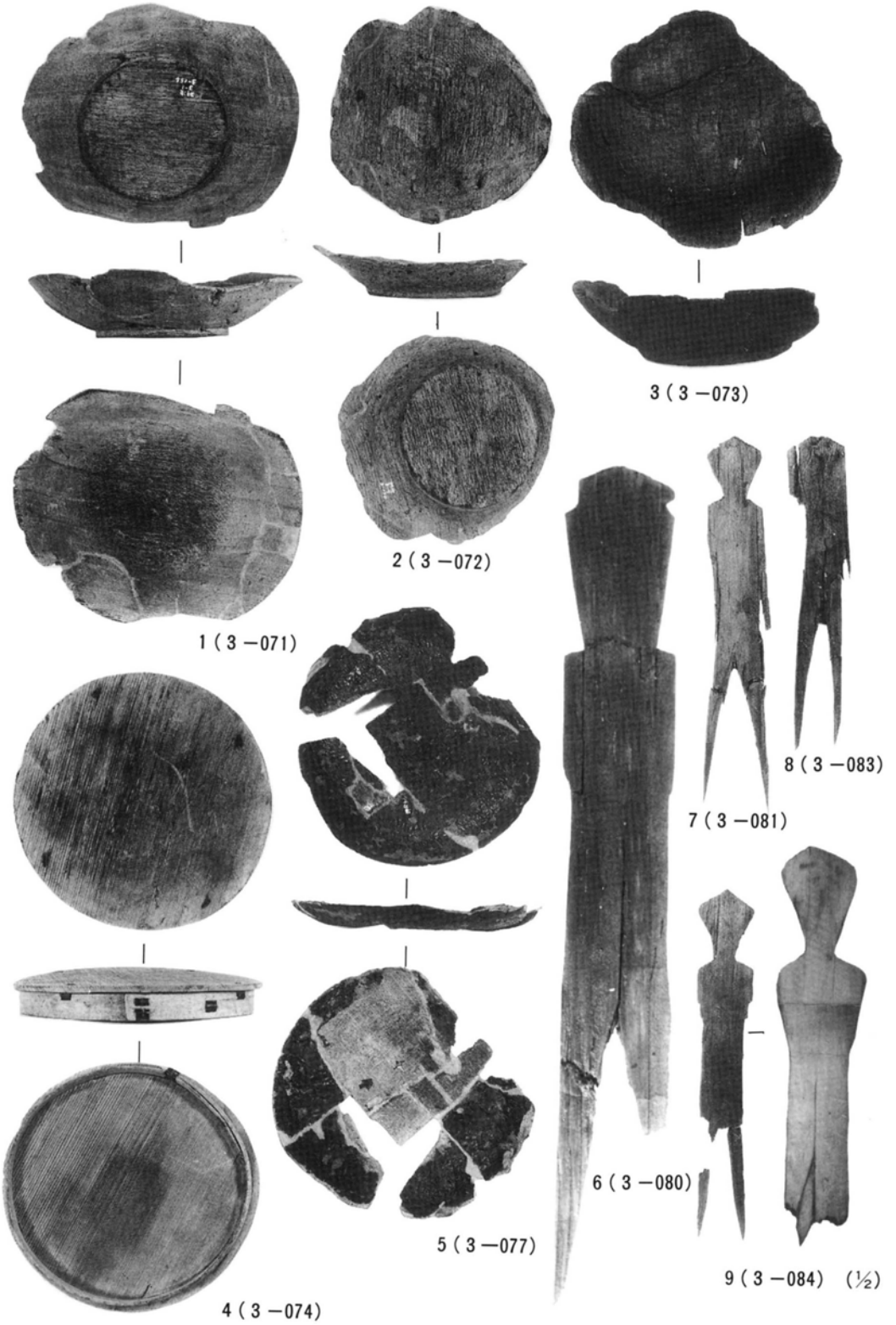
図版52　1～9　表土・表採，10～15　ＳＥ1176出土木簡削りくず(縮尺½)



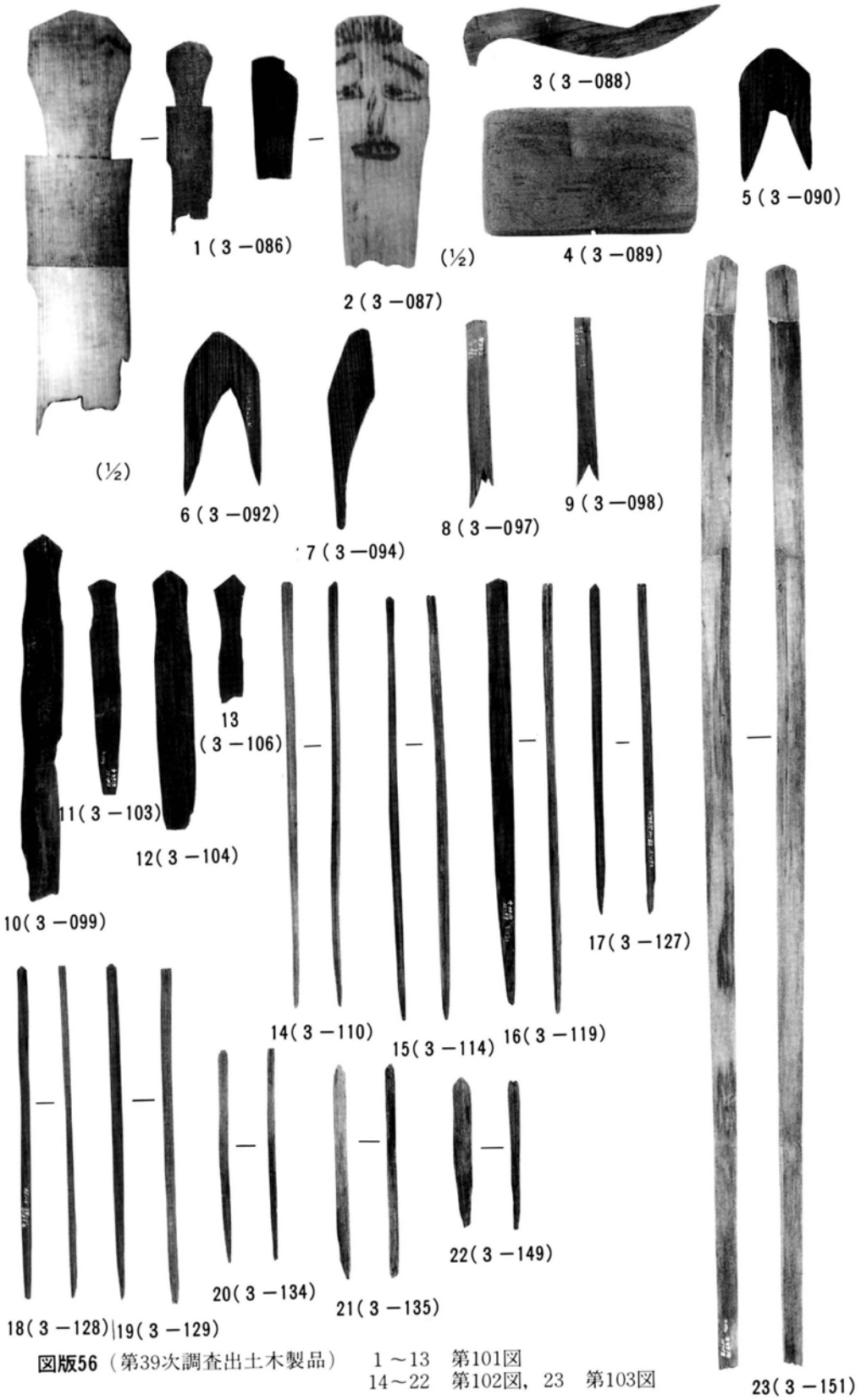
図版53　1～10　S I 1210，11～12　表土



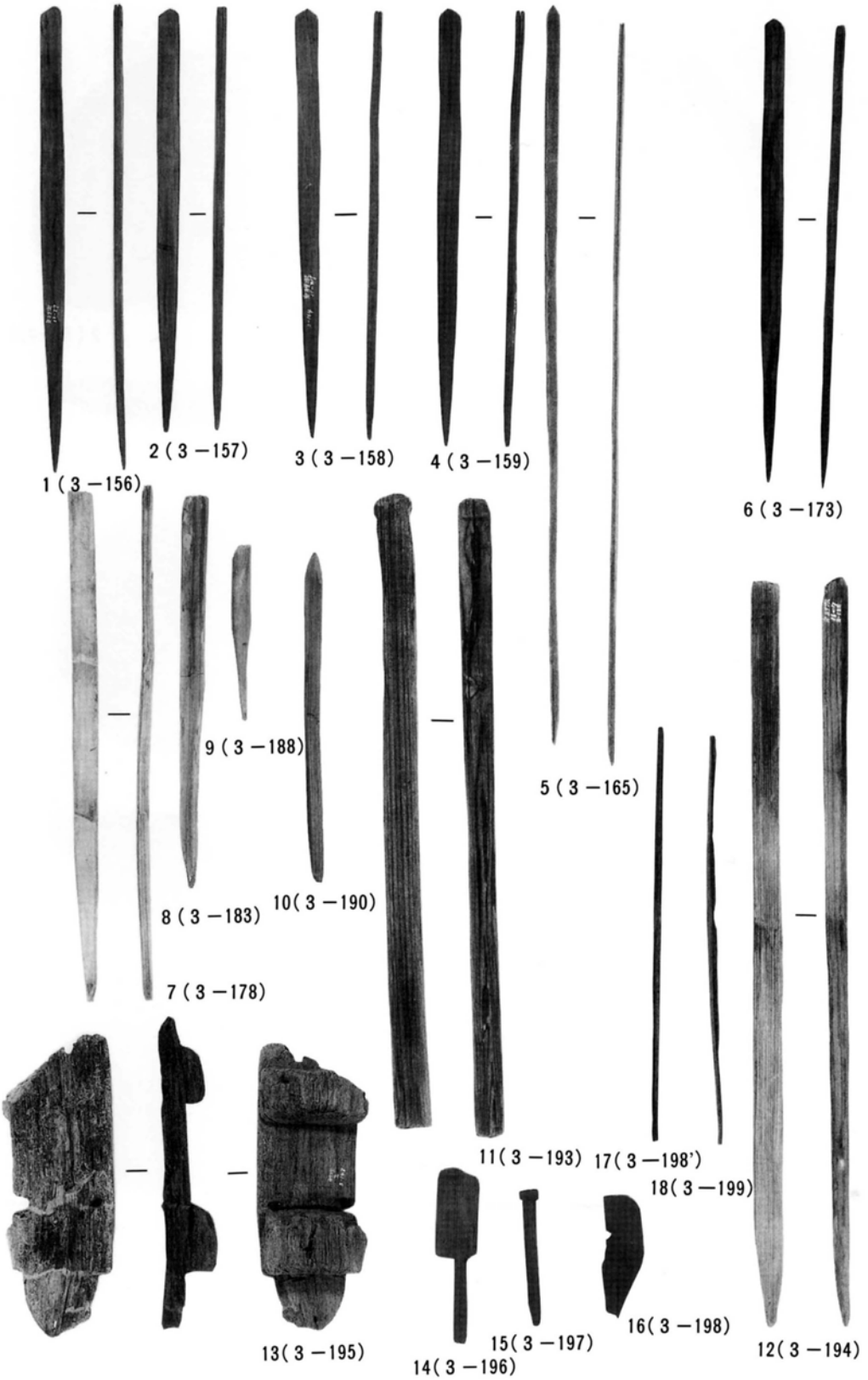
図版54（第39次調査出土木製品）　1～5　第98図，6　第99図



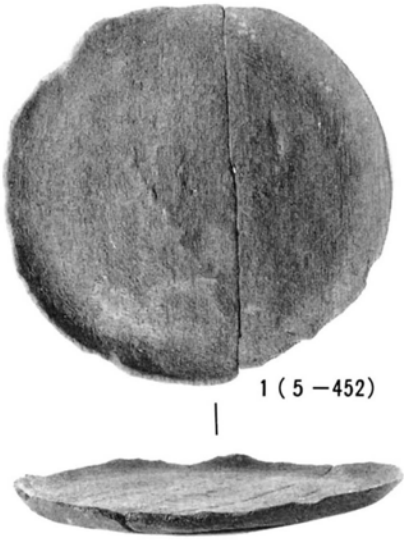
図版55（第39次調査出土木製品）　1～4　第99図，5　第100図，6～9　第101図



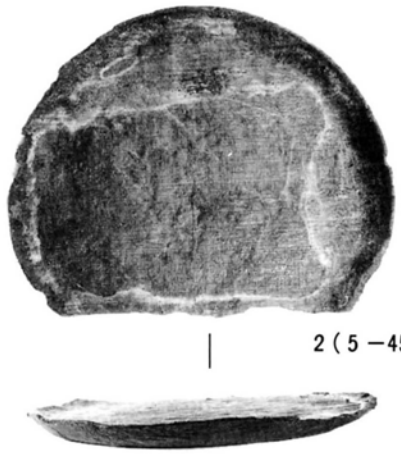
図版56（第39次調査出土木製品）　1～13　第101図
14～22　第102図，23　第103図



図版57（第39次調査出土木製品）　1～6　第103図，7～12　第104図
13～18　第105図



1（5－452）



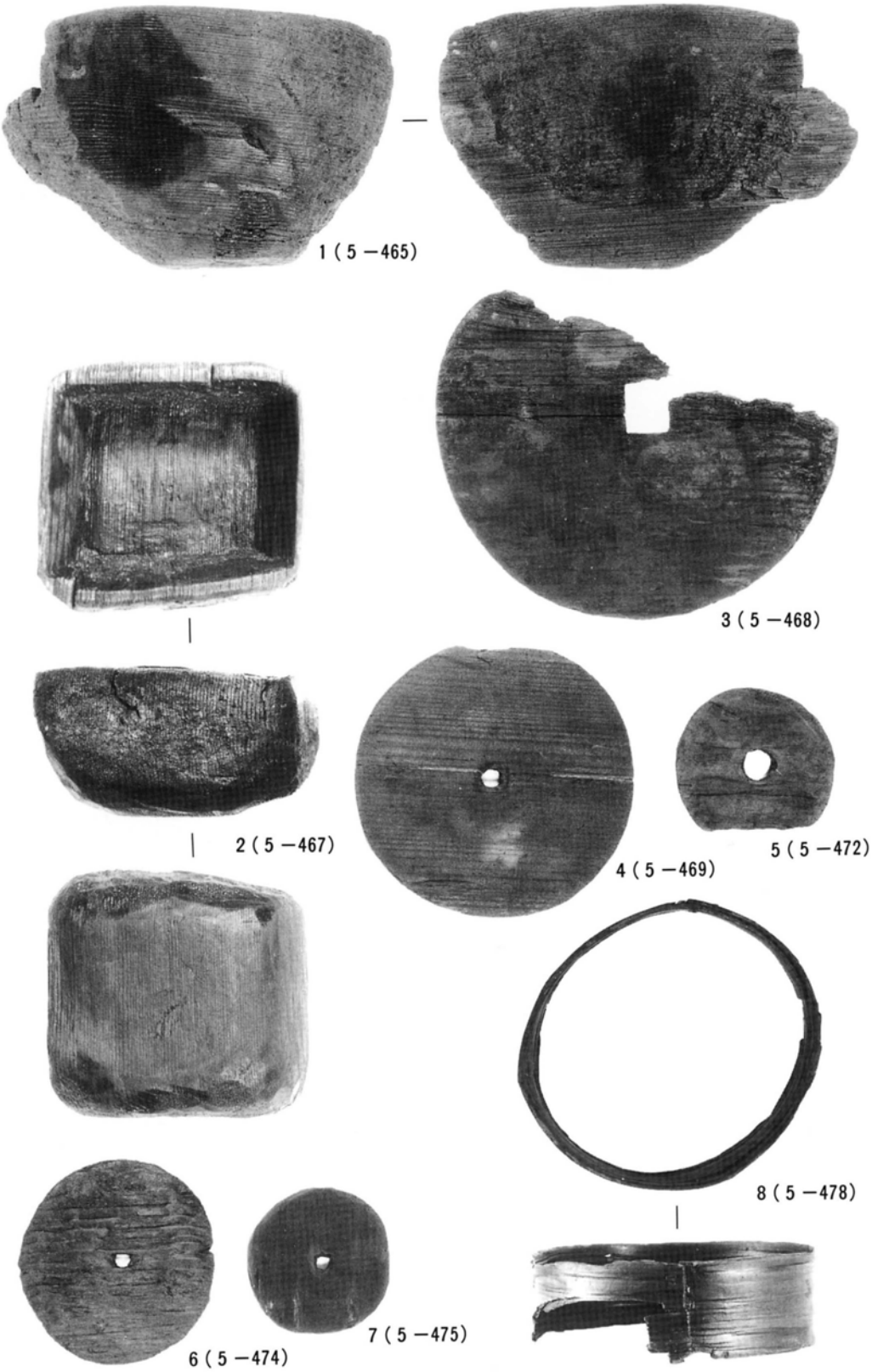
2（5－455）

3（5－456）

5（5－464）

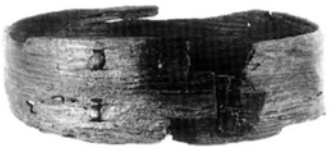
4（5－463）

図版58（第54次調査出土木製品）　1～3　第106図，4～5　第107図



図版59（第54次調査出土木製品）　1　第107図，2～7　第108図，8　第109図

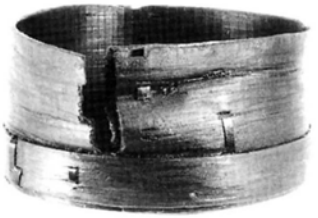
1（5－479）



3（5－482）

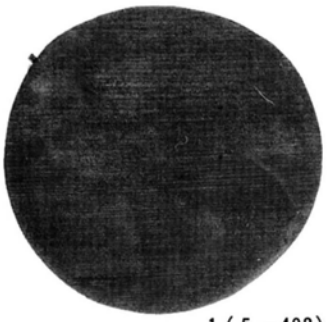
5（5－485）

2（5－481）

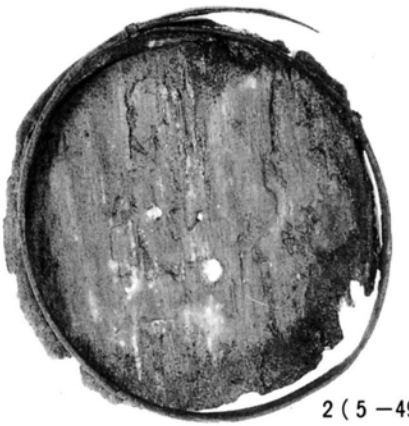


4（5－483）

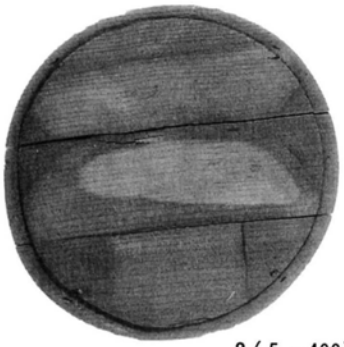
図版60（第54次調査出土木製品）　1～2　第109図，3～5　第110図



1（5 −493）

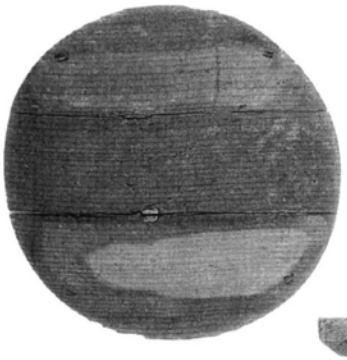


2（5 −495）

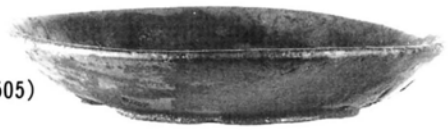


3（5 −499）

4（5 −501）

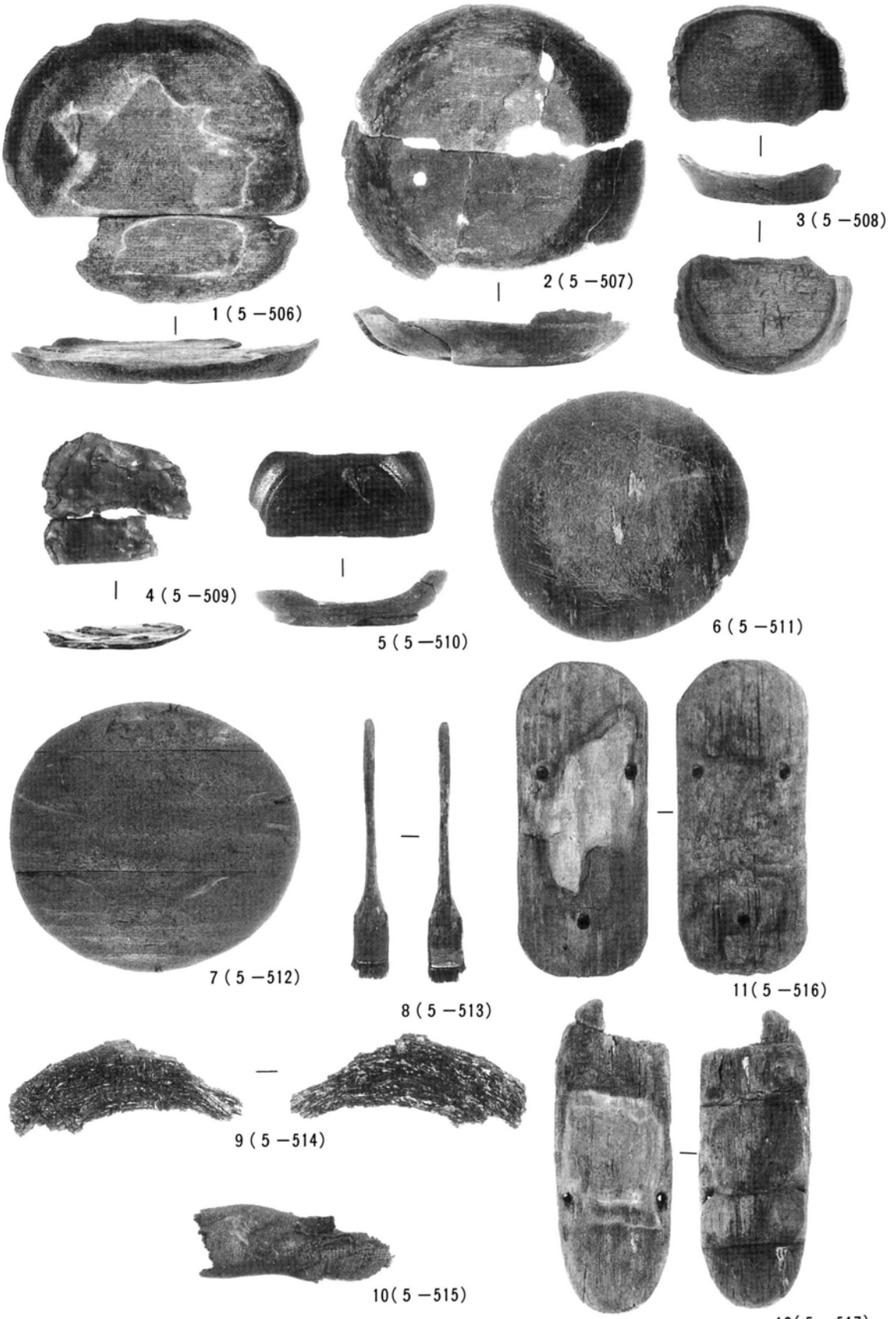


5（5 −504）

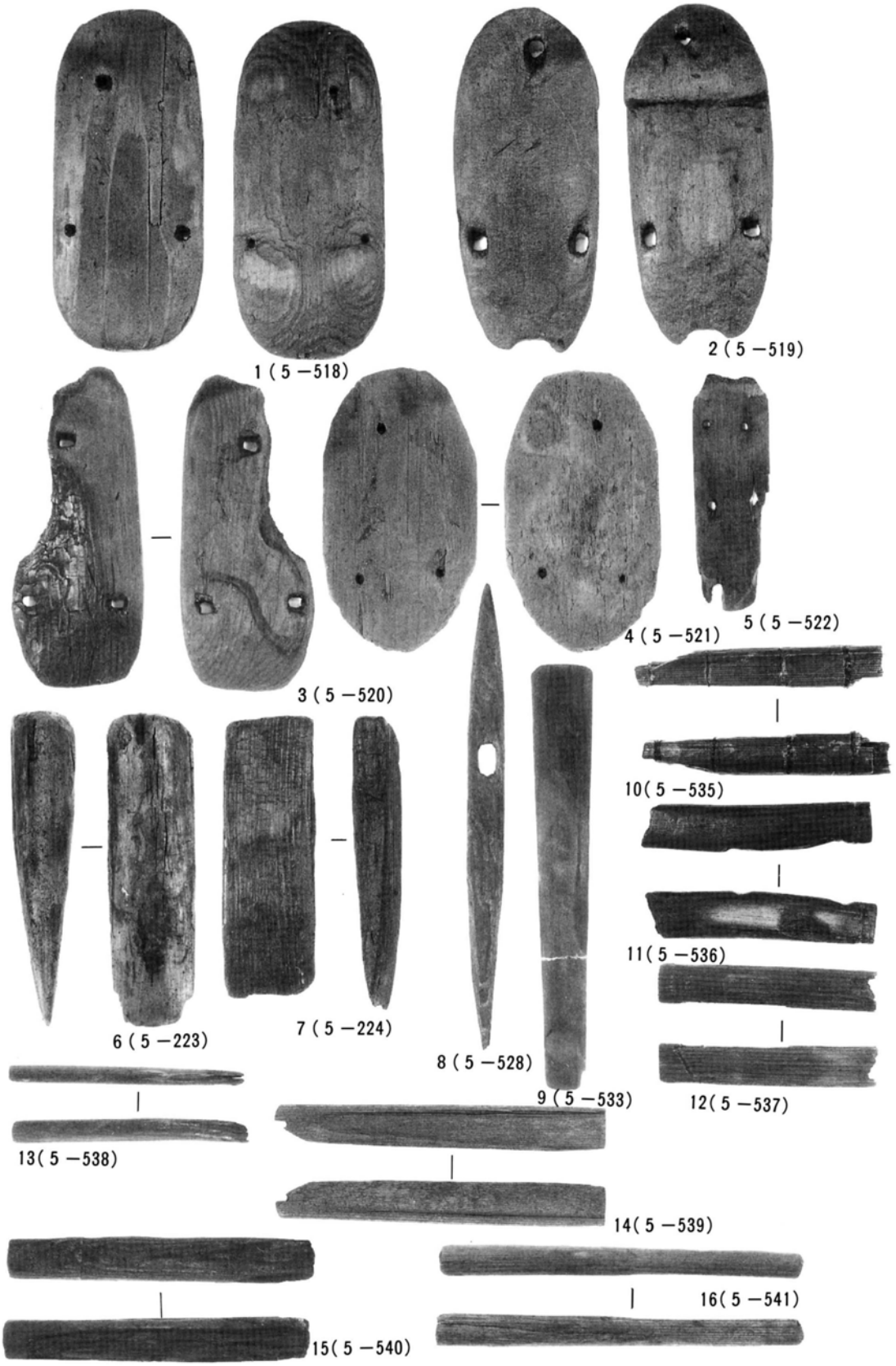


6（5 −505）

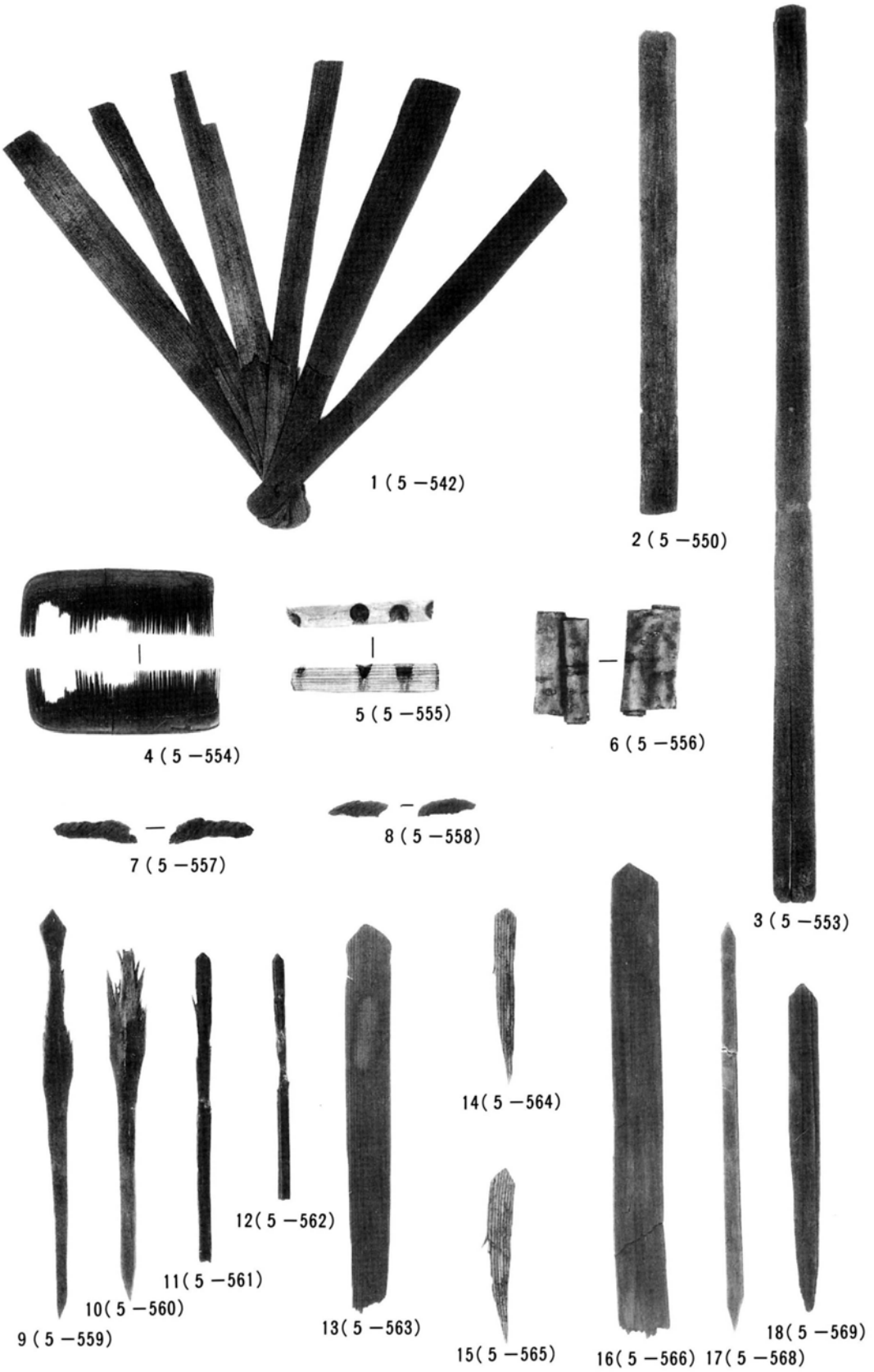
図版61（第54次調査出土木製品）
1～2　第111図，3～5　第112図
6　第113図



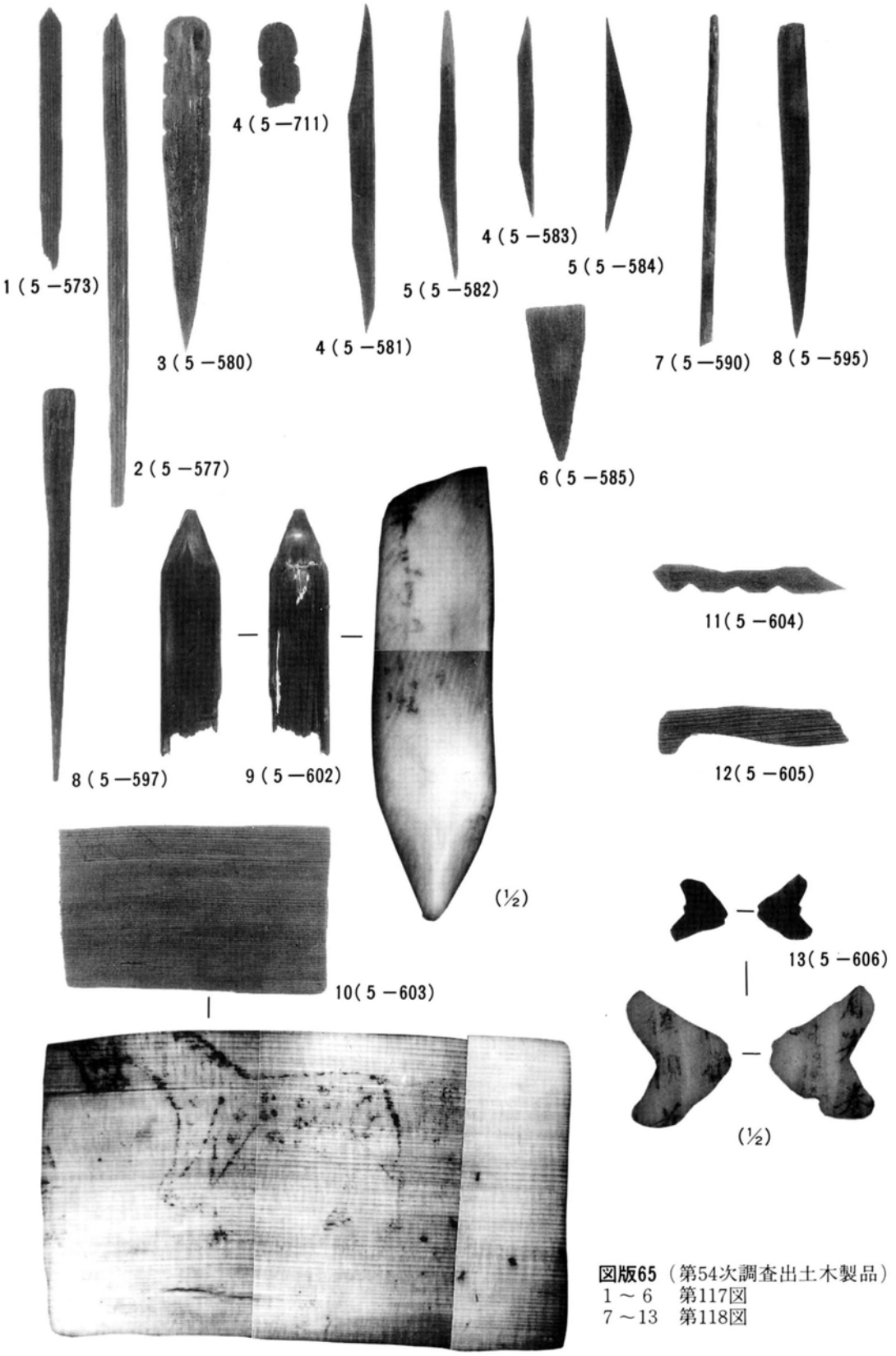
図版62（第54次調査出土木製品）　1　第112図，2～10　第113図
11～12　第114図



図版63（第54次調査出土木製品）　1 ～ 4　第114図，5 ～16　第115図

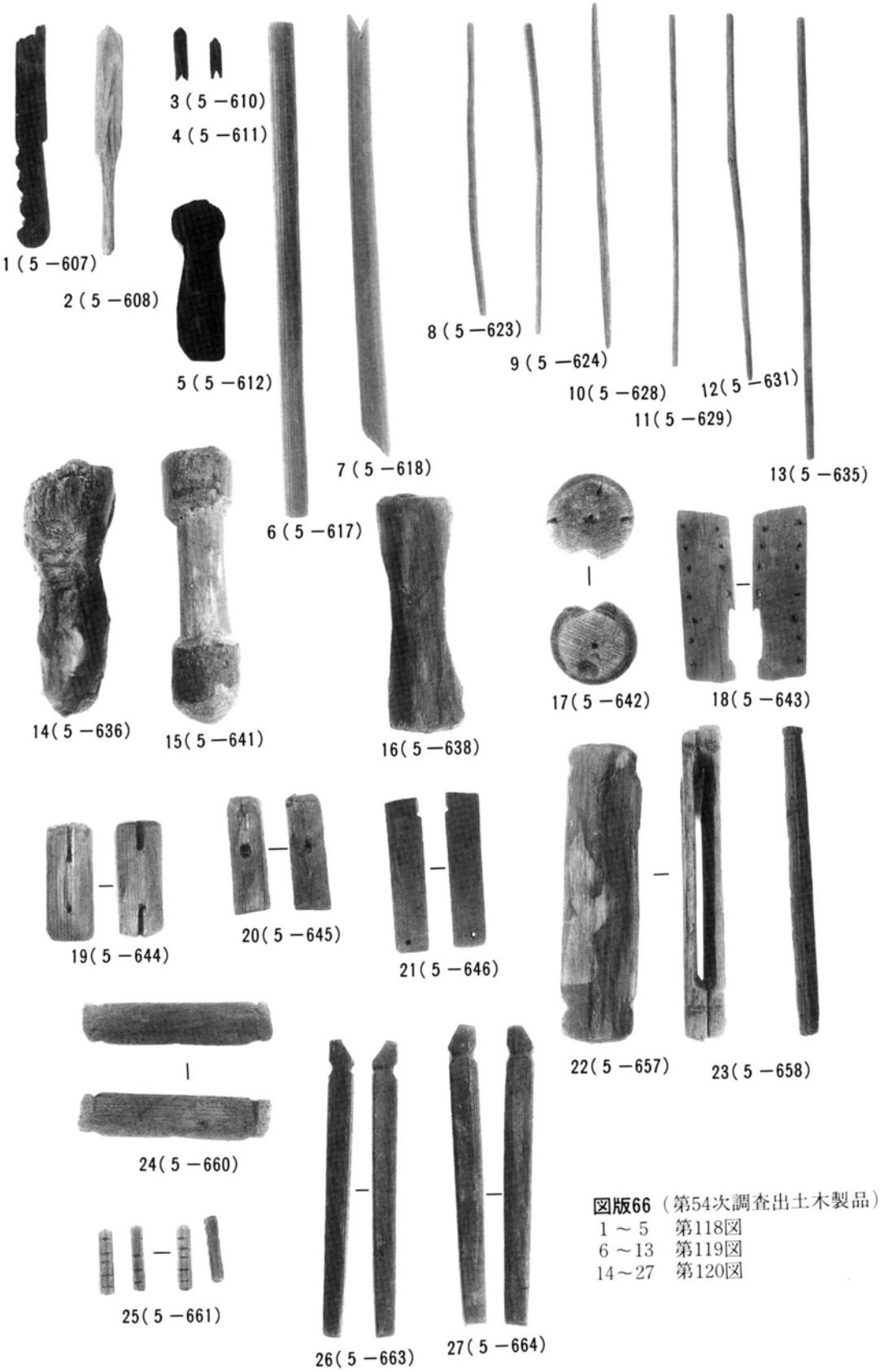


図版64（第54次調査出土木製品）　1～8　第116図，9～18　第117図

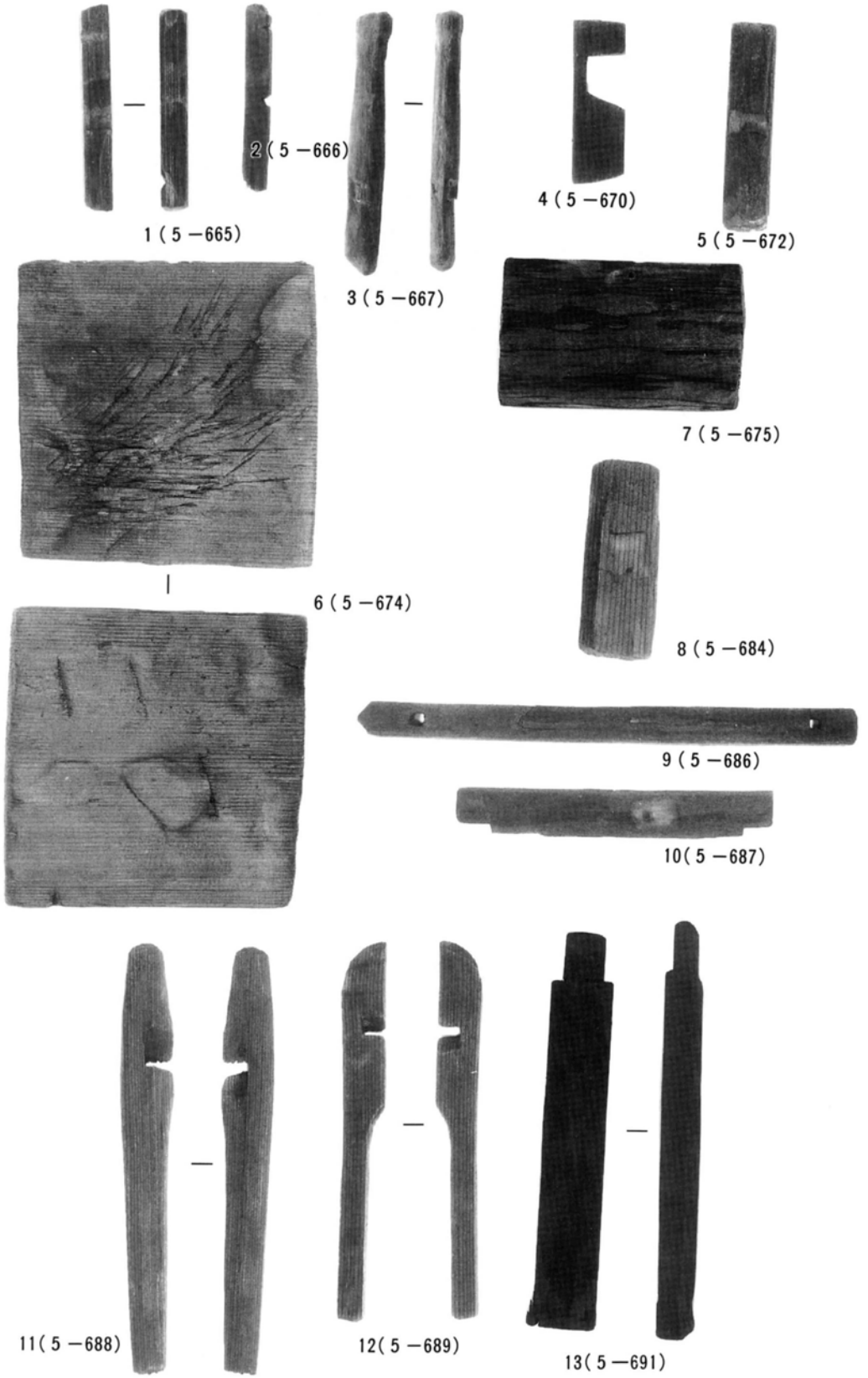


図版65（第54次調査出土木製品）
1～6　第117図
7～13　第118図

(½)

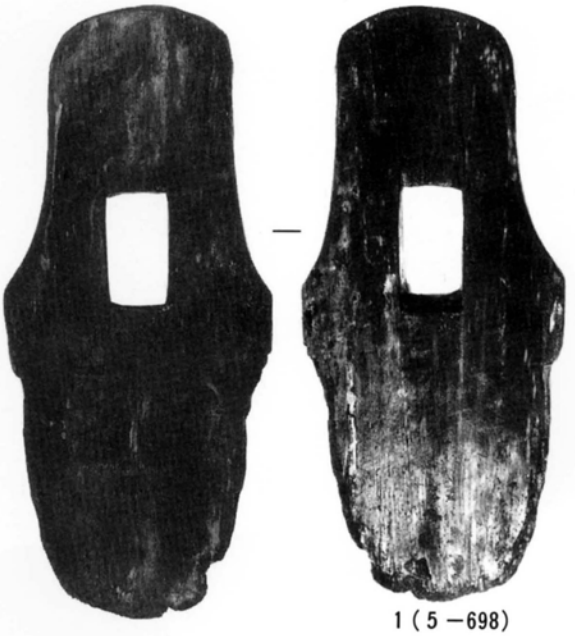


図版66（第54次調査出土木製品）
1～5　第118図
6～13　第119図
14～27　第120図



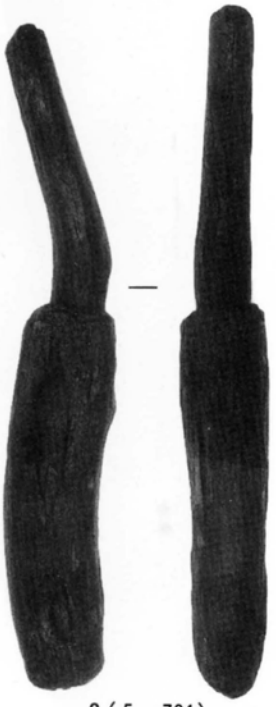
図版67（第54次調査出土木製品）　1～3　第120図，4～8　第121図，9～13　第122図

図版68（第54次調査出土木製品）　1～2　第123図，3　第124図　(1/5)



1（5 −698）

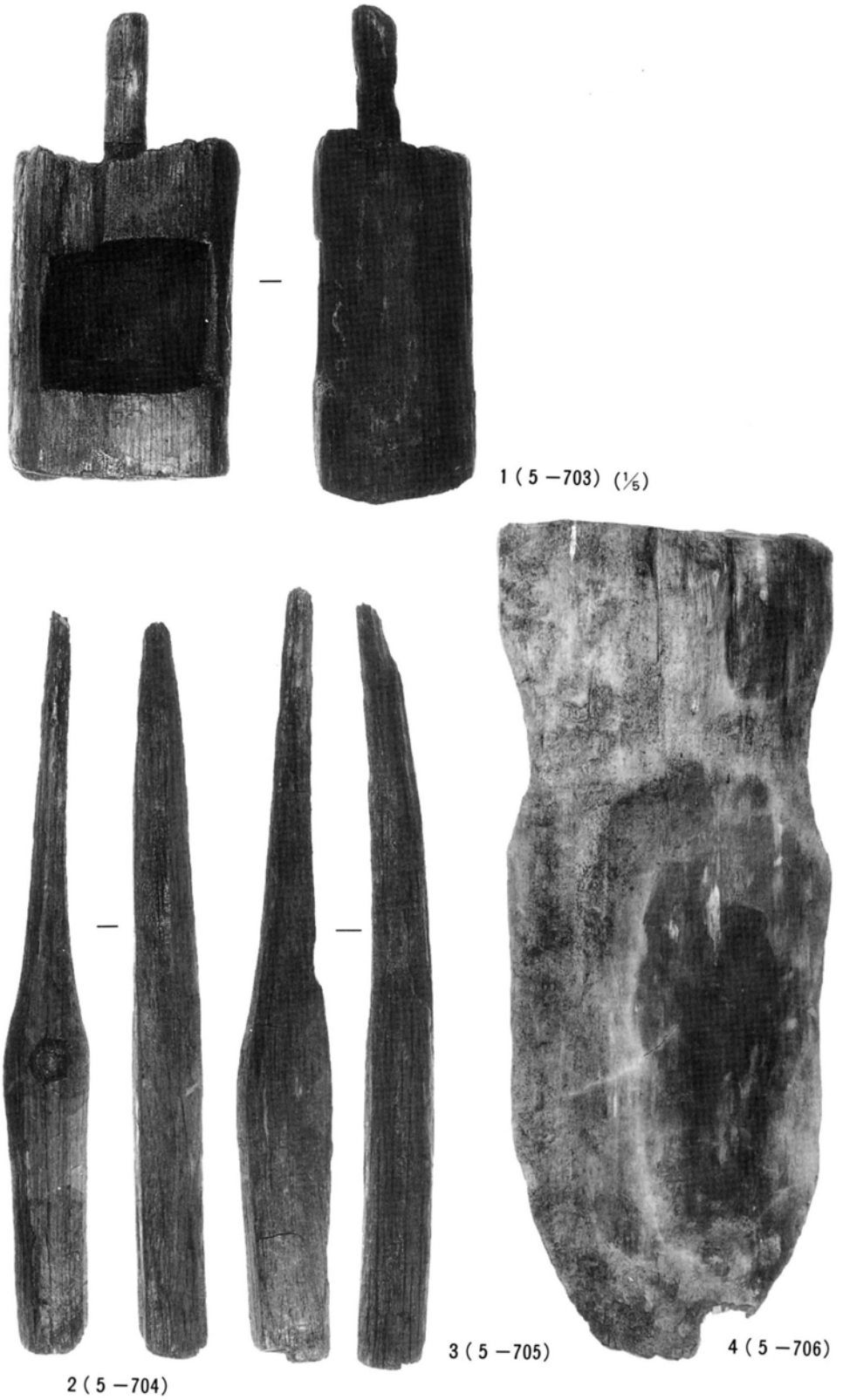
2（5 −699）



3（5 −701）

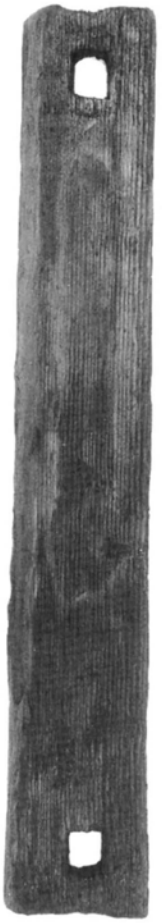
4（5 −702）

図版69（第54次調査出土木製品）　1 ～ 2　第124図，3 ～ 4　第125図（1/5）

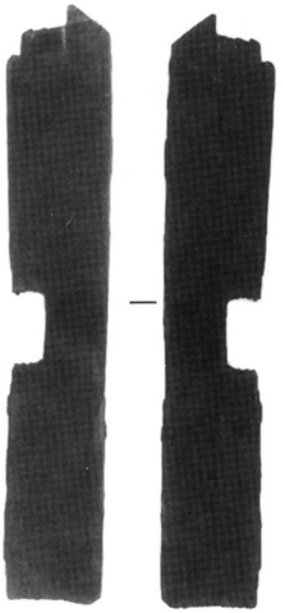


図版70（第54次調査出土木製品）　1～3　第125図，4　第126図　（1/5）

1（5 −707）（1/5）

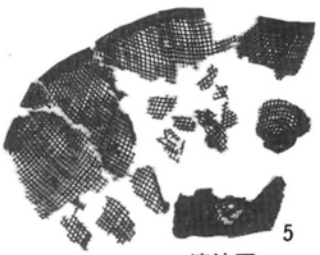


2（5 −708）（1/5）

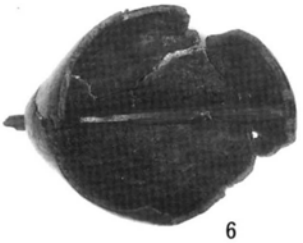


3（5 −709）（1/5）

4（5 −710）（1/5）



5
漆沙冠

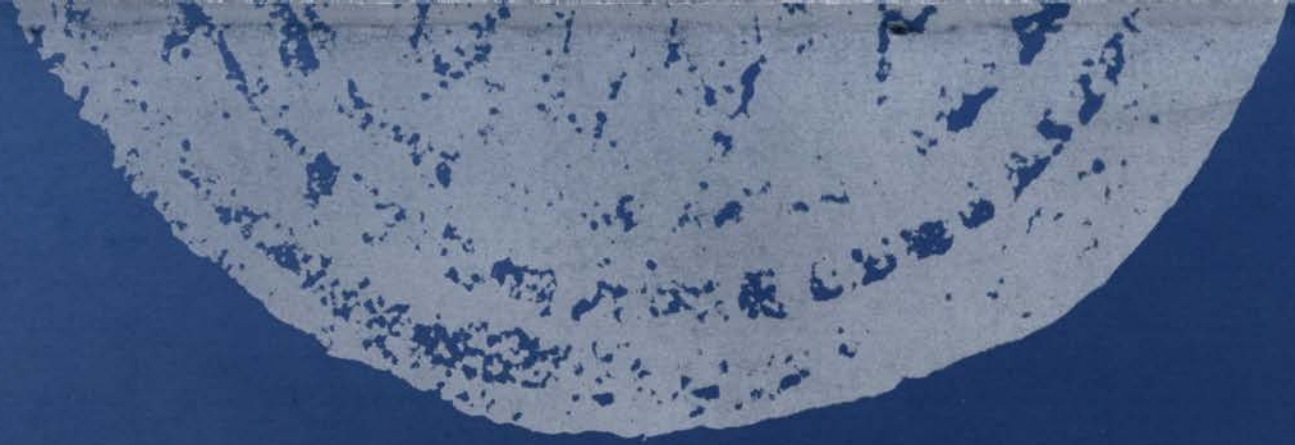


6
柄杓
（ヒョウタン）

7
草履

図版71（第54次調査出土木製品）
1 ～ 4　第127図

平成五年三月印刷
平成五年三月発行

平成四年度
秋田城跡調査概報

発行者　秋田市教育委員会
　　秋田城跡調査事務所
〒〇一一　秋田市寺内字大畑一一一
印刷所　秋田活版印刷株式会社
〒〇一一　秋田市寺内字三千刈一一〇